真恋姫的一刀転生譚　魏伝

minmin

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはとある外史のお話。

魏王、曹操に仕えた王佐の才、荀文若。

彼女には年下の叔父がいた。

その名を荀攸。

荀文若と並び称された魏の二荀の一人である。

※この作品はａｒｃａｄｉａ様にも掲載しています。

目次

前語り　荀攸という男 ―― 1
花の香に思ふ ―― 3
反董卓連合、その裏側で ―― 7
金剛爆斧、主が為に死域に入る　神速、真名託するも応え返らず ―― 12
洛陽炎上、董卓暗殺さる ―― 20
虎牢関にて、呂奉先籠城す ―― 29
戦の終わり ―― 36
幕間　二荀、集う ―― 45
陳留への帰還、その道中で ―― 53
黄巾三十万 ―― 61
三羽烏 ―― 68
強の始まり ―― 77
ただこのぬくもりを ―― 85
紺碧の張旗 ―― 95
涙の二人、折り合わない二人 ―― 102
幕間　思いと想い ―― 115
軍師の一日 ―― 122
集う者たち ―― 132
危うさの正体 ―― 140
幕間　姉妹語り ―― 148
大馬鹿か、大物か ―― 154
曹操と劉備 ―― 162
関羽と荀攸 ―― 169

孫の飛躍 177
嫌いと、好きと 185
らしさ 193
幕間　王道と覇道 202
執務室での日常 208
暗闘 216
大戦の幕開け 222
紅河 229
曹孟徳の用兵 235
戦闘と戦争 241
幕間　特等席 249
許都の美周 255
密勅 261
軍師二人 267
武人三人 273
心模様 281
劉備の決断 288

前語り　荀攸という男

とある晴天に恵まれた日の昼過ぎ、夏侯淵――秋蘭は陽気に誘われるように中庭に出た。

荀彧――桂花が主に軍師として認められ、姉に愛らしい副官がついた賊の討伐の後、戦と呼べるようなものは起こっていない。

しばらくは今日のような穏やかな日々を過ごしても罰は当たらないだろう。

気の向くまま、脚の向くままに庭を散歩していると、東屋に件の軍師の姿が見つかった。

珍しいこともあるものだ、と秋蘭は首をかしげる。

華琳様大好き人間であり、また大の男嫌いであるはずのあの桂花が、どうやら男の字で書かれた書簡を読みながら笑っている。

それは彼女が普段男相手に見せる冷笑とは別物で、心の底から正の感情で笑っている。というかにやけている。正直に言って少し気持ち悪いくらいに。

今は桂花、秋蘭ともに昼休みである。

弓兵ならではの視力で、どうやら男の字であるらしい、ということは分かるものの、書簡の内容までは判別できない。

さすがにこれ以上近づけば桂花に気づかれるな、と考えて、気づかれてもいいかと思い直した。

自分も桂花もやましいことをしているわけではないのだ。

ゆっくりと正面から近づいていく。

「随分とご機嫌だな、桂花。察するにその手紙が原因のようだが」

5歩の距離で声をかけると、弾かれた様に顔を上げてようやくこちらに気が付いた。

自分が暗殺者なら桂花は確実に死んでいる。

普段ならそんなことはありえないだけに、桂花の気の緩みようがいかにひどいものかがよくわかった。

「おどかさないでよ秋蘭……。まあ、その通りよ。

長い間音信不通だった家族から便りがきてね。

元気そうでよかったって思ってたところなの」
なるほど家族からか、と秋蘭は納得した。
桂花の男嫌いも、さすがに家族には適用されないらしい。
「そういえば、桂花の家族の話は聞いたことがなかったな。どんな男なのだ？」
どうして男だってわかるのよ、との問いに、字を見ればわかる、と返してやるとふくれっ面で黙り込んだ。どうやら少し照れているらしい。
「実は血の繋がりはないのよ。祖父が孤児を拾ったの。
ちょうど祖父の子ども、私にとっては年下の叔父になるんだけど。
流行り病で亡くなったところに荒野にぽつんと倒れてるのを祖父が見つけて、叔父と同じ名前を与えて自分の子として育てたのよ。それがこの手紙の主ってわけ」
「なるほどな。名はなんというのだ？」
「荀攸。字は北郷。今は洛陽にいるらしいわ」
これが秋蘭が初めて荀北郷の名を聞いた瞬間であり、魏に仕える希代の軍師荀北郷の名が歴史の表舞台に出るしばらく前のことだった。

花の香に思ふ

梅の香がする。

懐かしい故郷を思い出させる匂いに、北郷一刀の意識はゆっくりと浮上する。

いつの間にかうたた寝をしてしまったらしい。

ここ――王允の邸宅は、洛陽では数少ない、一刀が心からくつろげる場所の1つだ。

董卓の下、漢朝の清浄化が急速に進んでいるとはいえ、宦官の残した汚濁のはそこかしこに残っている。

この邸宅で過ごす時間は、そんな汚濁とは無縁でいられた。

匂いの元を探して、視線を庭へ。梅の木は庭の片隅にひっそりと立っていた。

司徒としてそれなりの禄を食んでいるはずの王允だが、邸宅も庭も華美とはいえない。

質素でありながらも風流で、静でありながらも確かな力強さが感じられる。

それはどこか王允自身の雰囲気を感じさせた。どうやら住処というものは主に似るものらしい。

懐かしい匂いを運んできた風に誘われるまま、顔を上に向ける。見事な蒼天が広がっていた。

ほんの数ヶ月前まで、「蒼天己死」という言葉が世に溢れていたとは思えない。

各地では未だに黄巾の残党が蔓延っているというが、少なくとも洛陽は一応の平穏を取り戻していた。

空に流れる雲のように、思考もまた取り留めもなく流れていく。

様々な形の雲に、今まで逢った人々の顔が映し出される。

義父や親族達、洛陽への旅の途中に出逢った3人組、董卓軍の幹部達。

最後に浮かんだのは、最近手紙を送った年上の姪のふくれっ面だっ

た。
想像の中でも素直じゃないんだな、と思わず苦笑いしてしまった。
「おや、いつになく機嫌が良さそうで。何か良いことでもありましたかな？」
声を掛けてきたのはこの館の主、王允である。
手には茶の道具一式。使用人がいないわけではないのに、一刀が訪ねた時はいつも手ずから茶を淹れてくれる。
自分で淹れた方が美味い茶が飲めますからな、と笑う顔は、とても洛陽の民政の実務を一手に担う司徒には見えなかった。
「家族のことを考えていました。元気で過ごしているだろうか、と」
茶を受け取りながら答える。向かい合って腰を下ろし、同時に茶を啜った。
「家族ですか。とても温かい笑みでしたのでな。
私はてっきり恋人のことでも考えているのかと思いましたよ」
からかうようにこちらを見つめてくる。５０を過ぎても他人の色恋沙汰には興味があるらしい。
「違いますよ……。いえ。やはり、好いているのかもしれません」
親族が集まった時、年が近いということで大抵一緒に過ごしていた。
桂花も当時抜け殻のようだった自分の面倒をよく見てくれた。自分の方が年上だから、という義務感もあったのだろう。
正月や盆で帰省したときのイトコの集まりのイメージそのままだ。
そんな支えもあり、どうにか前向きに生きていこうと思えるようになったころ、ふと気づいたのだ。
このままだと、彼女は自ら命を絶ってしまうのではないだろうか、と。
荀彧の死の原因には諸説がある。必ずしも自殺するとは限らないだろう。
それでも、自分にこの世界で生きる意志を与えてくれた彼女が自殺するかもしれない。
想像するだけで胸が張り裂けそうになった。

それを防ぐ為に必死に知を磨き武を磨き、今こうして洛陽にいるのだ。
最近になってようやく心に少しばかりの余裕ができた。
そうして改めて自分の気持ちを見つめなおしてみると―これはやはり恋なのかもしれない。
「良いことです。北郷殿はどこか生き急ぐところ、自らを顧みないところがありますからな。
恋人でもできれば、少しはましになるでしょう」
「おそらく片思いですからね。できるかどうかはわかりませんよ」
王允はおやおや、とだけ言ってまた茶を啜った。一刀もまた。
生き急ぐ、自らを顧みない。
自覚はしている。何故か子どもの姿になって、1人荒野で目を覚ました時は気が狂いそうになった。
疲労と空腹で倒れ、このまま死ぬのだろうか、とぼんやり考えていた時に義父に拾われた。
死んだ息子に生き写しだと言われ、荀攸の名を貰った時、北郷一刀は死んだのだ。
両親や妹、友人のことは覚えていたいと、字は北郷にしてくれと頼んだものの、それからずっと荀攸として生きてきた。
日本で、聖フランチェスカ学園で思い描いていた北郷一刀の未来は、もう実現することはない。
あの暖かな我が家にも、二度と帰れない。
それを受け入れた。全てを諦めていた。
だからこそ、こんな自分をずっと支え続けてくれた桂花の為に生きると決めたのだ。
たとえこの身が朽ち果てようとも。
それが、今の一刀の全てだった。

「して、今日はどのような用向きですかな。

勿論、茶を飲みに来たというだけでも大歓迎なのですが」
不思議な男だ。王允は会う度にそう思う。
そのときは茶菓子をもってお邪魔することにします、と静かに笑う様子は、とても17，8には見えない。
老成している。その言葉がこれほどよく似合う男を王允は他に知らない。
「王允殿は、近ごろ董相国の顔をお見かけしましたか？」
一度目を閉じ、明けたときには笑みの質が変わっていた。
静かではある。しかし、内から針のような鋭さが滲み出ている。
「はて。相国殿もお忙しい方ですからな。
改めて問われてみると、なるほどこのところ……。
十日程はお顔を見てはおりませんが」
返事をすると、すっと目が細められた。
「なるほど。では文和殿は如何ですか？」
「彼女なら以前にも増して精力的に働いていますよ。
忙しく走り回っている姿をよく見かけます。
この間も、なんと言いましたかな。新しく取り立てられた文官と熱く議論を交わしていました」
「李儒、ですか？」
「おお、そういう名でしたな。ご存知なのですか？」
ええ、まあ。聞いたことはあります。
それきり口を閉ざして何事かを考え込んでいる。
本来ならば無礼であるが、王允はこういうとき彼を咎めない。
数年前からの、決して長いとはいえない付き合いではあるが、こうなった後の一刀には驚かされてばかりいる。
この荀家の麒麟児は、今度はどのように自分を楽しませてくれるのか。
今尚考え込んでいる若者の姿を肴にして、王允は残りの茶を啜ることにした。

反董卓連合、その裏側で

「……董卓の専横を許すまじ。漢の忠臣よ、今まさに立ち上がるべし」
書簡を読み終えるとそれを丸め、華琳はしばし黙り込んだ。
「あの麗羽にこのように美しい文が書けるとは思えないのだけれど。言葉というのは学べるようでいて、ない者には永遠に身につかないものよ」
「おそらくは陳琳という者かと。何進に仕えていましたが、董卓の洛陽入りに合わせて職を辞し、今は袁紹の下に身を寄せています」
「欲しいわね。覚えておきましょう」
敬愛する主の言葉に、桂花は少し複雑になる。
文官の人手が足らず、本来武官である秋蘭にまで手伝いを頼んでいる現状、人材の補強は喜ばしい。
桂花個人としては、主の寵愛が別の者にも向けられることは歓迎できない。
しかし、優先すべきは公事である。表には出さず御意、とだけ答えた。
「それで、実際のところはどうなのかしら。この檄文を信じるならば、洛陽は随分と酷いことになっているようだけど」
「檄文を発した理由の大半は、董卓への嫉妬と反感でしょう。宦官勢力の排除は過激であったようですが、武力行使はそれのみです。以後洛陽は落ち着きを取り戻し、民衆の評判も上々でした」
「でした、ね。やはり先帝陛下の崩御から？」
「はい。劉弁陛下が崩御して後、洛陽の治安は悪化する一方のようです。街では董卓軍が賊となんら変わりない振る舞いをしているとか。以前と同じように賄賂なども横行しているようです」
華琳はふむ、と1つうなずく。

「本性を隠していたというのなら見事だけど。
董卓本人の性格等は把握できているの？」
「かなり用心深い、ということだけは。
董卓の顔を知っているのは自軍の幹部、司徒の王允等数人のみ。
普段の指示はその全てが軍師であるカクから出ているようです」
華琳の眼の色が僅かに変わる。自分と同じく、何らかの匂いを嗅ぎ取ったのだろう。
「今洛陽では、ある噂が不自然なほど早く広まっているようです。
劉弁陛下の崩御は病によるものではなく、董卓に毒殺されたのではないか、と」
「さもありなん、ね。麗羽の予感も、案外正しかったのかしら」
華琳がはあ、と息をこぼす。
袁紹は馬鹿だ。それは間違いない。
だが、馬鹿であるが故に道理を超えたところで大きな何かを為すときがある。
今回がそうだったということなのだろう。
「反董卓連合、参加するわ。手はずを整えておきなさい」
「御意」
礼をして部屋を辞そうとすると、華琳から先程までとは温度が違う声が掛けられた。
「少し顔色が悪いわよ、桂花。
体調が優れないのなら無理しないで休みなさい。
体調管理も仕事のうちよ」
足が止まる。どうやらばれていたらしい。
「そういうわけではありません華琳様。ただ……」
「ただ？」
「洛陽には親族がいます。それが少し、心配です」
「そう……。私も、無事を祈っておくわ」
ありがとうございます。
再び一礼して、今度こそ部屋をで出た。

自室までの廊下を歩きながら考えるのはやはり一刀のことだ。
王佐の才と呼ばれる自分が手ずから鍛えたのだ。
身内の贔屓目を差し引いても、軍師としての能力は中の上はある。
伏龍、鳳雛と称される諸葛亮、ホウ統や、江東の孫策の軍師周瑜には及ばないだろうが。
いつの間にか一刀が自分から訓練を願い出ていた剣の腕も中々で、そこらの一般兵よりは強い。
洛陽での政変程度は乗り切れるはずだ。
不安な点は、一刀が幼いころから時折みせる、自分の命をどこか見限っているところだ。
特に自分が絡むと、その傾向が強い気がする。
一抹の不安を抱えたまま、桂花は自室の扉を開けた。

袁紹が檄文を発し、反董卓連合が結成されてしばらく後、洛陽。
夜の帳が下り、灯り1つない路地裏を、一刀は滑るように進む。
素早く、しかし音は立てないように。
李儒を排除しようとした自分の動きはとうに知られているし、末端の兵士にまで人相書が回っているだろう。
見つかれば問答無用で斬られる。
本来ならば洛陽の治安を守るはずの兵は、今は賊と化しているのだから。
足は一度たりとも止まることなく王允の屋敷へと向かう。
彼の下で民政に携わっている間は、時間を作っては視察と称して洛陽中を歩き回った。
今洛陽で、自分以上に路地に詳しい文官はいないだろう。
予め打ち合わせしていた通り、鍵を開けてある裏口から身体を滑り込ませ、一刀は大きく息をはいた。

応接室に入ると、既に王允と賈クが待っていた。
待たせたことを詫びながら席に座る。
「茶の一杯も出せなくてすみませんな。
私はもう寝ていることになっているもので。
火など使っては怪しまれてしまいます故」
「お気になさらず。
我々は人の屋敷に勝手に上がり込む不届きものですからね。
こちらこそ、王允殿には泥を被らせてしまいました」
洛陽の民政を立て直した功労人から、董卓の無法を見逃す男へ。
王允の名声は地に墜ちた。
史書にもそのように記されるだろう。
それを承知で、一刀に協力してくれているのだ。いくら感謝してもしたりない。
「なんのなんの。董卓殿には大恩を受けておりますからな。
それに、男とはいくつになっても女性に格好をつけたいものなのです。そうでしょう?」
違いない、と笑いあうと、今まで黙したままだった賈クが初めて口を開いた。
「本当にごめんなさい。私がもっとしっかりしていればこんなことには……」
言い終わらないうちに、一刀の人差し指が賈クの唇を押さえる。
「それ以上は言いっこなしですよ、文和殿。2人とも、望んで此処にいるのです。
それよりも、李儒の様子はどうですか?」
暫く何かいいたそうに一刀を見つめていたが、やがて顔が切り替わった。
「数日後には長安に移るようよ。陛下と月を連れて、ね。
本気で遷都をするつもりみたい。
連合は私達で対処しろ、とだけ言っていたわ」
「反董卓連合、ですか……。また何とも間の悪いことで。

子飼いの兵力を汜水関と虎牢関の防衛に回さなくてはいけません」
王允がおどけたように言う。
「ですが、これは好機でもあります。
今なら、李儒も油断している。
文和殿、董卓殿の身の安全はどうなっていますか？」
「王允殿の養女が護衛に付いてくれているらしいわ。
自分から李儒に手は出さないけど、月には身も心にも傷一つつけさせない、って」
「では……明日、決行しましょう」
一刀の言葉に、賈クと王允が同時にうなずく。
「暴虐非道の男、董卓を討ち、陛下と人質の少女を解放します」

金剛爆斧、主が為に死域に入る　神速、真名託するも応え返らず

汜水関にて張遼――霞は兵に檄を飛ばしていた。

「皆気張りーや！

もうちょいで日が暮れや！そしたら攻撃も一旦止まる！

ここが踏ん張りどころやで！」

周りの兵が一斉に応、と声を上げる。

元より数が違うのだ。兵は疲労の極みにあり、休む暇など数えるほどしかない。

だというのに、士気は開戦当初から高いまま維持されている。

これも月っちの人徳やな。

口の中だけでそう呟く。

涼州から付き従ってきた兵の一人一人が皆知っているのだ。

己の主が、董卓という人が、どれだけ慈愛に満ちた人であるか。

檄文に記されているような奸雄ではないことを。

洛陽での新参兵の振る舞いを容認するような悪逆非道の人物ではないことを。

武に秀でているわけではない。

優れた智謀の持ち主でもない。

だが、何故か力を尽くそうと思える主なのだ。

人徳という点では、連合にいる劉備とやらも相当らしいが、霞は月とは別物だと思う。

劉備に従う人間は、皆彼女に心酔しているという。夢や酒に酔うように、劉備によっているのだと。

酒は飲んでも、飲まれるものではない。

月は、肯定も否定も全てを受け入れる。

来る者は拒まないが、去る者も追わない。あるがままの自分を受け入れてくる。

そんな月が、霞は好きだった。

「張遼！」
横から掛けられた声に顔を向けると、華雄がこちらに近づいてきていた。
あちらの攻撃もかなり激しかったのだろう。普段は日の光を反射して美しく輝く銀髪が、今は埃で曇っていた。
「袁紹の軍がまた動きだしたようだ。今のうちに石を集めておくぞ」
見ると、確かに袁紹の軍が大木を槍にして、車に載せたものを引っ張り出そうとしている。
「またかいな。何度も何度もこりんやっちゃな」
「だが厄介ではある。攻城兵器は誰が使っても効果は同じだからな。
愚直に繰り返す、という言葉もある。ひょっとしたら、馬鹿の袁紹が使った方が効果的かもしれんぞ」
なるほどそうかもしれない。２人で薄く笑いあって、迎撃のための準備を始める。
「石落としよるのは一旦引きーや！弓兵は穴埋めに入り！」
霞の声に反応して兵が即座に動く。
練度は高い。この戦に向けて、激しい調練を重ねてきたのだ。
月を人質にとられ、李儒の子飼いの兵以外はほとんどが洛陽の外に追いやられた。その時間を利用して調練を行った。
反董卓連合軍との戦を想定して、だ。
調練の計画は細部まで緻密に練られていた。
連合に参加する主な人物。その配下の武将、軍師。
連合軍がとるであろう作戦。
それら全てが想定され、そしてほぼ全てが的中している。
詠のように、優れた智謀の持ち主なら、敵の戦略、戦術を予想できるかもしれない。
名士は皆、独自の人脈を持っている。荀家ほど顔が広ければ、各地の人材を把握できるかもしれない。
だが、荀攸という男は、月が相国の位に就く遥か以前から全てを見通していたのだ。まるで、未来が見えていたかのように。
面白い。こんなに面白い男は初めてだ。見ていて飽きない、と笑っ

ていた王允の気持ちがよくわかる。
「楽しそうだな、張遼」
華雄が含み笑いをしながらこちらを見ていた。
「せやな。楽しいわ。楽しませてくれるやつがおるからな」
「ほう。男か？」
「確かに男やけど……って、そんなんとはちゃうで？」
「そうかそうか」
信じていない。顔は戻ったが、目が笑っている。
まあ、嫌いではないけど……どうなんやろなあ。
攻城兵器が進み始めた。迎撃の指示をだす。
「ええか！うちの声に合わせて石落とし！……今や！」
小難しいことを考えるのは後にして、霞は指揮に集中した。
どうやらこの攻撃が、今日最後の波になりそうだった。

日が暮れてしばらくして、連合軍の攻撃はひとまず静まった。
霞も、華雄と焚火を囲んで僅かな休息を取る。
炙った干し肉を一口の水で流し込み、大きく息をはいた。
向かいの華雄も同じように食事を終え、腕を組んで目を閉じている。
「なあ華雄」
「なんだ？」
華雄はいつでも実直だ。道理を強く好み、無駄を嫌う。
返事はしても目を閉じたまま微動だにしないのは、少しでも体力の回復に努めようとしているからだ。
自分とは正反対の性格だが、何故か不思議と馬が合った。
「アンタ、真名はしゃーないとしても、月っち以外誰一人字でも呼ばへんよな。
うちらのこと嫌っとるってわけでもなさそうやし、なんでや？」
「……私が董卓軍に加わった理由を知っているか？」
以前聞いたことはある。確か……。
「恋に負けたから、やったか？」

華雄は目を開けて軽くうなずいた。
「完膚なきまでに叩きのめされた。それも死なないように手加減されて、な」
仕方がないことだと思う。万全の状態の恋の強さは、最早別格だ。
「それが？」
「私は武人だ。初めて武器を手にして以来、常に最強でありたいと思っている。
それは今でも変わることはない。生涯を懸けて腕を磨き続け、いつか呂布に勝つ。
それが私の今の目標だ。勝負の結果、たとえどちらかが死のうとも、な」
「情が移らんように、ってことかいな」
「ああ」
なるほど。理解できなくもない。
「月っちだけ別なんは？」
聞くと、口だけで薄く笑った。戦闘中とは違う、柔らかい笑みだ。
「呂布に敗れたとき、これ以上の屈辱はないと思った。
なまじどれだけ手加減されたかが解ってしまっただけにな。
このまま自害してしまいたい、と思うほどに」
「それを止めたのが月っちってわけか」
「ああ。今は敵わなくとも、いつか再戦すればいい、とな。
月様は、私の命の恩人なのだ」
なるほどなあ、と霞は思う。同時に、やっぱり真面目すぎるのはあかんな、とも。
こら、近いうちに華雄と真名交わさなあかんなあ。
そう決めて、霞も休むために目を閉じた。

翌朝の連合軍の攻撃は、少し様子が違っていた。
先鋒の軍の中から、一騎がゆっくりと前に出てくる。
得物は青龍偃月刀。腰まで届く見事な黒髪が美しい。
「汜水関に籠る臆病者の敵将に告ぐ！
我が名は関雲長！漢帝国再興の大義に生きる劉玄徳の腹心なり！」
そのままこちらを挑発して誘き出そうとしている。一騎打ちで相手になる、とも。
勿論、相手にする者はいなかった。汜水関ではとにかく守備に徹し、連合軍を消耗させる。兵でも、物資でもだ。
ある程度時間を稼いだら、虎牢関に撤退し同じ作戦を取る。
連合軍が消耗しきったところで恋の軍が突撃する。
それが、詠と荀攸の示した基本的な作戦だった。
空気が変わったのは、挑発の言葉が月の誹謗中傷に移ったころだ。
中々出てこないこちらに業を煮やしたらしい。かなり激しい口調で罵っている。
それが暫く続いて—昨夜と同じように目を閉じて腕を組み、壁にもたれかかっていた華雄が突然前にでた。
「出る」
それだけ言って、門へと歩いていく。
「ちょ、待ちいや華雄！詠っちから言われたこと忘れたんか!?」
どれだけ挑発されてもうって出るな。将が出ると、兵もつられてしまい統率がとれなくなる、と。
すると華雄は前を向いたまま答えた。
「覚えているさ。私が出たらすぐに門を閉じろ。
お望み通りの一騎打ちだ。それなら問題ないだろう」
「せやかて……」
関羽は強い。ここから見ただけでそれがわかるほどに。
自分や華雄といえど、確実に勝てるとは断言できない。
「止めてくれるな、張遼」
「霞や」
「何？」

華雄が初めて振り返った。
「聞いたことあるやろ。うちの真名や。アンタのも教えてもらうで」
華雄が声をあげて笑った。
「風情がないな、霞。私の真名は帰ってきてからだ！」
馬に飛び乗り、開門！と叫びながら駆けてゆく。
二度と、振り返らなかった。

風を感じる。馬と一体となって駆けるときが、一番風を感じることができる。その瞬間が、華雄は好きだった。
徐々に足をゆるめて関羽の前へ。彼我の距離が馬躰十頭分ほどで止まる。
「董卓軍にも少しは骨のある者がいたか。私は――」
金剛爆斧を一振りして言葉を遮る。
「御託はいい。武人なら武で語れ」
顔つきが変わる。
やはり、強い。
世は広いものだ。このような豪傑が隠れていようとは。
得物を前にして睨み合う。呼吸を十ほど。同時に前へ。
切り結ぶ。重い。即座に馬首を返す。関羽も既にこちらを向いている。
再び得物がぶつかり合う。三合。四合。腕が痺れる。
――正面からのぶつかり合いは不利か。
渾身の力を込めて一撃を放つ。受け止められるがかまわない。体重をかけ、無理矢理距離を詰める。これで並走することになる。
涼州兵の強みは騎馬隊だ。馬術しかり、馬質しかり。
このまま攻撃を捌き続ければ、その差がでる。そこをつく。
関羽もこちらの狙いに気づいているようで、手数と力強さが一合ごとに増していく。一瞬たりとも気が抜けない。
そして―きた。関羽の馬が僅かに遅れる。
再び渾身の力を込めて放つ。関羽が馬ごと後ろにさがった。

馬首を返し、体制が整わないうちに止めを刺す。
金剛爆斧を大きく振り上げ――何かが通り過ぎた。
馬が崩れる。地が一瞬で迫ってきた。
馬が斬られていた。転がりながら受け身をとる。
身体の向きを変えながら即座に立ち上がると、関羽の馬もまた崩れていた。
直接傷は負ってはいないものの、こちらの攻撃を受け止めたときの衝撃が伝わり、立てなくなったらしい。
自らの馬がつぶれる前に、わざと隙を作って誘ったのか。
己の足で立ち、再び対峙する。仕切り直しだ。
円を描きながらじりじりと近づく。
馬の差はなくなった。有利な間合いを得るために、牽制に牽制を重ねる。
しばしの膠着。
頬を汗が滑り落ちる。関羽も同様だ。
その雫が、恐ろしくゆっくりと落ちるのを感じ、華雄は確信した。
どうやら入ったな。
過酷な調練をしていると、時折そういう兵が現れる。
平凡な兵が、突然目を見張るような動きを見せることがあるのだ。
まるで疲れを感じさせないまま動き続ける。
一刻なら問題ないが、二刻動き続けるとそのまま死ぬ。
幼い頃の師は、それを死域と言っていた。
実際に入ったのは初めてだが、感覚でわかる。間違いない。
間合いを詰める。足元から掬うように切り上げる。
関羽が下がるのに合わせて、前に突き出す。
快心の一撃は、回転しながら受け流された。
口角が上がる。笑みが零れるのが抑えられない。
これ程の高揚は、呂布との手合せ以来だ。
そのまま追撃をかけようと、振り返る。
その瞬間、風が身体を通り抜けた。
身体が軽い。どこまでも飛んでいけそうだ。

かつて、これほど風と一体となったことがあっただろうか。
風の先に呂布がいる。待っていろ。今追いつく。
陳宮が、カクが、王允がいる。月の顔が見え、霞のと酒を飲んでいる自分の姿が見えて。
全てが白くなり、風になった。

全てを、霞は見届けた。
華雄という忠将の生き様を、全て。
「華雄のアホ。帰ってきたら真名教えたるって言うたやないか。
うちだけに真名あずけさせよって……。
ほんまに、アホや……」
手の甲に、雫が落ちた。
1つ。また1つ。
それは、中々止まらなかった。

洛陽炎上、董卓暗殺さる

北郷一刀は思考する。
たとえ灯りひとつない牢の中であろうと、手足に枷が付いていようと、思考を止めることはない。
生きてさえいれば、頭がまわりさえすれば、策を練ることはできる。
一瞬たりとも気を抜かないで考え続けなさい。
あんたみたいな凡人は、それぐらいしないと世の中うまく渡っていけないわよ。
彼女の言葉は、一言一句違わず覚えている。
顔を少し赤く染めて、そっぽを向いたまま掛けられた言葉だった。
実際、こうして牢に入れられているのだから、彼女の心配は当たっているのかもしれない。
もっとも、此処に入っているのは一刀の策の一環であるのだが。
扉が開く音とともに、暗闇に僅かな光が差す。
続いて足音。音の大きさ、間隔、反響具合から推測して、おそらく成人男性二人。
歩くたびに、金属同士がぶつかり合う音もする。軽く裾が擦れる音も。
どうやら一人は文官、もう一人はその護衛の兵といったところか。
灯りが近づく。予想通り、一般兵が蝋燭を持って先導している。
その後ろから現れたのは—王允だった。
「無様なものだな、荀攸よ。
せっかく目を掛けてやったというのに、李儒様を排除しようなどと考えおって。
呂布や張遼のように、おとなしく従っていればよかったものを」
一刀は黙して答えない。目を閉じたまま微動だにしない。
それを見て、王允はふんと鼻を鳴らした。
「可愛げのないやつめ。
……まあいい。今日聞きたいことは1つだ。カクはどこにいる?」
一刀は答えない。だが、今度は片方の眉が僅かに動いた。

「……ここからは機密だ。お前は持ち場に戻れ」
「はっ」
蝋燭を受け皿ごと床に置いて、護衛の兵は去っていった。
王允のはるか後方で、ゆっくりと扉がしまる。
そして静寂が訪れた。
二人とも、一言も発さない。息がつまるような緊張が続く。
そして――先に静寂を破ったのは王允のほうだった。
「どうでしたかな、私の演技は。中々楽しめたでしょう？」
くっくっく、と堪えきれない笑いが漏れる。
これ以上ないほど楽しそうに笑い、にやにやとした目つきでこちらをみる。
知らない者が見れば、ただの悪戯好きの老人である。
誰も彼を司徒とは思わないだろう。
「中々面白い見世物でしたよ。
こんな所に囚われていなければ、もっと楽しめたのですが」
一刀もおどけながら枷をつけられた手を軽く掲げてみせる。
「それは重畳。司徒の位を降りた後は、旅芸人にでもなりましょうかな。
なんでも、先の黄巾の乱の首謀者も元は旅芸人であるという噂ですぞ」
王允は陽気に喋りながら手際よく一刀の枷を外してゆく。
「吟遊詩人もいいかもしれませんな。
華雄将軍の人柄を語り継ぐというのも、悪くない」
「そう、ですね。
彼女の死を、無駄にするわけにはいきません」
王允の屋敷で集まった翌朝、一刀は王允に捕らわれて牢に入った。
同時にカクは王允が事前に用意した別の屋敷に身を隠す。
その直後、華雄が汜水関で戦死したという伝令がきた。
華雄を討ちとった敵将は関羽。
関羽の挑発が董卓への侮辱に及んだところで華雄が出撃し、一騎打ちとなったらしい。

その知らせを聞いたとき、一刀は思わず呻いた。
まるで、三国志演義になぞらえたようだ。
勿論、細部は色々と異なっているだろう。
主な人物が全て女性となっているこの世界では、史実も演義もあまり信用しすぎてはならない。
だが、どうしても考えてしまうのだ。
見えない何かに強制されたのではないか、修正されたのではないか、と。
「さて、全て外れましたぞ。体調は如何ですかな？」
「問題ありません。行きましょう、王允殿」
これから赴くのは、運命との、世界との戦いだ。
修正力が働いていないというのなら、それでよし。
働いているというのなら、呂布や張遼の親しい友人である侍女を人質にとっている男、董卓を誅殺する。
それを、この世界の人々の真実にする。
その結果は、どうなるのか。
この試みがうまくいけば、彼女の命も救えるかもしれない。
「外に出る前に武器を渡しておきましょう。これをどうぞ」
そういって王允が自分の腰に下げていた剣をこちらに渡す。
鞘に収まったままでも、かなりの業物であることが見て取れる。
柄には北斗七星の装飾。
「七星宝刀、ですか」
「よくご存じで。もっとも、貴方は何でもよく知っていますがな」
思わず苦笑いする。
このタイミングでこの剣が自分に廻ってくるとは。
心せよ、北郷一刀。ここが1つの分水嶺だ。
深呼吸を一度。全身に血を巡らせ、一刀は歩き始めた。

月を見上げる。
昔から、月を見ると何故か心が落ち着いた。
自分の真名と同じ名前の星。
荀攸によると、月は自らが輝いているのではなく、日輪の光を鏡のように反射しているだけなのだという。
それは、自分の在り方にそっくりだ。
天下に対して何をするわけでもなく、ただ仲間の皆に与えられるはずの評価を奪って生きている。
天を知りて天にあまえ、乱世に戦わずにして乱世にのり、ただ人を顧みて人心を抱え込んだ。
その結果がこれだ。自分は陛下共々李儒に人質に取られ、皆にまで悪評が及んでいる。
反董卓連合なるものに攻め込まれ、華雄は戦死したという。
それらの事実の重さが、自ら命を絶つことさえも許さない。
本当に、どうしてこんなことになってしまったのだろうか。
「すまぬな、董卓よ。
朕が不甲斐ないばかりに、そなたには辛い思いをさせておる」
「陛下……。いえ、そのようなことは」
振り返ると、皇帝、劉協が立っていた。
いつからそこにいたのだろうか。
劉協は人の心の動きを感じ取る能力に長けている。言葉は発していなかったが、横顔から思いをいくらか読み取ったのだろう。
平和な世であれば名君として歴史に名を残したであろう皇帝も、今は李儒の籠の鳥でしかない。
「今になって、荀攸の言葉が身に染みておる。
『力なき正義に意味はない。
そればかりか、ときに災いとなることがある』
朕が兄上の死について、独自に調べようなどとしなければ、そなたが捕らわれることなどなかったろうに」
「でも、貂蝉さんが付いてくれていますから。
今も、どこからか見守ってくれているはずです。

洛陽に向けて軍が攻め込んできているそうですから、此処にいる方が安全かもしれませんよ」
「確かに、敵兵が来てもあの姿を見ればそれだけで逃げ出すやもしれんな。
……あやつが李儒をしとめられれば良いのだがな」
劉協の声は苦々し気だ。解ってはいても、言わずにはいられないのだろう。
「それは……仕方ありません。
李儒に手出しはできない、ってはっきり言われちゃいましたから。
『左慈や于吉に唆されたっていっても、李儒はこの外史の人間だからねん。
私が手出しするわけにはいかないのよん』って。
意味はよくわかりませんでした。
左慈や于吉っていう人達についても、心配ないって言うだけで……」
「もどかしいものだな。自分の無力さが恨めしい。
ただ時が過ぎ行くのを待つばかり、か」
それは自分も同様だ。2人して顔を伏せる。
その時、外へ通じる唯一の扉が開いた。
弾かれるようにそちらを見やる。劉協も同じく振り返っている。
部屋に入って来たのは、李儒だった。
少し様子がおかしい。気づいたのは、一呼吸してからだ。
部屋の入り口に立ったまま動かない。いや、少し震えているのか。
表情に温度がない。そう気づいたところで。
こちらへ向けて、棒のように倒れた。
よく見ると、背中に大きく斜めの傷がある。
「お久しぶりです董卓殿。陛下もご一緒でしたか。
お二人とも、ご無事なようで何よりです」
声とともに李儒の後ろから入ってきたのは、荀攸だった。
安堵で身体の力が抜け、床に座り込んでしまった。
「荀攸か。暫くぶりじゃの。

今の状況はどうなっておる?」
劉協はさすがに立ち直りが早い。
李儒に捕らわれている間も、常に皇帝としての気概を持ち続けていた。
「李儒は見ての通りです。
陛下のおわす場所を血で汚してしまいましたが、非常時故ご容赦下さい。
外では王允殿が、以前から潜り込ませていたこちら側の兵を指揮しています」
「これからどう動く?」
「この騒ぎに乗じて脱出します
隠れ家にて文和殿―カクと合流。
しかる後に、洛陽近くにて待機している呂布将軍の部隊とともに虎牢関へと」
劉協はすぐにうなずいた。
「わかった。全てそなたに任せる。先導してくれ」
「御意!」
荀攸が扉へと戻る。外の様子を確認し、自分の傍らに跪いた。
「立てますか?董卓殿」
そう言いながら手を差し出してくる。
「どうにか。ありがとうございます」
荀攸の手を取る。
離れないように、しっかりと握る。
とても、温かな手だった。
荀攸の案内で外へと向かう。
壁や調度品に、所々何かで斬られたような跡があった。
その跡を辿りながら進むと、大きな廊下へ出た。
剣戟の音が聞こえてくる。かなり激しい。
「王允殿!李儒は討ち取りました!
陛下、董卓殿、共にご無事です!」
荀攸の発した大声に、敵の動きが鈍る。

その隙をついて、こちら側が優勢にたった。
3人で王允へと近寄る。
「それは何より。皆様、お怪我もないようで」
「ええ。急いで脱出しましょう。
王允殿もこちらへ」
荀攸の言葉に、王允は首を振った。
「私は此処に残りますよ。
火をかけ、李儒の一派の残党を始末します」
「それは……」
荀攸が言葉に詰まる。
王允は、此処で死ぬ気なのだ。
「そんなの、だめです……。
これ以上、私のせいで誰にも死んでほしくないんです……」
自然と漏れた言葉に、王允は困ったように笑った。
「私は悪人に徹さなければ、嘗て部下であった荀攸殿の大義が薄れるのですよ。
それに、先帝陛下はまだ幼い。
誰かが御手を引かねば、今頃は道に迷うておられるでしょうからな」
「王允殿。貴方は、最初から……」
王允はそれには答えなかった。
「さあ、早くお逃げなさい。
火に巻き込まれてしまいますぞ」
すると、今まで黙していた劉協が口を開いた。
「王允よ。
漢帝国の皇帝として。そして先帝陛下の弟として。
その忠義に感謝する。
そなたの三族は、手厚く遇そう」
「恐れ多いお言葉です、陛下。
荀攸殿。皆様を、よろしくお頼みします」
「託されました」

別々の方向へと走り出す。
それが、王允を見た最後になった。
外へ出ると、背後で火の手が上がっていた。
直に、宮殿中へと回るだろう。
全てが灰に還る。
忠臣、王允とともに。

荀攸が案内したのは、郊外の小さな屋敷だった。
聞くと、王允が別荘として使っていたらしい。
誰にも邪魔をされず、静かに茶を飲むためだけの場所。
何もかもが質素だが、通された茶室だけは立派だった。
その茶室の奥に、ずっと会いたかった人がいる。
その顔を見た瞬間、涙が出た。
必死に堰き止めていた思いが、堪え切れずに涙とともに零れていく。
「私のせいで……。
私なんかのせいで、皆が、華雄さんが、王允さんが……」
止まらない。止められない。
陛下の御前で、相国がこんな姿を見せちゃいけないのに。
そんな自分を、親友は優しく抱きしめてくれた。
「それは違うわよ、月。
月のために。月だからこそ、皆命を懸けたの。
華雄も、王允殿も。
勿論、兵の皆もね。
だから、自分を下卑するようなことは言っちゃだめよ」
「詠ちゃん……。詠ちゃん。詠ちゃん！」
ただ泣くことしかできない自分を、詠はずっと抱きしめ続けてくれた。
翌日、事は洛陽中に知れ渡った。

先帝陛下を毒殺し、献帝とその侍女を人質にとり、呂布や張遼を脅して従わせていた暴虐非道の男、董卓暗殺される。
討ち取った者は、嘗ての上司、王允に投獄されるも、決して己を曲げなかった気骨の士。
荀攸、字を北郷という。

虎牢関にて、呂奉先籠城す

反董卓連合結成。
その知らせが洛陽に届いた翌日、王允の屋敷。
董卓軍筆頭軍師、賈クは配下の武将、呂布付きの軍師、陳宮の言葉を黙して聴いていた。
「……ですから！恋殿に全て任せておけば、ちんけな連合軍などいちころなのです！」
腰に両手を当て、得意げにない胸を張っている。
賈クは敢えて発言せずに黙っていた。
王允は軍議の場では常に聞き役に回る。
軍略に疎い一民政官が口を出すことではない、と。
口を開いたのは、王允の隣に座っていた荀攸だ。
「それでは軍師失格ですよ、公台殿」
「なんですと！恋殿の強さを録に知らない奴が何をふざけたことを！」
一理はある。恋の武は最早常人の域を大きく超えている。
本気になった恋を、荀攸が見たことがないのも確かだ。
「奉先殿の強さは重々承知しています。
おそらく私の想像の遥か上をゆくであろうことも。
しかし、彼女は人です」
陳宮がなにを当たり前のことを、という顔をする。
「首を刎ねられると死にますし、血を失いすぎても死にます。
不眠不休で戦い続けることもできなければ、水や食料無しで生きることもできません。
その食事に毒を混ぜるという手もあるでしょう」
陳宮がうっと言葉に詰まった。
「勿論、今回の戦でそういった状況になる可能性は低いでしょう。
ですが、全く考慮せずに奉先殿の武を頼みにするのは思考を放棄しているのと同じです。
それは、軍師が絶対にしてはならないことだと私は教わりました」

「で、ですが――」
何か言おうとした陳宮だが、結局言葉が続かない。
項垂れて黙り込んでしまった。
「我々の最終目的は、皇帝陛下と董卓殿を李儒から解放し、その安全を確保することです。
その目的を達成するために戦略を組み立て、その戦略に沿った戦術を用いなければなりません。
確かに奉先殿が撃って出れば、それなりの戦果を得ることはできるでしょう。
しかし、それは戦術的勝利でしかありません。
目先の戦術的勝利にこだわるあまり、陛下と董卓殿をお救いできなければ本末転倒です」
「――貴方は良い師をもったみたいね」
思わず口をついて出た言葉に、荀攸は本当に嬉しそうに微笑んだ。
「――はい。自慢の師です」
この男が、これほど柔らかく笑うのを初めて見た。
不覚にも、少し見とれてしまっていた。
「っそれで？貴方の言う戦略に沿った戦術の具体的な内容は何なのかしら？
まさかそこまで大見得切っておいて、何も思いついていない、なんて言わないわよね？」
荀攸は軽くうなずいた。
「一番重要なのはとにかく時間を稼ぐことです。
稼げば稼ぐほど、陛下と董卓殿を安全に助けることのできる可能性が高くなる。
故に――篭城するべきかと」
「ふん！やはり口だけの無能なのです！
古来より、篭城とは援軍を前提とした作戦なのですぞ！
この孤立無援の状況で、何処から誰が援軍に来るというのです！」
荀攸が失言をしたとみたか、鬼の首を取ったように陳宮が早口で捲し立てる。

一方、当の荀攸は涼しい顔だ。
「来ますよ。洛陽から。
私がお連れします。ある意味では、奉先殿よりも強力な援軍を、ね」
「恋殿よりも強い武人などいるわけがないのです！」
恋を侮辱されたと思ったのか、陳宮は激昂している。
だが、賈クには荀攸の言う援軍が誰のことを指しているのか理解できた。
「援軍とは陛下のことね。
月と陛下を救出した後、虎牢関にお連れするつもり？」
息をのむ音が聞こえた。陳宮と王允が絶句している。
無理もない。皇帝を戦場へと連れて行こうというのだ。
およそまともな漢人の考えることではない。
「ええ。その場で停戦の勅を出して頂きます」
「なるほどね。確かに状況次第では恋以上に強力だわ。
だけど、そううまくいくかしら。
檄文には耳障りの良い言葉を並べてるけど、袁紹に天下への野心があるのは明らかよ。
こちらが天子を思いのままに操ってるってことにして、無理矢理戦を続けそうなものだけど。
残念ながら、風評では圧倒的にこちらが不利。
一般兵も、大多数があちらの言い分を信じるでしょう」
「それは私がなんとかします。
最悪、董卓軍が壊滅しようとも、董卓殿と陛下の安全だけは必ず」
そう言い切る荀攸の顔は真剣そのものだ。
この男に懸けてみよう。
そう思えるような、強い意志に満ちた顔だった。
「ですが、兵力に差がありすぎますぞ。
兵を交代で動員し、昼夜問わず攻め続けられればこちらは消耗する一方です。
野戦でなければ、涼州兵の強みである騎馬隊も活かせません。
亀のように閉じこもるのは、恋殿には似合わぬのです！」

「ちょっと私情が入ってるけど、音々音の言うとうりね。
ただ籠城するだけでは、それほど多くの時間は稼げないわよ」
どうするつもり？
視線だけで問いかける。
荀攸は薄く笑っていた。
先程の真剣な顔から一転、悪戯小僧のような笑みだ。
「ところが、そうでもないのですよ。
籠城とは、奉先殿にぴったりの戦術でもあるのです」
困惑した。王允も陳宮も同様だ。
籠城が、恋にぴったりの戦術？
「――この世界には、六の大陸があります」
突然荀攸が話題を変えた。
六の大陸？
「その内の一つ、漢の大地から遥か海を越えた別の大陸には、噛みつき亀と呼ばれる生物が住んでいます。
その名の通り、噛みつくことが得意なのですが、中々恐ろしい亀なのですよ。
甲羅の中から蛇のように素早く頭を出し、人の指程度なら容易く食いちぎってしまうそうです」
隣で陳宮がぶるっと震えていた。
想像してしまったのだろう。自分も顔が引きつっている。
「亀とは、何も閉じこもっているばかりではありませんよ？」
今度の笑みには、暗さがあった。

「矢を絶やすな！交代で常に射掛け続けろ！」
虎牢関にて、曹休は兵の指揮を執っていた。
攻撃はうまくいっていない。
連合軍の兵による包囲が、だんだん遠巻きになっているのだ。

曹休直属の兵も、遠間から矢を射かけるばかりで、効果的な攻撃ができていない。
原因は明らかだ。
だが、いつ現れるかがわからない。
わかったところで、一般兵にはどうすることもできない。
曹休とて、数合もつかどうか。
あれは、最早天災の類だ。
「りょ、りょ、りょ、呂布だあーー!!!」
呂布という存在は。
突然門から飛び出して来るや否や、一直線にこちらの陣へと突っ込んでくる。
大量の矢が射掛けられるも、全てが方天画戟によって弾かれた。
突入したのは袁紹の陣だ。
方天画戟が振るわれる度に、まるで何かに空間ごと抉り取られたかのように、そこに空白ができる。
かすっただけで、兵が空を飛んでゆく。
一縷の望みを懸けて馬を狙うも、呂布が操るまでもなく、馬が自らの意思で攻撃をかわしていく。
天下無双の将、呂布。
天下の名馬、赤兎。
その進軍は、誰にも阻むことはできなかった。
やがて、呂布一人の前に、全軍が後退するという異常な事態となる。
兵は皆怯えていた。
無理もない。今日で何回目になるのか。
突然ふらっと出てきたかと思えば、一方的な蹂躙を繰り返して去っていく。
何日も現れないかと思えば、忘れた頃にまた現れる。
呂布の籠城が、これほど厄介だとは思わなかった。
苦々し気に見やるも、当の本人はどこ吹く風だ。
無人の戦場を、散歩でもするかのように馬を巡らせている。
いや、あれは――誰かを、探している？

そう気づいたところで、目が合った。
呂布が背中から弓を取り出し、矢を番える。
反射的に得物を掲げると同時に、衝撃が走った。
暴れる馬を必死に御し、馬躰にしがみつく。
放たれた矢は、兜の飾りを射抜いていた。
臆して身を屈めていれば、兜ごと頭を射抜かれていただろう。
安堵しつつ、矢を引き抜いたところで、違和感に気が付いた。
これは――。
「文烈！無事か！」
振り返ると、春蘭が駆けてきていた。
「大事ありません。それよりも」
「なんだ？」
「義姉上のところへ。報告せねばならないことがあります」

天幕の中に入ると、華琳が立ち上がって待っていた。
傍らにはいつもの通り、荀彧がいる。
「頭を射ぬかれたと聞いたけど……怪我はないようね。
あんまり心配させないでちょうだい、優」
「ご心配をおかけしました、義姉上」
一礼して頭を下げる。
普段、華琳は他の家臣の前で自分の真名を呼ばない。
幼い頃から姉弟同然で育ったとはいえ、今は臣下の礼をとっている。
その華琳が、筆頭軍師である荀彧の前で自分の真名を呼んだ。
どうやら、よほど心配させてしまったらしい。
「それで。報告しなければならないこととは何かしら？」
次に口を開いた時には、いつもの華琳に戻っていた。
覇気が内から滲み出ている。
曹休は、手にしていた矢を差し出した。
「呂布が放ち、私の兜を射ぬいた矢です。
布が巻き付けられていました。どうやら矢文のようです」

華琳の目の色が変わる。
だが、大きく反応を示したのは傍らの荀彧の方だった。
「それは――！」
華琳が驚いて荀彧を見やる。
普段の彼女は、敬愛する主の前でこれほど取り乱したりはしない。
「どうしたの？桂花」
「その布は、以前お話した洛陽にいる私の親族に。
叔父の荀攸が旅立つ日に、選別として渡したものです」

同時刻、虎牢関。
「お帰りー、恋。うまくいったんか？」
こくり。恋は黙ってうなずいた。
「そらよかった。
しかしえらいぎりぎり狙ろうとったな。
相手が下手に動いとったら死んどったで？」
ふるふる。今度は首を横に振る。
「それぐらいじゃないと、怪しまれる」
「ま、そらそうか。
さて、ここまではアンタの思惑通りにいっとるみたいやけど。
ここからが正念場やで、北郷」
月や詠、皇帝を連れてこちらへ向かっている男に想いを馳せて、霞は空を見上げた。

戦の終わり

――走る。とにかく走る。
少しでも速く。少しでも早く、彼女の下へ。
よろけながら角を曲がりきったところで、足音に振り返った彼女と目が合った。
「月っち！」
「霞さん！」
勢いのままに抱き着く。
少し苦しそうだが、月も抱きしめ返してくれた。
「無事やったか？怪我は？
李儒のくそ野郎には何にもされてへんよな？」
そのまま抱き上げると、へう、と縮こまってしまった。
悪い悪い、と頭を掻きながらそっと降ろしてやる。
「うん。私は大丈夫。
ずっと護ってもらってたから。
でも、華雄さん、が……」
嗚咽が漏れる。
顔を伏せたまま泣き続ける月を、今度は優しく抱きしめた。
「華雄が一騎打ちに出た理由は知っとるか？
関羽ってやつがな、月っちの悪口言いよってん。
そらもうぼろくそにな。
華雄は、それが我慢できんかったんや。
自分がどれだけ悪く言われても、月っちを悪く言われるのだけは許せんかったんや。
月っちのために華雄は戦って、ほんで逝ってもうた」
月の体がビクリと震える。
「だから、月っちは華雄の分まで生きなあかん。
華雄が命を懸けるだけの価値があったことを、生きて証明せなあかん。
せやから、間違っても自分なんかのために、とか言うたあかんで」

震えが止まる。
「うん……。もう、大丈夫」
そう言って顔を上げた月は、笑っていた。
泣きながら、笑っている。
「同じこと、詠ちゃんにも言われちゃったから。
だからもう、大丈夫」
強くなった。霞はそう思う。
同時に、月は笑顔じゃないといけない、とも。
目は真っ赤だし、無理して笑っているのがまるわかりだ。
けれども、自分はこの笑顔の為に戦っているのだ。
ちっぽけで単純だが、何にも勝る理由だった。
「――良い臣下をもったな、董卓よ」
横合いから声が掛けられる。
月と同時にそちらを見やると、誰かが階段を登り切ったところだった。
男だ。まだ若い。
幼さが抜けきらない、少年と言っていい年頃だ。
「その張遼だけではない。
兵の一人一人が、だ。
理不尽な侵略を受ようとも、自軍よりはるかに上回る大軍を相手にしようとも、誰一人として諦めてなどいない。
この虎牢関の全てが、見事な正の気に満ちておる。
もう一度言おう、董卓よ。
そなたは、良い臣下をもった」
月が少年に向けて笑顔を返す。
目は相変わらず赤いままだが、今度は心からの笑顔だった。
「ありがとうございます、陛下。
皆、私の自慢の仲間です」
どうやら、この少年はへいかと言うらしい。
へいか。へいか――陛下!?
慌てて片膝を付こうとすると、手を振って止められた。

「よい。ここは戦場であろう?
面倒な礼など不要じゃ。
膝など付くよりも、咄嗟に動けるようにしておくほうが、朕のためにもなる」
からからと笑う姿は、どこか王允に似ていた。
「戦場だという自覚が御有りでしたら、私達を置いて先に行かないで下さい、陛下。
敵の手の者が紛れ込んでいる可能性が、全くないわけではないのです」
続いて上がって来たのは、荀攸と賈クだ。
二人とも、少なくとも目立った怪我はない。
それを確認して、ようやく霞は安堵の息をはいた。
「すまぬ。外に出るのも、このような景色も久しぶり故つい、な」
荀攸がはあ、とため息をつく。
「今後はお気を付けください。
っと。お久しぶりです、文遠殿、奉先殿」
いつの間にか恋が後ろに来ていた。
どうやら「散歩」から戻って来たところらしい。
「ん。セキトたちは無事?」
「ええ。皆王允殿の別邸にいます。
私がいない間は文和殿が世話をしてくれていました。
今は洛陽も落ち着いたので、兵が交代で世話をするように手配してあります。
念のため公台殿が時々顔を見せるそうなので、問題はないでしょう」
「恋でいい」
「はい?」
皆が驚いて恋を見つめる。
本人はいつも通りの表情だ。
「月も、陛下も、セキトたちも、皆助けてくれた。
皆の命の恩人。

だから、恋でいい」
荀攸は暫く躊躇っていたが、やがて柔らかく微笑んだ。
「わかりました。
私の真名は一刀です。
よろしく、恋。これでいいですか？」
恋がうなずく。
それを、皇帝陛下が面白そうに見つめていた。ますます王允にそっくりだ。
「ああー」
せやったら自分も、と言いそうになったところで、華雄にからかわれたことを思い出した。
恋は深く考えないが、それ故に驚くほど純粋でもある。
本当に荀攸に感謝しているだけなのだろう。
だが、一般的に、親族以外の男女が真名を交換するということは、「そういうこと」だ。
月も詠も、顔を赤らめてもじもじしている。
華雄のせいで、妙に意識してしまう。
結局言い出せないまま、口の中でもごもごというだけだった。
「ところで、戦況はどうなのですか？
見たところ、損害は軽微ですし、士気も落ちてはいないようですが」
「ん。うまくいってる。
一刀の作戦のおかげ」
霞もうなずいた。
「この間、恋が帰ったと思って兵が突っ込んできたところにすぐにまた突撃する、っていうのやったばかりやからな。
今攻撃が止まっとるのも、それが原因や。
敵さん、すっかり怯えてしまっとる。
上の方がどうかはわからんけどな」
荀攸は顎に手を当てて何やら思案している。
「ならば、丁度良いところに着いたのかもしれませんね。
――この戦を、終わらせます」

言い切った。
荀攸から、静かに、しかし激しく気が漏れている。
「この前も言ったけど、具体的にどうするつもり？
陛下にご協力いただく、とは言ってたけど……」
「うむ。朕は何を為せばよいのかの」
詠と陛下が口々に尋ねる。
霞も同感だ。
この状況から、どのように戦を終わらせようというのか。
「反董卓連合は、盟主袁紹が発した檄文によって結成されました。
私も読みましたが、あの檄文は素晴らしい。
あの美しき配列・韻律・音調。
苛烈な行間に潜む詞藻・洒脱・品格。
……まあ、記したのは袁紹ではないでしょうが。
それはともかく。
ここで重要な点は、彼ら連合軍は、檄文に記された言葉によって集ったということです」
「ほほう。それで？」
陛下の問いかけに、荀攸は簡潔に答えた。
「言葉には、言葉で勝ちます。
具体的には、袁紹に舌戦をしかけます」
「その舌戦に、袁紹が応じるかしら」
詠は半信半疑のようだ。
「必ず応じます。
言葉で人を集めた人間は、自分に向けられた言葉を無視できない」
なるほど。理屈は通っている。
「暴虐非道の魔王、董卓を討つ。
洛陽を悪政から解放する。
董卓から、皇帝陛下をお救いする。
そういった大義名分を袁紹の檄文が与えるから、兵たちは命を投げ出して戦うのです。
その大義名分を崩してやれば、この戦は終わらせることができる」

いつの間にか、身を乗り出していた。皆も同様だ。
荀攸という男に、引き込まれる。
「敵は、袁紹が連れてきた軍ではなく、袁紹の舌です」

虎牢関の門が開き、中から数十騎が出てくる。
中央には馬車だ。
始まったわね。
華琳は、そっと不自然にならない程度に麗羽に近づく。
すぐに声を掛けられるように、だ。
兵がざわつく。
無理もない。先頭にいるのは、仲間の兵を散々殺して回った呂布だ。
呂布一人ではない。たった数十騎という数が、返って不気味さを引き立てる。
やがてその一団は、麗羽が直接率いる軍の前方で止まった。
静寂が訪れる。
今戦場を支配しているのは、間違いなくあの一団だ。
やがて、一騎が前に出てくる。
隣の桂花が息を飲む音が聞こえる。
――いい顔をしている。
それが、荀攸を初めて見て抱いた感想だ。
覚悟を決めた、男の顔をしていた。
優には、まだあのような顔はできない。
「反董卓連合、盟主袁紹殿に問う！
袁紹殿は、一体如何なる理由で皇帝陛下のおわす洛陽へ攻め込もうとなさるのか！」
荀攸の言葉を、虎牢関の全軍が繰り返す。
それは、大きな唸りとなって連合軍に届いた。
目だけで隣を見ると、麗羽はどうすればいいのかわからずおろおろ

している。
二枚看板も同様だ。
仕方がない。自分が声を掛けるしかないようだ。
「ほら、麗羽。答えてやりなさい」
「わ、私がですの？」
思わずため息が出た。
「貴女以外に誰がいるの。
この連合軍の盟主でしょ？
あんなに素晴らしい檄文を書いたんだから、それをそのまま言ってやればいいのよ」
「そ、そうですわね」
まったく、手のかかる盟主だわ。
「それは勿論、皇帝陛下を董卓さんの魔の手からお救いするためですわ！
それに、董卓さんの軍は洛陽で暴れまわっているそうじゃありませんの！
名門袁家の当主として！陛下や民が苦しんでいるのを見過ごすわけにはいきませんわ！」
「なるほど。
では袁紹殿は、董卓のように天下への野心ではなく、只々陛下と民の安寧のために軍を起こしたと。
では、それさえ成されれば、血を流す必要はないはず！
天下への野心を持たぬというのならば、何故対話の道を探らず軍を起こしたのか!?」
「洛陽で盗賊まがいの行いをしているような者たちに、話が通じるわけがありませんでしょう！」
「ならば、その話が通じるならば、武力により血を流す必要はない！
両軍の兵とて、貴女が安寧を願っている民である！
その民が血を流すことは、貴女の本意ではない！そうではありませぬか!?」
「え、ええ。当然ですわ！」

麗羽が戸惑っている。
荀攸の狙いがわからないらしい。
だが、無数の兵の前で荀攸は言質を取った。
この場にいる両軍全てが生き証人だ。
「ならば、早々に軍を引かれるがよい！
魔王董卓は、この荀北郷が誅殺いたした！
人質として捕らわれていた皇帝陛下、及びその侍女は既に自由の身！
呂布将軍、張遼将軍ともに袁紹殿と戦う理由はあらず！
洛陽は以前の平穏を取り戻しつつある！
徒に血を流し、洛陽へ向けて軍を進めることは、袁紹殿の志に反しますぞ！」
荀攸の言葉に、連合軍の兵士が顔を見合わせてざわつき始める。
ただでさえ呂布の存在により戦意が下がっていたところに、戦う理由が根本からなくなろうとしているのだ。呆然と立ち尽くしている者も少なからずいる。
「な、な、なんですって!?
何処の馬の骨ともわからない者がいい加減なことを！
だいたい、貴方が董卓さんの手先でないという証拠はありますの!?」
尤もな話ではある。
麗羽の言葉に兵が落ち着きを取り戻したとこで、激震が訪れた。
「朕では証拠にならぬか、袁紹よ！」
突然、場違いに明るい声が響き渡った。
中央の馬車が前に出てくる。
中から、少年が身を乗り出していた。
「漢帝国皇帝、劉協である！
朕が此処にいることが何よりの証拠であると思うが、どうかな？」
麗羽は最早見ているのが滑稽なほど動揺していた。
声も身体も大きく震えている。
「こ、こここ皇帝陛下!?

ま、まさかそんな。に、偽物ではありませんの!?」
「麗羽。貴女、今とんでもない不敬を犯してるわよ」
劉協はなおも楽しそうに続ける。
「どうした!?朕の顔を見忘れたか!?
幼いころ、そなたの祖父とともにまみえたことはあるはず！
よく見えないというのなら、そなたが迎えに来るがよい！
呂布や張遼は下がらせる！
何なら軍をよこしてもよいぞ！」
そんなことはできない。できるはずがない。
軍を率いて、皇帝を連れ去る。
董卓と同じような所業を、他の諸侯の目前で行えるはずがない。
連合の中には、劉備のように純粋に皇帝と民を想って参加した者もいるのだ。
おそらく、兵の中には数えきれないほどに。
「来ないのならばこちらから行くぞ！
その間、誰一人血を流すことは許さん！
漢帝国皇帝、劉協の名において、停戦を命ずる！よいな！」
戦は、終わった。

幕間　二荀、集う

洛陽の天気は快晴だった。
空が良く見える。景色が良い。
それもそのはずだ。嘗て豪華絢爛だった――装飾過多ともいう――宮殿はそのほとんどが李儒と共に灰になってしまった。
李儒だけではない。
忠臣王允もまた、壮絶な最後を遂げた。
最期まで付き従おうとした兵によると、王允は先帝陛下のお供は自分の役目だ、誰にも譲りはせぬと言って兵を逃がしたあと、歩いて宮殿の奥深く、炎の中へと消えていったらしい。
古来より、炎は始まりを暗示するという。
宮殿を包んだ炎は、全てを始まりへと還した。
宦官による汚濁も、李儒による地獄も、王允の忠義も。
全てが忘れ去られ、過去のものとなり、歴史と化してゆく。
これから始まるであろう未曾有の大乱世。
数多の群雄が割拠し、敗れ去り消えてゆくだろう。
彼らの記憶は時と共に記録となり、やがて史書に記された文字へと成り下がる。
その史書に、自分の名は、荀攸という名は果たしてどのように記されるのか。
蒼天の下、裸の玉座に座る目の前の少年の名は、どのように記されるのか。
或いは、漢帝国再興の名君として。
或いは、漢帝国最後の愚帝として。
それはまだ誰にもわからない。一刀にさえ。
「――重いな、荀攸よ」
一刀の胸中を知ってか知らずか、少年――劉協は言葉を発した。
「漢朝四百年。
先人達の重みが、この身にずっしりと伸し掛かっておる。
今の朕でさえ、だ。

董卓の治世から、いきなり李儒による地獄へと突き落とされた先帝陛下の重圧は、如何程であったのか」
「……」
一刀は答えられない。
劉協もまた、応えを期待しているわけではないだろう。
四百年、脈々と受け継がれてきた血の重み。
それは高貴であると同時に呪縛でもある。
想像を絶するであろうその重みは、皇帝となった当人にしか本当に理解することはできない。
「ひとまずは落ち着いたわけじゃが、これから世はどうなるのかの」
今度は明確な問いかけだ。
「おそらく、この平穏は長くは続かぬかと。
連合軍に参加していた諸侯は全て領地へと戻り始めましたが、袁紹はこれで諦めるような人物ではありません。
特に、今回は大衆の面前で面子を潰された形ですから」
「ふむ、他にはおるかの」
一刀は1つうなずいて続けた。
「同じ袁家の袁術は邪気のない子どもですが、子ども故にその欲に限りがありません。
幼い頃から甘やかされ続けた影響でしょうが。
さらに傍にいる人間もよくない。
袁術の欲がよろしくない方向に向かえば、それは張勲によって際限なく暴走するでしょう。
次の乱の火種となるのは、おそらくこの二人かと」
「止めることはできぬ、か」
劉協がぽつりと呟く。
「はい。
董承殿を助けるためとはいえ、陛下が董卓の人質となっていたことを、天下に公表する形になりました。
先の黄巾の乱に続き、漢朝に乱を抑えるだけの『威』がないことは既に周知の事実です。

軍閥化を目論む者は、それを躊躇わないでしょう。
これは、私の責任でもあります」
頭を下げると、劉協はよい、と手を振った。
「魔王董卓の親族であるが故に、朕の暗殺を命じられた侍女。
そのような者を見殺しにして、大儀も何もなかろうよ。
ところで、その董承は息災にしておるのか？」
「今頃は文和殿、呂布将軍、張遼将軍、公台殿、と共に。
……華雄将軍を弔う、と」
「……そうか」
それだけ言って、劉協は暫く口を閉ざした。
一刀もまた。
先に沈黙を破ったのは、劉協だった。
「董承らの処遇は？」
「彼女達には、洛陽に残ってもらいます。
董承殿は、引き続き侍女として。
陛下の御身は呂布将軍が。
謀略からは、文和殿が御護りするでしょう。
公台殿は……呂布将軍が了承すれば、連れて行こうかと思います。
一度呂布将軍から離れたほうが、彼女のためにもなるでしょう」
陳宮を連れて行く。
その言葉の意味するところは、つまり。
「往くか、曹操のもとへ」
一刀はしっかりとうなずいた。
「はい。
何かにつけて人を扱き下ろす気の強い姪ですが、あれで打たれ弱いところもありますので。
長い間離れていましたが、傍にいて支えようと思っています」
「そうか。
朕の下に留まる器ではないのはわかっていたが、やはり惜しいの。
王允がよう言うておった。
『荀攸殿は必ずや天下にその名を轟かすようになりましょう』、と

な。
これからどのようなことを為してゆくのかが楽しみで仕方ない、とも。
朕も、楽しみにさせてもらうとしよう」
劉協の言葉に、一刀は涼しい顔で問いかけた。
「よろしいのですか？
漢朝を滅ぼすかもしれませんよ？」
劉協は声を上げて笑い出した。
「滅びるか？それもよかろう。
どうせ滅びるならば、精々華麗に滅びればよいのだ」
黄昏の空に、高らかな笑い声が響き渡った。

王允の屋敷の庭を、ゆっくりと歩く。
隅から隅まで、確かめるように。
曰く、人が本当に死ぬのは、人に忘れられた時だという。
王允は、この庭を愛していた。
この庭の全てに、王允との思い出が宿っている。
それらを、心に焼き付けていく。
王允という忠臣を、決して忘れることのないように。
暫く歩いた所で、梅の木を見つけた。
まだ洛陽が平穏だった頃は満開だった花も、今はもう散り始めている。
「手紙を送ったのは、この花が咲き始めるよりも前だった。
最近、時が過ぎるのが速く感じる。
何故なんだろうな、桂花」
「相変わらず生き急いでるからじゃない？
大体の事情は聞いたけど、無茶ばっかりして。
一歩間違えれば死んでたわよ、あんた。
それとも、まだ自殺願望でもあるわけ？」

応えは背後からすぐに返ってきた。
「久しぶりに会ったのに、酷い言い草だな。
ちゃんと勝算があったからやったんだ」
振り返ると、いつも通りのふくれっ面をした姪がいた。
「本当に相変わらずね、あんたは」
「桂花も相変わらずだな。
どこも変わってない。
性格も、背も胸も最後に会った時のまんまだ」
「よーくわかったわ。
やっぱり死にたいのね、あんた。
お望み通り殺してあげるからちょっとこっち来なさい」
げしげしと遠慮なく脛を蹴ってくる。
無性に楽しくなって、思わず笑ってしまった。
「それは辞めてもらえるかしら。
折角に手に入ることになった優秀な人材を、痴話喧嘩で失うなんて笑い話にもならないわ」
いつの間にか曹操が近づいてきていた。
傍らには、夏候姉妹が控えている。
「ち、痴話喧嘩だなんて！
そんなんじゃありません、華琳様！」
桂花がすぐさま声を上げる。
顔が真っ赤に染まっていた。
「いやいや、どこからどう見ても痴話喧嘩以外の何物でもなかったぞ。なあ姉者？」
「ちわげんか？なんだそれは？」
「夫婦喧嘩、といえばわかりやすいか？」
「おお、そういうことか！
うむ！まるで長年連れ添った夫婦のようだったぞ！」
姉妹の感想に、桂花はますます顔を赤らめて黙り込んでしまった。
「ご挨拶が遅れました、曹操殿。
荀攸、字は北郷と申します。

呂布将軍に託した文はお気に召して頂けたでしょうか？」
一刀の言葉に、曹操は実に愉快そうに笑った。
「ええ。中々素敵な恋文だったわ」
すると、黙り込んでいた桂花が大声を上げた。
「こ、恋文!?
見せて頂けないと思ってたら、あんた華琳様にそんなもの送ってたの!?」
「そんなものとは酷いな。
ありったけの想いを込めて書いたっていうのに」
「あ、あんたねえ……！」
そのやり取りをにやにやしながら見ていた曹操が笑い出した。
「大丈夫よ、桂花。
万が一文が誰かの手に渡ってもいいように、恋文ともとれるよう曖昧に書いていただけだから」
「私としては、恋文と捉えて頂いても一向に構わないのですが」
「あら？それもいいわね。
この子ったら、こんなに私を慕ってくれているのに、閨にだけはどんなに誘ってもこないのよ。
貴方を誘えば、桂花も一緒にきてくれるかしら？」
「それはいい案ですね」
桂花はこれ以上ないほど顔を赤くして、わなわなと震えていた。
ひとしきり笑ったあと、曹操に向き直って一礼する。
「改めまして。
曹孟徳殿。貴女の臣下の列の末席に、この荀攸の名を連ねることをお許し頂けましょうか？」
曹操はすぐにうなずいた。
「許す。荀家の麒麟児の能力、私の下で存分に振るいなさい」
この日、曹操の下に二荀が集った。

――同時刻、領地へと帰還中の袁術軍。

「七乃！七乃！
何やらあそこが騒がしいぞえ！」
「本当ですねー。
もうすぐ美羽様のお昼寝の時間だっていうのに。
あれじゃあ美羽様が眠れなくなるじゃないですかー」
「気になるの！見に往くぞ、七乃！」
元気よく走り出す主を張勲は慌てて追いかける。
「わわ、待って下さい美羽様ー！」

騒ぎの中心に近づくと、兵達が輪になって何かを遠巻きに囲んでいた。
どうやら、その何かが騒ぎの原因らしい。
「何があったんですか、皆さん？
そんなにざわざわしてー」
「そ、それが……」
返事をした兵の声は、震えていた。
「我が軍の近くで怪しい動きをしていた孫策軍の兵を捕らえたところ、あのような物が……」
そういって円の中心を指差す。
美羽と一緒になって覗き込むと、何か四角い物が落ちていた。
近づいて拾い上げる。
それは、玉璽だった。
横から、美羽がひょいっと覗き込む。
「それはなんじゃ、七乃？」
「これはですねー。
むかーしむかーし、始皇帝の時代から伝わってる、伝国の玉璽っていうんですよ。
失くした人が国も失くしちゃってー、見つけた人が国を手に入れるって言われてる皇帝の証なんです」
「なんと!?
それでは、見つけた妾が皇帝になれるということかえ!?」

その玉璽の傍らには、人を象った紙が落ちていた。

陳留への帰還、その道中で

主となった曹操に付き従って本拠地の陳留に帰還する道中。
一刀は遠慮なく背中に突き刺さる視線に苦笑いした。
視線の主は陳宮だ。今にも噛みつきそうな顔でがるると唸っている。
洛陽を出発した時からずっとこのままだ。
それを見かねてか、隣を往く桂花が声を潜めて話しかけてきた。
「ちょっと。大丈夫なんでしょうね、あれ」
「問題を起こさない程度の分別はあるだろう。
送り出した恋の顔に泥を塗ることになるし。
まあ、好き嫌いは別なようだけど」
同じく一刀も陳宮に聞こえないよう声を潜める。
自然と顔を寄せ合うかたちになった。
桂花の白い頬が、ほんのり赤く染まる。
「連れてくるって決めたのはあんたなんだから、しっかり監督しなさいよ。
もし流血沙汰になんてなったら、私の面目も丸潰れじゃない」
「あんまり心配せんでも大丈夫やと思うで」
いつの間にか、反対側に霞の馬が並んでいた。
気配も音も全くしなかった。並足であることを差し引いても、驚くべき馬術だ。
「あんなんでも、最低限の筋は通す奴や。
何かあっても、精々一刀が蹴られるくらいで済むやろ」
「それはそれで嫌だな」
再び苦笑いしながら、一刀はこうなった原因を思い出していた。
「ふざけたことを言うのもいい加減にするのです！

どうしてねねがお前なんかに付いて往かねばならいのですか！」
暖かな日差しが差し込む昼下がり、王允の屋敷に陳宮の大声が響いた。
怒りで目が吊り上がっている。
一方、怒鳴られた一刀はいつも通りの涼しい顔のままだ。
「その方が恋と公台殿、双方の為になるからです。
特に公台殿、貴女は危うい」
「なんですと！」
再び陳宮が激昂する。
陳宮の剣幕に、上座の月は一刀と陳宮の顔の交互に見つめておろおろしている。
呆れ顔の者、面白がる者、表情を変えない者。反応は様々だ。
「貴女は行動のほぼ全てが恋の存在を前提としています。
恋に依存しきっていると言っていい。
いずれその重さが、恋を押し潰してしまうかもしれない」
「そ、そんなことはないのです！」
少し言葉に詰まった。
どうやら自覚が全くないわけではないらしい。
「それに。
もし、恋を失ってしまったとしたら。
貴女は、自分の足でしっかりと立つことができますか？」
「れ、恋殿が死ぬなど、絶対にあるはずがないのです！」
既に若干涙声になっている。
想像しただけでこれだ。もし、が現実になったら、どうなってしまうのか。
「この世に『絶対』はありません。
以前話したように、如何なる武人でも、死ぬ時は死にます。
覇王項羽の如しと称された孫文台も、あのように亡くなるとは誰も想像しなかったでしょう」
陳宮の目尻から涙が溢れる。
すると、恋が口を開いた。

「一刀」
「何ですか？恋」
「一刀に付いて行くと、音々音の為になる？」
恋の言葉に、一刀ははっきりうなずいた。
「必ず。人を成長させることにおいて、曹孟徳に並ぶ者はいないでしょう」
恋もまた、こくんとうなずく。
「わかった。音々音を、お願い」
「任されました」
一礼する。恋も包拳礼を返した。
「れ、恋殿～……」
陳宮が情けない声を上げるも、恋は首を振った。
「いつも、一緒にいられるわけじゃない。
恋が護れないときだって、ある。
音々音も、強くならなくちゃ、だめ」
「わかったの、です……」
陳宮ががっくりと肩を落とす。
それを見て、張遼が膝を叩いた。
「よっしゃ、決まりやな。
音々音が一緒に行くなら、一つ頼みたいことがあるんやけど、ええかな？」
「私で了承できることならば。
場合によっては、主の許可を得なければなりませんが」
一体どんな頼みなのか。
一刀が首を傾げると、張遼は楽しそうに一刀の前で手を振った。
「そない面倒なことやあらへん。
頼みってのは二つあってな。
まず一つは――うちも、一緒に付いてってもええかな？」
張遼の口から飛び出したのは、予想外の言葉だった。
「優秀な人材が増えるのは、私としては大歓迎ですが……。
皆さんはよろしいのですか？」

「皆にはもう言うてある。
……ええかな？」
張遼が上目遣いで見つめてくる。少し潤んでいる瞳がよく見えた。
こういう時、女性は卑怯だとつくづく思う。
周りを見渡したが、何れも女性ばかり。しかも、全員が一刀から目を逸らしていた。
まあ、一刀の一存で了承しても問題はない、はず、だ。
たぶん。おそらく。きっと。
出仕して早々、越権行為を犯しているのかもしれないが、仕方ない。
所詮、男は女の涙には勝てないのだ。
「わかりました。
よろしくお願いします、文遠殿」
「霞や」
「はい？」
「うちの真名は霞っていうねん。
あ、あと敬語も禁止な？」
「……じゃあ、一刀、で。
よろしく、霞」

「……恋殿とねねならば、天下をとることなど容易いというのに……」
現実逃避から戻ってくると、陳宮が何やら聞き捨てならないことを呟いていた。
馬上から半身だけ振り返る。
「それは興味深い。
参考までに、どのように天下をとるのか聞かせて頂けますか？」
一刀の問いに、陳宮はえっへんとない胸を張った。どうやらお気に入りのポーズらしい。
「天子を御護りしている今、大義は恋殿にあるのです。

連合に参加していた諸侯を恋殿の武とねねの知略で片っ端から潰してゆけば、恋殿は漢帝国再興の英雄なのです！」
先程とは違う種類の苦笑いが零れた。隣の桂花は呆れ顔だ。
「なるほど。まあ、実現する可能性はなくもないでしょうが……。
では公台殿。貴女は、天下を統べて何をしたいのですか？」
「何、を……？」
一刀の言葉に、陳宮は固まってしまった。
「恋は強い。それは間違いありません。
貴女の戦術能力も、私などより遥かに上でしょう。
連合に参加した諸侯の中で、純粋に董卓の専横を止めようとした者は極僅かでしょう。少しばかり謀略を為せば、攻め込む口実は確保できる。
貴女達二人ならば、或いは天下をとることもできるやもしれません」
横で桂花がそんなわけないでしょ、という顔をしていた。
「その先にあるのは、貴女の策のままに大量の血を流した恋と、彼女への怨嗟の声。
人口が激減し、荒廃した不毛な漢の大地です。
貴女はその天下で、何を為そうというのですか？」
「……」
陳宮は答えない。答えられない。
「この乱世です。天下への野心を持つ軍師は大勢いるでしょう。それを否定するつもりはありません。私とて軍師の端くれですから。
ですが、貴女の野心には政の視点が、天下をどのように治めるか、中華の大地に住まう億の民をどのように食わせるかという視点が足りません。
頭の中にあるのは、恋をどのように戦わせるかという軍略だけです」
「そ、それのどこが悪いのです！
大体、軍師なんてものはどうしようもなく戦が好きで、頭の中では常にまだ知らぬ敵とまだ知らぬ激しい戦を戦っているのが本来の姿

なのですぞ！」
陳宮の大声に、周りの兵が何事かと振り返る。
さすがにばつが悪くなったのか、それきり黙りこんでしまった。
「確かに危ういわね、あの子。
戦をどうやって終わらせるか、っていうところから軍略を考えるあんたからすれば、特にね」
「能力はあるんだけどな。
経験を積む前に、恋の武と戦に魅せられ過ぎてしまったんだろう。
良くも悪くも、な」
会話は終わりにして、馬を御すことに集中する。
少しずつ、行軍速度が上がっていった。

曹操軍は、たとえそれが本拠地へと帰還する最中でも訓練を怠ることはない。
並足から早足へ。交互に繰り返したあと、早足が続き、行軍速度はさらに上がっていく。
走りながら食事をとることもする。名士のお嬢様だった桂花には、最初は堪えただろう。
指揮をとっているのは夏候姉妹だ。曹操はそれを採点しているらしい。
行軍を観察していると、姉妹それぞれのクセのようなものが視えてくる。
武将には大別して感覚型と計算型の二種類がいるが、姉が感覚型、妹が計算型のようだ。
一長一短であり、どちらが優れているというわけではない。
例えば、感覚型は軍略を細かく考えることはしなくても、相手の軍の動かし方を勘で見破ってしまうときがある。こういう将は、小細工の効きにくい、大群同士の正面からの決戦に強い。

一方計算型は、何軍にも分かれてあちこちで同時進行する戦に強い。性格な情報と決断の速さが重要だからだ。多数の将を統括する司令官に向いている。
そして、軍師に桂花。現時点でも、バランスのとれた良い軍だ。
ここに、神速の騎馬術を誇る張遼、純粋軍師陳宮が加わるとどうなるのか。荀攸となって以来、久しく忘れていたワクワクするという気持ちが湧き上がってきた。
「どうかしら？私の軍は。
荀家の麒麟児の見立てを聞かせてちょうだい」
曹操が馬を寄せて問いかけてくる。
視界の端に、桂花が頬を膨らませているのがちらっと見えた。
「素晴らしいの一言に尽きます。
兵も、将もそうですが、感嘆すべきは軍紀でしょうか。領地へと帰還している最中にもかかわらず、気に一切の緩みがない。ご主君の人柄が、そのまま軍に出ているのかもしれませんね」
「お世辞がうまいのね。他には？」
曹操は楽しそうに笑った。視界の端の桂花の機嫌が急降下する。
「馬の脚ですね。
馬という生き物は、長い間走らせないと身体が縮こまり、本来の脚の速さ、強さを活かせなくなるものです。
この軍は、並足で行軍している間も、兵が休んでいる間も、常にそれに気を配っていました」
今度の返答には、曹操は少し驚いた顔をした。
「よく気が付いたわね。中々そこまで気が回る軍師はいないものよ。
あれやこれやと理屈を捏ねるばかりで、戦場や兵の実際の姿を知らない自称軍師も多いわ。
頭の中だけで戦をするなら、誰だって百戦百勝よ」
無理もない。本格的に軍師の需要が高まったのはごく最近のことだ。
一刀のように、実際に兵に混じって戦を経験した軍師など少数だろう。

それを伝えようと、口を開きかけたところで。
「急報！急報です!!」
伝令の兵が大急ぎで駆けて来た。
曹操の前で馬から飛び降りて膝を付く。
「落ち着きなさい。
冷静に、正確に、何が起こったのかを伝えなさい。いいわね？」
「はっ」
伝令兵は、呼吸が落ち着くのを待って話始めた。
「エン州に、青州から黄巾賊が攻め込みました！
その数凡そ三十万！
エン州刺史劉岱殿は殺害され、配下の鮑信殿が指揮をとり食い止めておられますが、大軍を前に苦戦しております！つきましては、曹操殿に救援を請いたいと！」
騒乱が、始まった。

黄巾三十万

視界一面が人で埋め尽くされていた。
前後左右、何処を見ても人だらけ。平野部が、隙間なく人で埋め尽くされている。
群集に揉まれて脱落しないように、一刀は馬にしがみついた。あの張遼が傍に付いているとはいえ、一瞬たりとも気を抜くことができない。それは他の兵も同様だ。顔を引きつらせながら、必死に武器を振り回している。よく訓練され、精強を誇る曹操軍の兵も、少なからず恐怖を覚えているようだ。無理もない、と一刀は思う。
ここは、黄巾軍三十万のど真ん中なのだから。
「おらおらー！命が惜しかったらどかんかーい!!」
一人元気なのは、一刀より馬体1つ分先を往く霞だ。明け方に横っ腹から奇襲をかけたとはいえ、群集の真っ只中をまるで無人の野を往くが如く進んでいく。まるで水を得た魚のようだ。
霞曰く、騎馬隊で大軍を真っ二つに切り裂く快感は何物にも変え難い、らしい。
霞が先導してくれているおかげで、後方を往く馬は自然とそれについて行く形になる。僅かな方向転換も馬が自分で行うし、脚の速さも同様だ。マラソンや駅伝、自転車競技等のペースメーカーとその集団が近いだろうか。霞は、一刀が期待した役割をしっかりこなしてくれていた。
馬に脚が命じるままに駆けさせ、一刀は自分の役割に集中する。全体を俯瞰し、黄巾一人一人を見つめる。感覚を研ぎ澄ませ、士気や空気といったものを感じ取る。特異な点は決して見逃さないように。少しでも正確な情報を多く集めることが、一刀の役割だ。
そして、思う。
この群集は、異常すぎる、と。
それも全員が、だ。一人として例外はない。先ほどから襲い掛かってくる相手を切り伏せ続けている霞は、今頃不気味に感じているかも

しれない。
――この中に長くいるのは危険だ。
そう判断を下し、先を往く霞に向かって声を張り上げた。
「霞！行軍速度を少しずつ上げてくれ！
集団を抜き終わったら、速度を緩めずそのまま撤退する！」
一刀の叫びに、霞は青龍偃月刀をぐるぐると回した。了解の合図だ。
さらに速度を上げた霞の馬についてゆけるように、手綱をしっかりと握りしめた。

黄巾軍を突っ切って暫く後。
追跡を完全に振り切ったことを確認してから停止、降馬の許可を出す。
兵は皆、どう、と音を立てて座り込んだ。冷や汗をかいている者もいる。
そんな中、霞は未だに馬に乗ったままだった。
「霞」
声を掛けても反応がない。
どうすべきか迷っていると、こちらに顔を向けないまま霞がぽつりと呟いた。
「一刀」
「霞？」
「なんや、あれ」
振り向いた霞の顔には、恐怖が浮かんでいた。
「うち、最初はええ気分やってん。
数だけは多いけど、所詮は賊や。簡単に切り崩せとる、って」
その通りではある。実際、兵の練度は高くはなかった。
「せやけど、あいつら皆同じ顔やねん。、
うちにどんだけ仲間殺られても、どんな怪我しても、顔色一つ変えんと突っ込んできよる。
みーんな同じ無表情のまんまや。

あれは、やばいで。鮑信のおっさんの言うた通りや」
「……ああ」
うなずきを返す。
確かに、以前の黄巾党とは明らかに違う。
反乱初期の彼らには、様々なタイプがいた。
漢朝への不満、恨みを爆発させる者。
食うに困り、自暴自棄になって反乱に参加した者。
全てを諦め、絶望を目に宿した者。
だが今回の黄巾は、その何れとも異なっている。
彼らの目には、感情というものが一切映っていなかった。何も映していない、完璧な無だ。
まるでそうプログラミングされた機械のように、ただ進軍して目の前の敵を屠っていく。
何かに操られているようなあの状態は、まるで――。
「催眠術？」
「なんやて？」
思わず口に出してしまっていた。
霞に催眠術などと言ってもわからないだろう。
「まるで、噂に聞く五胡の妖術みたいだな、ってね」
場を和ませるように軽く言ったが、予想に反して霞は真剣な顔のままだった。
「……それ、当たりかもしれへん」
「え？」
思いがけない言葉に霞の顔をまじまじと見ると、顔をぷいっと逸らされてしまった。僅かに見える頬が赤い。
「洛陽におる時にな。黄巾の親玉が旅芸人らしい、って王允の爺ちゃんが言うとったやろ。
そんで、その親玉が芸を見せる時に妖術も使うらしいってことも聞いたことあんねん。
あの顔は、どう見ても普通やない。
一刀の言うとうり、妖術使っとるんなら、むしろ納得や」

なるほど、しかし――。
「自分で言っておいてなんだけど、あんなに大勢の人を操る妖術なんてあるのか？」
「それはわからへん。
うちが聞いたのは、妖術で遠くまで歌が聞こえるようにしとった、っていうだけや」
声を遠くまで届ける妖術。そのようなものがあれば、集団に催眠をかけることも可能かもしれない。
旅芸人の芸を実際に見たことはないが、話を聞く分には現代のライヴのようなものだろうか。それならば、一度行ったことがある。あの独特な熱狂、興奮。ライヴ中は、会場全体がトランス状態を共有しているようなものだ。その熱狂は、コンサートの主が方向性を与えてやれば、容易く暴動へと変化してもおかしくない。それは、ある種宗教の教祖と、狂信的に付き従う信者の関係に似ているのではないだろうか。
史実の黄巾の乱は、確か太平道という宗教団体による反乱だったはずだ。
この世界では、中々張角達の実像が見えてこなかったが、思わぬところで符号しているのかもしれない。
「霞、戻ろう。
一刻も早く、このことを皆に伝えないと」
「了解や！
全員乗馬！全速力で城に戻るで！」
霞と並んで駆けだすと、後方で兵が慌てて乗馬していた。
「一刀、ええ顔しとるな」
「そうか？」
自分では、特に変わっているつもりはないのだが。
「そや。虎牢関で、一人で袁紹に啖呵切った時と同じ顔しとる。
……かっこええで」
「え？最後聞こえなかったぞ？何て言ったんだ？」
「何でもあれへーん！」

霞は楽しそうに笑っていた。

「――では、今この城に攻め寄せようとしている三十万の大軍は、全て操られているというの？」

曹操の声は訝し気だ。

「北郷殿の言う通りやもしれませんぞ、曹操殿。

ひたすらに敵を屠るあの残虐性、手足が捩がれようが一顧だにせず進軍を続けるあの不気味さ。どちらも常人ではあり得ませぬ。むしろ、妖術か何かで操られていると言われて今更ながら納得しております」

鮑信が顎鬚を撫でながら唸った。

立派であっただろう髭には白いものが混じり始めている。劉岱が死して以降、敗残兵を一人で取りまとめ、救援が来るまで撤退戦を繰り返していたのだ。その苦労が現れている。

「実際に黄巾の兵を間近で見てきた貴方達がそう言うのなら信じましょう。

けれど、そうすると奇襲戦は悪手になりそうね」

曹操が当初予定していたのは、相手の兵力を減らすことを目的とするのではなく、隊をいくつかに分け奇襲を繰り返すことで戦意と士気を下げる作戦だった。明確な指揮系統がない軍や、飢民農民の寄せ集めである黄巾軍には効果的ではある。しかし、あの軍に対して心理的、精神的な作戦がどれ程の意味があるかは疑問だ。

「おそらく、黄巾の兵があのような状態になった原因は本拠地である青州にあります。あの軍はできる限り相手にせず、その原因を取り除くのが良策かと」

「ならば……桂花！」

曹操の声に、桂花は間髪入れずに応える。

「はい！まずは斥候を。城にはうなるほど食糧が蓄えられているとの

流言飛語を青州方面に向かって放ちます。その流言が効果を表すまで、この城で籠城を。
　さらに華琳様のお許しを頂ければ、伝令を二つほど発したいのですが」
　曹操の口角が上がる。
「冀州の麗羽、徐州の陶謙にね？」
　桂花もまたにやっと嗤った。
「文面は、百三十万の賊軍全て制圧の場を御検分されたし、で如何でしょうか？」
「それでいいわ。早速やりなさい」
「御意！」
　こちらに一瞬だけ視線を向け、桂花は部屋を出て行った。
　次に発言したのは、腕を組んで話を聞いていた陳宮だ。
「伝令によって袁紹、陶謙が動いてもよし。あるいは動かずともよし。
　つまりは伝令そのものに意味がある、と。その伝令を黄巾の本隊が知れば動かずにはいられないのです」
「その通りよ。北郷の言う通り、戦術以外の才能もあるみたいね」
「ふん！」
　曹操が褒めるも、陳宮は鼻を鳴らしてこちらを睨むだけだった。本来ならば不敬もいいところではあるが、見た目も相まって皆苦笑いするだけだ。
「し、しかし仮に操られている原因が取り除かれたとしても大軍は大軍のままです！一体どのように鎮圧するおつもりか!?」
　鮑信が話の流れについてゆけずに狼狽えている。
「鎮圧する必要はありません」
「何!?」
「黄巾の民百三十万。その全てを、受け入れます」
　そう言った一刀の顔を、霞が楽しそうに見つめていた。

同時刻、黄巾本隊。
眼鏡をかけた少女が、頭部全体を黄巾で覆った人物と話している。
声からすると、男だ。
「……本当に、姉さんは無事なんでしょうね」
「ああ、安心しろ。約束通り、俺は指一本触れていない。
そのかわり、食事も与えていないがな。早く城を攻め落とさないと、餓死してしまうかもしれないぞ？」
どうする？北郷一刀。
男は、頭巾の中だけでそう呟いた。

三羽烏

「良いか！我らが主、曹孟徳様はこう言った！黄巾三十万、その全てを平らげる、と。

ならばそれは必ず実現する！如何な大軍も恐れることはない！各々しっかりと励め！」

夏侯惇の威勢の良い声が響く。

先程の軍議では一言も発さず、眠っているのではないかと疑うほどだったが、今はまるで別人だ。

「死ぬ気で戦え！だが死ぬなよ！

少なくとも私より先に死ぬな!!何故なら私は決して死なないからだ!!

良いか!!!」

「応!!!」

城中の兵が一斉に唱和する。

半数以上の兵が初めて夏侯惇に率いられるはずだが、既に絶大な信頼を寄せられている。

夏侯惇は常に声に迷いが一切ない。それは彼女が主である曹猛徳に寄せる信頼の証だ。

兵は皆指揮官の不安や迷いを敏感に感じ取る。夏侯惇が曹操を一切の迷いなく信頼するが故に、兵も夏侯惇を信じるのだ。この軍は強くなる。そう確信するに足る光景だった。

――同日深夜。

黄巾の兵が、顔から感情というものを完全に落としたまま静かに城壁をよじ登っていく。爪が剥がれようと、膝を擦りむこうと、決して止まることはなかった。

そして、城壁を登りきったところで――下から槍で突き上げられた。血が降り注ぐ。夜襲を待ち構えていた城内の兵により、よじ登っ

て来た黄巾は容赦なく討ち取られていく。次々と登ってくる後続の黄巾の兵にも、矢が一斉に射掛けられた。
暫く膠着状態が続いたところで、ついに黄巾兵一人が防衛線を突破する。鮑信はそれを横目でちらりと見やり、黙って目の前の敵を切り伏せる作業に戻った。
四人目、五人目。並んで登って来た六人目と七人目を顔面を蹴って下に落とす。絡み合いながら落ちていくその男達の片割れと目が合って、ぞっとした。やはり、目に感情がない。今まさに死へと落ちて行くというのに、自分への怒りも、死への恐怖も、何も映っていなかった。他の黄巾も皆同じ。まるで人形と戦っている気分だった。
その時、背後で扉が開く音がした。どうやら先程の男が予め用意していた食料庫に入ったようだ。
男が入った食料庫は、荀彧が敵兵が進入するであろう経路、場所を予想し、城に蓄えられた食料が殊更大量に見えるように見せかけの量を多くしたものの一つだ。青州方面への流言飛語の信憑性を高める為に用意したらしい。
男が戻ってきた。仲間が用意した梯子を降りてゆく。
やがて、攻撃は収まった。
「損害を確認しろ。決して騒ぎ立てるなよ。
編成に問題が出るほどではないだろうが、報告の後再び振り分ける」
兵がうなずいて確認に走る。入れ違いに二人連れが近寄って来た。
「鮑信」
「夏侯惇殿」
一礼する。夏侯惇も、一歩後ろの荀攸共々返礼した。
「上手くいったか？」
「はっ。中に侵入したのは一人。
手はず通り、その者にだけは予め用意しておいた食糧庫を見せ逃がしました。
今頃は報告が届いておるはずです」
「そうか。よくやってくれた。

だが、わかってはいるがもどかしいな。やはり私は敵陣に突っ込んでいく方が性に合っている」
苦笑いしながら腰に提げている得物を軽く叩いている。銘は、確か七星餓狼といったか。
そんな夏侯惇を諌めたのは、同じく苦笑いしている荀攸だ。
「本当に突撃しないでくださいよ？
私が戻ってこれたのは、夜明けと同時に奇襲をかけたことと、霞の騎馬術が優れていたおかげです。あの軍にまともに突っ込めば、貴女とで無事でいられる保証はないんですから」
夏侯惇は唇を尖らせている。案外子どもっぽいところもあるようだ。
「そうは言うがな、北郷
お前や桂花と違って小難しい事を考えるのは苦手なのだ。
こればっかりは生来のものなのだから仕方あるまい」
「では、同じ事をご主君にも直接言ってください。
それでお叱りを受けても、私は助けませんからね」
荀攸の言葉に、夏侯惇は降参とばかりに両手を上げた。
「わかったわかった。
今回は我慢するさ。だが――」
そこで、一瞬餓えた狼のそれに変わる。
「いつか、私を満足させる戦場を用意してくれ。
頼むぞ、北郷」
抑えきれない覇気が滲み出ている。それは、何処か主の曹操を思わせた。
圧倒されて、言葉が出てこない。
「近いうちに、必ず」
「そうか、約束だぞ。
……鮑信、どうした？」
気が付くと、夏侯惇が自分の顔を覗き込んでいた。
「い、いえ。引き続き、警戒に当たります」
「そうか。では、後は任せた」

そう言って振り返る。荀攸も、目礼をして後を追った。
思わず詰まっていた息が漏れる。
緊張で、息をするのを忘れていた。
唸りながら顎鬚を撫でる。驚かされることがあると鬚を撫でるのが、最近すっかり癖になってしまった。
以前は密かな自慢の鬚に白いものが混じり始めて落ち込んでいたが、近頃では少しずつ抜けてしまうのではないかという新しい心配ができてしまった。それほどに、曹操軍は傑物揃いだ。
突然ばしん、と大きな音がした。見ると、荀攸が夏侯惇に背中を叩かれたらしい。手を伸ばして背中を押さえながら苦笑いしている。夏侯惇も笑顔だ。同じく軍師で姪だという荀彧とはそりが合わないようだが、二人の仲は良好らしい。
鮑信が見る限り、荀攸は傑物揃いの曹操軍の中でも異質だった。かといって、何が異質なのかと問われてもはっきりこうだと答えることはできない。
幼い頃から荀彧が指導したというだけあって、智謀は中々のものではある。武のほうも、鮑信からすれば少々物足りないが、決して弱いわけではない。どちらも常識の範囲内だ。
良く言えば智に秀でた知友兼備。悪く言えば器用貧乏。
それが、荀攸に対する凡そ正確な評価だろう。
だが、鮑信は彼がそれだけではない何かを秘めているように感じる。その、彼が内に秘めた『何か』が現れたのが虎牢関での舌戦であり、先の軍議での発言だ。
『黄巾の民百三十万。その全てを、受け入れます』
一体彼以外の誰が百三十万もの賊の全てを受け入れようなどと考えるだろうか。
一体彼以外の誰が皇帝陛下を戦場にお連れし、舌戦に参加させようなどと考えるだろうか。
そんな事を考え、平然と実行する彼の存在それ自体が異質だ。そう思う。
再び唸りながら鬚を撫でる。この癖は、中々直りそうになかった。

「こらー！・そこの鬚親父ー!!
戦の最中に考え事してぼーっと突っ立ってるんじゃないのー!!!」
頬を膨らませた于禁に怒鳴られてしまった。
「すまんすまん。
迷いは戦の後におくのが武人であったな」
片手でがしがしと後頭部を掻く。
「わかったのならさっさと兵の再編成するの！
さっきから報告するの待ってる人がいるの!!」
「おお、そうか。それはすまなかったな」
とんでもなく口が悪い今どきの娘だが、何故か多くの兵に慕われていた。
育った村を守るため、幼馴染二人と義勇兵として志願してきた心根の優しい娘だということは、兵の皆が知っている。
どうやら兵の大半が、手のかかる自分の娘のように思っているらしい。それは自分も同様だ。于禁が相手だと、どうしても甘くなってしまう。
この娘が幸せに暮らせる世を創るためにも、賊などに負けてはならない。
曹操軍の面々は、正直理解し難い。だが、わからぬままに信じることのできる将は全土に三人といない。曹孟徳こそその一人だ。この鮑信がそう見極めた。
この国を立て直す英雄は、あの曹操殿をおいておらぬ。
「于禁、再編案と兵の配置の変更案だ。曹操殿に報告してくれ」
気合を入れ直し、鮑信は兵に指示を出し始めた。

個人個人の練度はそこそこ。連携はよし。士気も及第点。
それが、夜襲の後秋蘭を伴って城内を見回った華琳の見立てだ。
三十万の大軍に攻め込まれているにしては、兵に動揺がない。無作為に――女性兵ばかりであったのはあくまでも偶然である――選んだ兵に聞くところによると、自らの威を見せつけようと無謀な出撃を

繰り返す劉岱を度々諌めていたのが別の場所で指揮を執っている鮑信であったらしい。その結果劉岱は戦死し、逆に鮑信への兵の信頼は深まったというわけだ。
兵は今、交代で休息を取っている。策が上手くいっていれば、次の攻撃までにはまだ間があるはずだ。束の間の安らかな時間を、皆思い思いに過ごしていた。
そんな兵の中で、一人の少女が華琳の目に留まった。休憩中の兵の輪から距離を置き、無手の型の稽古をしている。
「秋蘭、少し此処で待ってなさい」
「御意」
秋蘭が一歩後ろに下がった。そのまま少女へと近づいていく。
近づくにつれ、よく練りこまれた気が感じられた。気の扱いは感覚的な要素が多く、先天的な才能がないと実践で扱えるほどにはならない。その意味では、この少女はかなりの才能の持ち主だ。おそらく内勁だけでなく、気を放出する外勁も修めているだろう。
五歩の距離で止まる。闇夜に似合う、浅黒い肌をした少女だ。周りの兵に比べて一際小柄だが、強い突きをする。生傷が多く、しかもかなり新しい傷もあった。
「名は？」
「楽進と申します！」
返事と同時に手甲に包まれた拳を突き出す。鋭く空気を切り裂く音がした。
「正規兵の服装ではないわね。義勇兵かしら」
「はい！賊に苦しめられている人々を救うため、幼馴染と共に劉岱殿の下に志願しました」
劉岱の下へ志願したということは、例の無謀な出撃にも従軍したのだろう。
「良く無事だったわね」
「運よく！」
今度は蹴り。脚も同様に脚甲が付いていた。
「では、死んだ者も運かしら？」

動きが一瞬止まる。
「賊に殺されることを、運と呼びたくはありません」
「そう……続けなさい」
型を再開した楽進に向けて手刀を出す。邪魔にはならないが、どうしても目に入る位置だ。
楽進は淀みなく動き続ける。華琳の気を意識しつつも、その動きに動揺は見られない。むしろ表情は集中し、目には澄みわたるものがある。
「外勁は使えるかしら？」
「はい」
「二分の力で、空に向かって放ってみなさい」
表情が引き締まる。大きく息を吸い込んで、気を練り始めた。
そして、吸った息を吐ききったところで――。
「猛虎蹴撃！」
鋭い蹴りが天に向かって放たれた。その先に、放出された気が一筋の直線を描いていく。華琳だけでなく、秋蘭や周りの兵も皆目で追っていた。
「見事ね。ついてきなさい、楽進」
「はい！」
これだけでも、この城に来た価値はあったわね。
自然と笑みが零れていた。

「……まだ痛みますよ。少しは手加減して下さい、元譲殿」
一刀の愚痴に夏侯惇はかんらかんらと笑った。
「そう言うな、北郷。信愛の情というやつだ。
お前を認めているからこそ、思いっきりやったんだぞ？」
嘘だ。少なくとも半分くらいは嘘だ。間違いない。
「それに、私程度でそんな事を言っていては身がもたんぞ。
文烈は季衣に何回も同じことをされている」
思いがけず曹休に対して仲間意識が芽生えた。戦の前に彼が怪我

をしないように祈っておく。
「……と。噂をすれば、だ。
おーい！季衣！何をしている!?」
「あ！春蘭様ー！兄ちゃんも！
この人が作ったからくりすごいんだよ!!」
手をぶんぶん振りながら大声で少女が返事をする。本来ならば深夜の休憩時間には歓迎されない行為であるはずだが、兵は皆にこにこしながら少女を見つめていた。どうやら彼女の天真爛漫な性格は、この城の兵にもいい影響を与えているようだった。
夏侯惇と共に少女に近づく。
許チョ。字は仲康。曹操と同じ沛国の出身。『虎痴』の異名を持つ怪力無双の巨漢で、曹操の護衛として史実に名を残した。曹操は彼を我が樊カイと呼び、常に傍においていたという。
だが、目の前にいる少女はとてもそうは見えなかった。背丈は一刀の胸辺りまでしかなく、身体も腕も手荒に扱えば折れてしまいそうなほど細い。しかし彼女はこの細腕で、一刀よりも大きな鉄球を軽々と振り回すのだ。
「からくり？こんな処でそんな物を作っているのか？」
夏侯惇の疑問に、作成者であろう季衣と話していた少女はぶーぶーと文句を言った。
「そんな物って言い方はないでー。きちんと作れば、戦にも役に立つと思うんやけどなあ」
言いながら視線を下に落とす。そこにあったのは、支点を高くした木製のシーソーのような物のミニチュアだった。
「ちょい見といてや」
落ちていた小石を拾って片方の座席の上へ。転がらないようにしっかりと載せた後、もう片方の座席を指で軽く押さえた。すると、小石が勢いよく空へと飛んでいく。
「投石機、か」
「せやせや！李典特性投石機！
兄さんおひとつどうや？今ならお安くしとくで～」

ずいっと一刀に向かって身を乗り出してくる。ビキニスタイルの上半身も相まって迫力が凄い。だが、一刀が気になったのはそこではなかった。
「貴女は李典というのですか？」
「せやけど？」
可愛らしく首を傾げる。特徴的な髪が柔らかく揺れた。
「字は曼成？」
「せ、せや。兄さん、なんでうちの字知っとんの？」
今度は幾分困惑気味だ。
季衣も夏侯惇も不思議そうにこちらを見ている。
「北郷？」
「兄ちゃん？」
二人して顔を覗き込んでくるが、一刀はそんなことはお構いなしに思考を高速で回転させていた。
「――元譲殿」
「お、おう」
「ご主君のもとへ行きましょう。彼女を推挙します」
「へ？うち？」
突然の展開について往けず、李典はぽかんと口を開けていた。

この日、曹操軍の面々によって楽進、于禁、李典の三人が見いだされた。
彼女らは後に魏の三羽烏と称されることになる。

強の始まり

「熱した油！続けて火矢を放ちなさい!!」
華琳の指示に従い、火にかけられていた油が入った大鍋がひっくり返される。続けて火矢だ。梯子を登っていた黄巾兵が揃って火達磨なった。
驚くべきはその後だ。誰一人悲鳴ひとつあげず立ち向かってくる。
もうこれで何波なのか。波状攻撃に終わりが見えない。一度城内に入れば顔色ひとつ変えず中の人間を皆殺しにしていくだろう。
「操り人形、ね。確かにその通りだわ」
「華琳様？」
右隣の桂花がこちらを見る。反対側の陳宮は腕を組んで正面を向いたまま聞き耳を立てていた。
「彼らからは、日々の営みの痕跡というものが見えてこないわ。
起きて、動いて、食べて、寝て、という人として当たり前の営みがね。
おそらく、昼夜問わず食事も睡眠も取らせないまま操り続けているのでしょう」
「それは……」
桂花が絶句する。ふん！と不快気に鼻を鳴らす音もした。
「許せないわね。
操っている者は――或は者たちかもしれないけれど――民をそこらに転がっている石ころと同じくらいにしか思っていないのじゃないかしら」
怒りが沸々と湧き上がってくる。この光景を生み出した者には、相応の報いを受けさせてやらないと気が済まない。
「別段珍しい考え方でもないのです。
程度の差こそあれ、支配者階級なんて皆同じ考え方ですぞ。
どれ程手荒に扱っても死に絶えることはなく、一時数が減っても放っておけば勝手にまた増えてくるもの。地位を笠に着てふんぞり返っている者なんて皆そんなものなのです」

こちらを見ないままの陳宮の言葉に、華琳もまた前を見つめたまま答える。
「そうね。確かに貴女の言う通りでしょう。
――けれど、この曹孟徳の考え方は違う」
ここで初めて陳宮は華琳の方を見た。
何を甘いことを。その目はそう言っている。
「ちょっと――」
桂花が陳宮を諌めようとしたその時だ。
「後方に砂塵!!黄巾の本隊です!!!」
物見台にいる兵の大声が響く。若干声が上ずっていた。
遠方に、何か黒い大きな塊が見える。それは、まるで大きな1つの生物のようだ。
「あ、あれが黄巾の本隊……」
「百万を超す群衆とはこれ程のものなのですか……」
軍師二人も思わず唸っている。余りの数に不安が込み上げているのかもしれない。しかし、華琳の心中は響き合うものを抑えきれなかった。天道に我が道が見えてくる。
「あれは一つの国よ」
思いがけない言葉に、桂花と陳宮が二人して華琳の顔を見つめる。
「この曹孟徳が治めるべき民であり、国」
――そのためにも、上手くやりなさい、北郷。

「おっしゃ。一刀の読み通りやな。
あん中に皆を操っとる親玉がおるんやろ?」
霞が首をこきっと鳴らす。
他の兵も、士気は十分だ。
「ああ。外から見てよくわかったけど、確実に策を練って指示を出してるやつがいる。中央か、それとも後方か。行くなら、城が見えて気がとられてる今だ」

「ほな――行こか！
手加減なし、最初っから全速力や!!」
霞が手綱引く。馬も高く嘶いた。
「全員、うちに続けー!!」
号令と同時に駆けだす。
一刀も、他の兵と共にその後を追う。
以前と同じだ。ペースメーカーを霞の馬に任せてただ突っ走る。
霞に与えられた兵全員の息がぴったり合っていた。
兵の数は千。最初の夜襲の後、闇夜に紛れて城を出て平野で調練を繰り返してこの時を待っていた。今では全速力でも全員が一個の生物のように動くことができる。霞も満足の仕上がり具合だ。
黄巾本隊の後ろ姿が見えた。腰に佩いていた剣を静かに抜く。日の光を浴びて、柄の北斗七星がきらめいた。
――力をお借りします、王允殿。
一瞬目を閉じて黙祷する。
刮目と同時に声を張り上げた。
「如何な大軍であろうと、進軍中の背後を突けばもろく崩れるのみだ！
このまま最高速度で突っ込み、敵の首魁を討ち取る！」
相手は百万なのだ。実際はそう簡単ではない。だが、今回に限っては別だった。
黄巾本隊にいるのは、非武装の女子どもばかりだ。いくら妖術で民を集めようとも、武器は何もないところから生み出すことはできない。
さらに、一度偵察したところ、本隊もほぼ全ての民が操られているようだった。どうやら指示を出している人物は少人数らしい。恐るべきことだが、逆に言えば敵はその少人数で百万全てを制御しなければならないのだ。一般的な軍のように、部隊長、将軍、司令官のように階級で指揮を分散することができない。感覚を共有しているのでもなければ、感情がない集団が背後から奇襲を受けても、距離的にも時間的にも事態を把握するまでには暫くかかるはずだ。そこを突く。

「行くでーーー!!!」
霞の檄が飛ぶ。同時に後極に噛みついた。
群衆が真っ二つに割れていく。やはり反応が鈍い。城攻めにあれだけの戦術を駆使しているのだ。非武装の本隊にまで細かい迎撃の指示を出している余裕がないという一刀の予想は当たったらしい。
熱したナイフでバターを切るように突き進んでいく。何もしなくても馬が道を作ってくれているが、その分民が下敷きとなっていく。奥歯をぎり、と噛みしめた。
ひたすらに前へ進む。前へ、前へ。
そして――見つけた。黄色い天幕が張られた馬車がゆっくりと進んでいる。
「霞!あれだ!!」
「よっしゃ!」
霞が得物を構えた。白刃が日にきらめく。
すると、中が騒がしくなり――頭部全体を黄巾で隠した人物が飛び出してきた。
「殺!」
飛び上がって霞の頭部に向かって蹴りを放つ。霞も既に迎撃の体制をとっている。
一瞬の交差。
同時に振り返る。
霞の頬に一筋の跡。
片や、頭巾が破れて顔が覗いていた。どうやら男だ。男が慌てて頭巾で顔を隠す。
「助けて!」
声の方に向くと、男が飛び出してきた馬車から眼鏡の少女が身を乗り出していた。
「前の馬車に姉さんが捕まってるの!脅されてるのよ!!」
そういう事か。
気づくと、周りの黄巾が皆棒立ちになっていた。どうやら彼女が妖術を止めたようだ。

男の方に向き直る。
「……その顔。洛陽で見た覚えがある。確か、李儒に近づいていた道士、だったか。
先の洛陽での政変も、今回の黄巾も、全てはお前の仕業か」
霞の顔が厳しくなる。
「顔を覚えられていたとはな。
ならば……首ごと忘却しろ!!」
同時に男が前へ。再び蹴りを放つつもりか。
王允の遺刀を構える。
「させるかい!!」
迎撃する前に霞が割り込んだ。今度はしっかりと防ぎきる。
男が離れ、睨み合いになったところで、新たな声が場に響いた。
「――そこまでだ」
頭巾の男の背後に、いつの間にか全身白ずくめの人物が立っていた。
いつ其処に現れたのか。一刀も霞も、この場にいる全員が気づけなかった。
「止めるな。目の前にいる獲物を逃がせというのか」
尚も前に出ようとする男の肩を白ずくめが掴んで止めた。
「今回はやりすぎだ。卑弥呼がこちらに向かっている。
……捕捉される前に引くぞ」
「……糞が」
男から力が抜ける。白ずくめが白い大きな布を広げ――翻ると同時に、二人は消えていた。
誰も言葉を発さない。静寂が訪れた。
霞が馬を寄せてくる。
「……一刀」
「霞」
「終わったんか?」
「……ああ。そうらしい」
二人で周りを見やる。群衆が、徐々に正気に戻り始めている。

「後は、ご主君の仕事だ」

――数刻後。

兵が皆困惑していた。突如として攻撃がやみ、黄巾兵が呆然と立ち尽くしている。中にはうずくまり泣き出す者、嘔吐し始める者もいた。

「そ、曹操殿。これは一体……？」

鮑信が訝し気に問いかけてくる。

「北郷が上手くやったみたいね。皆、正気に戻ったようよ。

……どうやら、操られていた間の記憶が残っている、ということかしら」

自らの所業を自覚してしまったのだろう。それを受け止めきれずにいる。

「出るわ。開門しなさい」

それだけ言って、門へと歩き出す。桂花が無言でついてきた。

「だ、大丈夫なのか!?

正気に戻ったとはいえ、未だあれだけの大軍だぞ!?」

「……言って止まるような御仁ではないのですぞ。

黙って見ているしかないのです」

陳宮の言う通りだ。

ここからは、自分の仕事なのだから。

門を出ると、そこは惨憺たる有様だった。

血と埃に塗れ、のたうち回る黄巾たち。無傷の者は一人としていない。何よりも深刻なのは、己の所業に打ち震える彼らの心だ。

「顔を上げなさい!!!」

華琳の一括に、思わずその場の誰もがこちらを見つめる。

「起きてしまった事は覆らない。

どれ程凄惨な記憶だろうと、それが操られてのものであろうと、貴

方たちはそれを抱えて生きるしかない」
一転して皆項垂れる。そこにあるのは絶望だ。
「――しかし、それを一人で抱える必要はない。
貴方達の心の叫びは、この曹孟徳が全て受け入れる!!!」
「う、受け入れるだって？
俺たちは黄巾だ。誰よりも人を殺した黄巾だ。
それを受け入れるっていうのか？」
一人が泣きながら声を絞り出す。それを、皆が聞いていた。
「貴方たちが求めたのは、目の前の食をただ奪い続けてただ生き延びるための道ではないでしょう。
その心が本当に求めるものは、この大地を埋め尽くす黄色い民が平和に暮らすことのできる太平の世。
私ならば、それを実現できる!!!」
ざわつきが大きくなる。いつの間にか、本隊が合流していた。
北郷と文遠、そのとなりに三人の少女がいる。真ん中の長髪の女は、両脇から抱えられていた。
「貴方たちと、それを支えるあの膨大な本隊。その営み。
それは、既にひとつの国をなしている!!!」
城内の兵も、黄巾も、全ての人間が聞き入っていた。
この場を支配しているのは、間違いなく曹孟徳だ。
「しかし、拠るべき領土がなくては身が休まることはない。
民はただ餓えた重荷の民となり、兵も略奪のみに生きることになるでしょう。
貴方たちの行く末は、民を守る政なくしてその存続はありえない!!!」
「――どんなことがあっても」
ぽつりと声を出したのは、両側から抱えられた長髪の女だ。
「どんなことがあっても、皆が殺されたり、虐められたりすることはない？」
華琳が間髪入れずに答える。
「契約する!!」

隣の眼鏡の少女が続ける。
「皆、心に傷を負ってる。
扱い方を間違えれば、貴女といえども命とりになるのも承知してるの？」
「承認する!!!」
声が一段と大きくなる。
反対側の少女が、泣きながら訴える。
「本当に、皆が安心して暮らせる世になる？」
「確約する!!!」
全員が、膝をついた。
その光景を、城壁の上から陳宮がじっと見つめている。
「……人を基本として国を考えておるのですか？
領土ではなく民をもって国を宣言し国を創ろうというのですか。
それが、新しい政だと……」
その知らせは、瞬く間に四海を駆け巡った。
曹孟徳、青州黄巾党を収め兵士三十万、男女百余万の民を得る。
後に、史書にはこう記される。
魏武の強、これより始まる。

ただこのぬくもりを

門を潜り抜け市街へ出る。突き刺す日差しに目を細めた。
中天を告げる太鼓の音が濁って聞こえる。見上げた空には鱗雲。どうやら明日は雨になるらしい。
目的の店へ大通りを歩く。朝服姿の自分を見て、市で仕事をしている人々がひそひそ話しているのが聞こえてきた。
彼らには珍しい光景かもしれないが、一刀は荀家にいた頃、さらに言うなら日本にいた頃から下町の雑多な雰囲気が好きだった。
毎日を生きる人々の息遣い、その営み。泣き、笑い、喜び、悲しみ。それらを感じることで、自分は今この世界に属しているのだと実感できる。
深呼吸をひとつ。全身に隈なく、彼らから貰った元気が行き渡る気がした。
「おーい!!兄ちゃーん、こっちだよー!!!」
季衣が通りの先で飛び跳ねながら手を振っていた。声の大きさに周りの人が後ずさっている。
「今行くよ!」
思わず顔がほころぶ。彼女から貰える元気も、また別格だ。
「ありがとう、季衣。待っててくれたんだな」
早足で近づいて頭をなでると、えへへーと目を細めて嬉しそうに笑った。
あれだけの大声を出しても、嫌な顔をしている人は一人もいなかった。季衣がどれだけ愛されているのかがよくわかる。この小さな体の何処に入るのかという量を食べ歩く彼女の姿は、既に城下の一種の名物になっていた。
季衣の後について店に入る。一刀以外の面々は既に奥の個室に集まっているようだ。
「このお店はねー、秋蘭様のお勧めなんだって!
元々安くて美味しかったんだけど、最近腕の良い料理人が入ったらしくて、ますます美味しくなったんだってさ!」

季衣はご機嫌な足取りで軽やかに歩く。もし知っていればスキップでもしているだろう。
「それは楽しみだな。っと、着いたぞ」
扉の前に季衣と並んで立つ。ノックをすると、何してるの？と首を傾げられた。曖昧に笑って誤魔化しておく。もう十年も以上この世界で暮らしているというのに、未だに現代の癖が出てしまうことがある。染みついた習慣は、中々直せないものだ。
「一刀ね？入っていいわよ」
声に促されて部屋の中へ。
一番奥に華琳、その両脇に春蘭、桂花。秋蘭は姉の隣で、桂花の隣の空いている場所が季衣の席だろう。優と直心は桂花の反対側で二人して固まっていた。女性ばかりのこの会食、しかも桂花がいるとなればその緊張は計り知れない。二人の目はまるで救世主を見るかのようだった。
「来るの遅いでー。一刀で最後や」
霞は直心と一つ席を空けて、隣の楽進の首に腕を回して酒を飲んでいた。いつから飲んでいたのか、すっかり出来上がっている。楽進に続いて李典、于禁。彼女らの歓迎会と、華琳の州牧就任の祝いが今回の会食の目的だ。
陳宮も誘ったのだが、馴れ合うつもりはないのです、と断られてしまった。張三姉妹は長姉の療養とその看病で欠席である。
「遅くなって申し訳ありません。人材の諮問が思ったよりも長引いてしまいまして」
一礼して詫びてから席に座る。季衣も桂花の隣に収まった。
「構わないわ。国の要はまず何よりも『人』よ。手を抜かずにしっかりとやりなさい。まあ、貴方は言われずとも承知しているでしょうけど。
ところで、今の音は何？」
華琳にも一刀の行動は不思議に映ったようだ。この時代にはノックなどという習慣はないのだから仕方ない。
「実家にいた頃からの習慣でして。部屋に入ってもいいかどうかを扉

の外から確認するための合図です。大声を出さなくてもよいので中々便利ですよ。
……特に桂花の部屋に入る前には。一度うっかり忘れて大変なことになりました」
「自業自得でしょ。次あんなことがあったら本気で殺すからね」
桂花がジト目でこちらを睨んでいた。どんなことがあったのかは彼女の名誉のために伏せておく。
華琳はそれを見てくすくす笑った。
「相変わらず仲が良いのね。
全員揃ったことだし、そろそろ始めましょうか」
居住まいを正す。霞も、この時ばかりは背筋を伸ばしていた。
「楽進、李典、 于禁。貴女たちが私の配下に加わったことを心から歓迎するわ。
貴女たちと真名を交わせる日を楽しみにしておくから、私を納得させるだけの功を上げられるよう励みなさい」
はい！任しとき！わかったのー！と三者三様の返事
華琳が杯を掲げる。皆も続いて杯を掲げ、同時に飲み干した。
「曹操殿も、州牧就任おめでとうございます」
直心の祝いの言葉に、華琳は控えめに笑った。
「あくまでも代行、よ。
貴方に請われてとはいえ、ここで州牧を自称すれば、天下に二心有りと取られかねないわ。
……麗羽あたりは何か言ってきそうね。そのまま手を出すほど愚かではないと思いたいけれど」
確信は持てない。袁紹は何をやってもおかしくないからこそ袁紹だともいえる。
「まず間違いなく正式に任命されるでしょう。
既に洛陽の董承殿に使いは送りました。遠からず戻ってくるはずです」
送った使者には自分や霞からの私信も託してある。董承や賈ク、恋の近況も知れるだろう。

「先の話をしても仕方ないわ。今は食事を楽しみましょう」
「そうですね」
手近の蒸した豚を取って口に運ぶ。美味い。絶妙な柔らかさ、それに噛めば噛むほど肉汁があふれ出してくる。
直心が、思わずといった感じで唸って顎鬚を撫でていた。それを見て、秋蘭が得意気な顔をする。
「美味いだろう？
この料理は単純な分、料理人の腕の良し悪しが直に出る。私も初めて食べた時には同じように唸ったものさ」
それもうなずける。華琳や桂花も素直に驚いた顔をしているし、季衣などは顔を上げずに一心不乱に食べていた。
「美味しいのー！」
「ほんまや、こら美味いで」
于禁と李典もうなずき合う。
「確かに……これにあれを付ければ……」
楽進は食べながらぶつぶつと何かを呟いていた。
炒飯、肉まん、ラーメン、回鍋肉。鶏粥にザーサイ、魚の煮物。北麺南飯という言葉があったが、この世界の食はそれに囚われず実に彩り豊かだ。まあ、どう見ても日本ナイズされたラーメンがこの時代にある時点でどこか間違っているのだが、この世界が色々とおかしいのは今に始まったことではない。
炒飯をレンゲで掬って一口。やはり美味い。米の一粒一粒がしっかりと油でコーティングされて口の中でぱらぱらとほぐれた。
この炒飯に使われている野菜や香辛料は一体何処で生産され、どのようにしてこの街まで運ばれてくるのだろうか。一刀のうろ覚えの世界史の知識では、この時代に既にシルクロードを通じて交易が行われていたのかわからなかった。
「さっきから面白い顔をしてるわね。何を考えているのかしら？」
気づくと華琳が微笑みながらこちらを見ていた。桂花と楽進もそれとなく気にしているようだ。
「これらの料理に使われている食材は、どの地から仕入れているのか、

と。
物によってはこの地で生産してもいいでしょうし、他の地の特産品ならば、それを軸に交易を盛んにできるかもしれません」
それを聞いて、今度は声を上げて笑う。
「本当に面白いはね、貴方は。軍師の次は商人になるつもり？」
「そうですね。野に下るつもりはありませんが、官が主導して商いを活性化する必要はあると思います。
とくに交易はそうですね。ご主君の目指す太平の世が実現すれば、羅馬と交易をしてみたいと思っています。漢の地では余り価値が見いだせない物も、かの地では高級品として扱われている場合もあるでしょうし、その逆もしかりですから。
金銭でなくとも、保存のきく食糧と物々交換できれば餓えに苦しむ民を減らせるかもしれません」
「羅馬……大秦との交易、ね。興味深いわ。
その日が来るのを楽しみにしておきましょう」
ふと気が付くと、卓に座っている全員が一刀を見ていた。
困惑する。いつの間にか何かをしでかしてしまったのだろうか。
「あの……どうかしましたか？」
恐る恐る聞いてみると、桂花が大きく溜息をついた。
なんだ。一体なんなんだ。
その疑問に答えてくれたのは、優だった。
「一刀殿は凄いですね。大秦との交易など、私には壮大過ぎて想像もできません。
目の前の軍務で精一杯の毎日です」
嫌味とも取られかねない台詞だが、優が言うと少しもそのようには感じない。
横で直心もうんうんとうなずいていた。
どうやら、またもや価値観の違いが出てしまったようだ。
「そ、そうですかね。
あ、酒が少なくなってますよ、追加しましょう。すいませーん！」
露骨かもしれないが、強引にでも話を変えることにする。

自分の価値観、考え方がこの世界ではどれ程異様なのかは荀家にいた頃に嫌になるほど思い知った。自分の異端性は、なるべく表に出さない方がいい、とも。

声を上げると、すぐに足音が聞こえてきた。

部屋に入って来たのは、季衣と同じ年頃の少女だった。

「はーい！お待たせしましたー！

ご注文は……季衣!?」

「んー？ってあー!!流々!!」

互いに驚いて大声を上げる。全員が二人に注目していた。

意図したわけではないが、意識が自分から逸れてほっとする。

「ほう、二人は知り合いなのか？」

秋蘭が興味深げに声を掛ける。そういえば、この店を薦めたのは秋蘭だった。すると、この娘が最近入ったという腕の良い料理人なのだろうか。

「そーです！

もー！どうして手紙送ったのに逢いに来ないのさ！

何かあったのかって心配してたんだよ!?」

「え？なんで季衣が此処にいるの？

もしかして、本当にお城で働いてたの!?」

「本当にってなにさ！信じてなかったってこと!?」

「だ、だって季衣がお城で働けるなんて思えないでしょ……」

「ちょっと！それどういう意味なの!?」

口論が白熱するにつれて、声量も段々と上がっていく。

霞がもっとやれなどと囃しているが、流石にこれ以上はまずいだろう。

二人の間に手刀を差し出す。

「そこまで。そんなに大声出すとお店にも迷惑だよ。

ええと……君、名前は？」

「て、典韋です……」

冷静になって恥ずかしくなったのか、先程とは打って変わって声は小さい。

だが、問題は――。
「典韋？」
「は、はい」
「……力に自信はあったりする？」
「は、はい。季衣と同じくらい、かな？」
この娘が？あの悪来典韋？
俄かには信じられないが、あの許チョだって季衣のようなあどけない娘なのだ。そう考えると、典韋が目の前の少女でも不思議ではないのかもしれない。
「色々言いたい事はあるだろうけど、ここで喧嘩したら皆に迷惑だよ。
季衣も落ち着こう、な？」
「うー。でも……」
季衣は若干不満顔だ。
まあ、話を聞く分には少しばかり典韋に非があるように思える。
「どうせ喧嘩するなら、もう少し平和的に喧嘩しないか？」
一刀の提案に、二人は顔を見合わせた。

店の前の通りは喝采に包まれていた。
季衣と典韋の二人が槍を引き合っているのだ。いつの間にやら賭けも始まっている。
その時、季衣が引っ張られて前につんのめった。歓声が一斉に上がる。
「よっしゃあ！これでひとつ勝ち越しだ！」
「一気に頼むぜ典韋ちゃん！」
その喧噪を、華琳は酒を片手に穏やかに見つめていた。
「曹操様は、とても暖かく笑うのですね」
楽進が空いた杯に酒を注ぎながら遠慮がちに言った。
「この街の全ての民は我が子。私はそう思ってるわ。
その思いが出ているのかもしれないわね」

華琳が目を通りに向けたまま答える。楽進も同じく視線を移した。
「正直、想像していたお人柄とは違いました。
世間では、その……」
「乱世の奸雄、かしら」
尻すぼみになった言葉を華琳が続ける。楽進は、恐る恐るうなずいた。
「あながち的外れでもないかもしれないわよ。
今回だって、軍備拡大のために元賊徒を取り込んだように傍からは見えるでしょう」
「そう、ですね」
そして、それは一面の真実でもある。
この大陸に覇を唱える。それが自分の大望なのだから。
「あの娘――典韋といったかしら。
彼女を気に入ったのは秋蘭だそうだけど。秋蘭が気に入る者は秋蘭と同じよ。道理に基づいて行動し、性格は温厚。滅多に激することはない」
今回はその滅多なことだったみたいね。
そう言うと、楽進は思わず相好を崩した。
「けれど私の下に集う者には、私が奸雄と呼ばれるが故に来た者も多い。そして私はそんな彼らを使う。
私でも知らない私がこの身の内にいて、それが彼らを呼び寄せているのかもしれないわね」
「奸雄が自らの宿命だと?」
「さて、ね。
後の世に、私はなんと呼ばれるのか。
乱世の奸雄か、はたまた治世の能臣か。今は気にしても仕方ないわ。
そんなことは、後世の歴史家が勝手に考えてくれるでしょう。
私は私の気の向くままに、今生を駆け抜けるだけよ」
「……」
感じ入るように黙したまま、楽進は勝負の続きを眺めた。

それをちらりと見やった後、華琳もまた視線を戻す。最後の一番に観衆は大盛り上がりだが、脳裏に浮かぶのはある男の姿だ。
貴方は後世どのように呼ばれるのかしらね、一刀。
彼は、今まで出会ったどんな人物とも違う。幼い頃から自らの才を自覚し、それが異端であることも理解して生きてきた華琳だが、一刀はそれ以上だ。
異端ではなく、異様。
自分は周囲とは異なるが、まだ常識の端に収まっている。だが一刀は、その有様そのものが他の人々とは異なっていた。
これから一刀がどのようにこの乱世を駆け抜けるのか。興味が尽きない。
「はっはっは。まだまだ若いな優殿！」
「ご、五百銭が……」
何処かで聞いたような声が響いた。

一方その頃一刀は城へと向かって歩いていた。
「……降ろしなさいよ」
「だーめーだ。転んだらどうするんだ」
「転ぶわけないでしょ。歩けるから降ろしなさい」
「そんなに赤い顔して、店の中でもふらついてただろ。説得力ないぞ」
「……別に酔ってるわけじゃないわよ」
「酔っ払いは皆そう言うんだ」
桂花の体温を背中に感じながら歩く。まるで聞き分けのない駄々っ子だ。
「……恥ずかしいでしょ。この年でおんぶなんて。しかも年下に」
いつもより動悸が激しいのも、体温が高いのも、酒のせいだけではないらしい。
意識してくれているのなら嬉しい。素直にそう思った。
「あんたの背中、こんなに広かったっけ」
ぽつりと呟く。

「もうすぐ二十だからな。もう子どもじゃないさ」
「そうね……あんたも、私も……もう、子どもじゃない……」
「……桂花？」
返事がない。どうやら寝てしまったようだ。
起こさないように静かに背負いなおす。

乱世は未だ始まったばかりで、二人は既に子どもではいられない。
これから先どうなるのか。神ならぬ身では知る由もないが、今はただこの愛しいぬくもりを感じていたかった。

紺碧の張旗

大地を駆ける。

できる限りの速さで、しかし馬に無理をさせないように繊細に。

早駆けは、ただ速度のみを重視すればよいというものではない。馬を酷使しすぎると、脚が潰れて動けなくなってしまう。それでは意味がない。

草原に吹く風のように、速く、そしてやわらかく。

それが早駆けの心得だ。

華雄がよく言っていた。風と一体になった感覚が得られた時が、人馬一体という言葉を本当に体言した瞬間だと。

霞も同感だ。それだけに、同じ感覚を共有できる仲間が逝ってしまったことがより一層悲しくなる。

とはいえ落ち込んでばかりはいられない。先日華琳の認可を受けて正式に結成された張遼騎馬隊。この軍を、嘗て月の下で率いていた軍と同じように精強に鍛え上げること。それが今の一番の目標だった。

場内、謁見の間にて、霞は鮑信と共に跪いていた。目の前には新たな主君となった華琳の姿がある。両脇には春蘭、桂花を筆頭に武官、文官の幹部が並んでいた。

「二人とも、顔を上げなさい」

威厳に満ちた声が頭上から降ってきた。

顔を上げる。華琳が席を立ち、ゆっくりとこちらに歩み寄ってくる。隣の鮑信がごくりと唾を飲む音が聞こえた。気持ちはわかる。先日の穏やかな雰囲気とはまるで違う。五尺がかけているあの小さな身体の何処からこれほどの覇気が発せられるのか。

――乱世の奸雄？そんなもんで終わる玉とちゃうでこれは。

自らの主君とわかっていても、戦慄を覚えずにはいられない。冷や

汗をかいたのは、恋と仕合った時以来だ。
「今日、正式に鮑信、張遼の二人を将軍に任命する。
真名は既に交わしてあるわ。まあ、張遼はともかく男の鮑信の真名を人前で軽々しく呼ぶわけにはいかないのだけれどね」
最後の台詞と同時に一転して笑みに変わる。息が詰まるような重圧も、嘘のように消え去った。
「それは残念ですな。私がもう二十若ければ、閨で呼んで頂けるよう励みましたものを」
鮑信が顎鬚を撫でながら早速軽口を飛ばす。部屋が朗らかな笑い声に包まれた。
ひとしきり笑った後、華琳が手を二回叩く。それを聞いて季衣と流々が部屋の外へ出て行った。
「私から二人に最初の褒美よ。受け取りなさい」
入り口に立っていた見張りの兵が扉を開ける。季衣と流々が戻って来たようだ。
中に入り、それぞれ手にしている物を掲げて見せる。
それは、牙門旗だった。
大きい。通常の倍はある。
鮮やかに染め抜かれた生地に、鮑と張の文字。
開け放たれた扉から入ってくる風に、見事にはためいていた。
「貴方たちの旗よ。
作ったのは、裁縫、服飾の職人を希望する元青州の民。
貴方たちの働きが。貴方たちが戦い、下し、受け入れた民の営みがこの旗を生んだの。
それを誇りに思いなさい。そして、その誇りを掲げなさい。
この旗は、その証よ」
「――――」
言葉が出ない。
胸がいっぱいになって喋れない。その意味を今初めて実感していた。堪え切れずに涙が溢れる。気づくと包拳礼をしていた。鮑信も同様だ。

「「ありがたく!!」」
華琳の顔と、牙門旗。美しいはずのそれらは、涙で滲んで歪んで見えた。

「楽しそうですな、張遼将軍」
新たに配属された副官の路招がどこかで聞いたようなことを言った。こちらを見てにやっと笑う。そうすると厭らしい悪人面になるのだが、どうしてか憎めない男だった。
「んー……ちょっとな。
張遼将軍、かあ。うち、将軍になったんやなあ」
後ろをちらりと見やる。牙門旗が、蒼空に優雅にはためいていた。
「そうですな。見事な牙門旗です。
しかし、張遼殿は以前董卓軍に所属していた頃も将軍だったでしょう?」
「そう、それや」
「は?」
路招の首が高速でこちらに回る。今度は中々の間抜け面だ。
「うち、この前まで董卓軍におったやろ?
ついこの間まで敵やったわけや。この隊の中にも連合軍に参加して戦ったやつもおるやろうし、うちや恋に仲間をぎょーさん殺されたやつもおるかもしれへん」
「それは、そうでしょうな」
顔が曇る。こちらの言いたいことがわかったらしい。
「いくら上からの命令やゆーてもそう簡単には割り切れへんのが人間や。せやけど、この隊は皆うちの命令をしっかり聞いてくれとる。文句言うやつも一人もおらん」
「……上意下達は軍の基本ですからな。曹操軍には、そのような者はおりますまい」
「表には出さんでも、不満に思っとるやつはおるはずや。
それでもうちに従ってくれとる。新参のうちにな。

大将は、その不満を全部引き受けて、うちを将軍にしてくれたんやな、って思てな」
「恨み辛みも、不満も悪評も、全てを受け止めてなお前へ突き進む。それが曹孟徳の覇業なのでしょう。だからこそ、今回も直ちに出撃を命じた」
「せやな。大将には、感謝してもしきれんわ」
真剣な顔でうなずき合う。

――その知らせが入ったのは、牙門旗を受け取った直後のことだった。
「急報！急報です!!」
開け放たれたままの扉を見張りの兵が閉めようとしたその時、謁見の間へと続く廊下を慌しく兵が駆けてくる。息を切らせながらもつれるように部屋に飛び込み、その勢いのままほとんど転ぶようにして膝をついた。
一瞬の静寂の後、顔を上げたその兵の口から飛び出した急報の内容はとんでもないものだった。
「袁術が寿春にて皇帝を自称し仲帝国を建国すると宣言しました！」
その場に居並ぶ全員に衝撃が走る。
皇帝を自称する？
素直に従う者などほとんどいないだろう。どう考えても正気の沙汰ではない。
「伝国の玉璽は我に在り、最早漢王朝の命運は尽きた。新たなる支配者に従属せよ、と！
客将の孫策はこの知らせを受けて離反！偽帝袁術を討伐せよとの檄文を各地に送り前面戦争に入りました！」
伝国の玉璽。確か、一刀が皇帝陛下にその所在を尋ねたことがあったはずだ。その答えは、宮殿が炎上した際に失われたということだった。それを何故袁術が持っているのか。
思わず一刀の方を見る。違和感に気づいたのはその時だ。

驚いていない。
その顔に驚の色は一切なかった。いつものように、得られた情報を整理し、静かに己の中に深く埋没している。
「ご注進ー!!」
「いや、こちらが急報でございまするー!!」
何事かと入り口を見やる。先程の兵よりいくらかは落ち着いている兵が駆け込んできた。その後ろから続いてまたもや伝令兵。
「慌てふためかず、ひとりずつ粛々と述べなさい!」
華琳が一括する。二人の動きがぴたりと止まった。そして再起動する。
「も、申し上げます!」
袁術の建国及び皇帝自称の知らせを受け、袁紹が声明を発しました!
袁家の真の当主はこの袁本初である、故に真の皇帝となるべきは自分である、と!
同時に公孫賛の領土へと進行しました!」
そこかしこで呻き声が上がる。いつも通り不機嫌顔をしていた音々音でさえ、皇帝を名乗る人物が同時に二人現れるという事態に唸っていた。
一刀は――表情は、動いていない。まるで、全て予想していたとでもいうように。
「次!」
「はっ!」
え、袁術が洛陽へと軍を差し向けました!間諜からの報告によりますと、その狙いは皇帝陛下及び董承殿の身柄の確保であるとのこと!」
「なんやて!」
思わず大声を出してしまった。皆が一斉にこちらを見る。すんません、と一言いって口を閉じた。
「既に皇帝陛下、董承殿は洛陽を脱出しており、護衛には呂布将軍が付いているとのこと!現在袁術軍が追走している模様です!」

「そう……わかったわ。
ご苦労様。貴方たちはゆっくり休みなさい」
華琳が兵を労う言葉をかける。彼らは恐縮しながらゆっくりと出ていった。
次に言葉を発したのも、やはり華琳だ。
「貴方が予想していた火種が同時に大きくなったわね、北郷」
「はい。事が同時に起こるという最悪の予想が当たってしまいました。
ですが、良い方向に予想外のこともあります。
玉璽を手に入れた袁術はともかく、袁紹までもが皇帝を名乗りました」
それを聞いた春蘭が首を傾げる。
「北郷。何故それが良いことなのだ？
私には単に袁紹が同族の袁術に対抗しただけのように思えるが」
隣の秋蘭がうなずく。霞も同感だ。
その疑問に答えたのは桂花だった。
「先の反董卓連合よ。
虎牢関で皇帝陛下が御自ら戦場に出てきて停戦の勅をお出しになったわ。各地の諸侯、そして兵の目の前で、戦を止めて見せた。皇帝という存在を、強烈に印象付けたのよ。その印象はまだ薄れていない。恐らく、皇帝を自称するという行為に対する嫌悪感は相当なものになるはずよ」
「そうじゃなくても不敬もいいところ、自称するだけでも大逆罪と大差ないのですぞ。
漢の全土を敵にまわし、かつ相手にこれ以上ない大義名分を与えてやったようなものなのです」
音々音も桂花に同意する。その解説を、華琳は静かに聞いていた。
「桂花、北郷、陳宮。策は？」
華琳の問いに、軍師たちは口々に答えた。
「陳宮の言う通り、大義はこちらにあります。その大義を利用して、反袁家の象徴となるべきかと」

「大義の象徴、天子を奉戴するのですな。その象徴が放つ光に、世の人々は自然と集まってくるのです」
「陛下には恋が護衛に付いています。洛陽からの脱出を指示したのは文和殿でしょう。彼女らならば、まず間違いなくこちらへと向かっているはずです」
うなずく。華琳が勢いよく立ち上がった。
「ならば――張遼!!」
膝を付く。力強い声が、身体に染みわたった。
「早速初仕事よ。一軍を率いて陛下を迎えに行きなさい。
輜重隊は連れず騎馬隊のみで先行。一刻も早く呂布の部隊と合流しなさい」
「騎馬隊のみ？」
新参の将軍に、騎馬のみで構成された部隊を任せる？
「そうよ。北郷の提案でね。
貴方には、騎馬兵のみで構成された遊撃隊を率いてもらうことになったわ」
「必ず、ご主君の力になります。
千の兵で、十万の大軍を退けるようにもなりましょう」
「らしいわよ。期待されてるわね？」
こちらを見て穏やかに笑う。あの、暖かい笑みだった。

そして今、此処にいる。
華琳と一刀の信頼を裏切るわけにはいかない。
「急ぐで、路招！」
「はっ！」
馬速を上げる。後方翻る旗が、力を与えてくれる気がした。

涙の二人、折り合わない二人

「お加減はいかがですか？何か不自由することは？」
寝台の横の椅子に座って声をかける。
「ありがとう。最近はだいぶ動けるようになったの。
ご飯も美味しいし、こんなに良くしてもらってもいいのかな」
一刀の気遣いに、張三姉妹の長姉、張角は寝台の上で上半身を起こした格好で答える。
流々が加入し食事を用意するようになってから張角は見違えるように回復していった。保護した当時は軽度の脱水症状と栄養失調でやつれていた姿も、今は元の美貌を取り戻しつつある。
「我が主、曹孟徳は青州黄巾全てを民として受け入れると宣言しました。その全てには、当然貴女たちも含まれています。何も遠慮することはないでのですよ」
「だけど……」
張角がそこで言いにくそうに口ごもる。
「乱の責任、ですか？」
一刀の言葉に張角はうつむいて黙ってしまった。寝台の両脇に座っている妹二人も同様だ。
「確かに、責任が全くないとは言いません。少なくとも董卓が洛陽入りするまでの初期の黄巾の乱は貴女たちが原因でしょう。貴女たちの人気が、求心力が間違った方向に進んでしまった、その結果です」
三人はますます身を小さくする。
「だからこそ、貴女たちにはやらなければならないことがあります」
一刀の力強い口調に、姉妹は揃って顔を上げた。
「今回の乱では、心に傷を負った民が大勢います。己が為した所業の残酷さに、罪の意識に苛まれて夜も眠れない日々を過ごす者も多い。あの男に操られていたと認識しているとはいえ、実際に手を汚したのは自分ですから。
そんな民にとって、貴女たちは心の拠り所なのです」
「心の、拠り所……」

次姉、張宝が呟く。
姉妹それぞれが、一刀の言葉を己の中で反芻しているようだった。
「はい。
最初期、なんの邪心もなくただ貴女たちの歌と踊りに酔いしれていた人々。そういう者が、いまこの街にも大勢います。結果として賊となってしまいましたが、その頃の純粋な心が取り戻せるならば、まだやり直せるかもしれません」
張梁がゆっくりと顔を上げてこちらを見つめる。
その目に、段々と前を向く意思の光が戻ってきていた。
「古来、人々は歌で意思疎通をはかりました。
言葉の通じない異民族でも、歌ならば通じ合うことができます。私の故郷には、『音楽に国境はない』という言葉もあります。
音楽には、言葉とはまた違う力がある。
檄文に乱を起こすことができるなら、詩歌で人の心から乱世を終わらせることもできるはずです」
三人が、泣いていた。
溢れ出る涙を拭いながら、一刀の言葉をしっかりと受け止めていた。
「私たち、また歌ってもいいの？
あんなこと、しちゃった、の、に……」
言葉にならない。涙が、止まらない。
その涙を、一刀は指でそっと拭いた。
「歌ってください。
貴女たちの歌で、皆の心を癒してください。
皆、初めはただ貴女たちの歌が好きで、その歌を聞きたくて集まった人たちです。
彼らを癒せるのは、貴女たちしかいない。
貴女たちにしかできない、大切な仕事です」
張角が一刀の胸に顔をうずめる。
泣く子をあやすように、ただ抱きしめ続けた。

暫くして嗚咽は収まった。
もう大丈夫、という言葉と共に胸から離れる。
「あーあ、恥ずかしいところ見られちゃったな」
そういって明るく笑う。泣き笑いではあったが、可憐な笑みだった。
「さて？私は何も見ていませんよ？」
「それはそれで残念なんだけど……」
唇を尖らせて文句を言う。妹二人も苦笑いしている。どうやら本当に大丈夫なようだ。
表情を切り替える。
「今日伺ったのは、聞きたいことがあったからでもあります」
空気が変わったのを察したのか三姉妹も真剣な表情に変わる。
「もしかして……あの男のことかしら」
張梁が眼鏡を持ち上げながら問う。姉二人の顔がこわばった。
「ええ。張角殿を人質に取っていたあの男です。
どういった経緯であのようなことに？」
「……あの男、名前は聞いてないけど、突然現れたのよ。
暴動が一旦下火になってから、私たちは一部のまともな黄巾の人たちに匿われてたの。
ある日突然あの男がごろつきを連れて乗り込んできて、波才さん、を……」
張梁の目に涙が浮かぶ。
その波才という人物が彼女らを匿っていたのだろう。
「私はそのままそのごろつきに捕まえられて……。
たまに水をほんの少し飲ませてもらえるだけで、生かさず殺さずって感じだった。
だけど、何でか傷つけることはしない、って言ってて。ごろつきの一人が私に手を出そうとしたんだけど……蹴りでその人の首を折っちゃった……」
その時の光景を思い出したのだろう。震えながら肩を抱いていた。
「ふん！傷つけるより酷いことしてるじゃない！ちいは絶対に許さな

いんだから！
この子も、そのせいで……！」
「なるほど……」
そういう事情か。納得はできる。だが――。
「では、あれだけの人数をどうやって操ったのですか？
元々そのような妖術が存在するなら悪用する者が他にもいそうなものですが」
「……ある書物が原因なのよ。名前は『太平要術の書』。
暴動が起きちゃって私たちが捨てたはずのそれをあの男が持ってきて、ここに書いてある通りに妖術を使えって……。私は妖術を使わされただけで、細かい命令は皆あの男がやってたみたいだけどね」
張梁が苦々し気に言う。
「何故あのようなことをしたのか、目的については何か言っていましたか？」
顔を見合わせる。やがて声を上げたのは張角だった。
「はっきりとは覚えてないんだけど……『この外史を滅ぼすため』とかなんとか言ってたかなあ。
意味はよくわかんないんだけどね」
外史。またその言葉だ。洛陽で董承も耳にはさんだという。
おそらくは、外典や番外などの意味の外に歴史の史の意味合いだろう。一刀にだけはその意味が理解できる。
主な人物が皆女性となっているこの世界は、正しく外なる歴史と言えるのではないだろうか。
「その男、まず間違いなく董卓を唆した男と同一人物ですね。
陛下と董承殿を人質に取り、洛陽を地獄に陥れ、反董卓連合の火種となった男……」
「やっぱり！とんでもない極悪人だったのね！」
張宝が憤慨している。姉妹の中では一番の激情家のようだ。
「ええ。
そして伝国の玉璽を盗み出し、袁術に渡した男でもあるでしょう。
それが原因で今世には皇帝を自称する者が二人存在し、陛下は軍に

狙われ洛陽を追われました」
「北郷さん、此処にいて大丈夫なの？それ、結構一大事なんじゃ……」
張梁が訝し気に聞いてくる。
「問題ありません。既に霞が向かっています。
こと騎馬戦において、特に速度を旨とする今回のような戦では、彼女に並ぶ者はいません」
「ふーん、信頼してるんだね、張遼さんのこと」
張角は何故か不満げだ。
「でもでも、例えば敵に凄く頭の良い人がいて罠にかけられたら？」
「それも問題ありません。後発で軍師が出発しています。
戦術能力は私よりも上です。袁術軍にはまともな軍師は付いていないようですから、後れを取ることはないでしょう」

遅れる馬が出始めた。徐々に速度を上げつつ駆け通してきたが、これ以上の行軍は兵の戦闘能力にも支障をきたす。黄巾を迎え撃つ直前に行った野営訓練で兵の気力はこれぐらいでは問題ないように鍛えてあるが、馬はそうはいかない。どうやら限界のようだ。
「全員止まり！此処で野営準備や！」
火を起こし僅かばかりの休息を取る。
霞も獲物を抱いて眠りについた。
馬の往く音で目が覚める。一瞬で構えをとり得物を掲げると――
現れたのは、音々音だった。
「音々音か」
並足よりも更に遅く、一歩一歩ゆっくりと進んでいる。
「此処に来てどれくらいなのですか？」
全身が埃まみれだ。あの小さな身体でずっと駆け続けてきたのか。
「二時くらいやな」
「流石に速いですな。
半時後再び同じ速度で軍を進めれば、敵との遭遇は明日の夜半から

明け方にかけてなのです。
ねねは先に行きますぞ」
そう言って目の前を通り過ぎていく。歩みを止める気配はない。
「眠らずに行く気かいな？無理して戦場で役に立たんかったら意味ないで」
返事は、振り返らないままだった。
「ねねの騎馬術ではそちらの行軍にはとても付いていけないのです。
それに軍師は戦場で指揮をとるだけの力を残しておけばよいのですぞ」
「音々音……」

そして翌日。
「董承殿！前方に砂塵です!!」
護衛の兵が大声で叫ぶ。
「旗は確認できるの!?」
「間もなく！……見えました！
旗は『張』!!紺碧の張旗です!!
張遼将軍が、援軍に来られたぞーーー!!!!!」
おおーーーー!!!!
全軍から歓声が上がる。
それを聞きながら、溢れ出る涙を拭っていた。
自分は、助けられてばかりだ。
首を振る。霞と約束したのだ。華雄さんが命を懸けるだけの価値があったと言われる自分になると。
「霞さん！凄く格好いいですよ！」
精一杯の笑顔で、彼女に会うために馬速を上げた。

「陳宮殿！」

放った斥候が戻ってきた。武具も甲冑も身に着けず、ただ速度を旨とした兵を三人。敵を発見した時点で兵数を確認し帰還せよと命令していた。
そのまま馬上で音々音に何事かを報告している。敵が見つかったということか。
三人はそのまま霞の後方に向かって駆け出す。どうやら本隊に合流するようだ。
「見つけたんか？」
音々音がこちらと視線を合わせてうなずく。
「数はおよそ一万。陛下と月殿は、袁術軍より三里ほど先行しておるようです。
恋殿が時たま単身で奇襲を繰り返しておること、一般兵の中には陛下に向けて刃を向けることを躊躇っておる者が多いことが原因のようですな。
このまま行軍を続けられれば、皆を本隊に合流させることはそう難しくはないのです」
「そら良かった。とりあえず、最低限の目的は果たせそうやな」
ほっと息を吐く。月や詠、皇帝陛下が捕らわれる心配はなくなりそうだ。
「問題はその後なのですぞ。
こちらの軍を発見すれば、焦って勢いのまま攻撃を仕掛けてくるやもしれないのです。その場合、身の安全を確実に保証できない。かといって、これまでの行軍で疲弊している月殿の部隊を護衛なしで更に進ませるわけにもいかないのです」
その通りだ。とすると、選択肢は――。
「霞、決断するのです」
音々音がこちらの目を真っ直ぐ見つめてくる。
口調は静かだ。態度もいつも通り。しかし、全身から闘気が立ち昇っている。
「ここは月殿の部隊を吸収し、本隊と合流して陣を敷き戦うか、あるいは――」

「このままこの二千の兵で約五倍の敵に襲撃をかけるか、か？」
互いににやりと笑いあう。
悪くない。音々音と知り合ってから、一番通じ合っている気がした。
「涼しい顔してぎりぎりの軍略をつきつけるんやな。思わず大将と間違えそうになったで」
「こんなものをぎりぎりと感じておるのですか？
やはり軍略の何たるかをわかっておらぬようですな！」
相変わらずの毒舌を合図に手綱を引き絞る。
「言うたな？それなら、うちの武の全てを預けたる。
その軍略の何たるかっちゅーのを教えてみい！」
「無論なのです！
どこまでも苛烈な策を出し続け霞の武とやらを搾り尽くしてやるのですぞ！」
同時に駆けだす。
こんなに気分が良いのは久しぶりだ。
誰にも負ける気がしなかった。

「霞さん！凄く格好いいですよ！」
笑顔の月が近づいてくる。
全てを一人で抱え込む癖は、少しはましになったようだ。
「月っち！久しぶりやな！」
馬速は緩めない。このまま敵陣に突撃するのだ。
「霞！」
皇帝陛下が乗っているのであろう馬車を先導していた詠が叫んだ。
馬車の後方には恋が付いている。
「頼んだわよ！」
「任しとき！」
最高速ですれ違う。短い再開だが、これだけで十分だ。
悪くない。本当に悪くない。

沸々と涼州騎馬隊の血が滾ってきた。自然と口角が吊り上がる。
そして暫く後――。
「見えたで！　音々音の言う通りや！
追いかけるだけ、しかも恋のおまけ付きやからな。まともな陣敷けてへん！」
「まずは敵の陣を真っ二つに突っ切るのです。
しかる後に兵を二つに分け、左右両翼より敵を四分するのですぞ！」
音々音が馬躰にしがみつきながら叫ぶ。
馬に乗るというよりは乗せられているが、しっかりと並走していた。
「攻撃は馬上の兵ではなく馬に集中！　傷を負わせるだけでも良いのです！
この先制攻撃で統率のとれた機動力を奪えるだけ奪っておくのですぞ！」
「ちゅーことや!!　ええか!!」
「「「「「「「「「「応!!!!」」」」」」」」」」
全員が応える。
この小さな軍師への確かな信頼を、皆が共有していた。
「行くでー!!!」
突っ込む。敵兵は慌てふためくばかりだ。
左側より二人。得物を一振り。切り捨てる。見る限り、弓で狙われることはなさそうだ。
刃、石突、持ち手。全てを活用し、一人でも多くの騎兵を落とすことを第一にする。
馬は繊細な生き物だ。僅かの傷でもその走りに影響がでる。
続いて左右同時。右の兵をいなして身体ごと左にぶつける。
背後。いなしたまま石突で突く。再び左。切り捨てる。
「考えが甘いわ！」
馬の脚を狙ってきた兵を擦れ擦れまで身体を倒して迎撃する。
「涼州騎馬隊舐めるんやないでー!!」

馬速を上げる。今の自分を止められる者は恋くらいだ。
敵兵は皆浮足立っている。既に逃げ出した兵もいるようだ。
敵の機動力は大方失われた。組織だった騎馬隊での反撃はもうできないだろう。完全な乱戦状態だ。騎馬力を活かせないようでは、自分に敵はいない。
しかし、数に任せて力押しをされれば不利になるのはこちら側だ。
音々音の目に勝機は見えているのか？策は放てるのか？
その時だ。
「皇帝の自称！まずは笑殺してやるのです！
三族共々反逆者の汚名を着て皆殺しにされる覚悟はあるのですか！」
音々音の叫ぶ声が聞こえた。
完璧に不意を突き、戦術面で圧倒的優位に立ちながらもなお謀略の手を緩めない。なんて軍師だ、あのちびっ子は。
ならばこの戦局で自分が為すべきことは――いや。
一度全てを預けると誓ったのだ。最後まで音々音に乗っるのだ。武を、軍を、全てを与えろ。水のごとく自在に戦を動かせるように！
やがて――来た。四散した軍が、中央で集結する。
「音々音！」
徐々に近づく。声がようやく届く距離だ。
「大勢は決したのです！後は指揮官を討ち取れば敵軍は瓦解しますぞ！」
「せやけど数だけはまだまだ多い！もたもたしとると囲まれるで！」
そこで気づいた。音々音は、目を閉じている。
「全軍八方に散るのです！」
音々音の言葉に、自分が指示するまでもなく軍が再び分かれていく。この戦の主は、紛れもなく音々音だ。
そして、一瞬の交錯。
「ねねの目が開いた瞬間です！」
どういう事か。わからないが今はいい。最後まで音々音を信じるだけだ。

再びの乱戦。付き従う兵の数はまた少なくなった。
兎に角斬る。斬って、斬って、斬りまくる。
音々音はどこだ。何処にいる。無事なのか。
そして――見つけた。乱戦の場所から離れている。
『ねねの目が開いた瞬間です！』
敢えて目立つように外へ？全体を俯瞰し、何を見せようというのか。
見つめる。見定める。
――背後に二人。回避して旋回。
未だ目は閉じたままだ。
――正面。邪魔なだけだ。続いて右。斬り捨てる。
……まだか。まだなのか。
――再び正面。馬狙い。馬が自分で躱す。
……――――――!!
……目が開いた!!

その目玉で何をとらえている？敵の指揮官か？
違う。見当たらない。よく見ろ。何がいる。
その視線の先にいるのは――自分？
「後ろ!!」
声と同時に身体ごと振り返る。
そこには、信じられないという顔をした男がいた。
「殺!!」
男が武器を振り上げる。破れかぶれか。
「ぬるいわ!!」
交錯。
男が、倒れた。
「敵将、神速の張文遠が討ち取った!!」

戦はほどなくして終わった。

指揮官を失った袁術軍は戦意喪失し、兵は散り散りになってその大半が逃げ出した。投降を申し出た兵も少なからずいる。音々音はその全てを受け入れた。逃げ出した兵の追撃はしていない。

『ほとんどが袁術の愚政、重税に耐えかねて兵になった食い詰め者なのです。

放っておけば、天子に軍を差し向けた袁術の非道、そしてその結果敗北したことを各地で語ってくれるはずですぞ。自分の本意ではない、袁術の責任だ、と』

まだ他にも考えはあるようだが、お互い戦後処理に忙しくてそこまでは語れていない。

残存兵、投稿兵のまとめが終わったのは、中天を過ぎてからだった。

馬を降り、やれやれと目頭を揉んでいる音々音の隣に並ぶ。

「……あれ、うちをおとりに使ったっちゅーことかいな」

「……どんなに冷静で辛抱強い指揮官でも、どんなに大局を見渡せる者でも、ただ一点しか見えなくなる局面があるのです」

こちらを見ないまま答えた。今度は肩を揉みほぐしている。

「……それは？」

「獲物を仕留めようとするまさにその時、なのです。

まあ、仕留めようとしたのは実は猛獣で、返り討ちにされてしまったわけなのですが」

ちょっと待て。

「よしわかった。うちに喧嘩うっとんのやな？高く買うたるで？」

「武の全てを預けるのではなかったのですか？それとももう忘れたのです？

やはり猛獣とそう変わらないのです」

両手を空に向け、やれやれなんて言っている。

少しは成長したのか、なんて感心していたのが馬鹿らしくなった。

「一刀……ごめん。うち、やっぱこいつのこと好きになれへん」

「奇遇ですな。ねねもなのです」

「ふん!!」

同時に顔を背ける。

機嫌は最悪のはずなのだが、何故だか勝手に顔が笑ってしまう。
妖術使いではない自分には頭の後ろは見通せないが、きっと音々音も笑っている気がした。

幕間　思いと想い

「公台殿から連絡が入りました。
先発した霞の部隊に自らと護衛の兵、斥候のみを連れて合流。董承殿を追っていた袁術軍一万に二千の騎馬隊で突撃し、敵の指揮官を討ち取り敗走させたとのことです。
尚、逃走した敵兵に対して追撃は行わず、投降した者を受け入れ既に本隊、董承殿の部隊とともに帰還中とのこと。
同行していた陛下にお怪我はありません」
一刀の報告に居並ぶ文武諸官がおお、と声を漏らす。
今回の用兵は陳宮に一任されていた。曹操軍に加入して初めての、一軍の軍師としての戦。その戦で五倍の敵を打ち破ったのだ。本隊が後詰として控えていたとはいえ、これだけの戦果は感歎に値する。
いけ好かない奴ではある。
春蘭とは反りが合わないが、主への忠誠心は真っ直ぐで混じりけがない。その点は認めていた。細かい戦術を無視して感覚で動く時があるが、武将としての能力も申し分ない。
一方陳宮には忠誠心というものがまるでない。頭の中にあるのは呂布のこと、軍略のこと、それだけだ。
それは、危うい。
呂布に忠誠を誓っているというわけではない。
あれはただ単に、呂布のことが好きなだけだ。袁術と張勲の関係に近いだろうか。呂布のためなら周りをいとわずに行動する。そういうところがある。
それがいつか味方を、曹操軍を傷つける結果になりはしないだろうか。
「見事ね。
先の張遼、今回の陳宮。ともに素晴らしい勲功をあげたわ。
桂花に聞いていたけれど、貴方の人を見る目は確かなようね」
華琳の声は満足気だ。

確かに、一刀の人の才を見抜く目は確かだ。そこには予想というものがない。この人物はこういう才を持っている、と断言するのだ。一度も逢ったことがない人物でさえ。そしてそれは、一度もはずれたことがない。

そもそも自分が華琳に仕えることになった要因のひとつも一刀だった。

名士は名士と繋がりを持つ。その繋がりを通じて人材を登用し、それが繰り替えさえることでやがて巨大な人脈、派閥が築かれるのだ。荀家とて例外ではない。

当初、荀家にもたらされた登用の話は袁紹からのものだった。袁家といえば、四世三公を排出した名家の代表だ。出仕先としてはこの上ない。家族も大いに喜んだ。

そんな時、当時はまだ心を開かずに引きこもりがちだった一刀がぽつりとこぼしたのだ。

袁紹は愚物だ。出仕するだけ時間の無駄。最後は馬鹿を見ることになる。

あの時の一刀の言葉に従っておいて本当によかったと思う。実際に目の当たりにして良くわかった。あんなのに仕えるのはごめんだ。

「遅れて出発した本隊は輜重隊も兼ねていますので、補給の心配はないでしょう。

陛下には多少粗末な食事を取ってもらうことになりますが、不敬罪に問われたりはしないはずです」

冗談めかして言った最後の言葉に部屋が笑い声に包まれる。

自分の思考をよそに、一刀の報告は続いていく。

「間もなく天子をお迎えすることになります。

今後の両袁家の動向によっては、仮の都を定める必要が出てくるかもしれません。

いずれにせよ、準備が必要でしょう」

一同に静かな緊張が走る。

いくら衰えつつあるといっても、皇帝を迎えるといくことは多くの人間にとって一大事なのだ。

勿論例外もいる。その筆頭が主である華琳だ。
「そうね。そうなればそれなりの用意をしないと。
皇帝陛下がおわすにはふさわしくない場所だ、とかそこらの儒者が騒ぎ出すかもしれないわ」
華琳が鷹揚にうなずく。うんざりするといった表情だ。
「桂花！
貴女が考える新たな都にふさわしい場所は？」
「開発、防衛、軍事拠点。そのた諸々の条件を加味しますと、許がよろしいかと。
いずれ陛下が洛陽へお戻りになる御意志を示されるとしても、新たな中核都市として発展させる価値は十二分にあります」
すぐさま答える。
袁術軍侵攻の知らせがあった時から、事前に一刀と検討していた。
「ならばそのように手配を始めなさい。
この件についての責任者は桂花、貴女よ。相手が了承してくれれば、一人か二人補佐を付けるかもしれないわね」
華琳の決断も迅速だ。あるいは、自らもまた事前に事前に検討して同じ結論に達していたのかもしれない。時折、自分の考えを述べているはずなのにいつの間にか華琳の考えを代弁しているような気持ちになる。
「では、文和殿に？」
「ええ。正式に勧誘するつもりよ」
賈文和。洛陽では人質を取られる失態を犯したが、宦官を一掃し民政を清浄化させ、瞬く間に治安を回復させた手腕はかなりのものであると聞いている。袁術から逃走し、真っ直ぐこちらを目指した決断力もある。彼女が手が借りられるのならば、政務はかなり楽になるだろう。
「よろしいですか？
張遼将軍、陳宮殿に青洲兵。このところ敵方の取り込みが続いています。
またぞろ批判が湧き出しそうですが」

末席に並ぶ文官の一人が声を上げる。ざわざわと同意する囁きが聞こえてきた。確かに周囲の印象は良くはない。
暫く頬杖をつき黙していた華琳が突然立ち上がった。
「元董卓軍？元賊徒？
一向にかまわない!!
才があるのならば、いかに非情であろうと邪であろうとかまわない!!
どんな不逞の輩であろうと、どれほど不仁不孝であろうとまるで問題ない!!」
大声で語りながら真っ直ぐ前へ進む。
「唯才!!」
その覇気に、文官たちが怯えている。
「唯才があれば用いる!!!」
止まる。部屋の中央で、ぐるりと周りを見渡した。
「以上が私の思い描く国の形よ」
今までにない、新たな国の形。新たな時代の始まり。
それを感じ取り、皆がそろって膝を付いた。

部屋を出て、一刀と並んで自室までの道を歩く。
自分が何かに悩んでいる時、一刀は声を掛けたりはしない。ただ無言で傍にいるだけだ。そういう気遣いが嬉しくもあり、同時に少し煩わしくもある。
考えるのは、先程の朝議での華琳の発言だ。
唯才。
それは、明確な儒への宣戦布告だ。
わかってはいる。見せかけだけの徳や善行で地位を得、民草から重税、賄賂を搾り取る地方役人の数々。漢に深く根差した儒の腐敗が、国そのものを腐らせている。
しかし、自分もまた儒の者だ。
漢の大地に生まれ、儒によって育まれた。

儒によって鍛えられたという自負もある。
男は今でも大嫌いだが、真の儒者の中には敬うべき者もいる。儒がなければ、一生偏った価値観で生きていたかもしれない。
自分は華琳の臣だ。あの覇気に、あの生き様に見せられ忠誠を誓った。
その華琳が、儒を明確な敵とみなした。
一生華琳に付いて往く。それは間違いない。
しかし、親族はそうはいかないだろう。自分は裏切り者と呼ばれるかもしれない。
「――桂花」
一刀が袖を掴んで引っ張った。
いつの間にか部屋の前に着いていた。気づかず通り過ぎようとしていたようだ。
「ねえ、一刀」
一刀の眉がぴくりと上がる。
ここ最近はずっとあんたと呼んでいた。真名で呼ぶのは久しぶりだ。
「なんだ？」
「華琳様は、皇帝への道を歩むつもりはないのかしら」
腕を組んでうーんと唸る。
「……どうだろうな。今は、そのつもりはないように見えるけど」
今は。それは、いずれそうするつもりということか。
そう問うと、そうじゃない、と返された。
「ご主君の目的は、腐敗し、疲弊しきったこの国を立て直し発展させることだろう。覇を唱えるというのはその手段に過ぎない。
極論すれば、ご主君よりそうするにふさわしい者がいるならばご主君は躊躇わずその者に席を譲るだろう。勿論、自分よりふさわしい者などいないと確信しているだろうけどな。
皇帝の地位も同じだ。自らが皇帝になる必要がないからならない。逆に言えば、必要があるならなる。ご主君にとっては、その程度の飾りだよ」

「そう、ね……」
その通りだ。曹孟徳とはそういう人だ。
「入ったばかりの一刀に言われるなんてね。
割と、混乱しちゃってたみたい」
自嘲する。本当に、情けない。
「桂花」
何？と目だけで問う。
その目を、一刀はしっかりと見つめてきた。
「俺は、桂花の、味方だ」
一刀が語る。ゆっくりと、確かめるように。
「何があっても。もし世界中が敵に回ったとしても、俺だけは桂花の味方だ。
つらいなら逃げたっていい。俺はずっとついて行く。
だから、一人で無理するな」
「一刀……」
近づいてくる。
そのまま、抱きしめられた。
自分とは違う、男の身体。嫌悪感はない。
その温もりと鼓動に、安心した。
「生意気ね。
昔は私がやってたのに、立場が逆になっちゃった」
目を閉じる。悩みは尽きないが、今だけは全て忘れられそうだった。
そのまま暫くして身体を離す。
「ん。もう大丈夫」
「それならよかった」
顔を見合わせて笑いあう。この感じも久しぶりだ。
「私は部屋に戻って政務の続きをするわ。一刀は？」
「食堂にいって昼食かな。それから調練を視察してくる」
「そう。それじゃあ、また後でね」
「おう。桂花もしっかり食べないと、色々育たないぞ？」

「余計なお世話よ！」

最後の最後でなんてことを言うのか、この男は。

自分は怒っている。そのはずだが、何故だか顔は笑顔のままだった。

軍師の一日

食堂の扉を開けると、中には珍しい顔があった。
「一刀殿も昼食ですか？」
「ええ。よろしければ相席しませんか？」
「喜んで」
どうぞどうぞ、と椅子を差し出してくれた。礼を言うとはにかむように笑う。気持ちのいい笑顔とはこういう顔のことを言うのだろう。
「一刀殿が食堂におられるとは珍しいですね。普段は城下の大衆飯店でしょう？」
「そうですね。
視察の一環としてなるべく通うようにしています」
視察の一環？
「どういうことですか？」
「民が集まる飯屋、酒場は、民の本音が集まる場所でもありますから。町の政治に対する不満、世に流れている噂。食している料理やその値段を知ることも民政の大切な資料になります。
それらを拾い集めてまとめることも私の仕事のひとつなのですよ。
桂花が民政、公台殿が軍務。そして私はその間を取り持つ何でも屋といったところでしょうか」
「なるほど……」
一軍人である自分には縁遠い仕事だ。民が食している料理の種類や値段がどのように政治に繋がるのか、想像もできない。
「茶、いかがですか」
「いただきます」
一刀が手ずから茶を入れてくれる。その手つきは熟練とはいかないまでも中々様になっていた。動きに淀みは一切無く、流れるように茶が準備されていく。
「入りましたよ。冷めないうちにどうぞ」

「ありがとうございます」
軽く杯を掲げてから口に含む。
うまい。
思わず唸ってしまった。続けて二口、三口と流し込む。
一気に飲み干す。満足の息がほう、と出た。
そんな自分の様子を、一刀は穏やかに笑いながら見つめている。
「お気に召して頂けたようでなによりです」
一刀も自分の茶を飲み、うん、とうなずいた。
「驚きました。一刀殿にこのような得手があったとは」
「洛陽にいた頃教わったんです。
茶葉が良い状態になる瞬間を見極める目と、それまでじっと待つ忍耐が大事、だそうですよ」
洛陽で教わった。師事した人物は、あの王允だろう。思い返してみると、一刀の仕草が妙に年寄りじみている時がある。それは、王允を真似ているのかもしれない。
「想っておられるのですな、その人のことを」
「そう、ですね。今でも想っている。
あの人が生きた証を何か少しでも残したくて、決して忘れないようにこの身に刻み付けている。
子どもじみた感傷かもしれませんが」
一刀の目が遠くなる。
彼の脳裏には、今どんな思い出が浮かんでいるのだろうか。
「お待たせしました兄様！
あ、文烈さんも来てたんですね！何にしましょう？」
大きく明るい声に一刀の目が元に戻った。
礼を言いながら典韋から膳を受け取る。美味そうな料理が並んでいた。
「私も一刀殿と同じものをお願いします」
「はーい！お任せですね。少々お待ちください！」
元気良く厨房へと向かう。二人してその後ろ姿を眺めていた。一刀も、先ほどとはまた違う優しい顔だ。

「彼女が私が此処に来ている原因ですよ」
典韋の方を見つめたまま一刀が言う。
「というと？」
「町の飯屋も中々美味いのですが、やはり流々の料理には及びません。気がつけば足が此方に向いてしまっている時もあります」
おどけたように肩をすくめる。
きっと王允も、このように場を和ませていたのだろう。
「それはいけませんね。職務怠慢です」
「人間、食欲と睡眠欲には抗い難いのですよ。
……というわけで、お先にいただきます」
「どうぞどうぞ。
私も、茶のおかわりをいただこうかな」
暫く飲み食いする音だけが響く。まったりとした沈黙が心地いい。
やがて、典韋が新たな膳を持ってきた。
「お待たせしましたっ！
笑ってるのが聞こえましたけど、何か面白いことでもあったんですか？」
一刀と顔を見合わせる。そして、お互い同時に噴出した。
「流々が仕事の邪魔をしてるんだって話をしてたんだよ。
ですよね？優殿」
「ええ。全くその通り」
堪えきれずに大声で笑う。一刀も同様だ。
「ええ！私そんなことしてませんよう！
酷いです兄様！」
わたわたと両手を振る。その様子がおかしくて、また笑ってしまった。
「流々ー!!お腹すいたー!!
……兄ちゃんたち、何してるの？」
大声で叫びながら飛び込んできた許チョが首を傾げる。はたから見たら怪しいことこの上ないだろうが、中々笑いは止まらなかった。

手の甲で一刀の部屋の扉を二回続けて軽く叩く。すぐに中からどうぞと声がした。
扉を開け中に入る。正面の机で北郷が竹簡を眺めていた。どうやら仕事中だったようだ。
「この風習は中々良いな。確か『のっく』というんだったか？」
もっと広まってくれると助かるのだが。そう言うと、何故か苦笑いされてしまった。
「大秦のさらに先にある国の風習です。漢の大地に浸透するには、時間がかかるでしょうね。
残念ながら、秋蘭が生きているうちには難しいかもしれません」
「そんなものか。
っとすまない。これが今回の演習で消費した兵糧の目録だ」
抱えていた竹簡を渡すと目が細まった。不機嫌な空気が漂ってくる。
「……一人分ですか？」
「勿論姉者の分もある」
はあ、とため息をつかれる。
「春蘭にも、少しは書類仕事を覚えて欲しいんですが……」
気持ちはわからなくもない、が。
「一刀。
それは、桂花に優に抱かれろ、と言うようなものだ」
「つまりは、天地がひっくり返ってもありえない、と」
「そういうことだ。諦めろ」
再びため息。しかも、先程より大きかった。
「……まあいいです。
それより、流石と言うべきか、当初の予定より消費が少ないですね。
これなら、余った分は備蓄に回せそうです」
渡した竹簡にざっと目を通しながら一刀が言う。
「お前が来てから補給が常に速やかに行われるようになって助かっている。

一刀こそ流石だろう」
褒めたつもりなのだが、一刀は手を目の前で軽く振った。
「自慢するようなことではありませんよ。
補給は戦の基本ですから。いかな大軍でも、いかに精強な軍でも、食料がなければどうにもなりません」
無言でうなずく。全く同感だ。
人間は盤上の駒ではない。食事も取るし、眠りもする。それを理解せずに策を語る自称軍師のなんと多いことか。
「まず民を十全に食べさせ、その上で兵への補給を万全にする。
それができない者は、軍を動かす資格はないと思っています。
……その点では、ご主君に取り立ててもらうためにした桂花の行動は、軍師失格と言っても過言ではないんですが」
桂花と初めて会った時のことか。思い出して、つい笑ってしまった。
「そんな顔して言っても説得力はないぞ？
……少し、妬けるな」
「秋蘭？」
ゆっくりと近づく。
机の上に身を乗り出して、鼻先が触れ合いそうになるまで顔を近づけた。
「目の前に、こんないい女がいるんだ。
他の女のことを考えるのは男としてどうなんだ？」
「……からかわないでください」
目を逸らす。
その顔を両手で挟んで、無理矢理こちらを向かせた。
「割と本気だ。
……お前なら、抱かれてもいいと思っている」
触れるだけの、軽い口づけ。
「考えてみてくれ」
「……妻は、桂花と、決めています」
手強いな、この男は。

「華琳様をこの大陸の覇者にするのだろう？
その軍師となれば、お前もそれ相応の地位になる。
早く出世して、側室にしてくれ。
……女がここまで言ってるんだ。恥をかかせてくれるなよ？」
「……善処します」
真っ赤になって小さくなっている一刀にもう一度口づけして、部屋を出た。
どれくらい話していたのだろうか。
部屋に入る前は明るかった空は、いつの間にか赤く染まっていた。

「――次」
新たに一人が前に出る。
動く。最初に教えた型などまるで無視。獣のように殴りかかってくる。
――そんな大振りでは当たらないと言ったはずだぞ。
言葉にはしない。してもあまり意味が無い。最近になってようやく覚えたことだった。
かわす。突き出された相手の右腕を左手で掴み、踏み込んで右肘を胸に叩き込んだ。
胸を押さえてうずくまる。
「――次」
また一人。初っ端から飛び掛ってくる。同時に握り締めていた拳をこちらへ向けて開け放った。
砂。目潰しか。
腕で目だけを庇う。飛び上がったのは悪手だ。砂程度では、上から降り注いだ場合効果は半減する。
拳を突き上げる。落ちてくる力も合わさった衝撃を受けて、相手は地面に倒れこんだ。
「調練の成果は如何ですか、文謙殿」

闇夜から声が聞こえてくる。姿はまだ見えない。といっても、この場所に来るのは今鍛えている部下の兵を除けば一人しかいない。
「北郷殿」
一礼する。
薄明かりに浮かび上がった顔を見ながら、この軍を任された時のことを思い出した。
「此処に居る者たちが、貴女に任せたい軍の兵です」
困惑していた。
いきなり一軍を任せると聞かされた時も戸惑ったが、今はそれ以上だ。
目の前には、様々な人間が並んでいる。性別も年齢もばらばらだが、彼らには一つだけ共通点があった。
目に光が、ない。
何も映していない、完璧な無。
まるでこの世の全てを諦めてしまったかのような、絶望の目。
彼らを率いることなどできるのだろうか？着任早々不安が募る。
そんな自分の心境などお構いなしに、荀攸は言葉を続けた。
「彼らは元青州の民です」
青州の民。
ということは、先の戦で操られていた者たちか。
「その中でも、自分の行いを受け止め切れなかった者。天涯孤独の身となり、生きる希望を無くした者。兵を志願した中で、特に苛烈に戦う者を五十人集めました」
「それで、この目の暗さですか」
思わず言葉にしていた。慌てて口を閉ざすが、目の前の彼らの表情はぴくりとも動かない。
「ええ、そうです。
文謙殿。さし当たっては、彼らに体術を仕込んでください」
体術を？
「それは構いませんが、私とて未だ日々修行の身です。満足に鍛え上

げられるかどうかは……」
「問題ありません。
何も全員を体術の達人にしろ、というわけではありませんから。勿論、体術の腕は上がれば上がるほど良いですが。無手でもある程度戦えるようにするだけで十分です。当然武器も使ってもらう予定ですしね。
主な目的は身軽な動き、俊敏な動きを身につけさせることにあります」
「わかりました」
それなら自分一人でも何とかなるかもしれない。数も五十人程度なら把握できる範囲内だ。
「彼らには特殊な軍務に就いてもらいます」
「特殊な軍務、ですか？」
荀攸がこちらに向き直る。
真っ直ぐ自分を見つめてくる瞳に、何故か突然自分の鼓動が大きくなった気がした。
「ええ。
軍務だけでではありません。諜報もやってもらいますし、民草の間に流言飛語を広めることもあるでしょう。山や野を越え敵陣に奇襲をかけることもあれば、場合によっては、暗殺も」
「それ、は」
汚れ仕事として忌み嫌われ、専門の集団に金で任せてきたことを、直属の軍にやらせようというのか。
「この手の仕事は、行う者の心根が暗くなります。闇に引きずられる、とでも言いましょうか。雰囲気や空気というものはうつるものです。やがてそれが軍全体に伝播し、兵全体が陰気になることは避けなければなりません」
確かに、汚れ仕事を為す者と共に働きたくないと考える者は多いかもしれない。
「そこで彼らなのです。
彼らの心の闇は、それらの仕事の闇を凌駕する。何年続けても、闇

に呑まれることはないでしょう。元々忌避されていますから、彼らの仕事に興味を持つ者もほぼいないでしょうね」
「……それは、貴方の発案ですか？」
　ようやっと搾り出せた言葉は、それだけだった。
「ええ。既にご主君の許可は得てあります。
　後は貴女の意思です、文謙殿」
「私の意思？」
　どういう意味だ？
「貴女が了承すれば、この軍は全て貴女が率いることになります。逆に断れば、貴女は今後一切彼らと関わることはありません。此処で見聞きしたこと全ては墓の中まで持っていってもらいます。
　了承してもいいし、了承しなくてもいい。
　断ってもいいし、断らなくてもいい。
　全ては、貴女の意思ひとつです」
「……」
　そういうことか。どうやら、これはかなりの機密らしい。
　受けても碌なことにならない。断るべきだ。そう、頭ではわかっているのに。
「お受け、します」
　気づくと、了承の返事をしていた。
　どうして受けてしまったのか、後から思い返してみてもわからなかった。
「それは重畳。
　では、今から貴女は正式に飛爪軍の隊長です」
「飛爪軍？」
　この軍の名前だろうか。
「そうです。
　貴女が放ってみせた気弾。あれは、『猛虎蹴撃』というそうですね」
「え、ええ」
　それと、軍の名前と、一体どういう繋がりがあるのだろうか。
「虎の蹴撃といえば鋭い爪でしょう。それが空を駆けるのを、皆が見

ていました。故に飛爪軍。如何でしょうか？」

飛爪軍。自分の軍。

「頼みましたよ、楽進将軍」

肩に置かれた手の重みが、これから背負うであろう責任の重みに思えた。

集う者たち

「れ、恋殿～！
ねねは、ねねは……寂しかったのです～！」
陳宮が恋の胸に顔をうずめて泣きじゃくっている。軍師として戦場に出ている時とはまるで別人だ。
そんな陳宮の頭を、恋は優しく撫でている。こうして見るとまるで親子のようだ。陳宮は既に成人しているはずなのだが、この姿が年相応に見えてしまう。
その様子を、一同は苦笑いしながら見つめていた。霞などは完全に呆れ顔だ。
「皆さん、お怪我がないようで何よりです」
「まあ、本気で攻撃しようって思ってるのは将ぐらいだったからね。一般兵は陛下に武器を向けるのも嫌がってた者が多かったみたいだし」
賈クが視線を恋と陳宮に向けたまま応える。隣で董承もうなずいていた。
「北郷さんに忠告されてたから、脱出の準備は整ってましたけど……心のどこかで、陛下が襲われるなんてありえない。そう思ってしまっていたのかもしれません。出発が少し遅れてしまって。恋さんがいなかったら、正直どうなっていたかわかりません」
「まあ、全員無事だったんやしええんちゃうか？
一刀もいつだったか言うとったやろ。終わりよければ全てよし、とかなんとか」
霞はいつも通り楽天的だ。のん気に口笛を吹いている。
「あんたねえ……」
賈クがじと目になるが、霞はどこ吹く風である。
一刀、うち怖いーと自分の後ろに隠れてしまった。
「え、詠ちゃん。
久しぶりに会ったばっかりなんだから、落ち着いて。ね？」
じと目からつり目に切り替わった賈クを、董承が必死に宥めてい

た。
「残念ながら、俺も文和殿の味方かな。
霞はもう一軍を率いる将軍なんだ。結果だけが全て、というわけにはいかない。曹操軍はそんなに甘いところじゃないぞ？」
「えーん、一刀までいじめるー」
「失礼な。いついじめたんだ」
目元に両手を当てて嘘泣きをしてみせるが、今度は騙されない。洛陽にいた頃からすると、自分だって成長したのだ。
「だってうち頑張ったやん？
この前の黄巾の時も、今回の戦も、めっちゃ頑張ったやん？
もっと褒めるとか、なんかご褒美あってもええと思わへん？」
上目遣いでじっと見つめてくる。
騙されるな。流されてはいけない。何故だか突然横から感じる二人の気配が険悪なものに変わりつつある。ここで流されてはどうなるかわかったものではない。
「ご褒美ならあるぞ。
霞個人にじゃなくて、霞の軍全体に、だけどな。先日ご主君に許可を頂いてきた」
「へ？ほんまに？」
一転してきょとんとした表情に変わる。先程の上目遣いより、素のこちらの表情のほうが可愛い。そう思った。
「ああ。
千人分、全員お揃いの具足と頭巾だ。色は紺碧」
へえ、という声が上がった。霞だけでなく、賈クと董承もだ。
「霞の牙門旗と同じ色だ。
これから霞の部隊は遊撃隊として動くことになる。与えられた戦場、裁量の中で自由に戦場を駆け回る遊撃隊。騎馬のみで風のように駆け回る神速の遊撃隊だ。
その象徴が、霞の牙門旗と全員が身に付ける紺碧の頭巾。戦場を駆け回る紺碧の風。壮観だと思わないか？」
「紺碧の風、かあ……」

しばしの間、皆が黙り込んだ。自分が語った霞の騎馬隊を想像しているのだろう。まだ頭巾は全員分作成できていないが、現実となっても間違いなく想像通り壮観なはずだ。
「かっこええな。絶対や。ますます気合入るわ」
霞が腕を組んでうんうんと何度もうなずく。どうやら気に入ってくれたようだ。
「わ、私も早く見てみたいです。霞さん、きっとこの前よりもっと格好いいと思いますよ！」
「まあ、悪くはないわね」
賈クと董承も口々に言う。
ところが、霞の『おねだり』はそこで止まらなかった。
「それもええんやけど……うちはやっぱり個人的なご褒美欲しいなあ。
……一刀から」
再び上目遣いで見つめてくる。
「俺から？」
一筋の冷たい汗が頬を伝った。ものすごく嫌な予感がする。
「……一刀」
霞が目を閉じる。そのまま自分の顔を見上げて止まった。
冷や汗がもう一筋。これは、あれか。そういうことなのか。
いつの間にそうなったのか、さっぱり心当たりが無い。先日の秋蘭といい、どうしてこうも厄介ごとが続くのだろうか。
戸惑っていると、霞の顔が本当に泣きそうに歪んだ。
まずい。これは、まずい。
「……霞」
柔らかな頬を、手のひらでそっと包む。
そのまま、ゆっくりと顔を近づけて――。
「そう言えば!!」
突然響いた大声に二人してぱっと飛びのく。
慌てて横を見やると、賈クが顔を真っ赤にしてどかどかとこちらに近づいてきていた。董承はというと、同じく茹で上がった顔でその場

に座り込んでる。
「二度も命を助けてもらったお礼をしてなかったわね！」
怖い。言っていることはとても嬉しいことのはずなのだが、滲み出る空気がとても怖い。今の賈クは、或いは華琳にも匹敵するかもしれない。
「あの、そんな、お礼など……」
「いいから！
私のことはこれからは詠って呼ぶこと！あと敬語も禁止！いいわね！」
「は、はい……」
霞はいつの間にか再び自分の後ろに隠れていた。しがみついているせいか、何か柔らかいものが背中に当たって落ち着かない。それを見て取ったのか、詠からの重圧がますます強くなる。
「あ、あの……私も、月、で……」
詠の後方で、董承がおずおずと手を上げる。それを聞いた詠ががばっと振り返り、またこちらに向き直った時には重圧がさらに増していた。
身体が震える。後ろの霞が震えているのも、きっと演技じゃないはずだ。
「みんな、仲良し」
相変わらず陳宮の頭を撫でながら恋がぽつりと呟く。
「恋殿〜」
今だけは、陳宮が少し羨ましかった。

一方その頃、城内、謁見の間。
二人の人間が向かい合っていた。
「久しいな、曹操よ。虎牢関以来になるか」
先に声をかけたのは上座の男――劉協だ。
「はい。謁を賜るのはこれで二度目になります」

膝をつかず、首を垂れるわけでもなく、正面から顔を合わせて応える。本来ならば不敬であるが、劉協はそのようなことは気にしなかった。
「そうじゃったの。
虎牢関で初めて顔を合わせたが、そなたのことはよく覚えておる。
一切の遠慮なく朕を値踏みする目。何もせずともその身の内から滲み出る覇気。荀攸の評した通り、朕が求めていた者はそなたじゃと、一目で確信した」
「それは興味深い。
荀攸は、私のことをどのように？」
自然と笑みになる。
部下に評される。あまり愉快なことではないはずだが、それが一刀であるならば興味の方が先に立った。
「この国の覇者になり得る者。その三人のうちの一人だと。
朕も同じ思いじゃ。そなたならば、常識を打ち破り、凝り固まった古い価値観を一掃し、新たな時代を切り開くことができるじゃろう。
軍を動かし領土を得ることができても、時代を切り開くことができる者は中々おらん。そなたは間違いなく覇者の器であろうよ」
「恐悦至極にございます」
覇者の器。確かにその自負はある。
興味を惹いたのは、三人のうち一人という言葉だ。
この曹孟徳の敵となり得る者が二人もいるのか。邪魔だという思いと、楽しみにする思いが同時に沸き起こった。
「しかし、乱世とはわからぬものじゃの。
漢帝国きっての名仕である袁家が揃って皇帝を名乗り叛旗を掲げ、覇者の器を持ち、漢という時代を終わらせようとするそなたが朕を手中に収めるとは」
劉協は実に楽しそうだ。
この状況を楽しむことのできる余裕がある。皇帝の器というものがあるならば、劉協は間違いなくその器だろう。
「陛下。私は別段自らが皇帝になるつもりはありません。

それに、私が陛下と共に袁紹に滅ぼされることもありえますが？」
一応の可能性を示してみるも、劉協は楽しそうな笑みのままだ。
「確かにの。
袁紹は領土も広く、そこに住まう民も多い。莫大な財を持ち、兵も、武具も、食料も豊富にある。荀攸は何故か袁紹を過小評価するが、感情を廃し外から見れば不利なのはそなたの方であろうよ」
無言のままうなずいて同意する。
政戦両略。戦術。武術の腕も悪くはない。ほぼ自分が満足する能力を備えている荀攸だが、唯一とも言える欠点がそれだ。理由はわからないが、ことさら麗羽を低く見る傾向がある。
「ところがの。
それでも朕は、そなたが袁紹に敗北する様がどうしても想像できぬのだ。
言葉にするなら……天意、かの。それを感じておるのやもしれぬ」
天意。天の、意思。
「天意という言葉は、あまり好みではありません」
「ほう？」
初めて劉協の表情が変わった。
「私が往く道は、私が決めます。そこに天意などというものが介在する余地はない。
私が天に背こうとも、天が私に背くことは許しません」
「そうか。そうかそうか。
そなた、やはり面白いの！」
劉協が腹を抱え大声で笑う。目の端からは涙まで流していた。
「では、あくまで自らの意思で、自らの力で袁紹を打ち破るつもりか」
「それは少し違います、陛下」
自らの意思ではある。だが、それだけではない。
「曹孟徳だけでなく、曹孟徳の臣下、曹孟徳の民。その全ての力を以て、です」
「なるほどの。
信頼しておるのじゃな、臣下を」

「はい。自慢の臣下です」
劉協の目に、僅かに楽ではない別の感情が混じる。決して臣下に恵まれたとは言い難い皇帝だ。
だが、その色はすぐに消え去った。
「では、その自慢の臣下と共に袁紹を打ち破った後はどうじゃ？
そうなれば、そなたは間違いなくこの大陸の覇者となろう。自らが作った玉座にのぼり皇帝を称しても歯向かえる者はそうはおるまい」
確かにそうだ。多くの人間は、なんの躊躇いもなくそうするだろう。
しかし、この曹孟徳は違う。
「皇帝とは、炉の中の火のようなものです」
「……」
劉協は声を発さない。こちらの話を聞く構えだ。
「灰をかぶっていればいつまでも消えず、取り出せば赤々とした高熱を放ち、触れることができぬものでありながら人に不可欠のもの」
「火、か。朕が火だとすれば、それを護る灰がそなたか？」
理解が速い。やはり、この皇帝は自分の予想を越えて聡明だ。
「然り。
曹操は蒼天を飛翔する鳥にあらず。蒼天のもと地を往く者です。
皇帝という巨大な存在の下で、雄大に政を行う者」
「なるほどの」
いつの間にか、劉協は目を閉じていた。
「では、そなたは何になろういうのだ？」
目を閉じたまま問う。
「この大地に、一つの種から育ってくる無数の人間。その主席であることを望みます」
「主席、か」
「然り。
より主席にふさわしい人間がいれば、付き従うもよし、また斬り殺されるもよし」
未だ、目は閉じられたままだ。

「それで人は付いてくるのか？
皆心の中では漢の衰退を悟っており、次の世の皇帝を求めておるやもしれぬぞ？」
「皇帝として君臨せずとも統治はできます。
それに……」
目は閉じられたまま、眉がぴくりと上がる。
「それに？」
「やらねばならぬことが多い身に、皇帝の身分は余分です」
劉協が嗤う。先程までとは違う、低い嗤いだ。
目を閉じて嗤うその様は、何千万、何億という人間とその身一つで向き合ってきた闇と凄みが感じられた。
「余分。余分か。
やはり、そなたは面白い」
包拳礼をとり、膝を付く。
「陛下。
私は貴方を奉り、天下を睥睨いたします」
劉協が目を開く。同時に立ち上がった。
「曹孟徳！劉協陛下を奉戴申し上げる！」
「許す!!!」
この日、曹孟徳は献帝劉協を奉戴する。その知らせに、多くの人々が許に集った。
後の史書に記された曹操の臣下には、この時期に出仕した人物も多いという。

「ほら、風！一刻も早く曹操殿の下へ！」
「ふ、風は稟ちゃんのように血と精力があり余っているわけではないのですよ～。
もう少しゆっくり歩いてほしいのです……」

危うさの正体

その女二人組は遠目からでも目立っていた。
入城を求める者の列は天子がこの許を仮の都と定めてから日に日に増えている。今日もその終わりが確認できないほど続いているが、その二人は順番がくるずっと前から門番の印象に強烈に残った。
一方は黒髪に眼鏡をかけた理知的な顔立ち。領主曹操ほどではないが、姿勢を正したくなるような威厳が感じられた。
もう一方は、小柄で明るい金髪を長く伸ばしていた。そのゆるやかに波打つ髪と同じく、どこかふわふわとした雰囲気を持っている。手には子どもが喜びそうな飴。頭の上には奇怪な人形。これほど特徴的な者も珍しい。
「何者か!?」
門番が声をかける。
前に進み出たのは黒髪の女性の方だった。
「郭嘉と申します！荀彧殿の招きで参りました！」

同時に綺麗に指を揃えて伸ばした右手で眼鏡をくいっと上げる。思わず先生と呼びたくなるような優雅な動作だった。
「同じく程立と申します～」
飴を口元に当てたまま連れも答える。
郭嘉。程立。
聞き覚えはある。数日前に筆頭軍師である荀彧殿から通達があった。曹操様に仕えるために訪ねて来るはずだから丁重に迎え入れろ、と。
失礼なまねをしたら切り落とすわよ、とも言われた。ナニを切り落とされるのかはわからない。きっとわからないままのほうが幸せのはずだ。
「お聞きしております。お通りください。
城内にいる者に声をかけて頂ければ、別の者が案内します」

「ありがとうございます」
郭嘉が一礼して通り過ぎる。程立も無言のまま一礼して後を追った。
噂は聞いたことがある。神算鬼謀の士であり、その思考の鋭さは刃の如し。荀彧殿が自ら招いたのだ。自分の想像など遥かに超える頭脳の持ち主なのだろう。
袁家との戦を前に人材を集めているということか。皆が思っているよりも、戦は近いのかもしれない。
同僚の声で仕事に引き戻されるまで、二人の後ろ姿をぼんやりと眺めていた。

「お招きいただきありがとうございます」
謝辞を述べると荀彧はそんなに畏まらなくていいわ、と肩をすくめた。
「礼を言いたいのはこっちのほうよ。
賈クと董承が加わったとはいえ、陛下が許を仮の都を定められたから文官の仕事が急激に増えてるの。二人とも、ばりばり働いてもらうから覚悟しなさいよね？」
「心得ました」
「了解なのですよ～」
賈クに董承。洛陽で皇帝陛下にお仕えしていたはずだ。
正式に曹陣営に加わったということだろう。賈クの軍師としての能力は勿論、董承は陛下との繋ぎ役としても期待できる。人材は順調に集まっているようだ。
一息ついたところで報告と議論が始まった。
「劉表が兵をこちらに進める用意をしているそうです。南陽、章陵の諸県が彼の味方についたとか」
「荊州に居座るあの唯我独尊の男が？裏で糸を引いてる奴がいるのかもしれないわね」
賈クが荀攸に反応し眼鏡の中央を指で持ち上げながら言う。

「優殿。調練の進み具合はどうですか？」
「元劉岱配下の兵はほぼ満足できるところまで仕上がっています。実戦を経験すれば、その錬度はさらに上がるかと」
「とりあえずは心配なさそうね。
　袁家の動きはどうなの？」
「袁術が天子に軍を差し向けながらも敗走したという噂は既に十分に広まっているのです。孫策軍におされていることもあって人心は離れ始めているようですな。まあ、元からそんなものがあったのかどうかも疑問なのですが」
　各人が次々に発言していく。さすがに割合でいえば文官が多いが、曹休のような武官も分け隔てなく意見を交わしていた。
　――この自由闊達な雰囲気は素晴らしい。私はこういう場に招かれたのか。
　それを誇らしく感じると同時に、僅かに漂う危うさにも気がついた。一体この危うさの原因は何だろうか。
「袁紹の方はどうかしら？」
　荀彧がもう一方の袁家の動向を問う。
「未だ公孫賛を攻めています。手こずっているようですね」
　そう述べる荀攸の顔を見て、危うさの正体に思い至った。
　ちらりと隣の風を見やる。目が合った。どうやらこの小さい親友も同じ考えらしい。
「劉表の動きにその袁紹をはめればうまく繋がりませんか？」
　意を決して声をあげる。こんなに緊張したのは旅に出る時以来だ。
「ふむ……」
「なるほど」
　考え込んだのは荀攸で、その隣の曹休は素直に感心していた。
「中々の目の付け所ですね、郭嘉殿。
　しかし、あの袁紹に劉表を操るほどの器量があるでしょうか？」
　荀攸が問うてくる。
「そうね。
　自分の手元の人材すら持て余している気がするし」

「財にまかせて膨大な兵力を抱え込んでも、使いこなせなきゃ意味ないわよ」
賈クと荀彧が口々に同意する。
間違いない。先程から感じている危うさの正体はこれだ。
「皆さんは、袁紹さんの領地を訪れたことはありますか～？」
風が間延びした声をあげた。
その場の軍師たちが顔を見合わせる。
「ありませんね」
「ないわ」
「ないわね」
「あるわけがないのです！」
順に荀攸、荀彧、賈ク、陳宮である。
「袁紹さんの領地はこの許都に負けず劣らず栄えているのですよ。官吏だけでなく民も皆豊かに暮らしています。
まあ、名門袁家の領地がみずぼらしいなどありえない、そこに暮らす民もまた華麗であるべきだ、という理由なのが袁紹さんらしいのですが」
聞いた話によると、曹操殿と袁紹は幼馴染だという。
皆が知らず知らず曹操殿の才覚によりそうからか、幼い頃から比較対象であっただろう袁紹もおのずと過小評価されている。
「荀攸さんのおっしゃる通りの愚物ならば、それほど領地が発展するわけはありませんし、人が集まることもないのですよ。
戦う前から相手を侮って低く見るのは如何なものかと風は思うのです」
「……」
荀攸が腕を組んで唸っている。
風もまた、無言で見つめ返した。
「……ぐー」
「「寝るな!!」」
「おおっ」
突然聞こえたいびきに自分と賈クの声が重なった。

以前三人で旅をしていた時はよくやっていたが、まさか出仕して初の会議でしでかすとは思わなかった。
扉の外から声が聞こえてきたのはその時だ。
「程立の言う通りよ、北郷。
何故だか知らないけど、貴方は麗羽をどうしても低く見てしまう傾向があるわ」
入ってきたのは、見事な金髪を優雅に巻いた、小柄な女性だった。
彼女はそのまま窓へと歩み寄る。
「袁本初とこの曹孟徳。
どちらの天賦の才が大きい？」
曹孟徳。
これが、この人が、曹操。
覇道を突き進む、乱世の奸雄。
「それは勿論華琳様に決まってます！」
「その通りです！華琳様は大陸一の英雄ですから！」
荀彧がすぐさま声をあげると、今までずっと腕を組んで黙していた夏侯惇も大声で同意する。
文武筆頭の両名からの賛辞を受けても、曹操の顔は涼しいままだった。
「麗羽には不要な才能がないわ。
そういう人間は時間とともに強くなり疲れを知らない」
主の言葉に、先程まで喧騒に満ちていた部屋が静まり返っていく。
「故にこの曹操をしのぐ場合があるわ。
相手を侮ることは自分の力への驕り、その始まりでもあるわ。以後気をつけなさい」
軍師たちは、皆うつむいてしまった。
「申し訳在りません。
どうやら袁紹とはこういう者だ、という先入観に囚われていたようです」
荀攸の謝罪に、曹操は穏やかに笑った。
「わかったのならいいわ。

私が言わなくても、程立の言葉で十分反省していたようだしね」
曹操がこちらに顔を向ける。慌てて風とともに一礼した。
「郭嘉と申します」
「程立です～」
また、笑う。惹き込まれる笑みだ。
「桂花から名前は聞いてるわ。
二人とも、早速役に立ってくれたみたいね」
「いえいえ～。
風が言わなくても誰かが指摘したと思いますから」
風は相変わらずののんびりとした口調だ。緊張など全く感じさせないその声に、強張っていた身体がほぐれていく気がした。
「貴女は泰山で日輪をその手で支える夢を見たそうね。それは正夢よ。
以後程昱と名乗り私を支えなさい」
風がまた一礼する。
その時、新たな声が外から飛び込んできた。
「珍しいものが見れたな、曹操よ。
荀攸のあのような姿、王允にも見せてやりたいものだ」
入ってきたのは曹操よりいくらか背が高い青年――いや、少年か。後ろには見たことのない装飾の服の娘。おそらくは侍女がいた。
朗らかに笑いながら曹操に近づく。
「これは陛下。
謁見はどうなさいました？」
曹操が苦笑いしながら問いかけた。
慌てて膝を付くと、皇帝、劉協は実に面倒そうにうなずいた。
「逆賊袁家討伐の詔勅を諸侯に発せよとせがまれるのにうんざりしての。
司空に会うてくると言うて逃げ出してきた」
あっけらかんと言ってのける。
この皇帝陛下は、想像していたよりもなんというか、人間くさい。
「いけませんね。

詔勅とは天上の意志を伝えるもの。
この程度の事態で発せられてはなりません」
曹操が語る。
その言葉は、雄大な熱をもってこの場の人間を包み込む。
「この曹操が奉戴いたす天子の御心とは、遥か高みにそびえ地上を覆い尽くす大きさを有するものです。
それが見えねば見えぬほど、万民はその存在を強く感じるものでございます」
「袁家のことなどまるで知らぬかのように振舞え、ということかの」
かつて、天子に器量の大きさを求める司空がいただろうか。
曹操は、まるで天子の師のようだった。
「まあ、暫くは心配することはないかの。
袁紹が公孫賛を攻略するには時間がかかると見ておるのだろう?」
劉協の視線が荀攸へと向いた。
「はい。
公孫賛の白馬陣は騎射において大陸で並ぶものはそうありません。公孫賛自身もそこそこに有能です。そこそこ止まり、とも言えますが。
ただ、圧倒的に将が不足しております。いずれは袁紹が勝つことになりましょう」
荀攸の言葉に皆がうなずく。自分も同意見だ。
「同門だった劉備が援軍に駆けつけるでしょうけど、それまで持ちこたえられるかしらね。
生き延びていても、篭城戦にに持ち込まれればかなり厳しいわ」
「やはり、部隊を任せられる将の不足ですな……」
ふと脳裏に、仕えるべき主を探すと別れた友人の姿が浮かんだ。

その状況を一言でいうと、『メンマ』だった。
酒のつまみもメンマ。ラーメンに乗せるものもメンマ。締めはメ

ンマ丼。
最初から最後までメンマ尽くしの食事を堪能して満足気な表情をしているのは、白い服に身を包んだ女性だった。風に揺れる鮮やかな青い髪が美しい。
「さて、そろそろ往くか。
馳走になった。店主、勘定を頼む」
少しばかり多い銭を机において立ち上がる。
「へえ。早く逃げた方がよろしいでしょう。
……袁紹が攻めてきて、ここいらももうすぐ戦場になるって話です」
店主の忠告に、脇に立てかけていた槍を軽くふるいながら女性はまるで散歩にでも行くかのように答えた。
「逃げる必要はない。その戦場へ往くのだからな」
「へ？」
呆気にとられる店主をそのままに、女性は足取り軽く去って行った。

幕間　姉妹語り

自室までの道を秋蘭と並んで歩く。
郭嘉と程イクの歓迎会は大いに盛り上がった。
華琳が戯れに郭嘉に手を出そうとし、それを受けて郭嘉が鼻血を大量に出して倒れ、そんな郭嘉に桂花が嫉妬し、それを北郷が男三人で酒を酌み交わしながら穏やかに見つめていた。
季衣と流流は、程イクの――北郷が言うには『腹話術』だったか（程イクはあくまで人形の宝譿が喋っているのだと言い張っていた）に夢中になり、董承と賈クはそんなことはしなくてかまわないと言ったのに侍女服で忙しく料理を運んでいた。
二人が運んできた料理の大半は恋の腹の中に消え、それに付き合っていた陳宮が食べすぎで倒れる。霞は最初から最後まで酒を飲み続けながら凪にちょっかいを出し続けていた。凪は幼馴染二人に助けを求めるも面白がって霞を煽る。
悪くない。たまにはこんな日も、悪くない。
ただ、一つ気になるのは――。
横目でちらりと隣を歩く妹を見やる。酒で頬が僅かに赤く染まっていた。今日は普段より多く飲んでいたせいか、少し気だるそうに歩を進めている。それが秋蘭の持つ雰囲気と相まって、独特の妖艶な色気を立ち上らせていた。
「どうした？姉者。
そんなに見つめられると照れてしまうではないか」
秋蘭もまた目だけをこちらに向けて問いかけてきた。気づかれていたらしい。
昔からそうだった。人の心の動きに聡いというよりは、気配りができる妹なのだ。あまり頭が良くない自分をよく助けてくれた。秋蘭はそんな自分を可愛いなどと言ってくれるが、面倒ばかりかけている自覚はあるのだ。心苦しいという思いは持っている。
「ああ。いや、その、な」
桂花が軍師として加入するまでは、華琳の補佐は秋蘭の仕事だっ

た。主の地位が上がるにつれて、自分たちの面倒な机仕事も増えた。自分にはうまくできない。それを助けてくれたのも、秋蘭だった。
華琳の補佐、姉妹の机仕事。それらを全て一人でやっていた。それでも疲れた様子を見せなかった。実際には、疲れていないはずがない。常にどこか余裕を持ち、感情をあまり表に出さない妹。それが秋蘭だ。
だが――。
「秋蘭は」
「うん？」
言うべきか、言わざるべきか。
一瞬迷って、結局口にすることにした。
「北郷が、好きなのか？」
秋蘭が突然転びそうになる。慌てて支えてやった。
しっかり立たせてやると、目が落ち着き無く動いている。これほど動揺する秋蘭を見るのは久しぶりだった。
「大丈夫か？」
無言のままこくんとうなずく。左右に激しく揺れていた瞳がようやく止まった。
そうか、とだけ言って歩き出す。秋蘭も、無言のままついてきた。
暫く居心地の悪い静寂が続く。
やがて秋蘭が口を開いた。
「……いつから気づいていたのだ？姉者」
それは、まるで隠していた悪戯がばれてしまった幼子のようで。
あまりに秋蘭らしくないその声色に、つい笑ってしまった。
「さて、な。
酒を飲んでいる北郷を見つめるお前を見て、ふと思ったんだ。
別にこうだったから、ああだったから、などという理由はない。
本当に、ふと思ったんだ。
ああ、秋蘭は北郷が好きなんだ、とな」
「……」
自分の答えに、秋蘭は何も言わなかった。いや、言えなかったのか。

顔の赤味が先程より増していた。酒のせいだけではない。
「私こそ聞きたい。
いつからだ？」
「姉者？」
怪訝そうにこちらを向く。
「いつから北郷に懸想しているのだ？」
少し意地悪な聞き方になってしまったかもしれない。わかってはいるがやめられなかった。このできた妹に優位に立てることなど早々ないのだ。
ところが、返ってきた言葉は思いの外真面目なものだった。
「……以前、夜間の行軍訓練明けに、北郷の部屋の前を通りかかったことがある」
口をつぐんだ。
こぼれ出る言葉には軽はずみに茶化してはいけない、そんな重い何かが感じられた。
「灯りがついていたので、無理はするなと声をかけるだけのつもりだったのだがな。
姉者。北郷は、その時何をしていたと思う？」
ふむ、と考えてみる。
夜間行軍の訓練明けということは、相当夜も更けている頃だろう。そんな夜中にしなければならない仕事……。
「間諜からの報告を受けていた、か？」
秋蘭の顔から、色が徐々に落ちていった。
「間違いではない。
報告は既に終わっていた。北郷はその報告の内容を元に、ある数を導き出そうとしていたのさ」
数の話は私にはわからないぞ。
そう言おうとしたところで。
「低く見積もっても三千万。
北郷によると、それだけの民がこれからの戦乱によって命を散らすらしい」

三千万。
未曾有の大軍と言われた反董卓連合軍の総兵力も、その数には遠く及ばない。
「北郷は言っていたよ。
そのうちのいくらかは、自分が殺すことになるかもしれない。何十万、何百万という民が、救うべき民が自分のせいで死んでいくことになるかもしれない、と」
しかし、それは。
「……戦なのだ。仕方ないだろう。
第一、北郷は軍師だ。あいつが直接手を下すわけではあるまい」
「私も同じことを言った。
だが、北郷は――」

『私は軍師です。
私の判断で。進言で、策で戦が動くときもあるでしょう。
軍人は武器を以って人を殺しますが、軍師は言葉を以って人を殺す。
私の口から漏れる言葉の一つ一つが、人を殺すかもしれない。
その覚悟と責任が持てない者は軍師を名乗るべきではありません。
思い上がりかもしれませんが、私はそう考えています』

言葉が出なかった。
自分は曹孟徳の剣だ。そう考えて、武人として、軍人として生きてきた。
だからこそ、智謀を鼻にかける桂花とは反りが合わなかったし、一般兵に混じって調練に参加し、現場の事情をよく汲み取る北郷に好感を持った。
だが、やはりどこかで軍師というものを軽く見ていたのかもしれない。
秋蘭の口から語られた北郷の言葉は、その認識を打ち砕くのに十分

だった。
「北郷は、その命の重みを身一つで背負おうとしているように見えた」
秋蘭の語りは、止まらない。
「どうしてそこまでするのか、と問うと、こう返された。
桂花のためだ、とな」
北郷が桂花を想っていることは気づいていた。鈍感な自分でもすぐに気づくほどわかりやすい。桂花も、口では悪態をつきながら北郷を想っているように見えた。
「それを聞いて、どうにもたまらなくなった。
桂花のために。それだけのために、北郷が自身を痛めつけているように思えて。
そんな北郷を、愛おしいと思った。
自分が、これほど男を愛おしいと思えるのだと、驚いた」
「……」
何も言えないままの自分を、秋蘭が遠い目をしたまま見つめていた。
その目に映っているのは、自分ではなく北郷なのだろう。
生まれたときからずっと一緒だった妹の、何でも知っていると思っていた妹の、自分が全く知らない姿がそこにあった。
「……随分と恥ずかしい話をしてしまったな。
笑うか？姉者」
「……笑うものか」
こんなにも純粋な想いを、笑えるはずがない。
「お前は昔から世話焼きだったからな。
北郷のような男に構いたくなる気持ちもわかる」
「そうだな。
少し、姉者に似ているのかもしれん」
「それは、喜ぶべきなのか悲しむべきなのかどっちなんだ？」
どちらからともなく笑い合う。
主のいない、姉妹二人だけの戯れ。たまには、こういうのもいいものだ。

「しかし、北郷の桂花への想いはそうとうだぞ。勝ち目はあるのか？」
「さて、な。
私は別に側室でもいいのだが……」
珍しく歯切れが悪い。
「拾われ子、養子。それは皆が知っている。
とはいえ同姓、しかも親族だろう。
それを好機と見る自分と、それを理由にするのは卑怯だと思う自分の両方がいる」
なるほど。
なんというか、実に恋する乙女の悩みだった。
ここは、姉として助言してやらねばなるまい。
「秋蘭。この前、街の書店の店主が進めていた書物の謳い文句なのだがな」
「姉者が書店に？一体どうしたのだ？」
「いいから聞け。
それによると、『恋と戦争についてはあらゆる手段が許される』、だそうだ。
悩んでいるよりも、もっと行動したほうが良いかもしれないぞ？」
いつも冷静な妹が、目を丸くして驚きを示す。
そんな姿が、たまらなく愛おしかった。

大馬鹿か、大物か

「愛紗ちゃんみたいな姿勢でお茶を飲むと美味しいねー」
キ州のとある天幕にて、劉備――桃香は実に幸せそうに笑う。
「だけど愛紗ちゃんは一年中この姿勢だよね。疲れない？」
「いえ、私は問題ありません。
……疲れているのは兵の方でしょう」
目の前に置いた木板を眺める。そこには、長姉である桃香が書いた地図があった。普段ののんびりした雰囲気からは想像しにくいが、盧植に師事していただけあってそれなりの学がある。
「袁紹は強くなりました。我らがついている白蓮殿は防戦いっぽうです」
「袁紹はそんなにすごいのか？鈴々にはそんな風には見えなかったのだ！」
干し肉を噛み千切りながら大声を上げたのは末妹の張飛――鈴々だ。
「戦地戦場においての強さは人物の出来だけではかれるものではないぞ鈴々」
そう諭すと、姉妹二人が疑問の声を出す。
「どういうことなのだ？愛紗」
「どういうこと？愛紗ちゃん」
あの。鈴々はともかく、貴女がそれでは……。
「袁紹には負けを負けとも思わせない巧みな収拾力があります。見ようによっては詭弁、詐術とも言えますが。
早くから有能な軍師、武将を集めた成果でしょう」
それを聞いた桃香がうーんと唸る。
「じゃあ袁紹さんに今勝てそうなのは誰かな？
洛陽は袁術さんの軍がいて混乱してるらしいし、その袁術さんは孫策さんに押されてる。陶謙さんはお歳をめされてるからなのか軍を動かすつもりはなさそうだし。劉表さんは……袁紹さんの味方かなあ」

思いの外冷静に時勢を見極めている。反董卓連合での停戦以来、この主はできるだけ戦を起こさずこの乱世を収めるという自らの理想に大きな希望を見出した。それがこの余裕に繋がっている。
「愛紗ちゃん、曹操さんは今どうしてる？」
曹操。曹孟徳。
あの荀攸が選んだ主。
「先頃天子を奉戴したことは桃香様のお耳にも届いているでしょう。
曹操殿はわからない人です。今日の小が明日にはいきなり大になっていても不思議のない人間、とでも言いましょうか。
そのあたりは、桃香様に似ていますね」
最後の言葉は、掛け値なしの本心だった。
曹操殿は確かに英傑だが、自分の主も決して引けを取らない。そう思っているからこそ、姉と慕っているのだ。隣の鈴々も大きくうなずいていた。
「ありがとう愛紗ちゃん。
さて、それじゃあ……今日も元気に助っ人に行きますか！」
立ち上がって見せた長姉の満面の笑み。その笑みが、全身に力を与えてくれる気がした。

キ州、清河郡界橋の南二十里。
公孫賛軍四万、袁紹軍六万が対峙していた。
袁紹軍の士気は高い。
戦力は相手の二割り増し、さらには袁家の豊富な資金がその要因である。
「まるで兵を動かそうとしないな、相手は」
陣の中央辺りにいる兵の一人が隣の同僚に話しかける。
「歯ぎしりするくらいしか打つ手が無いんだろうよ。
いくら白馬長史、白馬陣といっても四万と六万じゃあなあ。こっち

には武器も食料もたっぷりあるし」
　同僚は欠伸を噛み殺しながら答える。
「士気もこっちの方が上だ。いつもの三倍の報奨金らしいしな」
　二人がそんな話をしている頃、はるか後方で一人の女性がたった一騎で袁紹軍のど真ん中に踏み入った。
「道を開けろ」
　最後尾にいた兵は、その女性の静かな迫力にたじろぎ言われるがままに道を開けた。
「おう。おまけにあの白馬義従には一騎十倍の値だってな」
　女性はそのままゆっくりと、しかし誰にも遮られることなく前に進む。
「討ちたいもんだなあ」
　そこで、後方から進んできた女性が二人の居る場所まで近づいてきた。
　最初に話しかけた男が気配に気づき振り返る。
「あん？なんだお前は？」
　美人だった。
　白を基調としたした上下。脚は際どいところまで露出している。風に流れる青い髪が美しい。
「キ州の住人だ。道を開けろ」
　強い口調に同僚が幾分機嫌を損ねて声を荒げた。
「なんだとう？此処をどこだと思ってやがる？」
「戦場だと心得ている。
　ほら邪魔だ。さっさと道を開けろ」
　人相の悪い男にすごまれても女性は涼しい顔のままだった。それどころか、はっきり邪魔だと言い切っている。
　それ以後は、何も言わなくてもただ馬を前へと進めるだけで兵が勝手に二つに割れていく。中央から前方へ。袁紹のいる本陣の真横もそのまま通り過ぎていった。
　そのまま袁紹の軍を通り抜け、無人の野を進む。誰もがその異様な光景に驚きながらも、誰一人としてそれを止める者がいない。

やがて彼女は公孫賛の陣に着き、今度は正面から踏み込んでいった。袁紹軍と公孫賛軍の違いはあれど、再び兵が二つに割れる同じ光景が繰り返される。
そのまま暫く進み続け、彼女が止まったのは公孫賛の目の前だった。

目の前の女が馬上で一礼する。自分ではどうやっても敵わないくらいの美人だ。ただの礼にも、どこか色気が漂っている気がする。
「キ州の住人趙雲。字は子龍と申す」
いきなり話しかけられた公孫賛は戸惑った。
「あ、ああ。公孫賛。字は伯珪だ」
「キ州の住人はほぼ全てが袁紹につきました。
だが私は、公孫伯珪殿。貴女に従おうと思う」
「へ？そ、そりゃまあ嬉しいけど。
なんでまた一人私につくんだ？」
趙雲がふっと笑う。
同性だが、思わず見とれてしまった。
「なに、貴女のほうがましに思えたから、ではいけませんかな」
ましって。それはどうなんだおい。
そんなことを思っていると、懐かしい声が後ろから聞こえてきた。
この能天気な声は――。
「すごいね～愛紗ちゃん。
両方の陣を真っ直ぐ突っ切って来たよ」
「ええ。よっぽど自分の腕に自信があるのでしょう」
振り返ると、予想通り見知った顔があった。
「桃香！来てくれたんだな！」
「やっほー！
久しぶり、白蓮ちゃん！」
傍らには関羽と張飛も居る。なんとも心強い援軍だ。
「ごめんね。袁紹さんに勝つ戦術を考えてたら遅くなっちゃって」
「おお、是非聞かせてくれ！」

「それがまるでなくて。
今は戦わないほうがいいんじゃないかな」
思わず馬上でずっこけそうになってしまった。後ろで趙雲も笑っている。
「あ、趙雲さんもそう思ってるんだ。
そうすると不思議な人だねえ。弱いほうにつこうとしてる」
弱いって……。
昔からこうだった。天然でずけずけとものを言うが、何故だか憎めない娘なのだ。
「よかったらうちに来ない？
こっちが次姉の関羽で、こっちが末妹の張飛。私のところは居心地いいよ？」
おいこら。せっかく私のところに来た奴を目の前で勧誘するな。
「魅力的なお誘いだが、私は既に公孫賛殿に従事を申し出たのでな。
今回はお断りさせて頂こう」
ほっとする。ここで趙雲に出て行かれたら士気ががた落ちするところだった。
「う～ん。ますますいいねえ～。義の人だねえ～」
桃香が腕を組んで唸っている。大きな胸が押しつぶされて持ち上がっていた。
べ、別に羨ましいわけじゃないが。
「どうする？白蓮ちゃん。
先鋒の麴義さんは白馬義従の戦いぶりを知り尽くしてるよ？
しかも文醜さん、顔良さんの二枚看板は温存する余裕だし……」
確かにそうだ。兵の数も将の数も、圧倒的な差がある。このままではじり貧になるのは間違いない。
そんな話をしていると、その麴義が部隊を率いて突っ込んできた。
「今だ！敵を殲滅せい！」
小難しいことを考えるのは後だ。とりあえず迎撃する。
指示を出そうとしたところで、それより先に趙雲が飛び出した。
「ここは私が！手土産を取ってきましょう！」

麴義は、単騎で飛び出した趙雲を見て取りにやりと笑って、自らも単騎で先頭に出る。
「おお！公孫賛の軍にも少しは活きがいいのがいたか！」
両者の距離が縮まっていく。もうすぐ一騎打ちが始まる。
そんな私の予想は、すぐに裏切られることになった。

「我が名はき――」
麴義が名乗り終わる前に。趙雲の槍が、その喉を貫いた。
そのまま、ゆっくりと。馬上から、麴義が崩れ落ちた。
趙雲が軽く槍を振って血を払いのける。
「我が名は趙雲！字は子龍！
文醜！顔良！まとめて相手をしてやるから出て来い！」
これならなんとかなるかもしれない。
ほんの僅かだが、希望が見えたような気がした。
麗羽の軍の兵が動揺している。先方を任された将が一撃であっさり切り捨てられたのだ。士気は当然落ちる。
趙雲がゆっくりと麗羽の軍の眼前を横切っていく。文醜と顔良を探しているのか。
「綺麗な人だねえ～」
並んで見ていた桃香がのほほんと言った。天然でやるこういう言動が、不思議と周りの人間を落ち着かせる。
「槍を振るってる時も、まるで舞ってるみたいだったねえ。
でも、あれは相当の無茶だよねえ……」
確かにそうだ。今は趙雲の武に気おされているが、万の大軍が一斉に攻めてきたらまずい。人は無限に動き続けられるわけではないのだ。
「というわけで私ちょっと行ってくるね！」
突然駆け出す桃香。
「へ？お、おいちょっと待てって桃香！」
慌てて止めるがもう遅い。関羽と張飛は既に一緒に駆け出していた。

三人はすぐに敵前を横切る趙雲に追いつく。
そして大声を張り上げた。
「袁紹さん！虎牢関で荀攸さんとお話したこと覚えてますか？私は覚えてます！」
それは麗羽の面子が丸潰れになった話だろ。挑発してるのか？
「できるだけ戦を少なくして、民の皆を泣かさずに天下をおさめる！それが真の覇業でしょう!?
反董卓連合の盟主だった人が！中原最強の兵力を以って天下をうかがおうっていう人が！それでいて領地を見事に発展させてるお人が！こんなところで無駄に兵を戦わせちゃいけないでしょう！」
いつの間にか、兵が皆桃香の言葉に聞き入っていた。
思えば、昔からいつもそうだった。良い意味でも悪い意味でも空気を読まない。そしていつの間にか皆桃香の持つ独特の雰囲気に惹き込まれる。
「漢帝国再興の大儀に生きる劉玄徳！天下万民に代わって袁紹さんに進言します！
まずは天下を治める皇帝を名乗りながらもただ重税を取り民を苦しめるだけの袁術さんから江東の民を解放するべきです！そうすれば白珪ちゃんは勿論孫策さんだって袁紹さんに付き従わざるを得ないようになるはずです！
それこそが王者の覇業ってものでしょう！」
やりきった。そんな顔で得意げに笑っている桃香を見て、なんだか身体の力が抜けた。
軍中で麗羽がどんな反応をしていたのかは知らない。けれど、結果として麗羽は軍を引いた。
わからない。長い付き合いだが、桃香という人間はさっぱりわからない。
趙雲もそうだ。あんな無茶をやらかしておいて、桃香と楽しげに話しながらご機嫌にこちらへと帰ってくる。
桃香。趙雲。
理解できない二人。

麗羽を超える大馬鹿か、或いは麗羽を超える大物なのか。
ひょっとしたら、こういう人間が世の中を動かすのかもしれない。
戦ってないのに虎牢関のとき以上に疲れた身体で、なんとなくそう思った。

曹操と劉備

「で、麗羽は何故か素直に軍を引いたわけだけど……これで終わりじゃないよなあ」

白蓮殿が腕を組んで溜息をつく。

「そうだろうねえ。

あれだけ盛大に自分は皇帝だーって言っちゃったからねえ。今になってやっぱりやめました、なんてわけにはいかないよ」

長姉も同じく腕を組んで言う。

「まあ、細かい理由はわからないけど今回は助かったんだからいいじゃない。戦ったら絶対負けてたんだろうし」

「桃香……そんなはっきり言うなよ」

悲惨な予想も、この長姉の口から語られるとまるでたいした問題ではないように思える。何もかもを呑み込んで身の内に収める器の大きさ。それが劉玄徳という人の魅力だ。

「仕方ないよ白蓮ちゃん。

兵に馬。武器に甲冑。軍師に参謀。食べ物に、それを作る農民と農地。ぜーんぶ袁紹さんの方がいっぱい持ってるんだもん。勝てないのも当然だよ。

私たちが来て将の不足は多少ましになったけどそれだけじゃあねえ」

白蓮殿か再び溜息をついた。先程よりも大きい。

「まさしく全部だな。しかもどれもそう簡単には増えないときたもんだ。

どうすりゃいいんだまったく」

どうすることもできない。それ以外に答えはないように思える。

軍議が始まってから一言も発していなかった末妹に水が向けられたのはそんなことを考えている時だった。

「ここで問題です。

こんな風にものが足りないときはどうすればよいでしょうか？

はい鈴々ちゃん答えて！」

突然指名された妹はきょとんとした顔をしていた。自分が頭が回るほうではないことを自覚している鈴々は、普段の軍議では大人しく座って皆の話を聞いているだけなのだ。
「え、えと。えーっと……買う？」
鈴々が自信なさげに答える。
長姉は軽くうなずいた。
「そうだね。でも今私たちが欲しいものの中には売ってないものもあります。売ってるものも袁紹さんみたいにお金がいっぱいあるわけじゃないので買えません。
買いたいものがあるけど、お金がない。じゃあどうするかな？」
「え？えっと、えっと……借りる？」
今度の答えはやや逡巡が短い。長姉も大きくうなずいた。
「その通り！
じゃあ、さっき言ったものが全部揃ってる所は？
はい、愛紗ちゃん！」
「曹操殿の所以外にはありませんね」
「大正解！
今なら都と天子様までついてくるよ！これはもう曹操さんに助けてもらうしかないでしょう！」
どうだとばかりに大きな胸を張る。
本人はいい考えだと思っているのだろうが、言っていることは実に情けない。鈴々は素直に感心しているが、白蓮殿は苦笑いだ。
それを眺めていると、隣から声がした。
「面白いな、劉備殿は」
そう言って酒を一口。軍議が始まった時から、ずっとメンマを摘みに酒を飲むばかりで一言も発さなかった趙雲が、初めて口を開いた。
「面白いか？」
「ああ、実に面白い」
杯を置いて大きくうなずく。
「持論だがな。
慕われる君主、大成する君主は大きく分けて二種類いる。

一つは、常に先頭を往き皆を惹きつけ先導する者。
一つは、後ろでどっしりと構え皆に安心感を与える者。
違いはあれど、どちらも指導者として素晴らしい資質だ」
「うむ」
なるほど、と思った。説明もわかりやすい。
「孫策殿が前者の良い例だ。
曹操殿は前者と後者、両方の資質を等しく持ち合わせている。まさしく傑物だな。
だが――劉備殿はそのどちらでもない」
「それは、長姉に指導者としての資質がない、ということか？」
思わず声に怒りの色が出てしまった。
それを感じ取ったのか、趙雲は肩をすくめる。
「それがわからん」
「わからん？」
どういうことだ？
「武も智もそれほどでもない。先頭にたち、皆を強烈に惹きつける光を持っているようには見えんな。かといって、劉備殿さえ居れば問題ない、と思わせるような安心感があるのかと問われればそれも怪しい。そのくせ、掲げる理想と言うことだけはやたらと大きい」
そんなことはないと否定したい。したいが、何も言えない。唸って黙り込むことしかできなかった。
「だが、何故かわからないが人が集まる。何故だかわからないが助けてやりたくなる。それが少しずつ大きくなっていく。いつの間にか相手を自分の味方に染め上げている、とでも言おうか。これほど器が量れない御仁も珍しいぞ」
趙雲の視線を追って長姉を見つめる。どうやら、彼女が曹操への使者になるということで落ち着いたようだった。
「――それで私の所に来たわけ？

公孫賛の言う通りだわ。貴女、よっぽどの大馬鹿かよっぽどの大物かのどちらかね」
公孫賛からの書簡を丸めながら目の前に座る劉備に言う。
「いやあ、そんなに褒められると照れちゃいますね」
褒めていない。少なくとも私は褒めていないし、きっと公孫賛もそうだ。
堪え切れず溜息が出る。これが書簡にあったいつの間にか劉備の色に染められる、ということなのかもしれない。
「……まあいいわ。
正式な官位は後日与えることにするわ。貴女はともかく関羽と張飛の二人は私にとっても役に立つし」
「自慢の妹たちですから」
えっへんと無駄に大きい胸を張る。
本当に、何故こんな娘にあれだけの猛将が付き従うのかわからない。
「しかし凄い竹簡の量ですねー。これ全部兵法書ですか？」
辺りをぐるりと見回しながら劉備が問う。
その目は、新しい玩具を与えられた子どものように光っていた。
「書庫に大量の竹簡があるのは当たり前だけど、此処にあるのは私が注釈をつけて選集した分だけよ。原本はもっと多いわ」
「注釈に選集ですか……。
えっと、こっちは？兵器に宮殿、その中の意匠。何かわからない器具の設計図に、これは詩文。
うーん。やっぱり凄いですねえ曹操さんは。何でもできて何でもやっちゃうんだ」
暫く劉備の好きにさせてやる。半分も理解できていないだろうが、首を捻りながらも次々と書簡を漁っていった。
やがて真桜が書いた投石機の設計図に興味を示した。熱心に読みふけっている。
「そうね。最近はやりたいことが多すぎて困っているわ。
……それで、貴女は何がやりたいのかしら？」

劉備の動きが止まる。
返事は、書簡を眺めたままだった。
「それは勿論、できるだけ戦をしないで乱世を終わらせること。戦なんかしないで、皆がずっと仲良く暮らせる世の中を創ることです」
そう。反董卓連合の時、関羽を引き抜きに行った時もそう言っていた。
「それなら何故私の所に来たのかしら。天子を奉戴しているとはいえ、私は未だ麗羽に比べれば勢力としては小さいわ。戦をしたくないのならば、降伏してそのまま麗羽の庇護下に入ったほうがよさそうに思えるけれど」
竹簡を纏めて、こちらへと振り返る。
目に宿る色が、変わっていた。
「だってそれじゃあ、漢王朝が滅んじゃうじゃないですか」
真っ直ぐにこちらを見つめて来る。その視線に、強い意志が宿っていた。
「……それは、貴女が儒を重んずるからかしら」
「それはちょっと違います。ええと、別に儒を軽んじてるわけじゃないんですけど……」
そこで辺りをきょろきょろ見回す。
そのまま身を乗り出して声をひそめた。
「大きな声じゃ言えませんけど、天子様だって一人の人間です。ご飯も食べるし、眠りもする。曹操さんは、天子様と私たちの違いって何だと思います？」
確かに大きな声でできる話ではない。
どうやら、こちこちの儒者というわけではなさそうだ。
「皇族に生まれたか。皇帝の血を引いているか。それだけね」
自分の答えに劉備は大きくうなずいた。
「そうです。それだけなんです。
天子が天子たる所以は、血の繋がりだけ。
言葉にするとちっぽけな理由ですけど、それも四百年続けば今みたいに敬われるようになる。

そして千年続けば、神聖で侵しがたいものになるでしょう」
何かが変わった気がした。
今の今まで取るに足りない存在だった劉備が、関羽と張飛の武を頼りにするだけの存在だったはずの劉備が、何か得体の知れないものに変わっていく。
「国には人と同じで寿命があります。国を作るのは人ですから、当たり前かもしれませんけどね。
国も、人も、いつかは腐る。腐った国を、その時代の英雄が掃除して立て直す。世界は、その繰り返しでしょう。
でも、それは漢王朝の下でが良いと私は思うんです。天子様は常に天子様でいて、その時代時代の英雄、覇者は天子様の下で政を行う。
それが私の考える、戦をできるだけしなくてすむ世の中の在り方です」
目の前にいるのは、最早何の力もない小娘ではなかった。
これは、敵だ。
天意。運命。そういった言葉が、昔から嫌いだった。それは、仕方ないと諦める言葉、天などという見えもしないものに身を任せる言葉だと思ったからだ。
人は皆、天に生かされてるとでも言うのか？冗談じゃない。
私の往く道は私が決める。人の力をなめるな。人の力で、人の才能で、この国を、この大陸を変えてやるのだ。ずっとそう心に決めて生きてきた。
その自分が、今初めて天意というものを感じているのかもしれない。
日は昇ればいずれ沈むように。雨は天から地へと落ちるように。
曹操と劉備は、敵同士なのだ。決して交わることのない、水と油。
ならば戦う。正々堂々、正面から打ち破る。完膚なきまでに、その理想を打ち砕く。
「……そう。
ならば、その理想を実現するためにも、精々励みなさい」

後日、劉玄徳は左将軍に任じられた。
許都の民の多くは、その知らせを喜んだという。

関羽と荀攸

食堂への道をゆっくりと歩く。たいしたことの無い距離だが、その間に様々な人とすれ違った。

熱く議論を交わし、顔を真っ赤にて歩く文官二人組み。何かに遅れるまいと急いで走る警備の兵。大量の竹簡を抱えほとんど顔の見えないおそらく男。

誰もが忙しく動き回っている。そして誰もが活き活きとした顔をしていた。許都は、今日も活気に溢れている。

時折、城内を巡回する兵が声を掛けてくる。汜水関での華雄との一騎打ちを覚えている兵が少なからずいるのだ。

華雄についてはあまり知らない。董卓を侮辱されて打って出たということは、今は曹操軍にいる呂布や張遼とは違い自らの意思で董卓に仕えていたのだろうか。もしそうだとすれば、あれほどの武人がなんと勿体無い。

今更詮無いことを考えながら扉の前へ。中から笑い声がする。

扉を開けると、予想通りの顔が一つ。そして予想外の顔が二つ並んでいた。

「お待ちしておりました関羽殿。こちらへどうぞ」

自分を食事に誘った荀攸が向かいの席にと手招きする。その隣の卓では、陳宮が呂布に次々と肉まんを手渡していた。

まるで小動物のように口いっぱいに食べ物を放り込む様子は、とても天下無双の武人には見えない。心が和むが、視線が合うと逸らされてしまった。陳宮は、最初から自分など目に入っていない。

「お待たせして申し訳在りません」

一言謝辞を述べてから腰掛ける。

「食事をご一緒にとお誘いしたのはこちらですから、気にすることはありませんよ。

まずはお茶でもどうぞ」

朗らかに笑って茶を注いでくれる。礼を言って一口飲むと、かなりの美味だった。茶葉が良いだけでなく、きっと淹れる腕も良いのだろ

う。そう思える味だ。
暫く二人で茶を楽しんでいると、唐突に荀攸が問いかけてきた。
「関羽殿が来られてからもう一月程になりますか。
この許都は、関羽殿にはどう映りますか？」
どう映るか。
思うことは様々あるが、一言でまとめると――。
「乱世の都、でしょうか」
荀攸の眉がぴくりと上がる。
「乱世の都、ですか。それはどのように？」
「城外での大規模な土木工事に、洛陽のものを超える高さに改築された城壁。いたる所で煙が立ち昇り、建築中の建物はひしめき合うように配置され、その周りには都とは思えないほどに広い農地があります。宮殿も瀟洒ではありますが華美な意匠、装飾は一切施されておりません。
極僅かの間にこのような都を造るとは、改めて曹孟徳恐るべし、といったところでしょうか」
荀攸が再び杯に茶を注ぐ。
「我が主、曹孟徳は司空の位にあります。それらのほとんどは主自らの発案ですね。お気に入りの関羽殿にそのように高く評価されて、主もお喜びになるでしょう」
曖昧に笑っておく。少し乾いた笑いになってしまったかもしれない。
公人としての曹操は素晴らしいし、尊敬もできる。自分を将としても一人の武人としても高く評価してくれていることも理解している。が、色事の対象として見ることはやめてほしかった。自分にはそのような趣味はないのだ。
「都そのものだけではありません。
人、牛馬は全てそれぞれに仕事が与えられ、忙しくそして無駄なく働いています。他の地から流れてきた餓民を積極的に受け入れ、建設の仕事をさせ充分な食と金、土地まで与えていると聞きました。これは貴方や荀彧殿の手腕でしょうか」

茶を飲みながら穏やかに微笑むこの男は、今尚書の地位にある。姪の荀彧は侍中と尚書令代理を兼任している。主である曹操が司空であることを考えると、まさに漢朝の中枢に居ると言っていい。だというのに、それを全く感じさせない。

「ええ。民政の責任者は桂花ですが、私や詠――賈ク殿や董承殿も携わっています。最近では隣にいる公台殿にも。

餓民の受け入れに関しては、一応私の発案ということになりますかね。公共事業により国民の職と賃金を確保するのは基本です。

……まあ、劉岱が溜め込んでいた財宝や、調度品などを行商人を通じて袁家に売り払った金をつぎ込んでいるので長くは続かないのですが」

自分の功を誇るでもなく、何でもないことのように言ってのける。多くの腐った高官にとって、民とは搾り取る対象、虐げる対象でしかない。それを国から職と食を、さらには土地と金まで与えようというのだ。その政策の重大さを気にしてもいない。

「何れにせよ、地も人も、つい最近まで三十万もの大軍と戦をしていたとは思えないほど発展し、活気付いていると思います」

「外から来た貴女の目にそう映っているのならば嬉しいですね」

そんな風に談笑していると、典韋が大きな皿を両手で頭の上に掲げてやってきた。

「お二人ともお待たせしました！

うまく焼けたと思いますよ、兄様！」

可愛らしく微笑みながら卓の中央に置かれた大皿に乗っていたのは、こんがりいい色をした豚の丸焼きだった。市で見かける豚よりも小さい。まだ子豚だろうか。

「ありがとう、流流。

もう一つも持ってきてくれるか？」

「はーい、すぐにお持ちしますね！」

元気よく返事をして厨房へと向かう典韋の背中を見送る。彼女の姿が消えてから、荀攸は卓に最初から用意してあった包丁を手に取った。

「では、今から切り分けます。
食事の内容はこちらで勝手に決めてしまいましたが、関羽殿は何か食べられないものやお嫌いなものはありますか？」
「いえ、特にはありません」
荀攸自らが目の前で切り分けるのか。なんというか、随分と贅沢な昼食になりそうだ。
そんなことを考えていると、典韋が今度は小さな皿を持って来た。掌に三つは乗りそうな、具なしの肉まんのようなものと、横には何かをすり潰したようなものがある。
「これは、まずはこうして食べる料理なのですよ」
荀攸が包丁を鮮やかに振るう。豚の背中を、横一線。なんの抵抗もないかのように通り抜けた包丁の腹の上には、薄く切られた皮が乗っていた。
その皮を、自分の小皿に滑り下ろす。
「どうぞ、関羽殿。まずはそのまま食べてみてください」
「は、はい」
こんがりとは焼けているが、このように薄い皮だけを食べるのか。料理としてはどうなのだろう。
そんな疑問は、口に入れた瞬間全て何処かに吹き飛んでしまった。
美味い。
口の中いっぱいに広がる芳ばしい香ばしい香り。仄かな塩気。そしてなんといっても食感が素晴らしい。舌に触れた瞬間、儚く脆く崩れ去る。
「これは……美味しいですね」
「本当に！凄く美味しいです兄様！」
典韋も自分に続いて同意の声を上げる。それを聞いて、荀攸はにやりと笑った。
「次はこれと一緒に食べてみてください。生地の上に皮を。その上にこの梅をすり潰した後に煮て味付けしたものを乗せて食べるんです」
言われるがままに典韋と競うようにして口に放り込む。人によっては少し濃いかもしれなかった味が、生地によって丁度良くなる。梅

で後味がさっぱりするもの良い。そのままもう一つ。予想通りに美味かった。
「恋も……ちょうだい？」
気が付くと、呂布が荀攸の横に立っていた。涎を垂らしそうな勢いで、豚をじっと見つめている。
「勿論。公台殿もどうぞ」
荀攸が切り分けてやると、二人ともすぐに口に放り込んだ。そして驚いた顔になる。
子豚丸々一匹分だったが、五人で食べるとあっという間になくなってしまった。

一欠けらも残さず食べきったところで、典韋が何か甘いものを用意してくるといって厨房に戻った。呂布は満足気な顔で荀攸に礼を言い、そんな彼女を見て陳宮も幸せそうだった。
人心地ついたところで、荀攸がこちらに向き直る。目が、真剣なそれに変わっていた。
「関羽殿は先程、三十万の大軍と戦をしたばかりの街とはとは思えない、と仰いましたね」
「ええ」
居住まいを正す。
空気が、変わっていく。
「曹陣営では、戦とその後の政は密接に関連しています。戦を始める前から政の方向性を考えておき、戦が始まると同時に少しずつ実行に移していく。そして戦後には、賊を追い立てるが如く政に本格的に取り掛かります」
水が流れるように滑らかに語られるのは、今までとは違う新しい政のかたちだ。彼から感じる新しい風は、どこか曹操に似ているような気がした。
「そもそもが、兵を動かすためには彼らを食わせねばなりませんし、彼らの家族も食わせねばなりません。戦をすることを考えれば、おのず

と政に繋がっていくのです」
そこで荀攸が陳宮をちらりと見やる。彼女は暫く視線を合わせると、一つうなずいた。
視線がこちらへと戻る。
「そして政とは、これと同じなのです」
そう言って皿の上に残った豚の頭を指差す。
政と、豚の頭が同じ？
「それは、どういうことでしょうか」
考えてみたが、自分にはさっぱりわからない。
「政とは、料理に似ているのですよ。
国の主は、まず自分の食べたこともないもの凄いご馳走の味を思い描いてしまうものなのです。それからその味をつくるための様々な食材をかき集め、時には全く新しい調理法を編み出してゆく。それが国を造る法や制度です。
豪壮な料理を次々に生み出せない王には民はついてこないのです」
言葉が出ない。
荀攸という人は、自分如きでは量れない。これ程推し量れない人は、長姉や曹操以来だ。
「王が描く国のかたちが魅力的なものであれば、誇りや文化も後からついてくるのです」
言葉を発したのは陳宮だ。
荀攸が大きくうなずく。
「その通りです。
そして我が主曹孟徳は、誰よりも魅力的な国を思い描くことのできる王です。そしてその国という料理をつくるために的確に人材を配置する。曹孟徳という料理長がいて、その配下に食材を切ったり味付けしたりする料理人である私や公台殿がいる。そう想像すればわかりやすいでしょうか。軍人の皆さんは、食材を調達する係ですね」
「なる、ほど……」
理解はできる。実にわかりやすくまとめてくれた。しかし、その話の大きさに心が追いついていない。

「貴女の主、劉玄徳という人も、同じくらい魅力的な国を思い描くことのできる人です」
長姉が褒められている。鈍くなった頭に沸き起こった嬉しさは、その次の言葉で打ち砕かれた。
「しかし、それをつくることはできません」
――。
「思い描く理想は、想像するご馳走の味は、とても素晴らしいものでしょう。しかし、本人にはそれをつくりだす料理の腕がない。だから貴女に頼り、張飛殿に頼り、最近では趙雲殿に頼る。
自分はこういう料理が食べたいと希望だけは口にするが、料理する腕はない料理長。それが劉玄徳という人です」
「我が主を侮辱するか！」
思わず声を荒げる。
睨みつけるが、荀攸はしっかりと視線を合わせてきた。
「侮辱するつもりはありませんよ。
彼女ならば、いつかその理想を周りの人の力で実現させることができるかもしれません。
ですが、その分だけ乱世は長引き人が死ぬ。それでも、彼女の下には多くの人が集まるのでしょう。彼女の人気に、彼女の理想に酔って。
――そして、理想に溺れて溺死することになる」
「……」
「関羽殿。貴女が本当にこの乱世を憂いているのならば、この大陸の民の安寧を心から願うならば、劉備殿にこのまま大人しく曹陣営の一武将でいるように勧めてください。貴女の進言ならば、劉備殿も聞いてくれる見込みがあるかもしれません。
それが、この乱世をできるだけ穏やかに、できるだけ早く終わらせる方法です」

その後、どうやって部屋に戻ったのか覚えていない。

気づくと夜で、いつの間にか寝台の上だった。
あのような言葉など考えるまでもなく捨て置いて、長姉に事の次第を伝えるべきだ。
そう思うのに、身体は何故か動かないまま、夜が更けていった。

孫の飛躍

「――やはり此処に居られましたか、蓮華様」
一人きりだったはずの書庫に、静かな声が響いた。
「何の用？張昭爺。
たまの休息時くらい、貴方のしかめっ面を見なくて済ませたかったのだけど」
竹簡に視線を落としたまま言う。
「人の目を見て話すのは礼儀の基本ですぞ。
それに、もし人違いだったらどうなさるおつもりですか」
声が僅かに叱責の色を帯びる。
「言ったでしょ、しかめっ面を見たくないって。御小言は朝議の時だけで充分よ。
それに人違いはありえないわね。誰も通すなって言いつけてある思春が通して、しかも私の真名を呼ぶ男なんて貴方くらいよ、張昭爺」
竹簡を次の項へと送る。竹が擦れる独特の音に紛れて、大きな溜息が聞こえた。
「やはり貴女も先代の娘、雪蓮様の妹ですな。
幼い頃お世話させて頂いた、あの素直な蓮華様は何処に行ってしまわれたのか」
ああ嘆かわしい、などと言っている。
きっと額に手を当てて、役者のように大げさに首を振っているのだろう。見なくてもわかる。間違いない。
「半分くらいは貴方が原因ね、きっと。
嫌われ役を一手に引き受けてくれてるのは助かってるけど、それも長年続けば染まっていくってことじゃないかしら？最近の貴方、御小言を楽しんでるようにしか見えないもの」
「それは心外ですな。私は全て蓮華様のためを思って諫言しているというのに」
今度は肩をすくめているのだろう。生まれた頃からの付き合いだ

口では敵わないことはわかっている。まあ、家臣としてはその外交の手腕も、遠慮のない物言いも含めて感謝はしていた。絶対に口にしてなどやらないが。
「しかし相変わらず書庫に篭るのがお好きですな。たまの空き時間くらい、ゆっくり身体を休めればよいものを」
こつこつと、此方に近づく音がする。やがて、五歩の距離で止まった。
此処で止まるということは、それ程重要ではない、内密にするようなことではない、ということだ。その時は三歩まで近づいてくる。
「たまの休みだから、趣味に時間を使いたいのよ。
それに……」
「それに？」
「母様がね、言ってたの。シャオがまだ小さい頃だったわ」

『雪蓮には武の才が、そして蓮華には政の才があるわ。
でも、どんな名剣でも手入れせずに斬り続ければ刃こぼれしてしまう。どんな名君も、停滞していてはいつかは腐ってしまう。
蓮華、貴女は書を読みなさい。
剣には砥石が必要なように、政には書が必要よ』
その後、姉様にも何事かを言っていた。きっと、あちらは武に関する心構えでも語っていたのだろう。
「だから私は此処に篭るの。私の心を、決して腐らせないように」
母様の志は、この身にしっかりと根付いている。それは、何があっても色あせることはない。
「先代がそんなことを……。
武人、君主としては素晴らしいお方でしたが、母親としてはどうにも不器用だったように思えましたがな。意外としっかりしていらっしゃったようで」
確かに不器用ではあった。言葉で何かを伝えるのが苦手で、姉妹揃って口よりも手で躾けられたようなものだ。
「しっかりしていた、っていうのはどうかしらね。

最後までシャオにはだだ甘だったでしょう？」
それを聞いて、爺がぽん、とい手を打った。
「ああ、そうでした。
その小蓮様ですが」
聞きたくない。非常に聞きたくない。間違いなく厄介事だ。
「何処を探しても見つかりません。
どうやら雪蓮様の軍に紛れ込んだようですな」
予想通りと言えば予想通りの言葉に、長い長い溜息が出た。
「……周々と善々は？」
「善々はいつもの場所に。
周々は居りませんな。おそらくは小蓮様とご一緒でしょう」
一応の護衛はいるのか。
いくらあのシャオでも、全くの一人で遠征軍に同行するようなことはしない……はずだ。
「なら、とりあえずは大丈夫でしょう。
……雪蓮姉様が、無茶をしない限りは」
「あの雪蓮様ですぞ？
無茶をしないなどありえませんな」
一度も顔を合わせていないのに、次の瞬間溜息が見事に重なった。

「どうした？雪蓮」
突然後ろを振り返って空を睨む親友に声を掛ける。
珍しく、こちらの問いかけに暫く返事をしなかった。
「今、誰かに馬鹿にされたわ」
おいおい。
「一応聞いておくが、根拠は？」
「勘よ♪」
困ったことに、一笑に付すことができない。雪蓮の勘は必ずと言っていいほど当たる。最早超常現象の類だ。

「お前を馬鹿にしているのが劉ヨウならばよいのだがな。
こちらを侮ってくれるに越したことは無い」
雪蓮がやっと前に向き直る。とはいえ、若干の不機嫌顔のままだった。
「まあ、ね。
袁術が皇帝を自称した途端に擦り寄った輩だしそんなもんでしょ。ここで劉ヨウを潰せば、また結構離反する奴も増えるんじゃないの？」
「ああ。
袁術に忠誠を誓っているのは張勲を初め直率の部下など極一部で、後は金だの利権などに吸い寄せられた有象無象だ。
しかも天子を狙って差し向けた軍が曹操に無様に敗れたことで人心は急速に離れている。追撃をせずに兵の投降を受け入れ、袁術など歯牙にもかけない態度をとったことも大きいな」
雪蓮が愛馬の首筋を撫でながらうーんと唸る。
「皇帝の護衛についてた呂布はほとんど戦わないで、最近移ったばかりの張遼と……陳宮だっけ？その二人の部隊だけで勝っちゃったみたいじゃない。しかも五倍の数相手に。
曹操は、どんな風にその二人を育てたのかしら」
確かに、曹操の手腕は驚嘆に値する。軍事においても、民政においてもだ。明命からの報告には、唸らされてばかりいる。
「それは当人に聞いてみなければわからんよ。
……そろそろ集落に入るぞ」
その瞬間、雪蓮の顔が切り替わる。
馬上で背筋を伸ばし、大声を張り上げた。
「速度を緩やかに！
矛先を地に向け、民の一人一人と目を合わせて通り過ぎなさい！
孫家が江南に戻ってきたことを知らしめるのよ！」
「「「「応!!!!」」」」

全軍が一斉に応える。
兵の心は、今再興の時を迎えた孫家に、雪蓮の下に一つになっていた。
「やるのお、策殿は。
あの若さで母君と見まがうばかりの差配ぶりじゃ」
いつの間にか、隣に祭殿の馬があった。
「ええ。
孫家長年の悲願、その時が目前に迫っている。ですが、焦りを全く感じさせません。一戦ごとに、王の風格を増していくようです」
暫く二人で主を見つめる。
「……もうすぐじゃの」
「もうすぐです」
別働隊を蹴散らしながら劉ヨウの城に到着するまでに、雪蓮に付き従う兵は三万を超えるまでに膨れ上がった。
孫家の、孫策の時代が来る。
それを、皆が感じていた。

「南の方約十里に砂塵!!」
「孫策だー!孫策が来たぞー!」
「兵の数およそ三万!」
「また増えたのか?なんと十日の間に……」
「数の上では互角だが……劉ヨウ殿はどうした!?」
「知らんのか!北門から逃げ出したらしいぞ!」
「城を捨てたのか!?
我々は……皆殺しにされるぞ!」
城内全ての兵に動揺が走っていた。
無理も無い。城の主が民と兵を捨てて一人逃げ出したのだ。
心の通わぬ主とはいえ、途中で任を投げ出しては不忠などと考えていた自分が馬鹿らしい。

兵の中央に向かってゆっくりと歩く。
主が逃げて、この大史慈の道が決まった。
「取り乱さなくてよい！ここを君たちの死に場所にはしない！
私に任せよ!!」
一人一人と目を合わせて動揺を沈めていく。上が揺らいでいる軍ほど脆いものはない。
「将軍！敵軍は目前で止まりました！」
何故勢いに任せて攻めて来ない。この期に及んで何故だ？
「敵は陣幕を広げ宿営の準備を始めております！」
孫策はまだ若いはずだ。若すぎると言ってもいい。
だというのに、あの止めようのない勢いをあえて止める老練さ。その指揮にはある種の面白さすら感じさせる。
自然と口角が釣り上がる。自分は、孫策に何を期待しているのだろうか。
「諸君に告げる！
敵の如何なる動きにも一切動じてはならん！
心を沈め出撃の体勢をとりただ私を見守っておればよい！」
まずは我慢比べだ。痺れを切らして先に動いた方が隙を見せることになる。
その時、ふいに孫策軍から笑い声が聞こえた。
見ると、ほぼ全軍が腹を抱えて笑っている。
「どうした!?何があった!?」
急いで城門の上へと登る。
「た、大史慈将軍！
り、りゅ、劉ヨウ殿が！」
城と孫策軍との間で、先程逃げ出した劉ヨウが虎に乗った少女に追われている。
服はぼろぼろに破れ、泣きながら這う這うの体で逃げていた。
「こらー！大人しく捕まりなさーい！」
桃色の髪をした小柄な少女が虎を見事に乗りこなしている。
それを見て、孫策一人前に出た。

ゆっくりと、。しかし、その歩みの一歩一歩に確かに感じられる力強さ。手にする美しい装飾が施された剣が、陽光を受けて鮮やかにきらめいた。
「城内の全ての兵士に申し告ぐ!!」
孫策を感じる。
若く躍動する次代の王だ。
「皆殺しにするわよ!!!
この孫伯符に降りなさい!!!」
城内が静まり返った。
孫策一人に、万の兵が圧倒されている。
主を嘲笑されてのこの大怒号。最早兵は死んだに等しい。
なれば、道は一つしかない。
「開門!」
「し、しかし将軍……」
門番がうろたえた声を出す。
「問題ない。開けてくれ」
兵が無言のままうなずいて仲間に合図する。
鈍い音を立てて、ゆっくりと城門が開かれた。
「我が名は大史慈!字は子義!
東莱は黄の出自だ!」
愛用の弓を腰に。反対側に佩いていた剣を手に取る。
「孫策殿!
挙兵以来の貴公の快進撃!まさにあっぱれ!必ずや天下に轟こう!」
このまま何もできず敗れることは、自らの誇りが許さない。
「だがこの城をおのがままにされたくば、この大史慈の屍を越えて頂こう!」
応えは直後だった。
「のった!!!」
言うが早いが孫策が駆け出す。周りの将が皆止めているがそんなことは関係ないようだ。

剣を合わせる。その時、孫策の声が聞こえた気がした。
――面白いわね、貴方。
振り向きざまにもう一撃。
――私の所に来ない？
千の言葉を交わした劉ヨウよりも、たった二合剣を交わした孫策と通じ合っている。
そう、思った。

この後孫策は江南、江東に割拠する勢力を虱潰しに攻略。揚州のほぼ全域を支配下におさめ天下への基盤を固める。その躍進は彼女を江東の小覇王と称させた。
尚、太史慈はこの一戦を機に孫策と固い主従の契りを結ぶに至る。

嫌いと、好きと

筆頭軍師である桂花。その横に彼女の補佐についている詠。月は全員にお茶を用意した後に壁際に控えていた。続いて陳宮。桂花の隣、詠の反対側には郭嘉と程イクが並ぶ。そして桂花の正面に自分。

軍師一同が車座に座っている。武将も任務中の者を除いて部屋に集まっているが、それぞれの場所に思い思いに散らばっていた。

壁にもたれ掛かり腕を組む者。どかっと胡坐をかいて座る者。生真面目に姿勢を正している者もいれば、酒を持ち込んで一杯やっている者もいる。

「――図らずも曹操殿が黄巾討伐の一介の義勇軍だった劉備と共闘したことが彼女を平原の相に押し上げたのです。

また青州兵の受け入れ等、曹操殿が悪名を馳せれば馳せるほど、劉備の人気は高まった」

協議しているのは劉備の処遇だ。語っているのは陳宮である。

「両袁家が皇帝を自称している今はよいでしょうが。

しかし、後ほど必ず皇帝を傀儡として権力をほしいままにしているという悪評、皇帝を廃し自らが天子を名乗るつもりだという憶測は必ず出てくるのです。

その時に天下に沸き起こるのは『劉』氏待望の声。劉備はそれに乗り一気にのし上がること間違いないのですぞ。

万物全ての現象に鑑みれば、『劉玄徳』とは『曹孟徳』と対を成すもう一つの力であると考えるべきなのです」

反応は様々だ。目を閉じて静かに陳宮の話を聴く者。陳宮をじっと見つめ、彼女の語りを通じて陳宮という人物そのものを見定めようとする者。肯定気味の顔の者、否定気味の顔の者。

「今は微小な勢力ながら、放っておけば曹操殿の覇業にとって最大の災厄となるのです。

ぬけぬけとこちらに飛び込んで来たのですから、しかるべき罪を与えて誅殺すべし！

さもなくば後顧の憂いを残すのです！」

真っ先に言葉を発し、反論したのは桂花だった。
「劉備を買いかぶり過ぎじゃないかしら。
単に『劉』の姓に怯えているように見えるわよ？」
「そうね。私もそう思うわ。
今の時代、力のない『劉』なんて五万と居るわよ」
詠が桂花に続いて同意の声を上げる。
この二人、何かと気が合うようだった。そういえば、性格も似ているかもしれない。
「曹操殿と劉備をあたかも表裏と見なし量ってみるのです。
そうすれば、また別の景色が見えてくるのですぞ」
「華琳様に匹敵するとでも言うの？冗談じゃないわ」
曹操と劉備。その二人をまったくの対等として量る。桂花にとってはありえない話だろう。忠誠心など元からあまり持っていない陳宮だからこその視点と言えるかもしれない。
「いえ、一理はあると思います」
郭嘉が眼鏡を指で押し上げながら言った言葉に、桂花と詠の首がぐるんと回ってそちらを向いた。
先輩二人に見つめられて一瞬怯むが、つかえることなく話し始める。
「劉備という人は、理ではなく感情で動く民草の心をまとめて飲み込むことで台頭してきた人です。
それはすなわち、その器に入る人が多ければ多いほど力をますことを意味します。
一国一州を争うだけでは小器でしょうが、天下をかけた争いとなれば大器となる」
程イクは目を閉じ、黙したまま親友の話を聴いている。
「――『柔よく剛を制す』。その言を残した光武帝・劉秀。項羽を飲み込んだ高祖・劉邦。
名君として名を馳せた『劉』氏に共通して見える風格を劉備殿もまた持っているのではないでしょうか」
「まさか中山靖王・劉勝の後裔だっていう大法螺を真に受けてるん

じゃないでしょうね？」
桂花が半眼で郭嘉を睨む。彼女はそれから目を逸らし、隣の程イクをちらりと見やった。
すると、今まで目も開けず、一言も発さなかった程イクが初めて声を出した。
「お兄さんは、どう思いますか～？」
間延びした声につられ、皆が揃ってこちらを向いた。
突然大人数の視線に晒され居心地が悪くなる。苦笑いしてしまった。
「……一応、代々伝わる『靖王伝家』という宝刀を持っているらしいですよ」
『おうおう兄ちゃんよ。風が聞きたいのはそういうことじゃねえんだぜ』
「意地悪する人はめっ、ですよ～？」
宝譿と本人の両方から責められてしまった。
「人は自分にとって都合の良い事を真実と思い込むものです。たとえ証拠がなくても、たとえそれが嘘であっても、民草が望めばそれが真実となる。劉備殿に関しても同じでしょう」
「ふむふむ。
では、陳宮さんや稟ちゃんの意見についてはどうですか？」
「あながち的外れではないと思いますよ。
ご主君は理を好み虚飾を嫌います。曹陣営全体の方針も、朝政も全て道理に基づいて行われています。
一方、劉備殿はその理から零れ落ちたものを拾い集めて自分の力にする。
理では量れない大器。それが劉備殿でしょう」
郭嘉が少し驚いた顔でこちらを見た。陳宮も満足そうに反り返っている。
二人のその顔を見て、桂花と詠の機嫌が急降下した。
「じゃあ、劉備の処遇についてに貴方の考えは？」
「このまま取り込むのが一番かと。

劉備殿は風評以上の器を備え、人心をとらえる力も並外れている。
関羽殿の武は恋に及びませんが、将として用いれば恋をしのぐ。
張飛殿の武もまた二万の兵に値する。
しかし、ご主君の度量はこれらを遥かに上回ると私は信じています。
劉備殿の人気、関羽殿の将器に張飛殿の武。
これらを丸ごとご主君に飲み込んで頂く」
皆がうーんと考え込む。
一人程イクだけがふふふーと口に手を当てて笑っていた。
後ろから大声が飛んできたのはその時だ。
「そんなものはいらんぞ北郷！」
全員が何事かと顔を向ける。
いつの間にか、真後ろに春蘭が立っていた。
「華琳様の天下にあんな奴らは無用だ！
ちびっ子の言う通り今すぐさっさと殺してしまえ」
いかにも忠誠心厚い武人の意見だ。しかし、春蘭がこれほどはっきり殺してしまえと言うとは予想していなかった。思わず桂花と顔を見合わせる。
「そうは言うけどね。裁可は仰がねばならないでしょ」
桂花の言葉にその場の軍師たち全員がうなずく。
だが、春蘭はきょとんとした顔をしていた。
「あんな奴らを殺すのに裁可なんぞが必要なのか？」
「あのねえ。
仮にも劉備は平原の相だったのよ。そんな戯れに殺せるわけないでしょう」
またも全員一致でうなずく。
それを見て、春蘭は親指で自らの首を指した。
「裁可なら常にこの首で負うているさ。
夏侯元譲は、曹孟徳の天下へ一本道だ」
きっぱりと言い切るその覚悟に皆が息を呑む。
敵わない。そう心底思わせる言葉だった。

「その気持ちは嬉しいけれど、残念ながら劉備を殺すのは許可できないわね、春蘭」
言葉と共に部屋の中に入ってきた主に、全員が居住まいを正す。
「劉備を殺すのはこの私。
そして、それは天の理を感じる戦の場においてのみよ。それまでは一切の手出しを禁じる。
さあ、わかったらこんな協議はやめて早く仕事に戻りなさい！」
主が手を叩いて急かすと、皆が慌てて立ち上がる。各々不満も語りつくしていないこともあるだろうが、曹孟徳という人はこうなったら梃子でも動かないのだ。
結局、それ以降劉備の処遇について協議がもたれることはなかった。

木の幹にもたれ掛かって酒を飲む。
色々と探し回って見つけた、庭にある手ごろな木。此処が、酒を飲むお気に入りの場所だ。
つまみはない。大将自らが発案し造ったという庭を眺め、流れる風を感じるだけで十分に酒が飲めた。
華雄が好きだった、風。
まだまだ語り合いたいことが沢山あった。まだまだ酒を酌み交わしたかった。
最近は、飲む度にそう思う。
「――やっぱり此処に居たのか、霞」
木の後ろから、声。
「なんや。珍しいな。
いつもは見かけてもそっとしといてくれるのに」
一刀が近づいて来るのはわかっていた。いくら酔っていても、そういう専門の輩でも武人でもない気配を見逃すことはない。
腰を下ろす音。どうやら、丁度反対側で同じように幹にもたれ掛

かっているようだ。
「ちょっとな。
さっきの協議、最初から最後まで、何も話さなかったろ」
「せやな」
軍人である自分が出る幕ではない、という理由もある。
春蘭ほどの覚悟はない、という理由もある。
だが――。
「関羽が、憎いか？」
喉の奥だけで低く嗤う。
やはり、見透かされていたようだ。
「憎い、とは少しちゃうかな。そりゃ思うところはあるで？
せやけど勝敗は兵家の常や言うし、うちかて曹操軍をぎょーさん殺しとる。
せやから……憎いやのうて、嫌い、かな」
そうだ。
改めて言葉にしてみて、よくわかった。
自分は、関羽が嫌いなのだ。
「嫌いか」
一刀の返事は短い。もしかしたら、自分に何かを吐き出させようとしているのかもしれない。
「せや。
うちはあんまり頭ええことあらへんから上手いこと言えへんけど、世の中には完璧な人間っておらへんやろ？
うちらの大将かて女好きが過ぎるのも欠点やと思うし、さっきみたいに劉備を殺すなー言うて下に不満を持たせることかてある」
「まあ、そりゃそうだ」
「せやけど関羽は、劉備が完璧な人間や思とるような気がする。劉備の言うとることは全部正しい、みたいにな。うちは、それが嫌いや」
人間誰しも完璧じゃない。誰だって、負の部分、負の感情は少なからず持っている。
関羽にはその負の部分が、清濁の『濁』があまりにもなさすぎるよ

うに感じる。
世の中は、人間は、そんなに単純で甘いものじゃない。そう思う。
「……嫌うな、なんてことは言わない。
でも、不満を持っても行動に移すのはやめてくれよ。今は味方なんだからな」
一刀の声が若干すまなそうに聞こえる。
劉備たちを取り込むと進言したのは一刀だ。それを考えているのかもしれない。
「心配あらへん。
敵は敵で、味方は味方。
それと好き嫌いは別もんや」
「そうなのか？」
思わずといった感じで聞き返してくる。そんなに自分は信用がないのだろうか。
「例えば、せやな。
孫策とかは敵やけど好きやで？一緒に酒飲んでみたいわ」
「ああー……確かに、気が合いそうだなあ」
孫呉の人、皆酒が好きそうだったもんなあ、なんてうんうん言っている。
「せやろ？
けど、戦になったらきっちり戦う。
敵だろうが味方だろうが、好きな奴は好き、嫌いな奴は嫌いでええねん。
今日は一緒に酒飲んで笑って、明日は全力で殺しあう。それで、どっちが生き残っても恨みっこ無しや。
そんなもんでええねん、うちらは」
「なるほどなあ……。
じゃあ、嫌いな関羽を引き込もうとした俺も、嫌われちゃうかな」
今度の声は少し面白がっている。
洛陽ではもう少し生真面目だったはずだ。少しずつ桂花に毒されているんじゃないのか。

自然と、口に出していた。

「うち、一刀のこと、好きやで」

「……ああ」

「一刀は、桂花のこと、好きなんやろ？」

「……ああ」

「せやから、待ってる。
うちは、ずっと、待ってるから」

「……ああ」

勝ち目が薄いことはわかっている。それでも、伝えずにはいられなかった。

らしさ

「――公孫賛の居城が落ちた？」
一刀からの報告に、詠が思わずといったように声を上げる。
驚きで染まったその顔は、智謀を誇る軍師にはとても見えないほど可愛らしい。
自分の補佐についたこの気の合う同僚は、予想外の事態に直面した時、意外なほどあどけない表情を見せるということに最近気づいた。
「袁紹は――趙雲、だったかしら。先鋒がそいつにあっさりやられて、劉備の口車に乗って撤退したんじゃなかったの？
あれ以来、演習をするくらいでまともに軍を動かしてなかったと思うけど……」
その通りだ。兵が更に増え、武具を揃え調練を繰り返しているというが、何処かに侵攻したという話は入ってきていない。
こちらに兵の動きを悟らせずに城を落とす。そんな頭があの袁紹にあるとは思えない。
などと考えていると、一刀がこれまた予想外の言葉を口にした。
「どうやら、穴を掘っていたようです」
「穴？どういうこと？」
再び疑問の声を上げたの詠だが、胸中では皆同じ思いだろう。さっぱりわけがわからない。
「大規模な騎馬隊の調練に紛れて、少しずつ兵を城壁に穴を掘る作業にまわしていたようです。
袁術が孫策に敗れるという一報が入ると同時に一気に城壁を崩し進入したとのこと。不意を衝かれた公孫賛は僅かな兵と逃走するのが精一杯で、組織だった反撃はほとんどできなかったようですね。今は劉備を頼り此方へ向かっていると報告がありました。
袁紹軍はそのまま此方へ向けて軍を進めています。おそらくは、公孫賛を攻略した後速やかに対曹操軍へと移行できるよう、以前から軍備を進めていたものと思われます」
やはり袁紹らしくない。用意周到に過ぎる。あのじゃじゃ馬を制

御するか、誘導するか、どちらにしろ長い間思い通りに動かした知恵者が裏にいる。文醜、顔良の言うことくらいしか聞かないあの性格を考えると、あの二人も協力しているのかもしれない。何れにせよ、曹陣営にとって面白くない事態になりそうだった。

「――麗羽らしくないわね」

ぽつりと呟かれた言葉に、皆の視線が自然と主の方へ向く。

脚を組み、頬杖をつきいつも通りの見た目で座っているが、視線と思考はどこか別のところへと飛んでいるようだ。

「華琳様もそう思われますか。これほど緻密な策を、こちらに全く悟らせず実行に移すなど、袁紹にできるとは思えません。二枚看板以外に、誰か頭の回る者が近くに登用された可能性が――」

「そうじゃないわ、桂花」

自分の言葉は、主によって遮られた。皆が驚きでやや目を見張っている。

普段の軍議では、華琳は軍師、武人問わずまず臣下だけで議論させる。意見が出尽くし、議論が下火になったところで初めて口を開くのだ。

それが、今日は軍議が始まったばかりで口を開き、筆頭軍師である自分の言葉を遮った。

そうじゃない。自分は、何か重要な勘違いをしているということだろうか。

「それは、どういうことでしょうか？」

控えめに問うと、初めてこちらに視線を戻して話始めた。

「別に優秀な軍師がついたことはそれでいいわ。自分に何かを為す能力がないなら、その能力を持つ者を引き上げるのも君主の才覚の一つでしょう。

問題は、穴を掘るという行為そのものよ」

穴を掘ることそのものが問題？

一体どういうことだろうか。少しばかり時間がかかる気がするが、調練に紛れて行う点も含めて悪くない策に思える。

「麗羽は尊大だけれども、その器量は大きいわよ。自分が名門袁家に

生まれたこと、そして今その当主であることを誇りに思っている。
派手で華麗であることを好み、地味であったり卑怯な手を嫌う。それは反董卓連合での方針にも現れているでしょう？
そんな麗羽が、軍を引いたと見せかけ、袁術が敗れるまで待ち、穴を掘るという地味な策で城を落とす。
どうにも、麗羽らしくないわ」
「……」
言われてみれば確かにそうだ。袁紹らしくない。
『そのような策、私にふさわしくありませんわ！』とか言いそうだ。
『華麗に雄々しく優雅に前進』なんて策とも呼べない策を各地から集まった諸侯相手に本気でぶち上げたのだ。その袁紹が、あのような方法で城を落とすだろうか。
人の性根、性格というものは中々変わらない。その性格を変えるほど袁紹に影響を与えた人物がいる、ということか。策の性質からいって、それはあの二人ではないだろう。
ということは――。
「黄巾を操っていた男、かもしれませんね」
一刀の呟きに、一同に緊張がはしる。自分も身体が強張るのがわかった。
あの凄惨な光景を生み出した男。あの男が、裏で糸を引いているというのか。
考え過ぎかもしれない。しかし、簡単に笑い飛ばすことができない程度にはありうる話だった。
しばしの静寂。誰もが、あの惨劇を思い返し、決して繰り返してはならないと心に記していた。
その静寂を破ったのは、やはりというか主だった。
「ここでぐだぐだ悩んでいても仕方ないわ。人というものは実際に会ってみないと本当のところは推し量れないものよ。
というわけで――ちょっと会いに行きましょうか」
言うが早いが、立ち上がって歩き出す。
その姿を、誰もが呆然と見つめていた。

「あの、会いに行くとは、誰にでしょうか？」
「勿論麗羽によ。
これぐらいわからないようじゃ、王佐の才の名が泣くわよ？」
いや、普通はわからない。
万単位の大軍を率いて攻めてくる敵の総大将に、まるでそこらに散歩でも行くかのように『ちょっと会いに行く』なんて言う人は普通はいない。
だが、度々思い知らされるが華琳は普通ではない人だった。

翌日。
朝議の後、執務室に戻り自ら判断しなければならない案件を凄まじい速さで終わらせた我らがご主君は、本日本当に袁紹に会いに行くことにした。
同行するのは護衛として季衣、春蘭、秋蘭姉妹、優、霞、そして何故か軍師であるはずの自分である。
一応自分には護衛など勤まりそうもないと言ってみたのだが。
『心配するな。華琳様は私たちが必ず護る。
お前を連れて行くのは軍師の目でも袁紹軍を見てもらいたいからだ。流石に敵のど真ん中に桂花を連れていくわけにはいかんだろ？』
桂花を危険にさらすわけにはいかない。そう言われては、何も言うことができなかった。
そんな事情で、今黄河を目にしているわけなのだが――どういうわけか春蘭が姿を見せない。軍規はきっちり守る春蘭が遅れるとは、一体何があったのだろうか。
そんなことを考えていると、後ろからその春蘭の声が聞こえてきた。
「すまん！遅れた！実は恋文を貰ってな！」

思わず全員が振り返る。
見ると、馬上の春蘭の左手には確かに文らしき紙が握られていた。
主の隣に馬を並べると、それを拡げて渡してみせた。
「夏候惇将軍の武と知を仰ぎ、是非とも袁紹軍にお招きしたい、だと」
今度は全員で苦笑いする。
まあ、恋文と言えなくもない。
「天下の将と軍師を躍起になって招請しているとは聞いていましたが、まさか春姉まで誘ってくるとは。無節操極まりないですね」
優がどこか面白がっているように言う。最近では、自分や霞の前でも姉妹と真名で呼び合うようになっていた。
「それなら私の所にも来ていたぞ？」
「うちにもやな」
秋蘭と霞が続けざまに言う。
それを聞いて、優の顔が固まった。
「……なんですと？」
優とは反対に、華琳の顔は楽しそうだ。
「季衣がこそこそ隠していたのはこれね。
まさか優には来ていないのかしら？」
優の顔は、固まったまま動かない。
「華琳様ー!!準備できましたよー!!」
川縁にいる季衣の声が聞こえてくる。数艘の小型船が用意されていた。
「気にしないでいいわ優！私の所にも来ていないわよ！」
「慰めになっておりません！」
駆け出す背中に向かって優が大声を上げるも、彼女は楽しそうに笑うだけだ。
「袁紹の持ってる情報はあてにならんってことさ」
「いやいや！袁紹の目の付け所は意外に鋭いかもしれんぞ！」
姉妹も主の後に続いて駆け出す。
「春姉！それはどういう意味……ちょ、待ってください！」
慌てて自分も駆け出す優。

霞と顔を見合わせて肩をすくめる。
「ちなみに一刀には？」
「何も無し。面子丸潰れになった原因だからな。嫌われてるみたいだ。後で優にも言っておくよ」
結局、船が出るまで優の顔は真っ赤になったままだった。

騎馬のまま船に乗って大河を進む。対岸は黎陽。袁紹軍の一大拠点だ。
「本当にこのまま七騎で敵の先陣に乗り込むおつもりですか？」
春蘭が一応は、という感じで聞いてみる。
「乗り込むだけじゃないわ。その黎陽を攻撃するわよ」
予想の斜め上を飛んでいく答えに全員が唖然としてしまった。
「どうしたの？曹の大剣夏侯惇をして心胆寒からしめる無謀かしら？」
「い、いえそんなことは……」
否定はしているが、内心では無謀だと思っているだろう。自分もそうだ。
「けどね、春蘭。我が大剣。
今貴女が天下の武人に畏怖をもってそう呼ばれるのは、この私とともに大の中に小をはらませ、順の中に奇を盛り込み戦い抜いてきたからでしょう？
この曹孟徳とともにある限り、如何に無謀に思えようと貴女は何も心配しなくていいわ」
如何なる武人でも、如何なる智謀の持ち主であろうと、やはり春蘭以上の臣はいないのだろう。幼い頃主従の契りを結ぶ前は、華琳、春蘭と呼び合っていたそうだ。
その絆は、その信頼は、決して揺らぐことはない。曹孟徳の寝室に自由に出入りすることを唯一許されているとの噂が民の間にも広まっているほどに、二人の絆は固いのだ。
……まあ、寝室に出入りするという噂には、別の原因もあったりするのだが。

船が対岸に着く。
兵がぞろぞろと集まっているが、真昼間から堂々と乗り付けたのだ。誰もが上流から来たと思っている。
「延津で待機しなさい」
「「御意!!」」
漕ぎ手に指示を出し颯爽と歩き出す。
軽やかに馬に飛び乗るその姿に、袁紹軍の兵卒の誰もが見とれていた。
人ごみの中からざわざわと漏れてくる声を聞くと、どうやらお偉方の閲兵だと勘違いしてくれたらしい。
主の目配せで春蘭が前へ。威厳に満ちたその姿に、皆が一斉に姿勢を正す。
「ご苦労!!先陣の防備に精一杯励むがよい!!」
「「「「は、ははっーー!!!!」」」」
そのまま春蘭を先頭にゆっくりと進む。主を中央に置いて、将軍で挟み込むかたちだ。
「ご主君はいつでもご主君のままですね。
天下の覇を競う大戦の前でも、どこか遊びのように楽しんでいる」
返事はない。しかし、どうみてもこの状況を面白がっている。
「義姉上は楽しいでしょうが、私は生きた心地がしませんよ。
敵も兵卒ばかりではありません。面が割れた時はどうなさるのですか?」
優の嘆きを聞いて益々笑みが深くなった。
何か録でもないことを考えている。間違いない。
「その時は全部優に任せるわ。
大軍をから私を護り抜けば貴方の名も売れるわよ?」
「それは奉先殿が傍におられる時に頼んでください!!」
優が悲鳴を上げると同時に、後方からも大声が聞こえてきた。
「そ、曹操だ!あいつは曹操だぞ!」
「ほ、本当なのか!?」
「間違いねえ!昔洛陽であいつを見た!

それにあのさらしの巨乳は張遼だ！」
もうばれたか。
……いや。よく考えたら、あっさりばれるのが当然のような気がする。
「貴女を連れてきたばかりに見つかってしまったじゃない霞。
もしかしたら『神速』よりも『さらし巨乳』のほうが有名かもしれないわね」
霞の方へ振り返ってくすくす笑う。
霞はものすごく嫌そうな顔をしていた。
「やめてーな。それ、めちゃくちゃかっこ悪いやん……」
無駄話をしつつも場速は上がっていく。
「打ち合わせ通り、このまま本陣まで突っ込むわよ。
此処の司令官は文醜だったわね？」
「はい。間諜からの報告では、いつもこの時間は昼寝をしているようです」
ここからが速さが肝だ。敵軍が体制を整える前に脱出する。

「敵襲！敵襲です！」
「文醜将軍！敵襲です！起きてください！」
ああもううるさい。
「なんだよ～もう……数は？」
しぶしぶ目を開けると、妙に慌てた顔をした兵が二人。何があった？
「数は七騎です。で、ですが……」
「だからなんなんだよ。はっきり言え、はっきり」
「そ、曹操が自ら率いております！」
はいはい、曹操ね。
……ん？
曹操!?

がばっと跳ね起きる。何処だ。斬山刀は何処だ。
「文醜!!」
天幕の外から聞き覚えのある声。
間違いない。
ようやく見つけた得物を引っつかんで外に出ると、確かに曹操が居た。
「麗羽に一言一句違わず伝えなさい！
この戦にて袁紹は、曹操にからかい尽くされた後、必ず敗れることになる！とね」
麗羽様をからかい尽くす～？
「袁紹殿の新しいお気に入りにもよろしくお伝えください。荀攸がそう言っていた、と」
新しいお気に入り？
「沮授の兄貴のことか？」
荀攸の目が、細まった。
「ええ。よろしくお願いします」
最後の荀攸の表情が、妙に気になった。

幕間　王道と覇道

「文ちゃん！」
「おう、斗詩。元気そうだなー」
帰ってきた親友が無傷であったことにとりあえずは安堵する。
奇襲を受けたという一報が入った時には正直かなり心配した。何せ相手はあの曹操さんなのだ。何があっても不思議ではない。
「文醜将軍が戻って来られたぞ」
「やはり曹操の七騎に襲撃されたという噂は本当か？」
周りの兵がひそひそと話している。その中から、一人の男が進み出てきた。そのまま文ちゃんに向かって一直線に歩いてくる。
「どの面さげて戻ってきた、文醜」
「淳于将軍」
淳于瓊さんが文ちゃんを正面から睨みつけていた。物凄い形相だ。
私だったら震え上がっているだろうが、文ちゃんはいつも通りの呑気な顔のままだ。
「どの面さげてって……なんかまずいことでもあんのか？おっちゃん」
淳于瓊さんの顔がますます険しくなる。
「わずか七騎で陣のど真ん中に乗り込んできた曹操をみすみす取り逃がしたのだろう？しかもその上袁紹殿に言伝を頼まれただと？大失態もいいところだな」
「うーん、それなー」
文ちゃんががしがしと頭を書く。
「あたいは武人だからさ、言葉であれやこれや言われてもなあ。馬鹿だから上手いこと言い返せないし。しかも麗羽様への言葉だろ？ならあたいの出る幕じゃないじゃんか」
正直、少し驚いた。
この親友は呑気に構えていたのではなく、決してぶれない軸を持っていたのだ。
「道を開けてくれよおっちゃん。

早いとこあたいたちの戦を始めようぜ」

「この私がからかい尽くされて必ず敗れる……まあ、華琳さんらしいですわね」

文ちゃんの報告を聞いた麗羽様は意外に冷静だった。沮授さんが来た頃から、何処か貫禄が増したような気がする。

「どうします？麗羽様ー。

あたいとしては早速河渡って攻め込みたいかなあ」

「そうですわね……」

麗羽様が頬杖をついて思案していると、兵が大声を上げながら駆け込んできた。

「青州より急報でございまする！」

全員が何事かと入り口の方に振り返る。

「徐州北部に駐屯していた曹操軍が青州に侵入！

斉、北海、東海の諸郡を攻めて占領した後大部分の部隊はあっという間に撤収いたしました！」

撤収した？

「袁紹殿！これらは明らかに曹操の挑発でございます！

周辺に不安定な状況を作り出し、我が軍の注意を散漫にさせようとの策です！」

居並ぶ軍師の一人が声を張り上げる。それを呼び水に、諸官が次々と発言し始めた。

「挑発などどうでもよい！

問題は曹操の方から宣戦を布告したという一点にある！すなわち天子のおわする許都に向けて進軍する名分ができたのだ！

ここはまるごと踏み潰すが如く全軍で正面から攻めるのが王道！」

「違う！違う!!違う!!!

曹操は単に黄河をこちらから先に渡らせんと狙っておるのだ！」

「然り然り！王道だの何だのはまだ先の話だ！」

まずい。
気がついているのは自分と文ちゃんだけのようだが、麗羽様の機嫌が急速に悪くなってきている。
「何もわかっとらん！
殿が求めておられるのは敵の狙いなど意に介さない圧倒的な勝利だ！」
「曹操を侮るな！こういう議論こそ曹操の思う壺だということがわからんのか!?」
「曹操曹操と敵を中心に据えて考えれば殿の天下を小さくするぞ！」
その時だ。
議論をずっと黙したまま眺めていた一人の男が、突然手を打って大きな音を出した。
静寂。
誰もが突然響いた大音に気を取られている。
「文醜将軍が伝えてくれたのは、曹孟徳から袁本初への宣戦布告でしょう？ならばまずは我らが主のご意志をお聞きしないことには始まりません。そうではありませんか？」
沮授さんの言葉に皆がばつが悪そうに黙り込む。麗羽様をおいて議論が白熱し過ぎたのは確かだ。
「如何でしょう？殿のお考えをお聞かせ願えませんか？」
そう言って中指で眼鏡を持ち上げてみせる。思わず見とれてしまうほどに優雅な動作だ。額の刺青を相まってどこか神秘的にさえ見える。
「あまり気にしなくてもかまいませんわ。
華琳さんは昔からどこか外れたところを持っている人。不安定を好み不安定に強い。奇策に奇策を重ねて大きくなる。天子を奉戴したことはその良い例ですわね。
今回の宣戦布告だって、案外本当にこちらの様子を見に来ただけかもしれませんわよ？」
なるほど。確かに曹操さんは、常識の枠を軽々と飛び越えるようなところがある。

「……この前は沮授さんの策通りに上手くいきましたわね。
けれど、やはり私には似合いませんわ」
それは、意外なほど小さな声だった。
麗羽様が立ち上がる。
「この袁本初は、曹孟徳との戦においておもしろいことは求めませんわ。
小よく大を制するような奇計をとらない。
制覇は当然の如く成すべし！それが王者の戦いというものです！」
これだ。これこそが麗羽様だ。
心が、身体が熱くなってくる。
「ふむ。なれば……。
私は審配殿の意見を支持します。
曹操という乱世の元凶とも言うべき人物を討つ時は、覇道に王道を交える必要があります。曹操には都、天子をはじめ全てを投げ出し殿の足もとにひれ伏すように敗れてもらうのがよろしいでしょう」
自分の意見を具申しつつ、さりげなく先輩である審配さんの顔を立ててみせる。本当に卒が無い人だ。
「審配さん！軍備は⁉」
「調練、武具甲冑、食料、全て万全に整っております！」
審配さんがすぐさま答える。
「ならば、今この時を以って開戦しますわよ！
直ちに本営を黎陽に移し全軍渡河に備えなさい！」
「「「「御意!!!!」」」」
居並ぶ全員が跪いていた。
一見静かに見える文武諸官。その内面は、触れれば天まで弾け飛びそうなほどに気に満ちいきり立っている。
「さあ！天地開闢以来の大戦をごろりとところがしますわよ！
華琳さんが如何なる謀をめぐらし如何なる策を練ろうと、それは私の覇業の添え物に過ぎないのです！」

「――いらっしゃい」
店に入ると、相変わらずの仏頂面の店主がいた。
軽く手を上げてから席に座る。いつも通り、何も言わなくても酒と蒸し豚が出てきた。
「すまない。また待たせてしまったかな」
隣に座り凪に声を掛ける。
「お気になさらず。待つことが苦痛なようでは、飛爪軍の隊長など務まりませんよ」
それもそうだ。とはいえ、すまないと思っているのは本心だ。詫びの代わりではないが、自分の壺から酒を注いでやる。
「ありがとうございます。
それにしても、こんな場所があったとは驚きました。一刀殿がよく街の大衆食堂へと通われていることは知っていましたが……」
凪が当たりをぐるりと見回す。何人かと目が合ったのか、静かに杯を掲げてみせる客もいた。その全員が曹操軍の兵だ。
「元々は寝ずの番の兵のために大将が差し入れ持って来るだけだったんだけどな。兵の間で美味いって評判になって、おっつかなくなったんだ。
で、それならいっそ店を開いてしまえってことになってね。油と種火は城で負担するかわりに、曹操軍の兵は格安で食事ができるようにしたんだよ。
店を開くのは真夜中から明け方まで。人は、深夜食堂なんて呼んでるよ」
「……うちの店の名前は、ただの『めしや』なんだがな」
大将が包丁を研ぐ手を止めないままぽつりと呟く。当然視線も落としたままだ。
そんな態度だから偶然覗いた客がすぐに逃げ出すことになるのだが、いくら忠告しても一向に直る気配がない。
「良い店だと思います。
一人で居ても、沈黙でも、心地良い。そう感じました」

「……ありがとよ」
大将が一瞬だけ手を止めて礼を言う。
暫く、凪の言う心地良い沈黙が続いた。
深夜、酒を飲み肉を食う音だけが響く。
「首尾は？」
酒のおかわりを注文した後に問う。
「上々です。
第一次入隊の兵、二十五人。滞りなく潜り込みました」
凪もまたこちらを見ないまま答えた。
「素晴らしい。正規軍に潜り込むのは少々難しいかと思ってたんだけどね」
「私もそう思っていましたが……」
言いたいことははっきり言う凪にしては珍しく言い淀んでいる。
「皆様が、その、思ったよりも暴れていたものですから。兵の動揺や混乱も大きかったのです。そのおかげですね。
……その分、兵に紛れながら護衛するのに苦労しましたが」
最後に付け加えられた台詞に苦笑いする。
なるほど。確かにあれは大暴れだった。
「潜り込んでいる人員と連絡は？」
「陣の移動がなければ、三日ごとに。
毎回人も時間も変えるように手配しています」
とりあえずは問題なさそうだ。
とはいえ、潜り込む日数が長引けば長引くほど、ばれる危険性は高まる。
「では、最終目標は打ち合わせ通り兵站線の情報の入手。時間はかかっても構わないが、必ず正確な情報を入手するように。偽の情報を掴ませられることだけは絶対に避けるように」
「わかりました」
追加の酒と肉が運ばれてくる。
その後は、店を出るまで無言だった。

執務室での日常

「失礼する……これまた凄いなこりゃ」

執務室の扉を開けると、なんというか、凄いとしか言いようが無い光景が広がっていた。

本来ならば大人数を集めて会議をするための部屋なのだろう。かなりの広さがある。その部屋を、曹操軍の軍師たち六人で使っている。

綺麗に並べられた机の上のあちこちに竹簡の山、山、山。部屋には仕切りも何もない。各々が自由に動き回り、竹簡を手にとっては読みふけり、或いは処理していく。曹操軍に身を寄せてからは驚かされてばかりだが、それは部屋一つとっても同じらしい。

この部屋に来るように言われたわけだが、軍師たちはそれぞれの仕事に没頭していて自分に気づく様子はない。とりあえず笑顔で扉のすぐ横に立っていることにした。こういう時はこれが正しい礼儀だったはずだ。

「ああ、白珪殿でしたか。

どうぞこちらへ。騒がしくて申し訳ありません」

そう待たずに荀攸が気づいて声を掛けてくれた。招かれるままに手近な椅子を引いて座る。

腰を下ろすと、もう一度辺りを見回す余裕ができた。

荀攸の年上の姪だという荀彧。元董卓軍の軍師であった賈クに陳宮。最近加入したばかりだという郭嘉に程イク。何れも天下に聞こえる才媛ばかりだ。その彼女らが頻繁に互いの机を行き来し、声を掛け合い、時には大声で怒鳴りあいながら仕事をしている。

「気になりますか？」

気づくと荀攸が軽く笑いながらこちらを見ていた。

「気になる、というか。

普通は政務って個人個人の部屋でもっと静かにやるものだろ？こんなのは初めて見たよ」

荀攸はもありなんとうなずいた。
「最初はそうしてたんですけどね。ご主君から命じられる仕事の種類があまりに多岐にわたるものですから。一々お互いの部屋を行き来するのも面倒ですし、いっそ全員同じ部屋にしてしまえ、となりまして」
なるほど、合理的ではある。
「機密とかは大丈夫なのか？外に漏らせないものだってあるだろう」
「防諜は私の担当ですから、備えはしてあります。
貴女も見たでしょうが、入り口には季衣がいます。まず招かれざる客が入ることはありませんよ。季衣なら何を聞かれても問題ありませんしね」
季衣。確か許チョの真名だったか。
あの小さな身体で、自分の身の丈よりも遥かに大きい鉄球を軽々振り回すという。
確かにあの娘がいれば、まず誰かが押し通るなんてことはないだろう。
「随分信頼されてるんだな、許チョは」
正直、すこし羨ましい。
「ええ、信頼していますよ。
腕も、頭も」
ん？
「頭も？」
疑問がついそのまま口に出た。
「ええ、頭もです。
季衣ならば、もし機密を聞かれても半分も理解できないでしょうから」
なんて大真面目にうなずいている。
「お前、意外と容赦ないのな」
「いえいえ。これも信頼の表れです」
沈黙。
堪え切れずに笑い出したのは、二人同時にだった。

ひとしきり笑った後、仕切り直しというように荀攸が言う。
「その後体調のほうは如何ですか」
「とりあえず普通に動く分には問題ない。戦に出るとなると、どうかな」
麗羽の策にまるで気づけず無様に敗走した自分を曹操軍はすんなりと受け入れてくれた。最初は桃香がいるからかと思ったが、どうもそうではないらしい。一部の幹部からは桃香よりも歓迎されていたりする。後は中立、悪く言ってもあまり関心が無いかのどちらかだ。少なくとも悪意や敵意は持たれていない。
当の桃香は自分に向けられた負の感情に気づいているのかいないのか、いつも通りのままだった。最近は頻繁に皇帝陛下に謁見しているという。今では陛下のお気に入り、だそうだ。
義妹の愛紗は一目でわかるほどに調子がよろしくない。原因はわからないが、どうも何かに悩んでいるようだ。鈴々は相変わらずの元気娘だった。
そんなことを考えている間に、荀攸が竹簡の山からお目当ての物を抜き出していた。
それを広げて眺めながら話を続ける。
「では、やはり暫くは兵の調練をお願いします。担当するのは騎馬隊ですね。いずれは張遼軍に合流させる予定ですのでそのつもりで」
身が引き締まった。紺碧の遊撃隊の噂は聞いている。その軍に加わる兵を育てるのか。
「責任重大だな。
新参の私をそんな大事な任に就けていいのか？」
「問題ありません。
唯才があれば用いる。それが曹陣営の方針ですから」
唯才。曹操が出した布告、求賢令。
改めてとんでもない所に来てしまったという思いと、自分の才が認められて嬉しいという思いの両方がある。腕を組んでうーんと唸ってしまった。
「それに、心配もしていません。貴女は人が良いですから」

おやっと思う。
洛陽で顔を合わせたことはあるが、会ったのはその一度きり。以降はまともに会話をしたこともなかったはずだ。それにしては、なんというか好印象だ。
「そうなのかなあ。
人が良いのは桃香――劉備だろ？あいつ、だれにでも優しいし」
面と向かって男に人が良いなんて言われるのは初めてだ。照れくさくなって桃香を引き合いに出すと、何故か荀攸の目つきが少し険しくなった。
「人が良いのと優しいのは別ですよ。
それに……」
「それに？」
何かを言おうとしたのだが、いえ、とだけ言ってやめてしまった。
「白珪殿は、人に何かを頼まれると断りにくい方でしょう？」
今度はずばり聞いてきた。
「う。ま、まあそうかな」
「で、一度引き受けるとその後も頼まれごとが積み重なって」
「う」
「気がついた時には自分だけがが損している」
「え、ええと……」
「それでも、満面の笑みで『ありがとう！』なんて言われたら仕方ないかな、なんて許してしまう」
容赦がない。しかも当たっているから否定できない。
実は私と桃香のこと監視してたんじゃないだろうな？
「優しい人とは、その損を承知の上で被り、その責任を取れる人のことをいうのです。そういう意味で、貴女はただ人が良いだけですね」
……あんまりいい意味じゃなかったわけか。
「ですが、貴女はそれでいいと思いますよ。
……優しいだけでは、為政者としては長くやっていくことはできません」
そう言って口を閉ざした荀攸の顔は、何故だかとても悲しそうに見

えた。

「では、この竹簡を持って調練中の張遼軍に合流してください」
「ああ」
公孫賛が竹簡を受け取って部屋を出る。
扉が完全に閉まるのを確認してから口を開いた。
「お人好し以外の何物でもないわね」
「桂花もそう思うか？」
一刀が苦笑いしながら再び席に座る。
「色々苦労を抱え込んで、最後に貧乏くじを引かされる手合いね。
乱世に生き残れない種類の生き物でしょ、あれは」
「見るからに苦労人だよなあ……」
そんなことを話していると、先程公孫賛が出て行った扉から、今度は月が入って来た。
「皆さん、お茶が入りましたよー。
少し休憩しませんか？」
月の声に真っ先に反応したのはやはりというか詠だった。それに釣られて残りの面々も竹簡を放り投げて集まってくる。最初は口うるさく注意していた稟も同様だ。順調に毒されてきている。
「珍しく一刀さんがお仕事の手を止めてましたけど、何の話をされていたんですか？」
月が皆にお茶を配りながら問う。仕事の手を止めていたという言葉に、稟と陳宮がじと目になっていた。
「ちょっとね。
白珪殿は、お人好しで苦労人だって話」
一刀が答えると、自分以外の全員がああ、という顔をした。どうやら公孫賛の性格は既に共通認識だったようだ。
「これからは少しは楽になるんじゃないですか～？
暫くは前線に出ることはないでしょうし～」
風がいつもと同じのんびり間延びした声で言う。

「まあ、正式に加入した以上はしっかり働いてもらいますけどね。
前線指揮官、軍師としても彼女が加わったことは助かるんじゃないですか？」
稟が眼鏡を持ち上げながら陳宮問う。
その陳宮は、口いっぱいに胡麻団子をほうばっていて喋れなくなっていた。全員の視線を向けられで驚いたせいなのか、喉につっかえている。
一刀がお茶を渡すと、一気に流し込んでむせていた。
「そうですな。
能力はそこそこかもしれないですが、あれほど使い勝手の良い将は中々いないので重宝するのです」
自分の失態など何もなかったように話すその精神にはある意味感心するが、口の端にあんこが付いていてはただの子どもが背伸びして話しているようにしか見えない。
一刀が指でそのあんこを拭ってやり、そのまま口に運ぶと顔を真っ赤にして恨みがましそうに睨んでいた。
……ちょっと羨ましかったのは内緒だ。
「使い勝手が良い将って、どういうこと？」
月が疑問の声を上げる。
返事をしたのは当然のように詠だ。
「うーん。
感覚的なものもあるから説明しにくいけど……どんな局面でも使える将、かしら」
どう？と詠が目だけで問うてくる。
お茶を飲みながらうなずく。概ねそれで間違いないだろう。
「戦の規模が大きくなればなるほど、兵の数、将の数も多くなる。これは当然なんだけど、問題はその将の性質なのよ」
「将の性質……」
月が親友の言葉を繰り返す。
その後をついだのは一刀だ。
「例えば、そうだな……今回の袁紹との戦に、五人の将が参加するとし

て。
その五人全員が春蘭だったらどうなると思う？」
一刀の例えに思わず飲んでいたお茶を吹き出しそうになった。
あの脳筋が五人？勝手に湧き出しそうになった想像を頭を振って消し去る。
「それは……あんまりうまくいかなそう、かな？」
「じゃあ、秋蘭が五人なら？」
「それも、良くなさそうかなあ……」
月の答えに、一刀と詠が大きくうなずいた。
「つまりはそういうことよ。さっきのは極端な例だけどね。
軍全体を一つの生き物として動かすには、猛将ばかりでも駄目だし、知将ばかりでもだめなの。
生き物なんだから、それぞれに役割があるのが当然。頭があって、手があって、胴があって足がある。それぞれ役割が違って、それぞれがその役割をきちんとこなすから色々なことができるの」
その通りだ。
さっきの例だと、春蘭が五人ならば、それは筋骨隆々の腕が五本あるだけ。それをどのように使うかという頭も、支える足も存在しない。
「白珪殿は、どんな局面でも使える将。
つまり、頭にも、手にも胴にも足にもなれる将、って言えばわかりやすいかな」
「なるほど……」
月が尊敬の目で一刀と詠を見ている。
詠が嬉しそうなのは構わないが、一刀の顔が僅かに赤くなっているのはどういうことか。
むかついたので、机の下で一刀の脛を蹴ってやる。
「つっ！」
一刀がびくっと震える。
どうしたのかと皆が問うが、何でもないと誤魔化してた。
……風だけは、にやにやとこちらを見ていたが。

いつの間にか胡麻団子の殆どが消えていたことに気づいた詠と稟が陳宮に食ってかかり、自分は成長期だ、二人が食べても太るだけだと返され言葉に詰まる。太ってるように見えるか、と詠が上目遣いで一刀に迫り、また脛を蹴って、風は大騒ぎしている間にちゃっかりと残りの団子を食べる。

恒例となったお茶会は、今日も騒々しい。

だが、こんな馬鹿騒ぎも嫌いではなかった。

暗闘

茂みの中に身を伏せたまま干し肉を齧る。そして一つまみの塩。たったそれだけで、身体の隅々にまで活力が戻ってくるのを実感できた。

塩はなくてはならないもの。頭ではわかっていたが、実際に体験してみるとまるで違う。

調練を繰り返した。最初は何もかもが手探りだった。今までにはない、全く新しいかたちの軍を一から創ろうというのだ。困難は予想以上だった。

ただ穴を掘っては埋めを繰り返す。飲まず食わずで何日も山野で過ごす。命綱なし、身一つで崖を越える。一見無意味に思える調練も、今振り返ってみれば確実に身になっている。でなければ、この監視任務も途中で音を上げていただろう。

それらの調練を考えたあの人は、そもそも飛爪軍などというものを創ろうと考えたあの人は、異質だ。生き方が、価値観が、発想そのものが異質。そういうところは、どこか主に似ている気がする。

その異質な人が言った。

『沮授という男は――同類なのかもしれない』

誰と、とは言わなかった。

沮授。

突如袁紹に仕官し、瞬く間に信を得幹部に成り上がった軍師。

経歴は一切不明。年さえもわからない。

能力はあるのだろう。素性の怪しい成り上がりがと妬む声もあるが、謙虚なその態度に彼に好感を持つ者も少なくないという。

沮授　と荀攸。この二人を、一体何を以って同類とするのか。共に若く有能な軍師ではあるが、そんなありきたりな理由ではないだろう。

気になる点が、ないわけではない。荀攸という男は元々別にいた。流行り病で幼い頃になくなったその名を、一刀が貰い養子となったら

しい。荀家に拾われるまでの経歴は、 沮授と同様全くわからない。
二人とも、まるでその時まではこの世に存在しなかったかのように。
馬鹿らしい考えだとは思う。しかし、そうだとすればしっくりくるのだ。
そんなことをつらつら考えていると、ついに動いた。
沮授だ。
真夜中だというのに、護衛の兵の一人もつけずに天幕から出て林の方へと歩いていく。
『袁紹が本陣を動かす前に、必ず誰かと連絡を取るはずだ。沮授は気軽に本陣を離れるわけにはいかないだろうからな。直接か、人や物を介してかはわからない』
読み通りだ。
決して気配を悟られないように、息を殺して移動する。
『相手が下っ端ならいい。それ以外――この白装束を着た男、顔を頭巾で隠した男なら無理はするな。無手で霞と渡り合った手練だ。気づかれないことを最優先に行動すること』
沮授の足取りに迷いはない。一切足を止めずに林の奥深くへと進んでいく。
特に周囲を警戒している様子は無い。油断なのか、それとも余裕なのか。
やがて、薄く月明かりが差し込む開けた場所で立ち止まった。
「待ちましたか？」
沮授が誰も居ない虚空に向かって問いかける。
噂に聞く妖術の類だろうか。張三姉妹は、公演に声を遠くまで届ける妖術を使っていると聞く。そのようなものがあれば、離れた場所にいる仲間と会話もできるかもしれない。
その予想は、すぐに裏切られた。
「ああ、待った。かなり待った。嫌というほど待った。
一体何処で遊んでいたんだお前は」
いつの間にか、沮授の正面にある木の幹に誰かがもたれ掛かってい

る。
幹から背を離し、沮授に向かってゆっくりと歩き出した。月明かりで顔が見て取れるようになる。
男だ。まだ若い。一刀とそう年は変わらないだろう。沮授と同じく額に刺青がある。模様は微妙に違うが、何処と無く似てはいた。
「いけませんねえ。
そこは『私も今来たところだから気にしないで』というのが逢引きの常識ですよ」
沮授の言葉に、男は心の底から嫌そうな顔をした。

「何が逢引きだ、気色悪い」
「つれませんねえ」
沮授は両の掌を上に向けてやれやれなどと言っている。男のこめかみが引きつっていた。
「お前の戯言に付き合ってる暇はない。
さっさと本題を話せ、干吉」
干吉。
沮授はやはり偽名なのか。本名は、干吉。
干吉の顔が真剣なそれに変わる。
「こちらは予定通りですね。
官渡の戦いはもうすぐそこです」
干吉の言葉に、男はふんと鼻を鳴らした。
「勝てるのか？」
「さて、やってみないことにはわかりませんよ。
まあ、勝てるかどうかは二の次です。重要なのは戦を起こすことですから。そしてそれは苛烈であればあるほど良い。
それだけ――多くの血が流れることになります」
干吉がにやりと嗤う。
それは、沮授として袁紹軍で見せていた愛想の良い笑顔とは全くの別物だった。
人が、あれほど邪悪に嗤うのを初めて見た。

「勝てなくとも良いのです。
戦の果てに、この乱世の果てに多くの血が流れればそれで良い。
人口が減り続ければ、国家としての体を成せないほどに人が死ねば、それはこの外史の崩壊に繋がる」
なんなのだ、それは。
天下の覇者となることでもなく、漢という国を滅ぼし新しい王朝を開くことでもなく。
ただ戦を起こし、ただ人を殺し、この大陸そのものを滅ぼそうというのか。
「……相変わらずの悪趣味だな。
まあ、俺はあいつを殺せればあとはどうでもいいが」
男が眉を潜める。
仲間ではあるのだろうが、干吉の思考はあの男にとっても気分が良いものではないらしい。
「私には貴方も趣味が悪いように思えますけどね、左慈」
「なんだと？」
男――左慈の機嫌がまた悪くなる。
「何かにつけて、北郷一刀、北郷一刀、と。
まるで恋する漢女のようじゃないですか」
「よしわかった。死にたいんだな？
一応は同志の情けだ。せめて楽に殺してやるからそこに座れ」
左慈が干吉の顔へ向けて左足で見事な蹴りを放つ。
干吉はそれをしゃがむことでかわす。が、それでは次の右足の蹴りに対処できない。
――が、追撃の蹴りは干吉の顔面に当たる寸前で止められた。
「……何故避けない」
「貴方を信じていますから」
そう言ってにこにこと笑う顔は、沮授のそれに戻っていた。
「……よく言う」
苦々しげに吐き捨てる左慈だが、沮授の言う通り最初から当てるつもりはなかったのだろう。

……少々殺気がこもり過ぎているようにも感じたが。
「では、私はこれで失礼しますよ。
あまり遅いとさすがに怪しまれますからね」
沮授が優雅に立ち上がる。
「その蹴りは――そこのねずみにでも当ててあげなさい」
「……ああ、そうだな」

ねずみ――自分か！

急いで跳ね起きた瞬間には、既に左慈は恐ろしい速さで此方に迫ってきていた。
「殺!!」
飛び上がり蹴りを放ってくる。側頭部への的確な一撃。
なんとか防ぐ。手甲越しだがかなりの衝撃だ。
体勢を立て直す。
着地したばかりの左慈の顎めがけて左のきざみ突き。
かわされる。すぐにもう一度。続けて右の拳。
「――ちっ」
舌打ちが聞こえた。明らかに苛立っている。
放った拳は全て余裕を持ってかわされた。こちらの腕がどうだというわけではないだろう。
干吉に放ったものと同じような軌跡を描く頭部への蹴り。
先程から執拗に頭を狙ってくる。殺意の表れなのか、それとも昏倒狙いか。
再び左腕で受ける。受けたその足を右手で掴んで捻る。
折る。
完璧に極めたはずの技は、身体を足が捻られる方向に回転させることによってはずされた。
そのまま両手を地面につきまたも頭部への蹴り。頭を引いてかわ

す。
左足で足元を薙ぎ払う。手だけで後方に跳ねてかわされた。綺麗に両足を揃えて着地する。そのまま再び後方へ跳ぶ。両手を揃えて地面につき、身体を跳ね上げて回転させる。まるで重さなどないかのように両足で着地した。
五歩ほどの距離をおいて睨み合う。
強い。
無手のみならば、間違いなく今までで一番の手練れだ。
暫くお互い無言のまま対峙する。
「……今の技。柔か。
北郷一刀の仕込みだな」
北郷一刀。
字と真名を続けて呼んでいる。そこに、僅かに違和感を覚えた。
一般的には、姓と字を続けて呼ぶものだ。
「荀攸殿の知り合いか?」
沮授の同志というのならば、この男も『同類』なのか。
「ああ、あいつのことはよく知っているさ。
むこうは俺のことなど知らんだろうがな」
左慈や干吉が、一方的に知っている。そういうことだろうか。

「……まあいい。
俺にはやることがあるんでな。お前と遊ぶのはまた今度だ」
そう言うや否や足元の砂を蹴り上げる。目晦ましか!?
「くっ!待て!!」
言ってはみるが、それで待つはずもない。
目を庇った腕を下ろした時には、既にその姿は消えていた。

大戦の幕開け

「おもしろい。おもしろくない。おもしろい。おもしろくない」
曇りがちの空の下、見事な庭の一角。
止める者など誰もいないから、と好き勝手に自ら造り上げた庭。その庭石の一つに、主である曹孟徳が座っている。
手元から、こつこつと竹簡を筆で叩く音が響く。
どうやら花びらを一つずつちぎっていく花占いを竹簡でやっているようだ。
「風」
竹簡を叩いていた音が止まる。結果はどうでたのか。
「はい～」
「貴女は、戦にはおもしろい戦とおもしろくない戦があると思う？」
閉じていた目を開ける。さて、どう答えるか。
「……戦とは結局殺し合いですから。それにおもしろいもおもしろくないもないと風は思うのです」
今度は、とくとくと酒を杯に注ぐ音。
「では、戦をする人は？
戦をおもしろいと感じた方が勝つのかしら？それともおもしろくないと感じた方が勝つのかしら？」
先程の問いとは似ているようで微妙に違う。そうなれば、自分の答えも変わってくる。
「風は……軍師として、戦におもしろさを求めてはならないと考えます」
「なるほどね」
そう言って酒を一口。
「稟や詠が言うのならまだしも、空に心を浮遊させ、宝譿と心遊ばせる風がそのような思いを抱いているとはね。
曹操と袁紹の戦いとは、そんなに大変なものなのかしら」
杯を傾けながらくつくつと笑う。これからあの黄巾を超える大軍と戦をしようとしている人物にはまるで見えない。

「稟ちゃんはなんと言っていましたか～？」
そう問うと、咳払いをした後にこめかみを指で押さえて話し始めた。
「『袁紹との決戦は、未だこの天下にはびこる旧体制の打倒！
名門袁家の傘下で漢帝国の利権にありつこととする四百年の濁った慣行を根絶やしにすることです！
すなわち、敵は袁紹という一個の人間ではなく、袁紹のもとで生き長らえようとする悪政、悪弊の権化の如き巨獣でしょう！』
……だそうよ」
声色、仕草までそっくりだった。あの指は眼鏡を持ち上げる真似だったらしい。
「稟ちゃんらしいですね～」
「そうね、そして危ういわ」
こっちへ、と手招きされる。
言われるがままに近づき、隣の手ごろな石に座った。庭石としては普通なのだろうが、小柄な自分には少し大きくて座りにくい。
丁度良い場所はないものかともぞもぞしていると、その間に酒で満ちた杯を渡された。
「あの娘は麗羽との戦いを恐れるというよりも苛立っているわね。
麗羽のようにおもしろ味のない者と戦うことが妙に苛立たしく、よもや負けるのではあるまいか、なんてことにばかり考えを巡らせているのよ」
「稟ちゃんは、真面目ですから」
主にならって酒を口に含む。
芳香が口の中いっぱいに広がった。旨みがしっかりと感じられる。そんな酒だ。
「人は、このお酒と同じなのですよ」
そう言うと、大袈裟に驚いた顔をされた。
「人は酒と同じ。おもしろいわね。
程イク先生の考えをお聞かせ願おうかしら」
その目は、まるで英雄譚に憧れる子どものように輝いていた。時た

ま見せるこの無邪気な顔が、劉備とはまた違ったかたちで人を惹きつける。
「人は誰しも心に負の部分を、心の闇を抱えているのです。
自分の武を戦場で振るいたいという気持ち。
自分の軍略を試したいという気持ち。
突き詰めれば人を殺したいと思っているのと同じだとわかっていても、どうしても捨てられない。心の何処かにいつまでも残っている」
そしてそれは自分の中にもある。厄介な軍師の性だ。
「それを負とも闇とも思っていない者もいるけれどね。
春蘭がそうだし、陳宮がそうでしょう」
その通りだ。一つうなずいて同意する。
「稟ちゃんはそれをなるべく遠ざけたいと思っているのですよ。
ですが、清濁合わさってこその人間だと風は思うのです。この酒と同じように、僅かな雑味がなければ旨みもないのですよ。
風の中には、戦におもしろさを求めてはならないと思う風と、軍略を十全に試すことのできる戦を楽しみする風と、二人の風がいるのです」
あの生真面目な親友も、そのことに気づいてはいる。自覚しているからこそ、それを遠ざけようとしているのだ。
「それでこそ人間、それでこそこの曹孟徳の臣よ。
人が正のみで、善のみでできているなんて思い込んでる者にはわからないでしょうけどね」
そう言って立ち上がる。
その目には、強い光が宿っていた。
「魔天を開けるわよ」
戦が、始まる。

黄河北岸渡河点、袁紹軍本軍。
今まさに黄河を渡り攻め込まんとする袁紹軍の前に、一人の老人が身一つで向き合っていた。
「この田豊！袁紹殿の渡河だけはお諫め申す！」
両手に松明。船の上で、火をつける寸前の状態だった。
「曹操との決戦は策でござる！
外の群雄と結び曹操以上の奇策、奇略存分に駆使せねば決して勝てませぬ!!
袁紹殿自ら何の策弄さず四十万の大軍を率いて渡河するなどもっての他！」
松明が落とされる。火は遠からず船全体に回るだろう。
命を賭しての諫言に、兵がどよめいている。
「おやめなさい田豊殿。
貴方が諫言を呈し続けてこられたのは殿を思うが故ではないですか。
殿はご自分の王道に拘っておられるとしても、今我が軍の気焔はこれ以上ないほどに猛っております。下手に奇策に走ることは、返って兵の士気を損ねることになります」
沮授が田豊を穏やかに説得する。
だが、田豊はちらりと一瞥しただけで黙殺した。
「袁紹殿！貴女には心の闇がない！」
船が徐々に火に包まれていく。
「名門に生を受けた貴女は最上最高の境遇に育ちまさしく王の道を歩んでこられた！それはいわば陽の道！
しかし覇業とは陰惨にして凶虐なるものをたっぷりと懐に抱いておかねば完遂できるものではござらんのです！」
火が、服の裾に移った。
「田豊さん」
その田豊を一言も発さず眺めていた袁紹が、初めて口を開いた。
「私の道は一点の陰りも必要としない陽の道ですわ。
私は天下万民と共に出ずる日輪を祝うが如くこの戦を始め、日輪が

大地を照らし恵みをもたらすが如く新王朝の威光でこの大陸を包むのです。
すなわちこの袁本初が火蓋を切ったこの戦は、祝福の声に満ちためでたい戦なのです！」
老軍師が、火に消えて逝く。
「およそ戦とは禍々しい凶事以外の何物でもござらん！
その沮授が殿の傍らにおる限り、貴女に祝福など訪れませんぞ！」

同時刻、黄河南岸渡河点、白馬津。
望み通り先陣を任された文醜軍は怒涛の勢いで城に籠る劉延軍を攻めたてていた。
「おらおらおらー――！
遂に来たぜー――！大戦の幕開けだー――！」
袁紹軍が誇る二枚看板。その名に恥じない強さだ。
「この斬山刀の錆になりたくないやつはさっさと逃げ出せよー――!!」
「「「「「「「「「「おおおおお!!!!!!!!!!」」」」」」」」」」
新たな王朝。新たな時代。
それを自らの手で切り開くのだという気焔が、兵の末端まで広がっている。
「劉延将軍！城門が破られるのは時間の問題です！」
副官の焦った報告を聞いても、劉延は動じなかった。
「落ち着け!!!!心を平静に保ち兎に角防御に徹するのだ!!!!」
指揮官の一喝を受けて、周りの兵の動きがぴたりと止まる。
「曹操殿はこの戦況を予想しておられた！そしてそれを覆す援軍をよこすとも！
なれば我らはそれを信じて耐え続けるのみ！よいか!!」
その時。

物見台の兵が、劉延に負けない大声を上げた。
「援軍！援軍です！」
城内が歓声に包まれる。
「旗は……玉碧の関!!紺碧の張!!
そして……深紅の呂です!!!」
歓声が、爆発した。

突如として城内から歓声が沸き上がった。
「文醜将軍！敵の援軍です！」
「あんだって!?」
慌てて振り返ると、味方からも大声が上がる。
「りょ、りょ、呂布がいるぞー!!!」
呂布。
その名を聞いただけで、全軍が恐怖に包まれた。
虎牢関で正面から攻め込んでいた袁紹軍にとって、呂布という存在は恐怖の象徴だ。
天にも昇る勢いだった士気が、一瞬でどん底まで落ち込んでしまった。
「しかもあの旗……張遼に関羽までいやがる！」
「どっちも化け物じゃねえか！」
不味い。このままだと、軍が軍として働かなくなる。そうなれば、ただの逃げ惑う獲物と同じだ。
「狼狽えるんじゃねえー！
全員迎撃用意！数はこっちの方が上なんだ！陣の中に引きずり込んで始末する!!」
腹の底から出した声に、周りの兵がようやく動き始める。
「敵の攻撃は兎に角受け流せ！本軍が来るまで持ちこたえろよ!!」
流石に四十万もの大軍となれば、呂布も撤退する……はずだ。
「あたいが呂布に狩られるのと、麗羽様が来るの……どっちが先かな」
斬山刀を担ぎなおす。

斗詩の顔が、何故か頭に浮かんだ。

紅河

「曹操さん、大丈夫ですかねえ」
向かい合って座る劉備が茶を抱えながら言う。
最近は、こうして共に茶を飲むのが日課になっていた。
「関羽ではなく、曹操の心配なのだな」
同じく茶を啜りながら問うてみる。
すると、劉備はにっこり笑った。
「愛沙ちゃんのことは、信じてますから」
「……そうか」
それだけしか返せなかった。
皆が口を揃えていう通りだ。本当に、この根拠のない自信は一体何処からくるのか。さっぱりわからない。何の曇りもない笑顔を向けられては、何も言葉がなかった。
劉備には、邪気というものが一切ない。色で言うならば、真っ白だ。邪気や負の感情が全くない人間は、返って恐ろしく感じる。
純粋に皇帝である自分と漢王朝の行く末を案じている劉備に恐れを感じ、漢王朝を滅ぼすかもしれないと明言している曹操に安堵する。これも自分を利用しようとする欲に塗れた人間と日々接する皇帝という身分の弊害だろうか。
そんなことを考えながら劉備の顔を見つめていると、にぱーとでも音がつきそうな顔で見つめ返された。
「陛下は曹操さんが心配じゃないんですか？」
満面の笑みのまま問いかけてくる。
この笑顔にほだされる民が多いというのもうなずける。庇護欲をそそる、という言葉はこういう者に使うのだろう。
「さて。
心配か、と問われると……しておらんな」
そう。心配など、全くしていない。
「特にこれといった理由はないのだがな。
朕には、曹操が袁紹に負ける様がどうしても想像できぬのだよ」

それを聞いて、劉備はあははと笑った。
「なんとなくわかる気がします。
曹操さん、何でも当たり前みたいにやっちゃいますからねえ」
腕を組んでうんうんうなずく。
皇帝の前で腕を組む。人一倍漢王朝に敬服していながら、そんなことを平然とやってのける。
やはり、量れない。
――曹操よ。そなたの言う通り、この娘、化けるやもしれぬな。
話しているうちに温くなってしまった茶を啜りながら、自ら最前線へと出向いた曹操に心の中で声を掛けた。

「――さて、貴女の曹操軍の将としての初仕事よ、関羽。
遠慮はいらないわ。その武、存分に振るってきなさい」
大将が関羽に声を掛ける。
「はい。
敵は皇帝を僭称し漢朝を滅ぼそうとする賊軍です。もとより遠慮などするつもりはありません」
ここ最近ずっと浮かない顔をしていた関羽だが、さすがに戦となると表情が切り替わった。迷いや不安は置いてくる。それができないようでは、将足り得ない。
「それは当然だけどね。
私の言う遠慮とは、味方に対してもよ」
味方に遠慮するな。
一体どういう意味なのか。顔を向けると、関羽も同様に大将を見ていた。
「貴女軍は、と言うよりも劉備軍は元々義勇軍でしょう？そして最近では飢民が多く合流してきていた。貴女の将器や張飛の武で補っていたけれども、軍としての錬度は限界があるわ」
確かにそうだ。いくら豪傑の二人がいようとも、それだけでは軍がいきなり精強になったりはしない。

まあ、恋という例外もいるにはいるのだが。
「曹操軍の錬度は四海随一よ。将から末端の兵の一人一人にいたるまで、ね。
この軍には、貴女の将器を存分に活かし、貴女の思い描く用兵をそのままに実現し得る兵が揃っている。
一切の遠慮なく、ただ将であることに徹しなさい」
「……はっ」

そして今関羽は曹操軍の将として戦場を縦横無尽に駆け回っている。
一人突出して敵兵を蹴散らしたかと思えば、次の瞬間には集団の中央にいて指示を出している。関羽とそれに付き従う兵が通り過ぎる度、まるで大きな鎌を振るっているかのように文醜軍が刈り取られていく。
「さすがね。
瞬く間に敵の猛攻がずたずたになったわよ」
「劉延殿もそれに呼応して城内から兵を出していますね。これで挟撃のかたちになりました」
大将と稟が口々に感想を述べる。
確かに見事ではある。それは認める。
しかし、これだけ味方が優勢になっていても心が沸き立たない。
やはり、自分は関羽が嫌いなのだ。
「どけどけどけー！あたいの道を開けろー！」
一方的に兵が蹂躙されることに我慢できなくなったのか、文醜が関羽に向かって突っ込んでいく。
「お前らは近づくなよー！
並みのやつは相手にならねえ！」
将としては、判断は間違ってはいない。
だが――。

「貴女の武は、関羽にどこまで通じるかしらね、文醜」
すれ違い様に一撃。青龍方と斬山刀がぶつかり合う。
文醜が顔を歪めて後ろに弾き飛ばされたのに対して、関羽は僅かに馬上で身体が揺らいだだけで涼しい顔だ。
関羽が距離をつめる。実力差は今の一合ではっきり感じ取っただろうが、文醜はそれでも気丈に得物を構えた。
二、三、四合。そして――五合目。
猛攻を受け続けて手が痺れていたのか、下からの切り上げに対応しきれなかった。
肩口を斬られ吹き飛ばされる。勢いのまま馬上から転げ落ち――黄河の中へと消えていった。
それを一瞥した後、関羽は悠々と戻ってくる。
文醜の兵は、それを呆然と見送るだけだ。
「きっちり命令されたことだけこなしよったな。可愛気のないやっちゃで」
聞こえているのか聞こえていないのか、関羽はまっすぐ大将へと向かって進んでいく。
「関羽」
掛けられた声に、関羽の歩みが一瞬止まった。
「劉備の下を離れ、ひとりの将に徹した気分はどうかしら」
馬が再びゆっくりと歩き始める。
「我ながら驚くほどに」
そのまま、すれ違う。
「さらに多くの兵を率い、さらに精強な敵と戦うことを望んでおります」
結局、一度も視線を合わせないまま陣の奥深くへと帰っていった。
「そう……後は霞、貴女の仕事よ」
「あいよ」
得物を掲げ、首を軽くならす。
戦は、やはり見ているだけではつまらない。
「ほな――ええか！

これからの指揮はうち、張遼や！
全軍比翼の陣！敵は一人も逃がすんやないで！」
背中から自分の将器を見定めようとする大将の視線を感じる。
自分が関羽を嫌っていることは知っているだろうに。その自分に関羽と同じ一軍を率いさせ、その指揮ぶりを比べている。
目論見通りだろうが構わない。
武人としても、一個人としても、心が奮い立つ。
「弓兵前に出え！
万の矢でこの河、屍で埋め尽くしたれ!!」
声を張り上げ、敵陣に突っ込んだ。

「殿！対岸の様子が変です！
やけに静かで兵の姿も見えま……！」
物見台から遠方を観察していた兵が声を詰まらせる。
「と、と、殿ーー！か、かか、河べりがーー!!」
一体何があったのか。
その疑問は、すぐに解消された。
河べりが、紅い。
「あ、ああ」
河べりが、屍で埋め尽くされていた。
「か、河面にびっしりと……」
「あの鎧は我が軍……この数では文醜軍は全滅か」
「これでは接岸できん！この津自体しばらく使い物にならんぞ」
皆が次々に呻き声を上げる。
「文ちゃん……」
あのいつでも元気だった親友は、どうなってしまったのか。
そんなことを考えていると、物見の兵が大声を上げた。
「殿！白馬城内より一軍が！」
あれは――曹操さんだ。

「ば、馬鹿な！曹操が何故此処に!?」
「陣を敷いたぞ！」
「此処でいきなり決戦に持ち込むつもりか!?」
予想外の事態の連続に、皆慌てふためいている。
それを収めたのは、麗羽様だった。
「落ち着きなさい!!」
一喝に、皆の動きがぴたりと止まる。
「華琳さんとはそういう人です！
この私に挑もうかという身分になった今も自分でちょろちょろと駆け回らば気がすまない小心者なのです！
これぐらいでうろたえるのは優雅な袁紹軍らしくありませんわよ！」
曹操さんがゆっくりとこっちへ向かってくる。
両脇にいるのは、関羽さんと張遼さんだ。どちらも一騎当千の豪傑だ。
麗羽様と曹操さんの視線が合う。
曹操さんが、にやりと嗤った。
「またえらく大軍を率いて来たものね、麗羽」
そう言うと、人差し指を立ててすうっと自分の右の首筋にあてる。
「この首ひとつに相変わらずごたいそうだこと」
麗羽様が身を乗り出した。掴んでいる船の縁がみしみしと悲鳴を上げている。
「二人とも、ここは逃げましょう！
袁紹さんはやはり数で勝負に出るそうよ！」
そう言って振り返り駆けて往く曹操さんの顔はとても愉快そうで。
「麗羽！
こっちは三千！捕まれば終わりね！」
麗羽様の顔は、これ以上ないほどに引きつっていた。

曹孟徳の用兵

「劉備は統率者として素晴らしい資質を持っているわ」
白馬津から撤退している最中、先頭を往く曹操が突然声を掛けてきた。
「民草の信を一身に集め、その気焔を天に届くほどに高めてみせる。それは学んで身に着けられるものじゃないわ。劉備がいるだけで軍の力は倍にまで膨れ上がりもする」
淡々と言ってのける。
長姉を賞賛しているように聞こえるが、この人がそれだけで終わるはずがない。
「けれど、統率者としての資質と統治者としての資質は別のものよ」
統率者と統治者。
率いる者と、治める者。
「劉備は、そこに在るだけで人心を焚きつける。
関羽は、そこに在るだけで人心を治める」
「そのようなことは……」
自分は一介の将だ。そのような資質が備わっているなどとは、考えたこともなかった。
「私は関雲長という者の為にふたつの装束を用意したわ。
そのひとつが、敵を一瞬にして瓦解させるあの鬼将としての装束。
もうひとつが、万民に畏れ敬われる厳格なる為政者としての装束よ」
為政者。
この私の中に、人を治める才覚を見出したとでもいうのか。
「関羽！
将としての才を絞りつくし乱世を一刻も早く鎮めてしまいなさい！
その後は政よ！」
曹操が機嫌よく言う。
『それが、この乱世をできるだけ穏やかに、できるだけ早く終わらせ

る方法です』
自分に料理を振舞ってくれた男の言葉が、頭に浮かんだ。

関羽が黙り込んだままうつむきがちに馬を進めている。
どう見ても心此処にあらずという状態だが、それでも馬を見事に御していた。未だ騎馬術に長けているとは言えない自分からすれば羨ましい限りだ。
「郭嘉先生！」
兵の一人が声を上げる。
「……先生はやめなさいと言ったでしょう」
一刀殿が稟はまるで学校の先生みたいだな、なんてわけのわからないことを酒の席で言い出してから、すっかり先生という呼び名が定着してしまった。
ちらりと後ろを見やる。砂塵が上がっていた。
「華琳様！敵の先陣が見えました！
敵は五千以上！予想を遥かに上回る速さで追ってきます！」
前を駆ける華琳様に向かって声を張り上げる。
「ですが空馬を待機させているこの先百里の森まで力を振り絞って馬を走らせればなんとか逃げきれるでしょう！」
真っ先に反応したのは華淋様ではなく、両脇にいる関羽と霞だった。振り返った顔は既に真剣なそれに変わっている。青龍刀を持つ二人の手に、それぞれ力が入るのがわかった。
「追ってくるのは誰かしら？稟」
前を向いたまま問いかける華琳様はいつも通り飄々としている。
まずい。非常にまずい。それほど長くもない付き合いだが、この主は誇り高き覇王である一方、ひどく子どもっぽい一面を持っているということはもう十二分に知っている。
そして、その一面が出てきた時は決まってとんでもないことを平然とやってのけるのだ。

「旗印から察するに袁紹の二枚看板のひとり顔良！
北方の荒くれ者を見事に纏め上げ……というよりは慕われているのですが、彼らを自分の軍略にのせて自在に戦える将です！」
「顔良、ね。予想通り過ぎてつまらないわ」
指をこめかみに当てて何やら考えている。
こちらも予想通りだ。こんな悪い予想は正直当たってほしくはないのだが。
「このまま逃げるのも退屈ね。
……久しぶりに私が用兵してもいいかしら」
ほら来た。
次の瞬間には、華琳様は自分の馬から私の後ろに飛び移っていた。
そのまま腰に手をまわされる。ふくらみと呼ぶにはささやかだが、背中に感じるしっかりと柔らかいその感触に鼻血を必死に堪えた。
「な、何をなさるのですか!?」
片手で鼻をつまみながら一応は抗議してみるも、華琳様はくすくすと笑うだけだ。
「私は今から兵馬を動かすのに専念するわ。
貴女は私を運びつつ私の言う通りに兵を動かしなさい」
はあ、と溜息が出る。こうなったらこの人は何を言っても止まらない。
「何か不都合があるかしら？」
不都合だらけだ。というより不都合しかない。
「『ああもう勝手にしなさい！
どうせ私が何を言っても自分の思うままにしかしないんでしょう!?』
……と詠ならすねてそっぽを向くでしょうね」
華琳様が噴出した。そのまま私の背中に額をあずける。
「声色がそっくりね。陳宮なら？」
「『自軍に十倍する袁紹軍を引き回して戦い続けよ！という命に従い策を立てたのですぞ！
水ももらさぬその作戦を単なる退屈しのぎの思いつきでころ

りと変えられたのでは百年かかっても勝てるわけがないのです！』
」
「風は？」
「『つまりは華琳様が軍師の役をなさるということですか～？
ここは作戦を変更してでも顔良さんを討っておくべしという
ご判断なのですね？』」
華琳様がまたくすっと笑う。
「さすがに親友だけあって風の真似が一番上手いわね。
私が用兵することについての貴女自身の考えはどうなのかしら？」
私自身の考え。
こちらは強行に強行を重ねてきた三千。対して顔良軍は気力みなぎる五千で、しかもその後ろには万の大軍。冷静に考えれば、ここは逃げの一手だ。
だが、主が戦うと決めたのだ。ならば、異論を差し挟む余地はない。
「……それぞれの軍師の思いが少しずつ入り混じり何やら混沌としています」
結局それだけ答えた。
それを聞いて背後の華琳様が柔らかく笑う。顔を見なくても、何故かわかった。
「貴女がつとめて自分を語らないのは、どうすれば元の作戦に加える変更を最小限に抑えられるか頭をめぐらせているからでしょう。
その一方で私の用兵を存分に眺めて私の考えを我が物にしようとしている。その柔らかな執念深さが郭嘉という軍師の美点ね」
「……」
黙ってほほを掻くことしかできない。顔が真っ赤になっているのが自分でもわかった。
「兵を動かすわよ、稟」
「御意！」
一番近くで体感する曹孟徳の用兵。一体どのようなものか。
正直、心の昂ぶりを抑えきれない。
「霞！百を率いて左手の林に向かいなさい！」

「応！」
すぐさま霞が軍から離れる。僅かな合図だけで百が流れるようにそれに続いた。
さて、顔良はどうでるのか。
暫く後方に注意を払っていると、文醜の軍からもまた一部が離れた。
「およそ千が離れました！
顔良らしい相当に考えたと思われる数です！」

曹操軍、二千九百。　顔良軍、四千。

しかしこちらの百を率いるのはあの霞だ。百騎で千を討つのはそう難しくはないだろう。
敵と直接干戈を交えることなく顔良の顔良らしさを弄ぶように戦いつつ逃げ切ろうというおつもりなのか。
霞の百と顔良軍から離れた千。その姿が共に見えなくなってから華琳様が次の指示を出す。
「関羽！貴女も百で林に向かいなさい！」
「承知！」
関羽もまた即座に向きを変える。霞とほとんど遜色ない動きで百が続いた。まるで何年も率いた自分の兵のように曹操軍の兵を従えている。
そして――顔良軍からも、再び兵が離れる。
「千騎です！
関羽が率いていった百を顔良は再び千で追わせました！」

曹操軍、二千八百。　顔良軍、三千。

次の一手でいよいよ顔良は華琳様の存在がわからなくなる。
続いて切り離す小軍の将は私か或いは華琳様ご自身か。
問題は馬だ。いずれ選りすぐりの馬とはいえ馬の疲労は限界に近

づいている。
　そんなことを考えていると、突然華琳様が背中にあずけていた頭をぱっと上げた。
「稟！全速よ！」
　全速？
「し、しかしこれ以上速く走らせれば逃げ切れなくなります！」
「あら？貴女まだ逃げる気でいたの？」
　若干悲鳴めいてしまった叫び声に、華琳様はあっさりと言ってのける。
「さあ稟！軍を動かしなさい！
　ここからが曹孟徳の用兵の本番よ！」
　主の実に楽しそうな声が空に響いた。

戦闘と戦争

「顔良将軍！
敵の行軍の跡です！曹操をとらえました！」
確かに地面に無数の馬の蹄の跡が見える。このまま何の問題もなければすぐに曹操さんに追いつけるだろう。
「これより先は隊列を整え粛々と追ってください！
如何に曹操さんが戦上手といっても私たち先陣五千のすぐ後ろには二万の大軍です！さらに相手は兵も馬も疲労しているはず！」
変え馬を用意しているとしても、その前に討ちかかれるはずだ。
「曹操です！
逃げる曹操の砂塵が見えました！」
白馬津の兵から息絶える前に聞いた話では、文ちゃんは関羽さんに斬られてそのまま河に落ちて行方知れずになったそうだ。
おそらく、生きてはいない。
文ちゃんの仇は、私がとる。
手綱をあらん限りの力で握り締めた時、副官さんが声を上げた。
「顔良将軍！敵の馬速が上がりました！」
見ると、縮まっていた距離が再び少しずつ離されていく。
「奴らがへばるのを待つことはありません！
ここは一気に追い討ちましょう！」
普通ならそれでいい。文ちゃんなら躊躇わずそうしただろう。
だけど――。
「曹操さんという人を即断してはいけません。
敵の速さに合わせてじわじわと距離を詰めましょう」
兵馬の相当な疲労にもかかわらず曹操さんが速度を上げてきたのは、私の五千を後続の二万から切り離そうという狙いのはずだ。けれどこの軍は五千で一軍。最初から後ろの大軍なんて当てにしていない。というよりも、予備の大軍を当てにするような軍略では曹操さんには敵いっこない。
曹操さんを討つにはあらゆる予断を捨てて、天気、地形から兵馬の

呼吸まで全てを頭に入れて考慮したうえで確実に勝機を見極めなければいけない。
――どんな些細な動きも見逃さない。
目を見開く。数の上で勝っていようと、油断など微塵もない。
「顔良将軍！
敵の一部が本隊から離れていきます！」
数は――百ほどだろうか。
ついに動き始めた。
曹操さんは昔から小回りのきく小さな軍を好む。自らの才を十全に承知していて、その才を存分に活かそうとするからだ。
しかもあの百騎の行く手には伏兵を配置しやすそうな林が広がっている。あまりにも曹操さん好みの状況だ。
けれど、あのまるで曹操はここだぞと言わんばかりの小軍は、だからこそ私を誘い込む囮とも考えられる。何れにせよこの位置からの見極めは不可能だ。
なら――無理をせず確実な手を打つ。
「利火羅さん！
千を率いてあの百騎を追い討ってください！」
ここは千だ。
たとえあれが囮でなく曹操さん本人が率いていても千であれば討てるはずだ。
「こちらも馬速を上げます！
距離を徐々に縮めていきますよ！」
曹操さんが兵を割った意図はまだ判断できない。
ひとつだけはっきりしていることは、曹操さんが自分の存在を餌にして私を撹乱しようとしているということだ。
距離を隔てながらのこの戦いは、おそらくは曹操さんであろう敵の指揮官と私との心理戦になる。
「顔良将軍！またです！」
前を往く曹操さんの軍から再び小軍が離れていく。数は先ほどと同じく百程度。ということは、さっきの百にはやはり曹操さんはいな

かったということか。
そして今度の百に曹操さんがいる可能性はさっきより高い。しかもますますあの百に曹操さんが潜んでいそうな気配がある。けれど私がそういう心理になればなるほどあの残りの本隊に曹操さんがいる可能性も同様に高くなる。
ここも千だ。躊躇あるときは最も理にかなった策をうつ。沮授さんもそう言っていた。再び千で追撃させる。すると、それを確認したかのように前の本隊がさらに速度を上げた。
これで決まった。間違いなく曹操さんはあの中に残っている。
ここに来て馬の疲労をかえりみないあの速さは曹操さんの戦意の表れだ。そうだとすると、狙いは数。後続を含め約三万のこちらからまずは私の五千を誘い出し、今本隊三千に対し相手は二千八百。
大丈夫だ。私は間違ってはいない。曹操さんは理にかなった選択をさせながらもここまで兵力差を詰めさせた。これが曹操さんの用兵だ。
けれど――もしここで曹操さんが再び二百を切り離したら?
これまで通り二百を二千で追わせる?そうすると敵の二千六百に対して千しか残らない。
そこには、如何なる選択にも理は残されていない。
一体どうしてこうなった?

「……というようなことを今顔良は考えているでしょうね」
なるほど。なんというか、実に華琳様らしい人を喰ったような用兵だ。
「しかし、華琳様は再び軍を割るつもりはないのでしょう?」
確かに主はそう言った。
ここで三百を切り離せば顔良は打つ手に窮しその考えは全て瓦解するはずだ。そうすれば我が軍は俄然有利に戦を運べる。
そう思い、実際に主にも進言してみたのだが――。

「普通はそうだけどね。
戦闘に勝つことと戦争に勝つことは別よ、稟。
曹操と袁紹の戦争。今この戦闘をあくまでもその一部として考えてみなさい。そうすると、顔良が討つべき手がひとつ見えてくる」
戦闘と戦争。
曹操と袁紹の戦争。
双方の勝利条件とは――。
「この戦に私の勝ちはないわ」
華琳様がぽつりと言う。
「なるほど。
華琳様にとっては、ここで顔良とその軍五千を殲滅したとしてもそんなものは袁紹殿に対する勝利ではない。
顔良にとってはたとえ全軍が滅びて戦闘に負けようともただ華琳様お一人を討てばそれは顔良の勝利であり袁紹殿の勝利である。
……そういうことでしょうか」
華琳様が笑う。場違いに華やかな笑みだ。
「その通りよ。よく気づいたわね。
どちらかというと桂花や一刀、詠の領分だけれど、大局を見る目も軍師には必要よ。
……陳宮は大喜びで顔良軍を壊滅させる策を練りそうだけれど」
ありうる。目を輝かせて死地に入りそうだ。
「では、軍師曹孟徳の次の策は？」
そう問うと、華琳様は空馬に飛び移った。
「稟。とりあえずは三百で一旦私から離れなさい。
顔良が崩壊するならそれでよし。貴女の思うままに軍を動かし殲滅しなさい。その可能性は低いでしょうけどね。
手堅い策を捨て大博打に出てきたら、すぐに本隊に再合流。それを見れば、顔良は勢いのままに攻め寄せてくるでしょう。
そうなると、一刀が用意させたものが役に立つわ」
「一刀殿が用意させたもの、ですか？」
私は聞いていない。一体何を用意させたのか。

「あら、稟は知らないの？てっきり風から聞いているかと思ったけれど。
なら楽しみにしておきなさい。一刀と風、二人で練り合わせた策よ。面白さは保障するわ。私も内容聞いた時は笑ったもの」
今度は一転して子どものように。こんなにも笑みの質がころころ変わる人を他には知らない。
きっと華琳様は生きていることそのものを心の底から楽しんでいるのだろう。そう思った。

駆ける。駆ける。駆ける。
曹操さんとの距離は徐々に縮まっていく。だというのに、私の心は未だに定まっていない。
――取り乱すな。
このような時は、敵を一度頭の中からたたき出す。そして問うのだ。
何故私は逃げる敵に追い詰められている？
私の心理的不利はどこからくる？
「顔良将軍！
今度は三百です！敵の三百が再び切り離されました！」
曹操さんと私では立場が違う。私がいくらの数の敵軍を討ったところで曹操さん一人に逃げられたらそれは勝利じゃない。だからこそ、見えない曹操さんのために十倍もの兵を割かなくてはいけなかった。
では、逆に曹操さんのこの戦場での勝利とはなんだろうか。
私を討ち取ること？
私の五千の軍を皆殺しにすること？
違う。曹操さんの勝利はここにはない。
つまり私が曹操さんの存在を見定めた時すべては逆転する。曹操さんの兵馬がどれほどのかずであろうと、私の軍の兵が皆曹操さん一人に殺到してただ一人を切り捨てればいい。

腹は決まった。
「全軍！兵は真っ二つに割れてください！」
あの離れた三百に千五百。残る二千五百に私の率いる千五百。
私も麗羽様の二枚看板の一人だ。武と軍略を十全に発揮すれば、疲労した二千五百は充分千で相手取ることができる！
「どちらにいるにせよ曹操さんは間違いなく先頭にいます！
一般兵は捨て置いて全軍全速で曹操さんただ一人に討ちかかってください！」
「「「「応！！！！」」」」
さらに馬速を上げる。ここで一気に畳み掛けるのだ。
すると――。
「顔良将軍！
別れた三百が本隊に戻りました！」
「こちらも別れた兵を合流させていくください！
再び隊列を整えます！」
一度分離させた兵をまた戻した。つまり、もう曹操さんの軍には倍する兵を相手に戦える将はいない。
そして、これで一連の用兵策はついえた。曹操さんはもう私と戦わずして逃げることはできない。
曹操さんが突然向きを変えて林の方へと駆けていく。
「全軍戦闘の態勢を整えてください！
敵は逃げ切れないことを悟って最後の戦いに踏み切るつもりです！」
曹操さんの侵入とともに林の鳥が飛び立った。伏兵はいない。
一体曹操さんの狙いは何なのか？この林を抜けた先には何がある？
そんな自問を繰り返しながら林を抜けると――そこには。
綺麗に整えられた錐行の陣と、鮮やかにはためく『呂』の旗があった。

顔良の軍の兵が遠目に見てもわかるほどに乱れた。
虎牢関で直接干戈を交えた――というよりは一方的に蹂躙された袁紹軍だからこそ、恋の強さに対する恐怖は骨の髄まで染みこんでいるはずだ。中には心に傷を負い、身体が癒えても兵として復帰できなかった者を多いと聞く。
「全軍割れなさい！」
華琳様の合図と共に兵が中央から真っ二つに割れる。
これで顔良の目には華琳様の姿がはっきりと映ったはずだ。罠とわかっていても、進まずには居られない。
「二の旗！」
右翼に旗が掲げられる。
華琳様の傍に掲げられているのと同じ、深紅の呂旗。
顔良軍がどよめいた。
「三、四、五！」
続けざまに三棹。呂旗が鮮やかにはためく。
顔良軍の中には、馬から転げ落ちる者も出始めた。
「全軍！
陣を両側から絞り上げ敵の動きを拘束してしまいなさい！」
顔良軍は完全に取り囲まれた。最早逃げ場はない。
同時に残り五棹の呂旗が全て掲げられる。
一刀殿と風が二人で練りだした、十面埋伏の計ならぬ、十旗埋伏の計。
何処にいるのかわからぬ華琳様に翻弄されていた敵兵は、今度は何処にいるのかわからない恋の影に怯えることになる。
そんな中でも顔良はさすがだ。真っ直ぐに華琳様目指して突き進んできている。
だが――。
恋は、華琳様の傍にいる。
文醜軍との戦いでも見せたのは旗だけ、最後の最後のまでその存在を隠していた。

華琳様さえ討ち取れば。そのことに希望を見出していた顔良に付き従う兵も、恋の姿を見てその意志が挫けていく。

一閃。

恋の一撃で顔良が崩れ落ち、戦は決した。

幕間　特等席

延津、曹操軍の砦。
顔良軍を殲滅させ自らの天幕に戻った華琳様が腰を下ろそうとしたその時、見張りの兵の一人が天幕の奥から文字通り山積みになった大量の竹簡を押し出してきた。
「殿！お疲れのところ恐れ入ります！
許都の荀彧殿よりこれらの案件につき至急ご承諾いただきたいとの事でございます！」
兵は忠実に与えられた任務を果たしているだけなのだろうが、さすがの華琳様もこれには苦笑いだった。
「袁紹殿と戦をしつつ先陣でこれだけの都の執政をこなさなければならないとは。
これではお体がいくつあってもたりませんね」
「まあ、桂花なら私がいないならいないで上手くやるわ。
金切り声をあげているのは詠でしょうね」
華琳様が山の頂上の竹簡を手に取りながら言う。腰を下ろしながらそれを広げ、ざっと目を通したかと思うとすぐに丸めて後ろに放り投げた。背後に立っていた兵が慌てて受け止める。
「いつも思いますが、華琳様は書を読むのが速いですね」
それでいて重要な点はきっちり把握している。ちらりと流し読みしているようにしか見えないのに不思議なことだ。
「俯瞰的に斜め読みして重要な単語だけを拾っているのよ。
『速読』というそうだけど、訓練しだいでは誰でもある程度は身に付けることができるそうよ。
貴女も試してみたら？」
速読。なるほど、言い得て妙だ。
「それも一刀殿が？」
「ええ。
教えてすぐに桂花や詠、私にも追い越されて落ち込んでいたけれど

ね」
本人の資質もある。それは仕方のないことだろう。
一刀殿を軍師として鍛えたのは桂花だというし、詠も彼女に負けず劣らずの頭脳の持ち主だ。そして、華琳様ほど多くの才に恵まれた人を私は知らない。
しかし、その『速読』という技術を独力で編み出し、訓練さえすれば誰もがある程度は身に付けられるまでに体系化した一刀殿も異様だ。最近では、彼と会話をする度に驚かされてばかりいる。
「そこの二人。稟、貴女も。
一人一つ竹簡を私に見えるよう広げてもらえるかしら」
そう言うと華琳様は自分の手にある竹簡も含めて四件を同時に処理し始めた。
つい先刻まであれほど激しい戦をしていたというのに、この人の精気は尽きることはないのだろうか。
竹簡の処理速度は格段に上がっていた。そろそろ山の中腹に差し掛かろうというところで、入り口の方からどたばたと誰かが歩いてくる音が聞こえてきた。
「聞きましたぞ！
ねねが命令された通りにたてた水も漏らさぬ作戦を退屈しのぎでころりと変えたそうですな！」
怒り心頭に発した声に一人を除いて天幕の中にいる全員が振り返った。
「この上また厄介なのが現れたわね」
華琳様だけは一瞬ちらりと視線を向けた後、涼しい顔で竹簡を読み続けている。
「厄介なのは誰なのです！
そんな思いつきで戦略を変えられたのでは――」
「百年かかっても勝てるわけがない、かしら？」
ずばり言い当てられて陳宮が絶句している。華琳様の方を向いていて助かった。笑いを堪えるのに必死な顔を見られすむ。
しかしその笑いは、華琳様の次の一言で何処かへ飛んで消えてし

まった。
「ねえ陳宮。
ついでにもう少し戦略を変えてみましょうか」
「なんですと!?」
あまりの言葉に身体の力が抜ける。手からずり落ちそうになった竹簡を慌てて持ち直した。
「貴女がたてた作戦によれば麗羽を次々と陽動し振り回したあげく最後は官渡だったわね」
華琳様の視線は竹簡に向いたままだ。普段通りの顔をしたまま政務をこなしながらとんでもないことを平然と言っている。
「ああそうですな!
ただ誰かさんが文醜、顔良軍を皆殺しにしてしまったおかげで、袁紹の後続は警戒して追撃を止めてしまったのです!」
ずっと下に向いていた華琳様の視線がようやく上がった。手にしている竹簡を纏めると、身体ごとこちらに向き直る。
「この際一気にその官渡まで退くというのはどうかしら?
官渡を拠点にしたほうが許都に近く朝政を執るのが楽になるわ」
開いた口がふさがらないとはこのことだ。
この人は楽しそうな笑顔で何を言っているのか。
「で、ですが官渡まで退くということはこの延津をはじめ黄河のすべての渡河点をむざむざ袁紹殿に譲り渡すことになります。
そんな事をすれば袁紹殿はあらゆる津を使い自在に軍を渡らせてくるでしょう」
「その通りなのです!
しかも許都から見れば官渡は最後の守りの要!そんな喉元まで敵を引き入れたのではこちらは危険極まりない戦を強いられるのですぞ!?」
自分と陳宮が口々に進言するも、華琳様の笑顔はまったく崩れなかった。
「自在に攻め寄せる袁紹軍四十五万を恐れつつも百年の戦を一年に縮めてみせる。

曹孟徳の傍に侍ってきたのはそういう軍師たちではないのかしら？」
後ろで陳宮が頭を掻く音が聞こえる。軍略についての誇りは並ぶ者がいないほどの彼女だ。こう言われては反論などできないだろう。
「それに、許都ではそろそろ面白いことが起きるわ」
面白いこと？
「それは一体何なのです？」
いつの間にか隣まで歩いて来ていた陳宮がどかっと腰を下ろしながら華琳様に問う。もうどうにでもなれと書かれているかのような不機嫌顔だった。
その不機嫌も、次の言葉で吹き飛んでしまった。
「劉協陛下より曹孟徳暗殺の勅が出されるわ」
……。

「「はい!?」」
勝手に出ていた大声が陳宮とぴったり重なる。今日は一体何度絶句させられるのだろうか。
「上手くいけば、よ。
一刀と風の手腕に期待して、私たちは官渡で見物させてもらういましょうか」

「では、私はこれで失礼致します」
劉備が一礼する。
決して優雅ではない。だが、仕草のひとつひとつが何故か人を惹きつける。人間的な魅力もそうだが、自然と色気が立ち上ってもいる。
「うむ。
関羽には後日改めて正式な官位を与えよう」
「ありがとうございます。
きっと愛紗ちゃん大喜びしますね」

満面の笑みを浮かべる劉備。
曹操や荀彧は時に恐ろしい笑顔になるが、邪気が一切ない笑顔というのも不気味に見えるということを初めて知った。
再び一礼して部屋を後にする。部屋の扉が音を立ててゆっくりと閉まると、暫くの静寂が訪れた。
「あやつは撒餌として役に立っておるのかの」
玉座で頬杖をついたまま虚空に問う。
振り返りはしない。既に飲み頃の茶を持って近づいてきているということが見なくてもわかる。
「順調のようですよ。
陛下のお呼び出しがない時は清流派の儒者の皆さんの集まりに引っ張りだこです。
最近では劉皇叔なんて呼ばれているようですね」
答えと共に董承が茶を差し出す。
最初はぎこちなかった侍女の仕事姿も少しずつ様になってきていた。特に良くなったのは茶の味で、荀攸に淹れ方を教わっているらしい。
「ふむ。
その集まりに参加しておるのはどのような者か？」
茶を一口。今日も旨い。
温度も、味も、いつも通り素晴らしかった。
「孔子の子孫孔融さんをはじめ儒者として名を馳せている方々、漢王朝の名門と言っていい方々がほとんどですね。
しきりに劉備さんを賞賛し曹操さんへの不満を肴にお酒を酌み交わしているとか」
予想通りだ。
荀攸や程イクの予想通りであり、期待通りでもある。
「曹操の専横を許すまじ、漢王朝を再興させるのは『劉』氏であり、宦官の孫である曹操などではない……そんなところか」
「ほとんど毎日集まっているようですが、愚痴っていることは結局それだけですねえ……」

二人して溜息をつく。
半ば自業自得であることはわかっているが、彼らの行く末を想像して少し哀れみを感じてしまった。
「思ったより早くなるかもしれぬな、勅が出るのは」
玉座という特等席で見物する荀攸の策。
結末は、まだ予想できなかった。

許都の美周

黄河のはるか南、長江のほとり。
馬上で水面を見つめるのは主である雪蓮だ。亡き母の軍を受け継ぎ袁術を破ってのち、電光石火の勢いで楊州全域を手中にしようとしている。
孫家の誰もが待ち望んだ飛躍の時。その期待を一身に寄せられているというのに、特に気負いもなく当たり前のようにそれを受け止めていた。
「申し上げます！
白馬津で文醜！延津で顔良！
曹操自ら率いる五千に袁紹の二枚看板が討たれました！」
曹操は勝たないまでも袁紹には大きな傷を与える。そういう意見は早いうちから出てはいた。
しかし――。
「早すぎる。いきなり大将が出てくるのも腑に落ちない。
そんなところかしら？張紘爺」
水面を見つめたまま雪蓮が問うてくる。見てもいないのに心の内をずばり言い当てられた。
「まあ、そうですな。
早いのは構いません。曹操の耳が良いのは今に始まったことではありませんからな。背後から奇襲し機先を制するとのも兵法の常道です」
そう。それだけならば、特に珍しいことではない。
「問題は、その奇襲部隊が僅か五千であること。それを率いたのが総大将である曹操だということに尽きます。ましてや緒戦。倍ではきかぬ大軍相手に君主自らが討ちかかる必要など全くない。
正気の沙汰ではありませぬな」
最後の一言はいくら諫言しても単騎で突撃を繰り返す雪蓮への嫌味でもある。それを察したのか、彼女はこちらへ振り返ると苦笑いしながら頬を掻いた。

「まあ、曹操にもやられはしないっていう確信はあったのよ。兵の中にあの呂布を上手く紛れ込ませてたみたいだし」
呂布。天下無双という言葉がそのまま歩いているかのようなあの存在感。武人ではない自分にもその強さは十二分に伝わってきた。曹操の身を護りきるだけなら五千の兵でも事足りるということか。
「曹操らしいといえばらしいのかもしれませんな。
相当に派手な戦果ではありますが、この一報だけで大戦の帰趨は占えませぬ。兵力ではまだまだ袁紹が上。各地の諸侯の静観の構えも変わりません」
曹操、袁紹とも天下への野心があることは明らかだ。どちらが勝っても、いずれは矛先はこちらのに向く。
袁紹はまだいい。新王朝の樹立という願望が透けて見える。
だが、曹操はその底が見えない。
人一倍野心が有りながら天子を奉じ、民を手厚く保護しながら敵兵は皆殺しにする。
「曹操に隙があるとすれば、許都ね。
あの娘――劉備がどう動かされるのか。それがわかっているから、多少頭の回る関羽から引き離して、政の実務からも軍務からも遠ざけているのでしょうけれど」
劉備。
本人は凡庸そのものだ。だが、まるで何か見えない力が働いているかのように、いつの間にか人が集まり、彼女を押し上げていく。
「動かされる、とは言いえて妙ですな。
ところで伯符殿。その報せは一体どちらの？」
雪蓮の苦笑いが少し軽いものに変わった。
「雪蓮でいいのに。
母様の代わりに私の子守をしてたのは皆知ってるんだから、今更でしょ？」
その通りではある。
自分は雪蓮。張招は蓮華。自然とそうなっていた。
だが――。

「だからこそ、です。
他の家臣に示しがつきませんからな」
「お堅いわねえ。
それで、報せだけど――許都にいる冥琳からよ」
冥琳が許都に？
美周と称されるあの美貌は、潜入には甚だ不向きではなのだろうか。
「袁紹につかれるおつもりで？」
一応は聞いてみる。
そして、予想通りに一笑に付された。
「まさか。
腹の内が見えないなら、実際に会ってみるしかないでしょ。その下準備よ。
一応は正式な書簡も持たせてあるから、もし見つかっても問題ないわ」
曹操と会談しようということか。
自らの半身である冥琳を送り込んだということは、本気なのだろう。王佐の才の眼は、今どのような景色を映しているのだろうか。
遠い地の軍師に思いを馳せ、主と共に空を見上げた。

――同時刻、許都。
大通りは今日も活気に溢れていた。
「おい聞いたか!?
初っ端から殿が連勝だぞ！」
「おう聞いた聞いた！
しかも袁紹の二枚看板を討ち取るとはさすが殿だ！」
通りの中央で職人風の男が二人威勢の良い大声でうなずき合う。
その横を商人が大荷物を背負ったまま駆け抜けて行った。

「急げ急げ！
俺たちががんがん働いて殿に圧勝してもらえば一財産は築けるぞー！」
都全体が素晴らしい活気で沸騰している。
戦とは戦場で起こっていることがすべてではない。曹操が作り上げたこの都はそんな当たり前のことを改めて思い知らせてくれる。
雪蓮よ。曹操は私たちが江南で想像しているより遥かに強いぞ。そして戦場においてはその強さはおそらく私たちの想像を絶するものだろう。
そんなことを考えていると、鍛冶職人たちが今まさに武具を作っている仕事場から景気の良い声が聞こえてきた。
「先生！
試作の新しい矛ができてやすぜ！」
声につられて見ると、文官風の優男が矛を掲げる傷だらけの大男に向かってすたすたと歩いていく。
差し出した手に渡された矛を軽く一振り。一つうなずいてからの振り下ろし、そして突き上げ。中々に様になっている。先生と呼ばれていたので文官かと思ったが、どうやら武の心得もあるようだ。
「軽くて折れにくい最高の竹が見つかりやしてね。
十日もありゃあ千振りはできまさあ」
怪しまれない程度、邪魔にならない程度に入り口に近づく。中を覗き見ると、大勢の職人が一心不乱に矛を作っていた。
決して楽な作業ではないだろう。かなりの重量の鎚を、繰り返し繰り返し鉄に向かって振り下ろす。彼らは皆汗だらけだ。だが、どの顔も自らの仕事に対する愛着と誇りが見て取れる。
「先生！
白馬の先陣は関羽将軍と張遼将軍でしたよね！」
「そうですよ！」
職人の一人が鎚を振るいながら矛を見つめる文官に問う。
「あの二人の青龍刀が先陣に揃った様はさぞ壮観だったでしょうね！」

その言葉を聞いて先生がふと何かを思いついたように顔を上げた。
「……親方。今から予定を変更できますか？
矛を千本ではなく、青龍刀を千本作ってもらいたいのですが」
「荀攸先生～～それは無理ってもんでがすよー！
あんな装飾の入ったシロモノをたった十日で千本なってできっこねえっす。
第一ありゃあ誰にでもおいそれと使える重さじゃねえでがしょー!?」
荀攸。
この男があの荀攸なのか。
虎牢関の戦場では、顔をはっきり見定めることができるほどの距離ではなかった。戦後はほとんど皇帝陛下に付いていたので、陪臣の立場である自分は直接会ってはいない。
「遠目に青龍刀に見えればそれでいいんですよ。装飾なんて必要ありません。
柄もこの竹を使えば誰にでも扱えるでしょう」
職人の親方が口をぽかんと開ける。どこの侠者の頭目かと見まがう風貌だが、呆気に取られているその顔は中々愛嬌があった。
「え？つまり偽の青龍刀ってことで？」
「ええ。
先陣の騎兵皆にそれを持たせて張遼将軍と関羽将軍の真似をさせるんです。
さぞや敵兵は凍りつくでしょう。できれば袁紹の目の前でやってやりたいですね」
皆が同時にその光景を想像したのだろう。朗らかな笑い声が一斉に上がった。
天下にその名が聞こえる名軍師が職人たちとあんなに気さくに冗談を交わしている。思えば雪蓮にもそういうところがあった。世の英傑とはそんなもので、案外そういうところから新しい奇策が生み出されるのかもしれない。
暫く荀攸と職人たちの談笑が続く。それを眺めていると、通りの中

央から声が掛けられた。
「此処にいたの、一刀。
先陣の華琳様より火急の報せよ」
そういって手にある書簡を差し出すが、決してそれ以上近づこうとはしない。
どういうことかと一瞬考えるが、すぐに原因に思い当たった。荀彧は重度の男嫌いだったはずだ。いかつい男だらけの場所には本来ならば近づきたくもないだろう。
それを悟ったのか、荀攸が苦笑いしながら近づいて書簡を受け取る。その場で広げて目を通すと、苦笑いが更に深くなった。
先陣の曹操からの火急の報せ。何事だろうか。
後ろから覗き込んでいると、荀彧と目が合った。男絡みの時ほどではないにせよ、微妙に嫌な顔をされる。そんな荀彧の反応を見て振り返った荀攸とも目が合った。
「貴女は？」
名乗ろうと口を開きかけたところで、荀彧の声が先に飛んできた。
「周瑜よ。孫策の軍師」
「貴女が」
荀攸の眼がすっと細まった。
すべてを見通すかのようなその瞳に、僅かに喜の色が感じられるのは気のせいだろうか。
「姓は周、名は瑜。字は公瑾と申します。
我が主孫策から、曹操殿への書状をお届けにまいりました」
一礼する。
荀彧。天下にうたわれる王佐の才。
荀攸。反董卓連合を瓦解させ、雪蓮が欲しいと言った男。
乱世の都で、名高い二荀に見つめられている。
らしくもなく、気が昂るのがわかった。

密勅

許都の農地を歩く。
豊かに育つ作物の中で、農民たちが噂話をしていた。
「おい聞いたか！
あちこちの拠点を全部引き上げてるらしいぞ！」
一人が仲間に向かって話しかけると、皆が次々に口を開く。
「どういうことだ？
こっちが優勢じゃねえんだか？」
「何故かは知らんがどうやら官渡水のあたりに本陣を敷くらしい」
「官渡水といえばここからほんのすぐ北じゃ！」
「じゃあ袁紹の軍団が一気にすぐそこまで来るんじゃねえのか」
拠点を官渡に移すことは特に隠しているわけではないようだ。農民までもが既にそのことを知っている。
「どうするよ!?
へたすりゃここいらまで血の海だぜ！」
「今のうちに逃げるか!?」
「逃げるってどこへ!?」
「おい！
青州兵の見回りの時間だぞ！」
声につられて視線を同じ方に向ける。確かに、一見して農民のようだが手に武器を持った兵が歩いていた。
青州兵。彼らは皆、元は黄巾党だったという。
「いつ見ても気味が悪いやつらだな」
「ああ。
だがよお、敵が来たら農民に化けてるあいつらが護ってくれる仕組みだろ？」
「そう考えりゃなんだか頼もしいな」
気味が悪いというのもうなずける。彼らには、どこか明命の工作部隊と同じ匂いがした。明命の部隊の者は普段はその匂いをうまく隠

しているが、彼らはそのままだ。
「どうせこのご時勢どこへ逃げても絶対安全な場所なんてねえんだ」
「ああ、逃げりゃたちまちひもじい流民に逆戻りだ」
「せっかくただで貰って耕した土地を手放すのも惜しいしな」
「ここにいりゃ食いっぱぐれはねえし、それがなによりよ」
曹操が力を入れていた屯田制とはこういうことか。
農民は戦火を怯えつつも土地を離れないから、兵糧は確保される。
三十万もの青州兵を田にしばりつける上にこの屯田の運営も困難を極めるだろう。しかし戦が長引けば後々これが効いてくる。ここにもひとつ、戦場以外での曹操の戦がある。
先ほど会談した二荀を思い出す。大雑把に言えばと前置きされたが、荀彧が朝政、荀攸が農政の担当しているらしい。曹操は先陣に出ていたが、あの二人と語り合うことができただけでも許都に来た価値はあった。
特に荀攸は面白い。雪蓮が色仕掛けでもいいから呉に連れて来いと言っていたが、荀彧がいなければ試してみてもよかったかもしれない。それほどに、最後の問答は印象に残った。

『――では、最後にもうひとつだけ。
天下に王佐の才をうたわれる荀彧殿にとって、王とはいかなる存在だろうか』
『華琳様――曹孟徳という人よ。
考えるまでもないわ』
『では、荀攸殿は？』
『私は王佐の才にはほど遠いのですが……。
敢えて言うならば、王は、この中にいます』
『脳漿に？』
『ええ。
いかなる知をどれだけ補おうとも生まれた時から変わらぬ姿でここに棲む。それが王佐の才と言われるのではないでしょうか。まあ、そんな人はごまんといるでしょうけどね』

『では、荀攸殿の脳漿に棲まう王に最も近いお方が曹操殿なのだろうか』
『それはわかりません。
全く同じ姿に思える時もあれば、まるっきり違う姿の時もあります。
ただ、私はそれほど王の姿にこだわってはいません』
『というと？』
『王をたすけるのが王佐の才です。ですが、ただたすけ続けるるだけでは辛い時もくるでしょう。
私は、王佐の才をたすける、支えられるような者でありたいと思っています』

何事かの報告が飛び込んで来たためにそれで終わってしまったが、その時の荀彧を見つめる眼は忘れられない。あれほど想いに満ちたまなざしは初めてだった。あそこで色仕掛けをするのは無粋というものだろう。
一人の男にあれほど愛されている荀彧への若干の羨望と、その二人の幸せいっぱいの顔を瞬時に真っ黒な笑みに変える報告とは一体何なのかという疑問を胸に、雪蓮の下に帰ることにした。

「うーん。
やっぱり、どうにもうまくないねえ」
目の前で義姉が飯をほおばりながら唸っている。食べ始めた時からずっとだ。
「鈴々の分はとっても美味しいのだ。
桃香お姉ちゃんの分と交換する？」
食べられるものは何でも食べる。それは三姉妹皆同じのはずだ。
何か自分の知らない好き嫌いでもあったのか。
そう思って聞いてみると、一瞬きょとんとした後、すぐに苦笑いに

変わった。
「うまくないっていうのはご飯のことじゃないの。
紛らわしい言い方しちゃってごめんね？」
そう言うとようやく笑顔で箸を進め始める。身体の調子が良くないというわけでもなさそうで、少し安心する。
「うまくないっていうのは、今の状況――まあ、最近の私たちなんだけど」
義姉がぽつりと呟いたのは、食べ終わってぱちりと箸を置くのと同時だった。
難しいことを考えるのは自分の役目ではないが、一応は首を捻ってみる。目の前の長姉は皇帝陛下や漢王朝の名門の人たちにしょっちゅう呼び出されて大人気であるし、次姉は先陣の将として大活躍だったと聞いている。自分は岩を砕くなどの力仕事以外働いていない気もするが、十分役に立っているとお兄ちゃんは頭を撫でてくれた。
すべてがとてもうまくいっている。自分はそう思うのだけど。
「大人気かあ……それはちょっと違うんだけどね。
陛下の眼は大道芸人さんを見る時のそれみたいだし、孔融さんたちのは役に立たない農具をお母さんに売りつけに来た商人さんに似てるし……」
腕を組んでうーんと唸る。どうにもはっきりしない。
「よくわからないけど、へーかや孔融とかが敵で、桃香お姉ちゃんに酷いことしようとしてるってことなのか？」
ごちゃごちゃと難しいことは自分にはわからない。だから単純に考えてみる。
良いことなのか、悪いことなのか。
今回ならば、その変な目で見てくるのは敵なのか、敵じゃないのか。
敵じゃないなら放っておくし、敵なら倒せばいい。それが自分の役目だ。
そう思ったのだけど、義姉の返事はやっぱりはっきりしない。
「うーん。

陛下は傍から見てるだけな気がするかなあ。敵じゃないけど味方でもない。
孔融さんたちは、絶対何か良からぬことを考えてるね。
けど、悪意はあっても敵意はないかな。敵になるほど力はない、同格だとは思われてないって感じがする。
成り上がりの小物を利用してやろう、ってところだね」
言い方は難しいが、今度はなんとなくわかった。
「……義勇軍の時と同じで、色々使われて手柄だけ取られそう？」
「まあ、似たような感じだね」
よくできましたと拍手してくれるけど、ちっとも嬉しくない。
「具体的にどんな悪いことを考えてるのかはさっぱりわらないんだけどね。
やっぱり愛紗ちゃんと離れるべきじゃなかったかなあ。
でも、『あの関羽が先陣に加わるならばこれほど心強いことはない』ってほとんど勅命だもんなあ……」
少し俯き気味のままぶつぶつ呟いている。普段はあまり悩まない義姉にしては珍しかった。
とはいえ、頭の良くない自分が口を出せることはない。こちらも腕を組んでその姿を見つめることにした。何も言わずとも、一緒にいることが力になることがある。愛紗もそう言っていた。
暫くそうしていると、門の方から声がした。
「劉備殿！
皇帝陛下より関羽殿の戦勝の祝いの酒が下賜されました！」
二人顔を見合わせる。
宮廷の礼儀作法は知らないが、たかだか緒戦に勝ったくらいで皇帝陛下から直接祝い酒が届くのは何かおかしい気がする。
それでも受け取らないと不敬になる。義姉は心なし青ざめた顔で表に出て行った。
持って返ってきたのは、一人で抱えるにはちょっと重たそうな綺麗な甕。よいしょと下ろしたその中には、なみなみと酒が入っている。匂いだけで美味いとわかるような、上等の酒だった。

「……毒とか入ってないよね、これ」
「……鈴々の鼻は大丈夫だって言ってるのだ」
本当にげんなりした、嫌そうな顔。絶対に人には見せられない。
「じゃあ、鈴々ちゃんが全部飲んでいいよ。お酒にも、作った人にも罪はないんだし。
問題は、これだなあ……」
そう言うと、袖を捲り上げて甕の中に突っ込んだ。一呼吸ほどしてから取り出したのは――筒？
小指ほどの長さのそれを二つに割ると、中には上質の紙が入っていた。濡れることなどかまわずそのまま広げて読み始める義姉。
その顔が読み進めるにつれて歪んで、訝しげになって、じと目になって、最後は大きな溜息で終わった。へーかが大道芸人みたいに見ているというのは、案外当たっているかもしれない。
「なんて書いてあったのだ？」
聞いてみると、紙をまるで汚いもののように指の先でつまんだままぷらぷらさせる。
「皇帝陛下からの密勅で、曹操さんを誅殺しなさい、だって」
思わずまん丸になってしまった自分の顔も、義姉には大道芸人のように見えているのかもしれない。そんなことが頭に浮かんだ。

軍師二人

「……どうするのだ？桃香お姉ちゃん」
末妹の鈴々ちゃんが聞いてくる。先行きの見えない不安はあっても、悲嘆に暮れているわけではないのが救いだ。
「どうしようか、なあ……」
自分ができること、できないこと。為すべきこと、そうではないこと。それをきちんとわかっている。己の中にしっかりとした優先順位があって、常にそれに沿って行動する。
義姉である愛沙ちゃんとは良い意味で対照的だ。彼女は三姉妹の中では一番頭が回る。それ故に考えすぎ、頭の中で迷子になることもある。
「とりあえずは……こうしようか」
手にしている上質な紙をびりびりと破る。鈴々ちゃんが可愛らしい目をまん丸にして驚いていた。
「へーかから貰ったものなのに、そんなことしてもいいのだ？」
「そこからして怪しいって私は思うんだけどね。
仮に本物だったとしても、証拠を残すわけにはいかないでしょ」
怪しい。実に怪しい。猛烈に胡散臭い。陰謀の臭いがぷんぷんする。
そもそもからして、『密勅』という言葉があまり好きではない。勅というのは、天地を真っ二つに切り裂くように、高らかに堂々と発せられてしかるべきもののはずだ。
たとえこれが天子の意思だったとしても、曹操さんを殺せなんて命令をこそこそ出すのは何か違う気がする。
「でも、どうしてへーかは曹操を殺せなんて命令するのだ？そんなことしたら袁紹に負けるし、困るのはへーかなのに」
確かにその通りだ。冷静に考えてみれば、自殺行為でしかない。
だけど――。
「多分だけどね。
皆は、袁紹さんより曹操さんが怖いんだよ」

そう言うと、末妹は納得できないという顔をした。
「鈴々は、怒った愛沙のほうが怖いのだ……。
袁紹も曹操も、あんな風に怒ったりしないのだ」
それは私もだけど。心の中だけでこっそり呟く。
皆が――特に古くからの漢王朝の名門の士たちが感じている怖さとは種類が違う。
人は未知を恐れる。
彼らにとって、曹操さんは『得体の知れないもの』なのだ。
漢王朝の中枢にありながら、儒を否定する。
唯才さえあれば、徳や人格などどうでもよい。
そんなことを公然とやってのける。そんな新しい気風、新しい価値観に、彼らは恐怖している。自らの地位や名誉の根拠が、根底から覆されようとしているから。
軍政両方に稀有な才能を持っている。乱世の奸雄。確かにその通りの英傑だが、それは漢という尺度の内側からの評価でしかない。
己の中に確固たる新しい価値観を持ち、それを世界にまで拡げる者。
それが曹孟徳という人の本質だ。
曹操さんにとっては、彼らが必死に築き上げ守ってきた権威など取るに足らないものなのだろう。そんな曹操さんを理解できずに恐怖し、自分達に取って代わろうとする袁紹さんに安堵する。それは、袁紹さんが今の自分たちの地位や権力をある意味では認めているということでもあるからだ。
「うーん。
敢えて釣られてみるか、見向きもしないで逃げるか。その場で様子を見るか、はたまた餌だけ食べて逃げるのか……」
最初のは悪手だ。この密勅、陛下が誰かに唆されて出したとかそんな簡単なものじゃない。
暗黙の命を受けているわけでもないだろう。誰かが――ほぼ間違いなく孔融さんたちだろうけど――勝手に出した偽勅のはずだ。
一目散に逃げる。悪くはないが、それだと愛紗ちゃんが取り残され

る。自分たちも直接の危険はなくなるだろうが、ありもしない罪をあれやこれやでっちあげられるかもしれない。
やっぱり様子見をするのが一番ましだろう。目の前に落ちてきた餌に針がついているのはわかるが、そこから伸びる糸の先に誰がるのかは全くわからないのだ。
暫くは気づかない振りをする。餌だけ食べられそうならそれでいいし、駄目ならそのまま根比べだ。
「鈴々ちゃん。いつでも許都から離れられるよう、準備だけはしておいて」
「わかったのだ」
ひとつうなずいて走り出す。荷物を纏めにいったのだろう。
「とりあえずは、いつもと全く同じ態度でお茶会に参加して……。不自然にならないように公衆の面前で一人になれる方法考えないとなあ。ああ、そこに誰かが一人二人近づいてもおかしくないようにしないと……」
年頃の乙女としてはよろしくないとは思うが、がしがしと頭を掻いてしまう。
「最近はあまり悩まなくてすんでたのになあ。
やっぱり軍師が欲しい……」
やっぱり乙女らしくない、切実な悩みだった。

「それで、動いたのは孔融らで間違いなのかの」
玉座から荀彧と荀攸を見下ろす。天下にその名を轟かす智謀の持ち主二人が並んでいる。直接の臣下というわけではないが、こうしてみると中々に良い気分だ。
「はい。数日前、劉備の元に勅が届いたようです」
荀彧が恭しくとは言えないが礼儀正しく返事をする。親族以外の男は皆嫌悪の対象であるらしいが、さすがに皇帝は別のようだ。それとも、皇帝は皇帝であって、男ではないということか。
「取り巻きの中には本物の勅であると思い込んでいる者も少なくない

ようです。
単純に頭が足りないのか、あるいは孔融が敢えて知らせていないのか。後者であるならば、体良く罪を被せるつもりなのでしょう」
荀攸が後に続く。こちらもその声にはあまり忠誠や崇拝といったものが感じられない。だが、荀彧のそれとは若干質が違う。
初めて謁見の間で顔を見たときからそうだった。荀攸は、皇帝という地位そのものにはなんら価値を見出していない。荀攸にとっては、皇帝とはことさら頭を垂れ膝をつく必要もなければ、取り入らなければならないような権威ではないのだ。表面上はともかく、心の上では。
報告しながら低く嗤う二人の姿はまさに悪役そのものだ。名士として名高い荀家が誇る二荀。敬虔な儒者が揃う荀家の筆頭二人がこのような顔をしているとは誰が想像できるだろうか。
なんだか頭が痛くなってきた気がする。
……話を変えるか。
「劉備はどうしておる?」
「呆れるほどに普段どおりです。あれで強かですから演技なのでしょうが」
ここ数日は敢えて劉備と謁見しなかった。三日と空けず顔を合わせていたのに突然それがぱったりと止まる。何か反応があるかと思ったのだが。
「まずは様子見か。
とはいえ、劉備には軍師もおらねば草もなし。独力でできることには限りがあろう」
今度は荀彧が口を開く。
「見て見ぬ振りをすることで孔融らの反応を引き出そうというでしょう。実際、取り巻きの一人が一度接触しています。
……まあ、お互い探りあいの化かし合いでしたが」
「なるほどの」
関羽を先陣に加えたのはこの、状況も考慮してのことだろう。離れている関羽の存在は劉備にとって楔となる。逃げ出せば、関羽を自然

に曹操陣営に引き込める。少なくとも袁紹との戦が終わるまでは劉備を追いかけることはないはずだ。
そんなことを考えていると、目の端にどこか浮かない顔をしている荀攸が映った。
「どうした荀攸。
何か懸念でもあるのか？」
「いえ。
懸念というほどでもないのですが……」
珍しく歯切れが悪い。
「よい。
思うところを述べてみよ」
そう促しても、戸惑ったような顔のままだ。そんな荀攸を荀彧も不思議そうに眺めている。
やがてひとつ大きなため息を吐いたあと、顔を引き締めてから話し始めた。
「実は、先ごろから軍師を二人探しています。
ですが、一向に見つかりません」
軍師を二人。
人の才を見抜くことにかけては並ぶ者がいない荀攸が探しているのだ。その二人も曹陣営に加えるに相応しい人物なのだろう。
「……その二人は、劉備の軍師と成り得る者です」
荀彧の眉が僅かに上がる。
「ほう。劉備のか。
その二人が劉備の軍師となると、厄介か？」
「この上なく。
袁紹以上の強敵となる可能性もあります」
即答した。どうやら本気らしい。
劉備が野に逃げる前に抱き込んでおきたいということか。
「最後まで見つからなければそれでもいいのですが。
場合によっては、うち一人は最初から存在しない可能性もあります」

荀彧がまた妙なことを言いだして、とでも言いたそうな顔で荀攸を睨んでいた。

とはいえ自分も同感ではある。劉備の軍師と成り得る。そうなればこの上なく厄介。そう断言するほどの人材が、最初から存在しない？

さっぱりわけがわからない。一体どういう人物なのか。

「その二人の名は？」

「諸葛亮。そしてホウ統。

伏龍、鳳雛と称される当代最高の軍師たちです」

武人三人

「呑気ですね、春姉は」
ちらりと隣を駆ける義姉を見やる。
猛将夏侯惇の副官。それが今の自分の立場だ。
「うん？そう見えるか？」
見える。おそらくよのほとんどの人が自分に同意してくれるであろうと思うほどにそう見える。
「官渡まで撤収とは一体どういうことなのですか。
この戦は黄河の渡河点の奪い合いで決まるのではなかったのですか？」
「北郷がそう言っていたか？」
うなずく。
直心殿は気持ちの良い御仁だが、友人と呼ぶには聊か年が離れている。曹陣営では珍しい年若の男として、一刀殿は得がたい友人だった。
最近では茶を一緒に飲む仲だ。その折、軍政を問わず自分が質問したことをわかりやすく説明してくれる。今回も許都を発つ前に戦の趨勢を聞いてみた。その返事がそうだった。
「実に軍師らしい答えだな。わかりやすいよう単純に説明してくれている。
だがな、優。我らは曹孟徳の臣なのだ」
「そんなことはわかっています」
何を今更。
何年あの人の義弟として過ごしたと思っているのか。
「いや、わかっていない。
華琳様はいつも単純なものを直角に曲げて答えをだす。そのほうが面白くなるからだ」
「面白いなどという理由で戦略をころりと変えるのですか？
武人としてはたまったものではありませんよ」

自然とぶすっとした物言いになってしまったのは仕方ないだろう。
春姉を苦笑いしながらこちらを見ていた。
「あきらめろ、優。
昔から華琳様の戦に作戦の変更はつき物だろう？大戦ともなれば尋常な変わり方ですむはずがあるまい」
「それは、そうですが……」
わかっている。本当はわかっているのだ。
義姉がそういう人だということも、結局自分はそれに従ってしまうことも。
だが、わかっていても愚痴りたくなってしまう時はあるのだ。
「どんなに理不尽で腹が立つように思える策に変えられても、それを並の知恵で追いかけようとするな。頭が湯だって死んでしまうぞ？
私を見ろ。頭が足りないのはわかっているからな。最初から気にしていないから腹が立つこともない」
そういって胸を張る。形の良い立派な胸だとは思う。が、言っていることは決して自慢するようなことではないと思うのだが。
「しかしですね……」
「優」
発しかけた言葉は、今までと温度の違う真剣な声で遮られた。
顔も、さっきまでの表情が嘘のように真顔になっている。
「おそらくそれが、お前がまだ一人で一軍を任されん理由だ」
「春姉……」
「すべてを華琳様に委ねて心で感じろ。
目の前にいる時よりこうして何百里を隔てているほうがずっと華琳様のことがよくわかる」
春姉は……いや、一軍を任される将は皆、曹孟徳という人をそんな風に感じているのだろうか。
曹孟徳は、義姉だった。ずっと家族だった。主従の立場になったとはいえ、未だ自分は心のどこかでそれを理由にして甘えていたのだろうか。
「夏侯惇将軍！」

後ろを見ると、伝令兵が大急ぎで駆けてくる。
頭を振って悩みを追い出した。個人的な理由で悩むのは後だ。そんなことは後からいくらでもできる。
「撤収途上の徐晃将軍の軍が袁紹軍三万につかまりました！
敵の数はさらに増え続けておりこのままでは全滅は必至です！」
まずい。噛み付かれた。
そう思った時、後方から空を覆いつくさんばかりの鳥の大群が文字通り飛び出してきた。
あっという間に日の光が遮られる。こんなに多くの鳥は見たことがない。
「全軍止まれ！反転するぞ！」
言うが早いが春姉が手綱を引き絞る。馬が悲鳴を上げそうになっていた。
「引き返すのですか!?
私たちは五千！袁紹の軍は三万を超え増え続けています！おそらく我が軍の撤収を嗅ぎつけて早くも進軍に出たに違いないでしょう！
この尋常ならぬ現象もその進軍によるものではないのですか!?
戦の大局を考えれば、ここはその徐晃とやらを見捨ててでもこの五千の兵を退却させるべきです！」
大声で怒鳴るも、既に春姉は後方へ向けて駆け出している。
その顔にあるのは笑みだ。
「続け優！
華琳様ならばその袁紹の進軍を見ずにはおかん！
そして華琳様のように感じれば、このただならん状況も心が躍りうきうき嬉しくなってくるぞ！
それこそ曹操麾下の取るべき道だ！」
一点の曇りもない笑顔でそう言ってのける。
やっぱりこの人には敵わない。そう思った。

官渡、曹操軍本営。
主である曹孟徳の天幕の前で見張りをしていた兵が声を張り上げた。
「夏侯惇将軍らがご帰還でございます！」
左手に軍師たち。右手に護衛の兵がいる。その中央の入り口から、曹操が姿を現した。
――思ったよりも小柄だ。
それが主を初めて見た感想だった。
とても世間で乱世の奸雄だの魔王だの言われている人物には見えない。
「貴女が徐晃ね。
一刀から話は聞いていたけれど、実際に顔を見るのは初めてかしら。
私が曹操よ」
少し驚いた。
新参の私が最初に声をかけられるとは思っても見なかった。
「姓は徐、名は晃。字は公明と申します」
名乗って一礼する。
主は黙ってうなずいた。
静寂。
きょろきょろと主と夏侯惇将軍の顔とで視線を往復させていた曹休がまず声を上げた。
「曹休より報告いたします！」
「もう聞いたわ。
風の便りは貴方たちの逃げ足よりも速かったようね」
曹休がきょとんとした顔をする。
そんなことは気にもしていない様子で主は階段に腰掛けた。
「じきに全土に知れ渡るでしょう。
で、春蘭。

袁紹四十万の大進軍はどうだったかしら？胸が躍った？」
夏侯惇将軍が渋々といった様子で話し始める。
本営に到着した時からずっとぶすっとした顔のままだ。一体あれをどのように感じたのか、興味はある。
「戦意十分の大軍なら胸も踊りました。
ですが、あのような進軍を見せられてもそうはなりません」
まあ、確かに面白くはない。
主は無言のままにこやかに笑っただけだった。
「新将軍の徐晃は？」
横目でちらりと曹休を見る。
いくら階級の上ではこちらが上位とはいえ、親族より先にぽっと出の私が先に声を掛けられる。さぞ不満だろうと思ったが――意外にも真面目な顔をしていた。どこか周りが見えていない感じだ。
今はそれよりも自分のことだ。さて、あの進軍を見ての感想か。
「理解しきれないものは語れません」
僅かに視線に含まれる色が変わる。
お気に召したのか、そうでないのか。
「文烈」
字を呼ばれて曹休がはじかれたように顔を上げた。そのまま一礼して語り始める。
「あ、あれは単に己の軍容を誇示したに過ぎず、周りの諸侯を誘い入れるための宣布のようなものかと」
「誰が軍師のように語れと言ったかしら」
鋭い一声に曹休が項垂れる。
初めて顔を合わせた時も、どうにも心が道に迷っているように見えた。
「ではその軍師たちに聞きましょうか。
この報告を受けてどうとらえる？」
主が半身で振り返る。その視線の先には二人の文官風の女性が立っていた。
おそらく郭嘉と陳宮だろう。前線に出てきている軍師はその二人

だったはずだ。
「尊大にして気宇の小さい袁紹のこと！どうせ緒戦の敗退の挽回策なのですぞ！」
つまりは形ばかりの王道にこだわる恥知らずな進軍なのです！」
まず口を開いたのはちびっ子の方だった。噂に聞く容姿によると、あれが陳宮だ。なるほど、生意気という言葉が服を着て歩いているように見える。
「結果袁紹の補給線は伸びこちらは縮まりました。
これからの戦いはそこを衝くことが肝要かと」
次に発言したのは黒髪眼鏡の女だった。おそらくあれが郭嘉だ。
こちらも噂通り気の強そうな顔をしている。眼鏡を持ち上げる姿も様になっていて、まさに『先生』という感じだ。
「前線の報告を聞く軍師の耳とはその程度なのかしら」
だが、そんな軍師二人の言葉に主は不満げだった。
「この三人の言葉の中では徐晃の反応が最も状況を語っているわ。
つまり麗羽の大軍を頭に思い描けば、語る術べ無しなす術べなしという言葉が相応しい。
今の麗羽は私の想像を超えるほどに見事な麗羽だわ」
「つ、つまりはこのまま袁紹にやりたいようにやらせるしかないということなのですか!?」
陳宮がどもりながら言う。
君主が部下の目の前でなす術べなしなんて言っているのだから当然ではあるのだが。
「稟。貴女は袁紹という敵を巨獣にたとえて恐れたわね。
巨獣を破る時はその最も美しい所が光輝いている時に討つのが良い」
……わかりにくい。
一刀殿のように、とは言わないがもう少しわかりやすく話してもらいたい。
「急報！急報でございます！」
伝令兵が駆け込んできた。

君主の天幕の前だというのに騎馬のままだ。袁紹軍に何か動きでもあったのか。
「敵の進軍はこれより北五十里で止まった後、東西百里以上に渡り野戦陣地を築き始めております！」
どこまでも尊大で余裕のある進軍を続けるつもりか。
さて、主はどうでる？
「この圧倒的劣勢から私が勝ちを拾うのか。
それとも麗羽の足元にひれ伏して敗れるのか。
面白くなるわよ」
結局、とりあえずは今日は就寝ということになった。

与えられた天幕に向かってゆっくりとあるく。
将軍という位のせいか、夏侯惇将軍とほとんど遜色ない個人の天幕を一つ用意してくれているそうだ。ついこの前まで賊紛いのことをやっていたのが嘘のようだ。
元李儒――世間では董卓ということになっている――の兵だったというだけで、どの地に行っても忌避された。洛陽での李儒の振る舞いに賛同していたわけではない。が、見て見ぬ振りをしていなければ慰み者にされ、殺されていたはずだ。自分は呂布将軍ではないのだ。数の暴力は、個人には如何ともし難い。
同じような仲間と共に流れに流れた。食うに困り、役人を襲うこともした。殺してはいないし、賂をたかる輩に限ったつもりだが、罪の意識はある。
それも長くは続かなかった。いよいよ進退窮まったところで、奇跡的に荀攸という人に逢ったのだ。
『貴女が徐公明殿ですね。
その力、曹陣営のために振るっていただけませんか？』
そう言いながら温かに笑った顔は、今でもはっきり覚えている。
それから数日の後、いついの間にか将軍になっていた。異例なこと

ばかりする曹陣営でも異例なことだったらしい。それを主である曹操は笑って許可したとも聞いた。荀攸が才あると言う者に間違いはないと。

そうして、今ここにいる。

官渡に向かって発つ直前、一刀殿に言われた言葉を思い出す。

『貴女の戦い振りを調べさせてもらいました。

まず始めに退却路を確保し、常に撤退を考慮する。何よりもまず生き残ることを優先する。

万人受けはしませんが、少なくとも私は一向に気にしません。

この戦、必ずどこかで戦略上上手く負ける、負けとはいかずとも上手く撤退する必要が出てきます。その時、血気に逸る皆を落ち着かせ、できるだけ損害を少なくして軍を引くこと。それを貴女にお願いしたい』

どうやらその役目はそう遠くないうちに回ってきそうだ。

『期待していますよ、負けずの徐晃殿』

二つ名まで貰った恩に報いるためにも、しくじるわけにはいかない。

大斧を握る右手に、力が入った。

心模様

人が大地を埋め尽くそうとしていた。

「「「「「「「「「さあ祝おう!!!日輪が出づる時を!!!」」」」」」」」」

とりあえずは目算で数を計ってみる。

……人が七分で、大地が三分。それぐらいしかわからない。馬鹿らしくなって数えるのをやめた。

「「「「「「「「「さあ歌おう!!!天に向かって勝利の歌を!!!」」」」」」」」」

整然と並んで進軍する袁紹軍。

その全員の大合唱が耳を震わせていた。

「……どうやら私が見た五万の軍はこのひとかけらだったようですね。

馬鹿は馬鹿でもここまで突き抜けるといっそ清々しい」

夏侯惇将軍はふーむと静かに感心している。

「まあ、馬鹿と無能は違うものということだな。その点で袁術よりもだいぶましだろう。

それに理に適ってはいる。圧倒的大軍でただ前進する。その規模が大きければ大きいほどこちらの小細工は通用しにくくなる。

ただ気に入らんのは……」

そこでわなわなと身体を震わせていた曹休が声を荒げた。

「ふざけた楽奏に遠目にもわかる華美な軍装!このゆったりとした進軍。

……これは戦をするための軍ではありません!!」

袁紹軍の大合唱にも掻き消されないほどの大声で叫んでいた。

「軍を撤収させた結果がこれですか!?貴女の本意はわかりませんが……。

義姉上！　何故私がこんなものを見なければならないのですか!?」
相当憤慨している様子だ。なるほど、一刀殿の言う通りかなりの真面目君らしい。
「もう充分です！　戻りましょう春姉！
この上あの袁紹満悦顔まで見てしまえば頭が怒りで沸いてしまいます！」
ひとりさっさと馬首を返して駆け出してしまった。
夏侯惇将軍と顔を見合わせて苦笑いする。
「華琳の考えを並みの知恵で追いかけるなといったろうに……。
徐晃といったか。北郷が抜擢したのだから間違いはないだろうが、曹操軍は知恵も武勇も並では務まらんぞ。覚悟しておけよ」
やれやれ。全くとんでもない軍に加わってしまったものだ。
そう思いながらも、顔は勝手にほころんでいた。

「「「「「「「「万民の歓喜が天下にこだまし!!!」」」」」」」」
まさかこれほどの規模でこんな形の進軍をするとは思いもよらなかった。
頭と舌で乱世を生きる軍師にとって冷徹な智は忠や義よりもはるかに重い。まして無闇に熱情をおもてに表さぬものだ。
「「「「「「「「九天が王者の道を照らし出す!!!」」」」」」」」
この許攸、袁紹殿とは一定の距離を保ち軍師としてあるべき姿を固く守ってきたはずだ。
だが、しかし。この軍勢の熱気を前にしては胸のうちからこみ上げ五体を衝き動かす熱いものを自覚せずにはいられない。それに歓喜を感じる一方で、冷徹な自分がそれに恐怖を感じている。
「許攸殿！」

声を掛けられてようやく伝令兵の存在に気づいた。何十万もの大軍では、歩く音だけでもかなり騒がしくなる。ましてやこの大合唱だ。これでは近づいてきたのが暗殺者でもわからなかったろう。
「密偵の報せによりますと我が軍が渡河を終える前に曹操軍すべてに撤収命令が下されておりました！」
撤収命令。
「敵の本陣は？」
「官渡です」
曹操の狙いはなんだ？
官渡の複雑な地形を考えれば守りの要としては最適ではある。しかしこの大軍勢をしのげるわけでもあるまい。
しかも都の喉元にまで決戦の戦場を退くことは危険極まりない。
いや、だからか？そこにこそ曹操の狙いがあるのか？
……天子か!!
そうだとすると厄介だ。
伝令兵を下がらせ袁紹殿の下へと向かう。
「袁紹殿！
謹んでご忠言申し上げます！」
王者に相応しい一際華美な軍装に身を包んだ袁紹殿がちらりとこちらを見やった。
「忠言？なんですの許攸さん」
傍には沮授殿が控えている。二枚看板をともに失って以来、沮授殿は袁紹殿の一番のお気に入りだった。
「曹操は我が軍の進軍の前に本営を官渡に移しております！
この意図を推るに曹操は我が大軍を都の近くに引き込んだ上で、殿を『都を脅かす逆賊と見なせ』と天子に勅を発させることが予想されます！」
袁紹殿はもうこちらを見ない。
ただ、目が少し不快気に細まった。
「許攸さん。
この進軍の真っ只中に身を置きながらまだ陰気に頭をめぐらせて

いるんですの？」
　それきり一言も発さない。代わりに口を開いたのは沮授殿だった。
「許攸殿。
　この華麗で優雅な進軍を見聞きし誰がこれを逆賊のものと見なすというのですか？」
　いつも通りの笑顔だ。
　だが、今はその笑顔を薄ら寒く感じるのは何故なのか。
「この華々しくゆるやかで巨大なる進軍のことが世に伝われば天下の声は一斉に殿を後押しするでしょう。そしてその風評と大軍勢の圧力はまず曹操軍の底辺である兵卒揺り動かさざるを得ない状況に追い込むでしょう」
　袁紹殿が沮授殿を熱い眼差しで見つめていた。そこにあるのは、陶酔だ。
「大軍勢の武力に頼ることなく曹操を内より崩しすべてを投げ出させた上で、許都に向かって再びこの大進軍を繰り出す。
　その時満天下は祝福の声に満ち溢れているでしょう。そしてそれは帝位禅譲へと続く真の王道なのです」
　その口から漏れる言葉は理に適ってはいる。それなに、湧き上がった不安はいつまでも消えなかった。

「……ということらしい」
　一刀曰く、『深夜食堂』の二階。
　深夜ではなく真昼間なのだけれど、裏口から店主に通され食事を取りながら一刀の話を聴いていた。
　二階には裏口からしか入れない。そして裏口から入ろうとすれば必ず店主が気づく。二階には一瞬で店の裏側に滑り降りられる坂がついている。完全に密談のための部屋だった。ちなみに店主の寝床は一階だ。
「中々わかりやすい報告書ね。

騎兵は全員無事、歩兵も流民に化かして全員逃がしたみたいだし、良い人材じゃないの。
何より逃げる負けるを全く厭わないのが良いわね」
前例のない大抜擢だ。元々の境遇もあって一刀への忠誠心は揺ぎ無い。そういう意味でも良い将になるだろう。
「そうだな。
孔明を探してたら公明に当たるとは思ってもみなかった。本当に良い拾いものだったよ」
……ひょっとしてそれは洒落のつもりで言っているのだろうか。
「まあ、前半はそれでいいわ。
問題は後半よ。どうしてあんたが袁紹軍の内情をそんなに詳しく知っているのかしら」
そう問いただしても一刀は曖昧に笑うだけだ。
無理をしている。
青州兵の一部を草に使っていることは知っている。それが、おそらく通常の草の活動に留まらないことも。それに華琳様は草の必要性は認めていても暗殺といった卑怯な手段は嫌う。それも心労の一因だろう。
剣を習い、初めて人を殺めた日の夜もこんな顔をしていた。一刀は昔から人の生死に関することには敏感に反応した。産まれたばかりの子どもやその母親が亡くなるのはよくあることだ。旅の道中での賊との殺し合いも。このご時勢、死とはいつでも身近なものだ。
そうした死に直面する度、一刀は今でも泣きそうな子どものような表情をする。十日ほど全く眠れず吐き続けた時から比べれば、少しはましにはなっているのだろうけれど。
「一刀。こっち来なさい」
「え？」
「いいから。口答え禁止」
戸惑ったまま立ち上がり、中腰のままこちらへ歩いてくる。
近づいたところで、襟を掴んで無理やり引き倒した。
「うわっ」

そのままぽすっと頭が膝の上に着地する。仰向けにして、指で髪を梳いてやった。
最初は驚いていたようだが、すぐに身体の力が抜けていくのがわかった。
「……昔はよくこうしてもらったな」
暫く無言のまま身を任せていた一刀がぽつりと言う。
「そうね。
あんたの頭抱えて同じ寝所で眠ったこともあったわ」
「そうだな。
……今はもうできないだろうけど」
確かに、自宅の庭ではないのだから、誰に見られるかわかったものではない。
けれど――。
「別に来てもいいわよ？私の寝所」
一刀が固まる。
額に当てていた手にも、緊張が伝わってきた。
「いいのか？
昔と違って、ただ寝るだけじゃ済まないぞ？」
なるべく冗談めかして言っているが、声が震えているのが丸わかりだ。
「いいわよ。
一刀だから。ううん、一刀がいいの」
静寂。
「……そうだな。
俺も、桂花がいい。桂花が、好きだから」
「私もよ。
一刀がいい。一刀が好き」
少しずつ、頭が下がっていく。
唇が、自然と重なった。
今はまだその時ではないけれど。一刀なら、絶対に後悔はしない。

そう、思った。

劉備の決断

都ほど近くにある大池。
酒で満たされた大甕を横においてのんびりと釣竿を垂れる。とはいえ全くあたりはないのだけれど。時たま上げて餌を確認しても、齧られている様子もない。
「桃香お姉ちゃん。この池には本当に魚がいるのだ？」
横で同じように竿を構えている鈴々ちゃんは、じっとしているのがたえられないようでさっきからずっと身体をもじもじ動かしていた。
「焦っちゃだめだよ鈴々ちゃん。鈴々ちゃんの焦りやいらいらなんて、お魚さんにはみーんなお見通しなんだから」
そう、焦ってはだめだ。
釣り手の焦りや苛立ちが、竿や糸を通して水中へと伝わるように。私のほんのわずかな動きも、そこらじゅうに潜んでいる密偵にすぐ伝わる。
「そういうものなのだ？」
「そういうものなの」
今はじっと待つ。相手が焦れに焦れるまで。その時こそ、人の本性が最もよく視える時だ。
「そうなのかー。
じゃあ、桃香お姉ちゃんはそんな大きい竿でどんな大きいお魚を釣るつもりなのだ？」
今私が持っている竿は鈴々ちゃんが持っている竿の倍はある。本当は力持ちの鈴々ちゃんが持つほうが似合っているのだろうけど――。
「これは小ものを釣らないための大竿だよ」
そう言った次の瞬間、ゆっくりと近づいてきていた釣り人が声を掛けてきた。
「はっはっは。
この池にはそんな大魚はおりませんよ」

継ぎ接ぎだらけ、汚れが目立つ服。どこからどう見てもただの農民にしか見えない。
「そうかな？
甕の中にはもっと大きな針を持っているんですけれど」
その一言で釣り人が一瞬言葉に詰まる。
つば広の帽子からこぼれ見える額には汗が浮いていた。
「これはこれは。
貴女様も随分のんびりしておられます故、まだ甕の中にお気づきでないのかと思っておりました」
あたりだ。ようやく魚がよってきた。
どれだけ見た目を誤魔化しても、身に染み付いた動きだけは自然と漏れてしまうものだ。あの歩き方は、常日頃から礼服を着慣れている人のそれだった。
「こうしていたほうが近づきやすいでしょう？」
「恐れ入ります。
私は孔融殿の同志、王子服と申します」
つばを持ち上げ顔を見せてから隣に腰を下ろす。とりあえずはまともに話す気はあるらしい。
「狙っている魚はまだ官渡水の中にいるような気がしますよ」
子服さんもまた釣り糸を垂らす。
「もうすぐ年に二度の朝議ですからな。節句の宴もあります。大魚も都が恋しくて戻ってくるそうですよ。
まあ、戦況がどうにもならなくて投げ出したというところではないでしょうか」
そんなことはない。
確かに曹操さんは無駄を無駄と知りながらそれを愉しむことができる人だ。けれど、こと戦においてそれはない。その行動のひとつひとつに全て意味がある。
「その節句の宴では、左将軍が剣舞を披露されるご予定だとか。曹司空もたいそう楽しみにしておられるようですよ」
節句の宴で、剣舞。

「それは、陛下や曹司空の御前で、ということですか？」
「そうなりますな。
逆賊が許都に潜伏しているという噂が流れている故、本来ならば剣舞といえど陛下の御前に刃物を持ち込むことなど許されないのですが……陛下は劉皇叔の舞が是非見たいと特別にお許しになられたそうです。
とはいえ、謁見の間の周囲には近衛兵が配置されるようですが」
なるほど。仕込は万端というわけか。
そしてその仕込は、そのまま私を始末するためでもある。
陛下の御前を血で汚し、漢王朝再興の尽力者曹操を殺した大罪人、劉備。その場で斬り殺されても誰も文句は言わないだろう。
後はそのまま袁紹さんに降伏する。というよりは迎え入れるつもりか。帝位を禅譲するとかなんとか言って呼び出し、これまた誅殺してしまうつもりかもしれない。
「では、私はこれで」
子服さんが去っていく。言うべきことは言った、ということだろう。
「と、桃香お姉ちゃん！」
鈴々ちゃんの声がする。
自分の竿を見ると、今まで見たことがないような大魚が餌に喰らいついていた。
そろそろ、決めなくてはいけない。
この魚を釣り上げてどうするのか。
上げてみたら思ったより小さいってこともある。煮る釜があるのか？焼く火があるのか？それとも腐らせてしまって私が笑いものになるのか。
「……今日は上げちゃいけない日みたいだね」
大魚が餌を食いちぎって池の中に消える。
「帰ろう、鈴々ちゃん」

帰りの道中の馬上。前に乗る鈴々ちゃんの頭の上に胸を乗せて考える。
曹操さんを暗殺し、その後許都に上がってくる袁紹さんを誅殺すれば確かに漢帝国は一発逆転だ。
でもそれは何かが違う。巨大な奸雄はいなくなるかもしれないが、乱世はより一層激しくなるだろう。大勢力が居ない分、今以上に細かく国が割れるかもしれない。いや、英雄という意味では孫策さんがいるのか……。
何れにせよ、そこに私の居場所はない。
「桃香お姉ちゃん。
鈴々は今日みたお魚のことは誰にも話さないのだ」
突然胸の下からぶすっとした声がした。
「んー？どうしてなのかな？
鈴々ちゃんならこんなお魚見たーっていっぱい自慢すると思ってたけど」
「もし嘘だって言われたら嫌なのだ！
桃香お姉ちゃんが釣ってたら鈴々だって自慢したのだ……」
一転してしょんぼりとした声。これは少し悪いことをしてしまったのかもしれない。
けど――。
「鈴々ちゃん！ほら吹きって言われて生きるのも悪くないよ！
地と人は手にはいらなくても空はいくらでも手に入る！」

「蝶花による楽奏に引き続き～～」
謁見の間に朗々とした声が響く。
「左将軍劉玄徳殿による剣舞～～。
演目は屈原作『国ショウ』～～」
私は袋だ。

民の声を、希望を。恨みもつらみも。
すべてを飲み込んで天下へと拡げる袋だ。
曹操さんが機嫌よく歌っている。
だけどその袋は愛紗ちゃんと鈴々ちゃんの二人だけで満たされてもいる。その私が、この勅のことを愛紗ちゃんには伝えなかった。
孔融さんが暗い目で嗤っている。
これはきっと天意が足りないっていうことだ。今はまだその時じゃないっていうことだ。
陛下。
貴方はこの勅を発してはいないのでしょう。けれど、止めようともしていない。
貴方には、曹操さんという雄の活躍を眺める余裕がある。漢王朝など滅びてもいいという諦観がある。それは、私の思い描く漢には無用の長物です。
剣の切っ先が曹操さんへと向く。
そして――そのまま孔融さんへ。
孔融さん。
貴方から受け取った曹操さん誅殺の勅はこの大袋の中で封印します。
だけど、曹操さんっていうあの物凄い人が私の袋に入りきらないときは――。
他の誰にでもない、私に下された天意として。
正々堂々と、戦の場で。
この許都で。あの書庫で語り合った時から、貴女もそう感じていたでしょう？
曹操さん。

節句の宴は何事もなく終わった。
潜入の噂があった逆賊も、結局現れることはなかった。

節句の宴が終わった夜。
鈴々ちゃんと二人、得物を抱えて椅子に座っていた。堪え性のない人ならば、今日すぐに来るはずだ。
お互い一言も発さないまま時が過ぎる。
そして半刻が過ぎた頃――深夜の邸宅に、招かれざる客の気配がする。
顔を見合わせてうなずく。得物を構えて立ち上がる。
窓から入ってきたのは――全身黒ずくめで、手に短剣も持った男だった。
すぐさま鈴々ちゃんが横から一撃。そのまま中に引きずり込む。
続けて入ってきた男も私の不意打ちで昏倒。ほっと息をついた時、背後で音がした。
振り返ると、別の場所から侵入したでであろう同じ装束の男がいる。
まずい。しくじった。
男が短剣を振りかざし、気が抜けて身体に上手く力が入らない私に襲い掛かって――窓の外から飛んできた短剣が胸に刺さって事切れた。
「こいつらは囮ですよ。
相変わらず詰めが甘いんだからもう」
外から軽口が聞こえてくる。
最後に言葉を交わしたのはそれほど前ではないのに、何故だかとても懐かしく感じた。
「お久しぶりです、元直さん」
私の言葉を聞いて鈴々ちゃんも思い出したらしい。強張った身体から力が抜けていく。
「誰ですそれはー？
俺は単福です。た、ん、ふ、く。
そこのところきちんとわかってます？」

相変わらずの軽口だった。安心してくすくすと笑ってしまう。
彼はよっこらせ、なんていいながら窓から中に入ってきた。
「勿論わかってますよ。
でも、命を助けてくれたお礼くらいきちんと言いたいじゃないですか」
私がそう言うと、彼――徐庶さんは何故か固まってしまった。
「本当にこの人はもう……」
ぶつぶつ言いながら後頭部を帽子越しにがしがしと掻く。ところで、夜なのにその真っ黒な眼鏡は意味があるんだろうか。
「まさか昨日の今日で来てくれるとは思ってませんでした」
「まあ、可愛い可愛い後輩二人の頼みだしね。法正も絶対連れて来てくれって言ってたし。
それにそろそろ潮時かなって思って暫く前から許都に潜り込んでましたから」
なるほど。
やっぱり、軽そうに見えてやることはやってくれる人だ。
「それじゃあ行きましょう。愚図愚図している暇はなさそうですし」
鈴々ちゃんが荷物を背負う。
再び顔を見合わせてうなずき合った。
「関羽殿は本当にいいんですか？」
単福さんが一応は、という感じで聞いてくる。
「先陣の功労者ですし、殺されることはないと思います。
生きてさえいればどうにでもなりますから」
そう言って、今できるだけの笑顔を見せる。
この笑顔は、私の覚悟だ。お別れなんかじゃない。絶対にまた会うんだ。
「わかりました。もう何も言いませんよ。
それじゃあ行きましょうか。いざ蜀へ！」
さあ、新しい空を手に入れに行こう。